

21世紀の田舎学に関する学際的研究

- 今立型モデルの構築をめざして -

平成 17 年度～平成 19 年度

助成番号 D05-R-0360



トヨタ財団研究助成プログラム

代表研究者 杉村 和彦

福井県立大学学術教養センター長

はしがき

この研究報告書は、平成 17 年度から平成 19 年度までの 2 年間にわたって行われたトヨタ財団研究助成「21 世紀の田舎学の学際的研究 今立型モデルの構築をめざして」の研究成果を取りまとめたものである。今日、グリーンツーリズムなどによる都市住民の田舎志向という現象の中で、「人間の生活の場」としての農村が再評価されつつある。工業化、都市化の果てに、その行き詰まりの中で見出されつつある、農村の新たな価値創造のプロセスにおいて重要なことは、現代においてあえて田舎に住むことの意味と、そのための生活知である。同時に、グローバル化の中での 21 世紀の田舎学は、かつての閉じた共同体ではなく、開かれたコミュニティの再構築を図らなければならない。本研究では、NPO を主体とする、福井県のブランド創造活動推進事業、今立古民家・匠・ロングステイプロジェクトにおいて展開した「遊作塾」の活動を中心事例として、「21 世紀の田舎学」の可能性を検討した。

遊作塾の活動に関してはその歴史的背景として、1970 年代からの「八つ杉現代美術研究所」の活動、今立紙展、結い村構想研究会、NPO 森のエネルギーフォーラムの地元学を経て、遊作塾につながる展開に参加メンバーからの聞き取りの中で再構成し、また「遊作」というコンセプトの現代的な射程を再検討した。

またプロジェクトの事業内容を、〈遊作〉というコンセプトを軸に遊作塾の活動をメンバーの協力を仰ぎながら討議を重ねて克明に復元し、その現代的意味を検討した。〈遊作〉というコンセプトには、「21 世紀の田舎学」が中心軸とするべき、手作り世界の復権ということにむけての極めて重要な手がかりとその方策がこめられている。「都会」に対して「田舎」という場所が受け持つ効率性を超えた世界の開示の方向として、「遊ぶことと作ること」をつなぐ作業は今立の古民家を中心としたプロジェクトの中での作業と意味を超えて普遍的な広がりと重要性を持っていると考えられる。

こうした「遊作塾」の活動の現代的意味の捉え返しの作業として、地域比較の視点から国内の田舎学の掘り起こしの試みを行い、「田舎学」の地域間比較とその中から現代の重要課題について議論を重ねた。そして今立の遊作塾の事例からの問題提起として 21 世紀の田舎学を構想していく上で、手作りの世界の重要性を確認することができた。こうした議論を踏まえて手作りの世界と田舎学の現代的な課題についても論点を深めており、小さな一地方の中で創造された「遊作」のコンセプトが、今後田舎暮らし派の一つの紐帯を作り出していくのではないかとひそかに期待している。こうした研究の機会を与えていただいたトヨタ財団関係各位にはこの場をもって心より感謝したい。

研究代表者 杉村和彦

21世紀の「田舎学」の学際的研究

- 今立型モデルの構築 -

目次

1章 . はじめに	1
1 . 「田舎学」の現代的背景	1
1) < 田舎 > への新しいまなざし	1
2) 「田舎」雑誌の中に	2
3) まなざしを支える新しい動きと背景	3
4) 主体性の田舎学	4
2 . 「田舎学」という構想	5
1) 「着土の時代」の中で	5
2) 着土論とその限界	7
3) 田舎学の創造	8
3 . 田舎学の現代的パースペクティブ	9
1) スローライフと田舎学	9
2) 自給的な世界の豊かさ	10
3) 非効率性の価値	11
4 . 今立型モデル 遊作という経験の可能性について	13
1) 地元学から遊作塾へ	13
2) 背景	14
3) 今立という地域性	14
4) < 匠と遊び > < 匠も遊ぶ >	15
5) < 遊作という場 > 遊作自由大学	16
2章 今立における地元学の展開過程とその意味	17
1 . 河合勇の試みから結い村構想	17
1) 河合勇が若者に与えた影響	18
2) 「八つ杉現代美術研究所」の活動 絵画教室	19
3) 「八つ杉現代美術研究所」の活動 演劇や舞台芸術	20
4) 「八つ杉現代美術研究所」の活動 紙の実験展から今立現代美術紙展へ	20

5)「八つ杉現代美術研究所」の活動 八ツ杉陶芸教室	2 2
6)「八つ杉現代美術研究所」の活動まとめ	2 3
2 . 結い村構想研究会 (1992 年～1994 年)	2 3
1)「モラル意識の確立」	2 5
2)「芸術村の基盤整備」	2 5
3)「人材育成」	2 6
4)「公共事業に芸術導入」	2 6
3 . 地域資源調査から遊作塾へ	2 7
1)NPO 法人森のエネルギーフォーラムと地域資源調査	2 7
4 . 認識から創造へ	3 0
3.章「遊作」という経験と田舎学の構想	3 2
1 . 今立古民家・匠・ロングステイプロジェクトと遊作塾	3 2
1) 今立古民家・匠・ロングステイプロジェクトの出発	3 2
2) 限界集落からはじめる地域調査 アクションリサーチ	3 2
3) 実行委員会の組織	3 5
2 . 古民家という宇宙と手作りの世界	3 9
1) スロービルディング	3 9
2) 匠の技の集積する世界	4 0
3) 古民家巡回バスツアー	4 1
4) 茅葺屋根の再生	4 3
3 . 「遊作」という言葉の誕生	4 5
1) 今立・古民家・匠・ロングステイプロジェクトのねらい	4 5
2) 前夜祭で	4 6
3) <遊作>の発明	4 8
4) 第1回公開講座	4 9
(1) 第1部 パネルディスカッション	4 9
(2) 第2部 見学会	5 0
- 1 町中見て歩きガイド：石田慶昭氏（石田工務店代表 大工棟梁）	5 0
- 2 岩野市兵衛氏（人間国宝）の和紙制作現場	5 1
- 3 直井光男棟梁と大瀧神社・岡太神社にて古建築の見学	5 1

4 .「遊作」という経験	5 3
1) 古民家の中の遊作	5 3
(1) いまだて遊作塾第二回講座「古民家再生講座釘を使わない本棚づくりと和紙制作体験講座」	5 3
(2) 古民家再生講座 枕屏風の建具組み立て	5 4
(3) 囲炉裏を作る	5 6
(4) 古民家の未来をデザインする	5 8
2) 伝統の和紙の講座	6 5
(1) 古民家見学と昼食	6 5
(2) 楮畑刈り取り体験	6 7
(3) 和紙制作体験	6 7
5 .「遊作」の多元化	6 9
1) 田舎の遊作	6 9
(1) 田舎の夏休み～和紙で作るオリジナル時計～	6 9
(2) 和紙講座 (和紙時計作り)	7 0
(3) ランプシェード	7 0
2) 遊作の“農”や“食”への展開	7 4
(1) 野菜収穫「ENJOY の田舎暮らし」～田舎暮らしは面白い～	7 4
(2) 天然酵母パンと農園訪問講座～手づくり石鯨と体験講座～	7 5
(3) 農園見学	7 6
(4) 天然酵母パンと農園訪問講座～手づくりパンの体験講座～	7 6
(5) 食と遊ぶ	7 7
(6) 食学	8 0
3) 石窯ピザ焼き講座	8 2
4) 音と遊ぶー遊作ライブ	8 5
6 . <遊作という場> 遊作自由大学	8 9
4 章 都市 農村交流の組織としくみづくり	
いまだて遊作塾と安心院グリーンツーリズム研究会の事例から	9 2
1 . 今立と安心院の接点	9 2
1) 草の根型地域の興隆と組織	9 2
2) 今立遊作塾と安心院グリーンツーリズム研究会	9 3
2 . 安心院におけるグリーンツーリズムの有機的組織	9 4
1) 西の横綱	9 4

2) 安心院町グリーンツーリズム	95
3) グリーンツーリズム研究会への支援状況 商工観光課推進係	98
4) 地域に根ざした地域のためのグリーンツーリズム	100
3. 安心院農村民泊視察調査	103
1) 『百年の家 ときえだ』	103
(1) 家族となべをつつく	104
(2) 農村社会の古い価値観の中で民泊に踏みこんだ若奥さんの作戦	104
(3) 時枝家から学ぶこと	105
2) 『舟板昔ばなしの家』中山家	105
(1) もてなし達人	106
(2) きっかけはワイン祭り	107
(3) GTの本質は一般客にあり	108
(4) 新婚旅行で来たカップル	109
(5) 修学旅行で大変貌した女子学生	109
(6) 中山家から学ぶこと	110
3) 「量よりも質」の論理	110
4. 関係づくりの重要性	111
5. 今立遊作塾の経緯と主題	112
1) いまだて遊作塾とは何か	112
2) いまだて遊作塾設立の経緯と目標	113
3) いまだて遊作塾における関係構築	114
4) 安心院と今立遊作塾の違い	114
5章 世界とつながる田舎学	117
1. フランス・レンヌとの交流	117
1) 研究者同士の発想から	117
2) 仏日産直研究プログラムの主眼	118
3) フランス交流研究会「都市と農村の交流の21世紀」	119
4) 日曜大工とフランスの手作りの世界	121
2. 豊かな自給性と技能の自在性 アフリカ	123
1) アフリカ農業の自給性について	124
(1) アフリカ農村の停滞	124
(2) 「緑の革命」を拒否する世界	124

(3) 混作のひろがる世界	1 2 5
(4) 熱帯雨林の生産力	1 2 6
(5) 「情の経済」と「共食」	1 2 7
(6) クムの山羊が表すもの	1 2 8
2) 椿さんの語るタンザニア経験	1 2 9
(1) 椿さんの来日	1 2 9
(2) 青年海外協力隊の時期	1 2 9
(3) 日本農業の近代化の中で	1 3 0
(4) タンザニア30年	1 3 0
(5) モノを分ける世界	1 3 1
(6) 援助の中で	1 3 2
(7) 生活の中から考え直す	1 3 3
(8) 椿さんを通じた日本の田舎学とタンザニアの田舎学	1 3 4
6章 遊作と現代の田舎学の可能性	1 3 7
1 . プロジェクトの限界とプロジェクト後の展開	1 3 7
1) プロジェクトの限界	1 3 7
(1) プロジェクトの主体と助成	1 3 7
(2) 助成する側の視点	1 3 8
(3) 活動主体の視点	1 3 8
2) プロジェクト後の展開	1 3 9
(1) 困難な現状	1 3 9
(2) 具体策	1 3 9
3) ぶらっとホーム	1 4 0
2 . 現代の田舎学の射程とその担い手	1 4 1
1) 田舎志向と現代におけるライフスタイルの転換	1 4 1
(1) 現代の田舎への志向性	1 4 1
(2) 半農半Xというライフスタイル	1 4 1
2) 価値の転換と現代の田舎学	1 4 3
(1) 現代社会における深い価値転換	1 4 3
(2) グリーンツーリズムの起業者の視点と<田舎>の具体的生活	1 4 3
(3) <田舎>人の田舎再建のゆくえ	1 4 4

3) 現代の田舎学の「場所」とその担い手	145
(1) 田舎志向者の類別	145
(2) 深い関与をするリピーター	146
(3) 地元学の主体との差異	147
4) 地元学と現代の田舎学の間	147
(1) 地元学の活動方向	147
(2) 生活者としての田舎人の視角	148
5) 「田舎」の新しいかたち	149
(1) 生産の共同体を超えて	149
(2) アフリカ社会のユニークネス	149
(3) 「田舎」をめぐる歴史的位相	150
(4) 近代を超えるパラダイム	151
(5) 開かれた共同体	152
(6) 共存を可能にする場	153
3. 遊作と現代の田舎学の可能性	154
1) 現代の田舎学と遊作の位置	154
(1) 田舎志向と手作り	154
(2) 遊作塾の活動と田園工芸	155
(3) 手作りからグリーンツーリズムを捉え直す	155
2) 手作り志向のパーспекティブ	156
(1) 現代の中で失われた手作りの世界	156
(2) 工業的生活と「労働」	156
(3) 農村生活におけるわざ	157
(4) 手作りの世界としての田舎	157
3) 技能の世界とその多元性	158
(1) 技能知の未来	158
(2) 技能の熟練と田舎人の生活	158
(3) 技能の世界の種差性	159
4) 手作り論と現代の田舎学	160
(1) 手作りを可能にする場としての田舎	160

(2) 田舎性と都会性	1 6 0
(3) 技能性の復権と田舎学	1 6 1
5) 遊作 価値の反転と脱構築	1 6 2
(1) 田舎志向と時代精神	1 6 2
(2) 「遊び」ということの意味	1 6 2
(3) 価値転換の場	1 6 3
6) 遊作の根源と田舎学の可能性	1 6 4
(1) 「遊び作る」とはどういうことか	1 6 4
(2) 参加できる手作りの場と遊び	1 6 5
(3) 国宝が語る遊ぶ世界	1 6 5
4 . 環境の世紀 遊作という希望	1 6 6
1) 自然と和解する技術	1 6 6
(1) 環境の世紀の中で	1 6 6
(2) 「目によって捉えられる自然」を超えて	1 6 7
(3) 自然と和解する生活	1 6 7
2) 自在の世界	1 6 8
(1) 自在性の根源	1 6 8
(2) 技における日本とアフリカ	1 6 8
3) 「生活の芸術化」への問い	1 6 9
(1) 「生活の芸術化」への出発点	1 6 9
(2) 手作りの現代的復権の場としての田舎	1 7 0
4) 遊作の希望	1 7 1
(1) 精神のモノカルチャーを超えて	1 7 1
(2) 教育の世界の中の自在性	1 7 1
(3) 遊作の世界のひろがりとその希望	1 7 2
執筆分担	
1章 杉村和彦	
2章 増田頼保	
3章 増田頼保 杉村和彦 (5 節 1) - (3) のみ)	
4章 石山俊 内山秀樹 (3 節全て)	
5章 増田頼保 (1 節全て) 杉村和彦 (2 節全て)	
6章 杉村和彦 増田頼保 (1 節-2) , - 3) のみ)	

1章 はじめに

杉村 和彦

1. 「田舎学」の現代的背景

1) <田舎>への新しいまなざし

今日「田舎」への新しいまなざしが生まれている。都市農村交流やグリーンツーリズムが全国各地の農村で行われている。その中で展開する田舎体験や自然体験、体験農業、農家民泊などの試みが、「癒し」や「人間回復」、「スローライフ」といった言葉を軸にその現代的意味や価値が語られ、農産物の直売所やセカンドハウスというような事業も各地に急速に広がってきている。農村への週末の入り込み客は増大し、「田舎」や「自然」を求める人々の関心を広く認めることができる。

このような<田舎>へのまなざしの中でとりわけ強調されることは、「農村体験」ということであろう。このような「農村体験」は、ゆきずりの農村視察、いわばそこを歩くとか見るといような、単に農村景観などの視覚的経験だけでない。それはそこに触れ、生活してみるという、農作業や農産加工、遊びや調理など、より総合的な直接的経験を提供することを目的としている。

例えば今日農村で活況を呈している農産物の直売所や農村レストランの様子を見てみよう。都市から参入した人達は農作業や食品加工を行ったり、あるいは地域住民の運営する農村レストランにおいて食事をする¹⁾。このような農村レストランでは、素材本来の味と地域に伝わる伝統の技を活かした素朴な味が提供される。同時にそこには都市からやってきた人が参加できる伝統料理の講習会や伝統素材を消費者自身が栽培し育てるようなプログラムが用意されている。そしてその活動や経験を通して「農村」を体験する各種プログラムは、住民組織や行政機関などによって開発・提供されている。このような直売所や市の数はすでに全国で一万以上という。

そこにはこれまでの農村の世界では見たこともないような人々のイキイキとした表情があり、日常的に農村と都市の二つの世界の交流の場が開かれている。農村の人たちはそこに来て、都市の人たちの田舎志向に触れ、これまでにないような農村に生きることの直接の手ごたえを感じる。同時にこのような農村レストランは、新鮮な素材の持つ本物の味、食文化や食材の価値を提供することからも、地域の生活者がまさに自らの地産地消を考えていく上で最前線基地ともなっている。

一方都市の人たちはそこに、日常の追い詰められた世界から解放されるさしあたりの避難所の位置を確認してしばしの安堵を感じる。そしてそこから、農山村の豊かな自然、美しい景観、きれいな空気などへの関心をさらに拡げていく。現代の農村では、このような都市との結合の上に立った農村とその交流の世界が田舎志向をはぐくみ、新しい田舎へのまなざしを拡げているのである。

2) 「田舎」雑誌の中に

一方、現代社会の中での新たな「田舎」へのまなざしを伝えるものは、一般市民の購読する「農村」「田舎」を扱う雑誌が多くの人に読まれていることであろう。『新・田舎人』『チルチンビト』『ロハス』『うかたま』などの雑誌が発刊され、それぞれの雑誌の中では、多少の主題を変えながらも、田舎復権をうたう視座においては共通しているといつてよいだ

1 1990年代以降、各地で直売所や農村レストランが設置されたが、これらの設置数は、関東および周辺地域において極めて多いことがわかる。実際、農村レストランの分布状況を概観するならば、栃木県および群馬県にはことに多く立地していることが伺われる。2004年4月現在、栃木県内には65ヶ所の農村レストランが設置されているが、その立地は都市近郊地域を中心に立地している。農村レストランは、都市住民にとって、農村の人々、農産物、景観に触れることで、いわば農村を消費する直接的な機会を提供している。

ろう。このような雑誌の中では、農村に生きる一介の老農夫たちが、農村に生きる技に熟達した一人の英雄として登場する。村の片隅で孫たちに微笑みかける写真が、都会の世界に疲れた人たちにもう一つの世界の豊かさを語りかけることになる²。

こうした「田舎」雑誌が購読者として想定している対象は、かつての農村の一般購読者を対象とした「家の光」などと違って、都市に住む20代～30代の女性であるといわれる。都市の片隅のカフェで「田舎」雑誌を手にして、農村生活の中で満面の笑顔をたたえる老夫のまなざしにかぎりない「いやし」を感じる女性たちの厚みが増し、「田舎」ブームを牽引しているのである。このように、かつてと違い「田舎」は都市から吹く風に支えられている。

それゆえ「田舎」雑誌の中の「新田舎」人は、かつてのように田舎に住みぬきの人ばかりというわけではない。「田舎」から離れ、大都市に生活の拠点を構える人も、「田舎」の価値を支える協働者として、田舎には住まないとしても「新田舎人」としてくることがふさわしいだろう。むしろそこで雄弁に語りかける人たちは、田舎住みぬきの人たちではなく、現代において「田舎」に思いを馳せ、「田舎」の中に行き詰まった現代の乗り越えの場をも模索する、「田舎」暮らしの応援団の人たちだといってよいだろう。

このような応援団は各界の有識者によって支えられ、学者でもひろく「農業・農学」という領域を超えて、様々な「田舎」ファンがいて、農業・農村の価値を説いている。またひろく各種の作家の人たちの中にも田舎ファンがいる。次世代の田舎志向を喚起するということで極めて大きな役割を果たした人の一人は、「となりのトトロ」で有名な宮崎駿であろう。子供達のイメージの中に農村や農業世界は共有されるべきものとして、そのアニメーションの世界から子供達の中に内在していつているのである。

そして『新・田舎人』の中に掲載された俳優の永島敏行氏のインタビュー記事の中での以下のような発言は、今日の都市生活者のある共通した田舎への思いを代表しているように思われる³。

「戦後、暮らしを良くしようとみんなガンバって、そういう時代を経てきてこそいまの生活がある。だから、単純に批判する気はないんです。ただ最近になって、自然環境の大事さにみんな少しずつ気づいてきた。自然環境を残す役割があるとしたら、東京オリンピック前の日本を知っている、僕らがやらなければならないんじゃないかと感じます。

自分が親になってみると、この日本は奇跡の上に成り立っていると思うんですね。世界各国いろいろ行ってみても、日本ほど便利で天国みたいな国はないでしょう。その一方で忘れてしまったものも、だいたある。農業や漁業も忘れられつつある。千年、二千年かけて築いてきたものを、たった50年間くらいですべて忘れてしまっているのか。それに農業や漁業を通して得られる感覚、自然の力が人間を生かしているという感覚も、大切なんじゃないかな。」

以下ではこのような「田舎」に注がれる新しいまなざしの様態とその背景についてより立ち入って検討し現代の田舎学構想にむけての諸前提を俯瞰しておこう。

3) まなざしを支える新しい動きと背景

このような農村への新しいまなざしとして前面にあらわれてくるものは、立川が指摘するように⁴、さしあたり次のような二つの層があるといつてよいだろう。一つは都市の消費者からの熱いまなざしである。彼らが農村に対して差し向ける「まなざし」の先には、農村の中での観光や買い物、レクリエーション、体験、居住といったことがあげられるだろう。こうしたことを可能にする条件としては、まず都市ホホワイトカラー層の成立などによ

2 立川(2005:25)が指摘するように、このような「まなざし」を積極的に演出する主体という点に関わるものとして、日本においては、とくに学者や作家などが、メディアのなかで積極的に農村を再評価・再構築することで、世論形成に貢献してきたという傾向も認められる。

3 『新・田舎人』23号, 2000

4 立川, 2005:24-25 を参照せよ。

って、週末に農村で滞在することを可能にするような新たなライフスタイルの追求できる豊かな人々が広く登場してきたことがあげられよう。

しかしそれと同時にこうしたことがらをささえる、農村をめぐる政策的まなざしの大きな変化もすでに述べた農村をめぐる新しいまなざしの背景になっている。かつては農村は一義的に生産の場であった。ある意味ではそれ以外の意味は農村をめぐる政策課題とはならなかったともいえるだろう。これに対して今日では、農業における多面的機能の評価と維持増進に向けた政策や、グリーンツーリズムや体験農業、直売所など、農村での余暇・体験・交流機会を増進する政策支援などが広範に展開し、上記のような都市住民の農村志向を下支えするものとなっているのである⁵。

こうしたことを可能にする条件として、経済成長の中での都市ホワイトカラー層の成立などにより、休日を日常的に農村で楽しむ、新たなライフスタイルの追求できる豊かな人々が広く登場してきたことがあるとあってよいだろう。このような表層に現れる「田舎」志向にかかわる現象とともに、より深い層の人の流れもあり、都市の乾いた生活に対して、生き生きとした自然の緑・農村的なリズムとゆとりが渴望されている。また手作りの野菜を作ってみようと自ら市民農園に足を運び、「ふれる緑」を体験する人の姿もしばしば見られるようになってきた。

「緑」に対する希求が高まる時代に生きている。「緑」は現代を生きる私達にとって一つの時代精神というものとしての意味合いを持ち始めているのかもしれない。そして都市の住民の中からは定年後、帰農する人だけでなく、脱サラして、農業で身を立てようとする人のこともよく聞かれているようになってきた。ひたすら農村から都市に向かった近代社会の歩みからみれば、逆転する人々の動きを示し、そこに豊かさにかかわる人々の志向の転換を示唆するものを読みとることもできるだろう。

このように現代社会、とりわけ都市住民の中で深い思いをもって語られる、希求される「田舎」の世界がある。しかし具体的な現場の中で問題となることは、こうした語られ、希求される田舎像と現実の「田舎」の実像、あるいは具体的な田舎人としての「田舎」の間に大きなズレが存在していることである。語られる田舎は、「田舎」の自然の中で暮らす人間が背負っている「しんどい」部分をすべて覆って語られている場合が多いからだ。こうした状況の中でいわば「田舎」からみた「田舎」を軸に、「田舎」からの内発性のある「田舎学」が重要となってきている。

4) 主体性の田舎学

大きな価値転換をはらむ「田舎」を志向する新たなまなざしも、都市と農村の関係という視点から見ると、現在までのところ「田舎」に生きる人の内在的な意識とは多分にズレを示しながら、都市が「農村」を、国家が「田舎」を一方向的に消費するという枠組みを再生産し続けているといえるだろう⁶。

各地の農村における「村おこし」の中に見られる、地元学の取り組みは、多くの場合、都市住民の側からの田舎志向を媒介としつつ、そのインターアクションの過程の中で展開しつつあり、農村に広く展開しているグリーンツーリズムなどによって、住民自身による新しい価値の発見やそこから「地元学」が創造されているという側面もあろう。またそこから地域と地域を結ぶ交流ネットワークを創造し、「地域に生きる」意味を再創造する契機をもたらすことが期待される。

しかしこのような田舎人の対応はあくまでも都会人の「田舎」意識や価値の枠の中でとどまるという側面があり、田舎人の主体性という視点から見ると常に受身になりがちである。「田舎」は外部から語られるものであり、解釈され、意味づけられる存在にとどまるということになる。こうした中で、田舎人の主体性を取り戻していくために重要なことは、

5 立川,2005:19 を参照せよ。

6 立川,2005 の論点を参照せよ。

これまで歴史の中で常に都会から語られてきた「田舎」が、田舎人によって内部から位置づけなおされ、表現されることの重要性であり、主体的な「学」の構築が求められることであろう。これは言い換えれば、さしあたり次のようなことである。

田舎において「農」にかかわる自分に誇りをもち、そこで作られる農産物、生活のあり方に自身を回復し、現代社会における農的な暮らしの意味を了解し、むしろ積極的に都市とは異なる農村生活のあり方をより未来的なものとして、都会の人たちに伝えようとするような意識である。これはそれまで劣ったものとされた黒人性に対して、「ブラック イズ ビューティフル」という価値転換を求めたブラック・アフリカの歴史的経験にも似ているのかもしれない。

それと同時に今日の田舎学に要請される<主体性>は、都市 農村関係の中に、それを再編するものとしての農村側の積極的なアクターとしての役割である。「日本の都市は輝ける成長期を過ぎて、爛熟期、衰退期に入っている。」という声がある。高度経済成長を突き進み、都市は農村から離脱した人によって膨れ上がり、農村を従属的なものとして扱ってきたが、母体であった農村を欠いては都市の生命自身が枯渇するというような認識が生まれてきていることであろう。このように今日むしろ求められていることは、いまだ膨れ上がる都市に対して、「田舎」を残そうというような防衛的な視角ではなく、都市での生活や仕事に対して、農村的なもの、田舎的なものを与えなおし、都市の新たな生活のかたちをつくりだしていくというような視角である。例えば、すでに和食レストランにおける農的な趣向、東京の「六本木ヒルズ」屋上の水田など農的なものは、都市空間も広がり始めており、都市をリードする農村の時代を見据えた田舎学が求められているのである⁷。

同時に今日の田舎学は、地域が世界に投げ出され、直接対話するようなグローバリゼーションが一方で展開し続ける中で生まれてきている。そこで重要なことは、一方でこうした世界とのかかわりを見つめながらも、地域の自立性を確保し、そこに生きる場をつむぐ出していくことだろう。こうした土台の上に都市や地域との間に交わされる交流が、多様かつ多層で厚みのあるものになれば、それを土台として、地域が世界と直接つながる「姉妹ムラ」、「姉妹マチ」というような、21世紀の国際時代にふさわしい新たな展望も可能となる。

2. <田舎学>という構想

1) 「着土の時代」の中で

以上のような、21世紀に展開すべき田舎学という視座を追究する際に、本研究が中心的な対象とするのは、福井県今立町で展開した、今立 古民家・匠・ロングステイプロジェクトの活動である。ここではまず、このプロジェクトの活動の経緯と背景となる経緯を検討しておこう。このプロジェクトの活動の生まれる母体となってきたものは、NPO 法人森のエネルギーフォーラムが今立町から委託を受けておこなった月尾谷地区の地域資源、地域文化調査である。その調査の中で NPO 法人森のエネルギーフォーラムは、各地の農村における「村おこし」の中に見られる、「地元学」の視点と手法を生かして、月尾谷地区を中心として今立町の地元学を構想した。

その中にはもちろん、地域にある自然と人間の働きかけに関する調査、四季の自然と歳時記、和紙などの文化資源、里山利用などをめぐる伝統的世界の克明な記録をおこなうというような以前からおこなわれてきたような郷土史や地方史の中での調査項目もあった。

しかし、森のエネルギーフォーラムのメンバーが現代の山村を研究しながら痛切に感じたことは、現代の中で意味を持つ今立の地元学を作り出していくためには、生活者としての住民からの地域資源・文化資源の捉えなおしの動きだけでなく、都市住民の側からの田舎志向を媒介とすることが極めて重要であることである。逆にいうと今日の地域資源の中での「あるもの探し」という視角の中では、かつての「地域社会に閉じた」郷土学では限

⁷ 立川 (2005:21) の論点を参照せよ。

界がある。現代の農村において、「地元学」は都市と農村の相互交流の過程の中で展開しつつあり、都市と農村の結合の中に定位するものとしてものとして構想していく必要であった。

こうした都市と農村の結合の中に生み出される農村の地域資源価値の転換のプロセスをもっとも明瞭に示すものの一つが、以下のような世界遺産に登録された白神山地のブナの原生林とそこに生活する住民の世界である。高度経済成長期に他の諸地域の豊かなブナ林はつぎつぎに伐採されて行ったが、その中で最も開発の遅れた地域の一つである、青森県の白神山地には大規模なブナ林が残された。

京都大学アジア・アフリカ研究科教授の掛谷は、このような状況を陸上競技用のトラックを走る長距離ランナーにたとえて、青森県は、「一周遅れの最先端」の位置に立ったと表現することが出来ると述べている。すなわちそこでは、「経済開発に遅れをとったがゆえに、貴重な自然資源の保存については、最先端の位置に躍り出たのである」ということがいえる⁸。

今日中山間地の過疎地の中で捨てられたものが再発見され、新たな資源価値が付与されつつある現象の中には、こうした「一周遅れの最先端」というべきことがらを様々なかたちで見出すことができる。例えば耕作放棄地や空き家となった古民家が卓越する地域こそは、通常、もっとも過疎状況の進んだ「遅れた地域」と考えることが出来る。

しかし長期滞在型のグリーンツーリズムを存分に楽しもうとする都市住民にとっては、そうした地域こそ最も豊かな地域資源を有する場所だと考えることが出来るだろう。このように「一周遅れの最先端」としての中山間地の地域資源は、しばしば都市民の新たな資源価値評価との関係で、これまでの地域資源評価を逆転させ、農村間の資源価値の豊かさをはかる尺度をも変換して行っている。

そういう中で私たちが着目したものの一つは月尾谷の中にもたくさん存在する地域資源としての「古民家」である。古民家を覗くとそこには日本の文化の真髄というものが詰まっている。しかし今やそれが廃れようとしている。しかしそれは単にモノとしての家産が捨てられただけでなく、それを支えてきた様々な匠の技術もともに過去のものとして捨てられていくことを意味する。

こういう思いから、増田氏を中心とした今立のメンバーが、古民家と匠、さらには現代のグリーンツーリズムの動向をつなぎながら、立ち上げたものが、『今立 古民家・匠・ロングステイプロジェクト』であった。しかも福井県、旧今立町を含む越前市の周辺には、本当に優れた匠の伝統がある。また今立には和紙などの優れた伝統がある。

2) 着土論とその限界

こうした今立の世界に起こりつつある、地域おこしのあり方を現代農村全体に起こっていることがらと重ねて考えて見よう。今日、都市から農村へのJターン、Iターンという離都向村の流れ、グリーンツーリズムなどによる都市住民の田舎志向という現象の中で、「人間の生活の場」としての農村が再評価されつつある。工業化、都市化の果てに、その行き詰まりの中で見出されつつある、「人間らしい暮らしのできる場所」としての農村が示す新たな価値創造のプロセスにおいて重要なことは、そこに暮らそうとする人が、あえて都市から離れ、田舎を訪ね、田舎に住もうとするこの意味である。

グリーンツーリズムに参加している人を見ても、リピーターの人の中には、現代社会の中で自然や農村を志向する深い動機を有している人もたくさん参画している。こうした人の中には都市の生活とは異なる「豊かさ」を求めて自覚的に参画し、深いかかわりを作り出すとともに、中には農業者に自らもなろうとする者もいる。祖田修氏は、今日の自然や農業、田舎志向の中に「着土」の志向を読み取り、都市化・工業化の果てに、その負の遺産の中で価値転換を迫られる現代社会のこころの襲と人々の「緑」の志向の連関を指摘し

8 掛谷 1990

ている。現代にはかつてのように農村から都市への人の動きだけでなく、確かに都市から農村への流れがあり、祖田は、特に、UターンやJターンという動きの中に新たに土に着く人の姿を考えている⁹。

しかしグリーンツーリズムの動きなどを見ていると、もう少し行きつ戻りつしながら動いているように見える。確かに、「土に着く」というようなことに象徴されるような、現代社会の価値規範とは異なる価値を内包しながらも、都市の田舎志向の人がすぐに土に着くかということとそうでもなくて、どんな「土」に着くべきか、いろいろ吟味しながら動いているという世界が見える。

そういう新しい生き方を模索し世界を放浪しながら、農業に思いを寄せる一団の人々の一つが、「ウーフ(WWOOF)」というネットワークに属する人達といってよい。WWOOFとは金銭のやりとりなしで『食事・宿泊場所』と『労働力』を交換するしくみのことである。特に有機農業を志向する人達の集団で、有機農場や自然が豊かに残っている所、環境を大事にする人達、または人と交流することを大切にしている所と、そこで働いてみたい人達をつなぐことを目的にしている。この人達はすでに日本を越え、国境を越えて、環境の世紀をまさに「新たに代わるべき」生活に身を寄せて、遊び作りながら生きていてもいえる。こういうダイナミックでいわば遊牧的な様式を持ったネットワークは、まだ極めて少数かもしれないが、少し前までは予測することの出来なかった人の動きであることは間違いない¹⁰。

もちろんこういう生き方でなくても、一方では、表の世界で生きながらもそれとは違う世界を生活の中に持って生きる「兼業的」人間も増えてきている。離都向村を中核で担う人の中には、そうした人が多いし、農村に新しい価値付けをすることを可能とするのもそういう人だということが出来る。

今、地域資源を再発見していくために、そういう人達と地域社会の人達の交流の中で地域資源に新たないのちを吹き込むことが必要である。そこには様々な人が訪れ、これまで、「伝統」を滅びるに任せるか、「伝統」をむりやり維持するしかなかった世界の中に、伝統を現代化し生かす新しい可能性を開いていると考えられる。

3) 田舎学の創造

遅れたものとしての捨てられた「田舎」に命をそそぎなおし、それを息づかせていくこと、それをそこに住む生活者を軸としながらも、都市生活者も協働し、現代的な生活の場を作り上げていくことが今日求められているのだといってよいだろう。

それゆえ今日重要なことは、これまで一元的に農村から都市へという人の流れとそれを支える価値意識に対して、それと逆転するような価値意識を背景としながら、一つの新たな「田舎」を再建していくことであろう。しかしそれは、伝統的な農村や農業にそのまま回帰することではない。これまでの工業化や都市化の中で農村自身が大きな変容を受けており、すでに農村共同体の内実も大きく変わっていることを見ておかなければならないだろう。農村に住む人たちの多くも都市でサラリーマンとして雇用される第二種兼業農家として生活する場合も多く、農村における農業の意味が大きく変化している。

それゆえ現代社会の中に、祖田がというような<着土>というような現象があるとしても、着くべき<土>の社会的意味は大きく変わってきている。<土>に着きなおそうとする人は、仮に、農村に住みぬきの人でもあっても、現代の社会の動向に熟知し、都市の世界をも智慧し、身に着ける人であり、同時に都市からIターンするような人も含めた新しい共同生活の場を<田舎>として創造して行くことが必要とされているのである。

このような工業化や都市化の流れの行き詰まりの中で生み出されてきている「ポストインダストリアル」という状況の中での「田舎志向」の兆候の中には、もう一度自分たちの

9 祖田 1992, 1999

10 Woof, 2003 を参照せよ。

土地資源を見直そう、「あるもの探し」をしようというような意味において、今日の農村における「地元学」の視点と共通するものが見られる。とりわけ今日の地元学ブームのきっかけを作った吉本や結城の地元学の中に見られる「近代」のゆがみを全体として捉えなおそうとする視点と価値志向のあり方には共鳴するものも大きいといえる。

しかし一方でいまだ大きな力を有する工業化や都市化の流れに抗する力を構想しようすれば、それぞれの地域の〈地元〉に回帰するだけでは不十分であろう。重要なことは、何よりも〈都市〉ではなく、都市化によって疎外された〈農村〉を回復するものであり、各地元をつなぎながら、これまでの工業化と都市化に突き進んだ近代のゆがみを包摂するような〈田舎〉とそれを支える学を構想していくことであろう。このような視点から現代の田舎学に強く要請されているものは、「都市」から「農村」へという志向を実現していくプロセスを主題化していくことである。この点でこれまでの〈地元学〉は、あくまでも〈地元〉を忘れた〈地元人〉に対して、〈地元〉を取り戻すことを促すという「学」の構えであり、すでに都市との結合の中に存在する農村世界という視点が希薄であり、都市と農村の共同を開くという「学」のあり方に関しては必ずしも深まっていなかった。

本研究が主題化するものはこうした農村都市の交流の場の中に生み出されていく 21 世紀の田舎学のありようであり、そのあり方と可能性が後述する「遊作」という具体的な実践の場の中で検討されていくのである。

3. 田舎学の現代的パースペクティブ

1) スローライフと田舎学

すでに見てきたように現代の田舎学はかつてのように「都会」と「田舎」という分断された二つの世界として構想されるのではなく、むしろその関係のあり方の中にそれが育っていく培地を有し、現代社会の中で、その関係を反転するような役割が要請される。その際、これまでの〈都市化〉の流れ、〈都会性〉を示す価値に対して、「田舎」を「田舎」たらしめる価値がさしあたり田舎学の現代的なパースペクティブとして重要になっている。

たとえばこれまで「田舎」を遅れたものとする非効率的な価値、「不便さ」を一方向的にあげつらってきた〈都市性〉の価値そのものに揺らぎがあり、今日の「田舎」志向の中には、ある一定の水準で、こうした「不便さ」を価値づけようとする動機が潜んでいる。すべてを合理的で効率的に設定しようとしてきた都市空間の非人間性が語られ、田舎暮らしの中に人間的な癒しがイメージされている。人間という非合理性をも抱え込んだ存在の生活の場としての一つの豊かさが語られているのだということもできるだろう。こうした「田舎」を「田舎」たらしめる価値の現代的な展開の一つは田舎暮らしとスローライフというようなことからの連関の中にもみてとることができる。

例えば、車を使わずに歩くということ。美味しい空気に触れながら、車を使わずに歩いてみると道端に咲く小さな花に出会い、その香りがかすかに感じられる。小さな石ころを拾って川に投げ入れる。目的のない解放された時間に身を任せる。目的に向かって「より早く効率的に」を追い求めた現代社会の生活スタイルから離れてみると、そこに、それまでファーストの世界の拡張によって締め出されたものたちが息づき語り始めてくる。

今日提唱されるスローライフの原点であるスローフードの出発は、1986年にイタリアの田舎町に生まれたスローフード運動である。これは英語圏でできたファーストフードという言葉をもじったものだったが、ヨーロッパを覆うグローバル化の波への不服従の決意を示す言葉であった。スローフードの宣言は次のように語り始めている¹¹。

「我々の世紀は、工業文明の下に発達し、まず最初に自動車を発明することで、生活のかたちを作ってきました。我々みんなが、スピードに束縛され、そして、我々の慣習を狂わせ、家庭のプライバシーまで侵害し、ファーストフードを食することを強いるファーストライフという共通のウィルスに感染しているのです。いまこそ、ホモ・サピエンスは、

11 辻, 2003:31

この滅亡の危機に向けて突き進もうとするスピードから、自らを解放しなければなりません。我々の穏やかな喜びを守るための唯一の道は、このファーストライフという全世界的な凶器に立ち向かうことです。」

そしてこうしたファーストライフへの反撃を自分達のスローフードな食卓から始めるべきだとしてその意味を次のようにまとめている。「……ぜひ、郷土料理の風味と豊かさを再発見し、かつファーストフードの没個性化を無効にしようではありませんか。生産性の名の下に、ファーストフードは、われわれの生き方を変え、環境と我々を取り巻く景色を脅かしているのです。ならば、スローフードこそは、今唯一の、そして真の前衛的な回答なのです。」¹²

このようにスローフードへの視座は、食材としての地域資源の中へ「あるもの探し」の試みを促すものでもあり、以下に述べるような地産地消や自給的な生活世界の復権と深くかかわる志向性を有することになる。

2) 自給的な世界の豊かさ

スローライフは現代のわれわれの時間に振り回された生活へ批判のまなざしを向ける。その言葉が語りかけるものは、文字通りの「遅さ」としての「スロー」ということだけではない。日本でのスローライフの提唱者の一人である辻氏が述べているように、スローライフの「スロー」という言葉の中にはシンプルという表現が内包されている。シンプルな生活とはさしあたり近代的な道具立てを切り捨てた最低限必要のものだけに生きる生活であり、これはいわば自分たちのものは自分で作る、また作り直し、修繕するという自給世界とつながるものであり、その豊かさを語りかけるものだ¹³。

この豊かさとして、まず第一に自給の世界が切り開く手作りの世界の豊かさがある。現代社会はモノのあふれる時代であり、現金さえあれば、あらゆる必要な物を直ちに購入することができる。しかしそのモノはあくまでも外部者によって与えられるのであり、そのモノを自身にふさわしいかたちで作り出す機会を、あるいは権利を剥奪されているともいえる。モノはあふれるばかりあるが、そこで購入するヒトとモノの関係は恐ろしく均質なものになってきた。

このような大量生産と大量消費の味気なさの中で、それへの異議申し立てとして、個別的な嗜好にしたがって商品を選択し、自分だけのサービスを求める購買行動の兆しがある。消費者はその購入するものの中に、それを作った人のおいを嗅ぎ取ろうとする。大量生産の時代以前の職人の手によって作られた製品には、それぞれの職人の個性が表現されており、消費者もその個性との出会いを喜びとしてきた。こうした消費者に自給的世界はさらにそのモノ自身を自らが作ることの豊かさを語りかけるのである。

手作りでモノを作ろうとすると、同じ素材を使ってもそれぞれに違った個性が表れ、その違った個性が生活の豊かさとなる。自給的世界の中では、そこで使われるものは、それを作り出した人、それを使う人、それを譲ってくれた人の関係性と記憶がないまぜになっている。モノは一つ一つ社会的意味を持つ。その歴史的な記憶の中で、そこに生きる人を包み込む。近代の商品世界は、そうしたモノと人との歴史的な関係を断ち切ろうとしたが、そうしたよそよそしいものに包まれた生活の味気なさが、今日改めて生きられた世界とその中のモノと人との関係の取り戻しの作業として、手作りの世界の魅力を語り変えているのかもしれない。

自給的世界の中には、このような手作りの可能性を許すというような豊かさ以外にも、自給的世界には言うまでもなく、自立的な世界の安定性と充実というような豊かさを見て取ることができるだろう。外部の世界の変動に一喜一憂し、さらにその評価の中に呻吟する日常の生活から離脱し、個人のリズムに沿って世界から見れば一人一人の小さな営為

12 辻, 2003:31

13 辻, 2003:31

過ぎないとしても自らの思いの丈に生きる自由がある。

それと同時にもともと自給的世界は、市場とのつながりのない孤立した人の生きる世界ではない。自給的世界の中には、余りものを分け合うようなおすそ分けの世界や相互扶助、共同性の世界が存在した。自給的世界はこうした人の横のつながりの中で、相互の濃密な人間関係が行きかう場であり、こうした横のつながりの向こうには、村を越えたつながりもあった。

<都市化> やそこで展開する都会性は、ある意味では、こうしたわずらわしい自給的世界の人間関係を打ち切り、匿名性のある、ドライな人間関係の構築へと離陸したのであるが、徹底してアトム化できない、人々の存在としての人間のありようが、人間の生きる場としての新しい「田舎」の構築を求めているといえるのかもしれない。

3) 非効率性の価値

現代社会の中でスローライフはファーストライフとの対比の中で語られている。ファーストライフの社会とは、現在の日本のような大量生産、大量消費、大量廃棄の社会を考えることができるだろう。この中で人々がスローな生活を希求する動きがあることはすでに述べてきたが、社会全体がファーストであることから、スローライフを実現することは容易なことではない。それゆえ例えばこのような中で、環境破壊をせず、自然とともに暮らすスローライフを試みようとしても、それは全面的なシステムの転換ということではなくて、さしあたり、これまでのシステムの一部に風穴を開けながら、そこに新たな転換の起点を設けていくことだろう。

そして風穴を通して、そこに注ぎ込む価値の中に、これまでのファースト世界で培われた志向とは異なった「スロー」や「遅さ」の復権ということ刻みつけていくことが求められているのである。その際ファーストの社会に対してスローという価値が語りかけるものは、さしあたり次のような事柄だろう。例えばスローラブ。辻氏が語るように、育児、社会化、教育などはすべてスローなプロセスだ。

それは単に「時間がかかる」ということではなく、そこには愛が必要であり、愛とは「遅さ」そのものが本質であって時間を省くことはできないと辻は言う。このような視点を広げていくなれば、人と人の関係に関わる事柄、とりわけ信頼の構築ということなどには、そこに「遅さ」が不可欠なものとして関わってくる。それゆえスローライフの価値の提唱が見据えようとするものは、関係性やプロセスの意味というような「効率化」できないものであり、その主題化を通して、近代社会の中で、これまで隠されてきた人間現象の諸次元を明るみにしていくことでもあろう¹⁴。

同時に生産性至上の現代社会の中で、常に効率性を促される「労働」存在としての人間も疲労し、病に陥る存在だ。人間はしばしばがむしゃらに働くがしばしば休息も必要である。人はしばしば人生に悩み、立ち止まり、呻吟し、とてつもない浪費に見えるような経験を重ねる。こうした合理性や効率性という視点から見れば、呪われた部分としての側面を含みこむ人間の生きる場としても田舎のあいまいな世界のありようが重要となってくる。

以上のような現代の田舎学がそこに含みこみ、それを構成する中心的な価値の中でもスローや遅さ、そこから由来する不便さや非効率性をも再評価する視点は大量生産、大量消費、大量廃棄の社会を批判するエコロジーなどの批判の言説の中でも、これまで欠落している視点であったといえるだろう。

<効率性> の呪縛を免れ得ない現代生活の中で、さらに<効率的>たるべしという宣言は、人間現象というトータルなありようの中に、<不便さ>や<非効率性>のような語ることでできない「呪われた」部分を作り出し、それでもそういうものを抱え込み生きざるを得ない人間現象を干上がらせてゆく。このような中で、現代が有する<田舎>というイメージの心地よさは、いまだそれが明瞭に発見されていないとはいえ、それ自身がその近

14 辻, 2003: 54

代に対して呪われた部分を引き受け、そうした呪われた部分を抱え込まざるを得ない人間群に対して「人間らしくなる場」を提示し直しているからだともいえるだろう。

但し「田舎」という生活の場は、「スローライフ」の言説がしばしば陥るように、「スロー」か「ファースト」かという二分法的な視点にはもとより一定の距離を持つ。具体的なスローを志向するような生活の場においても、自ら「スロー」も「ファースト」もともに含みこみ、その行為のモザイクの中に構成されている。しかしそれでも「田舎」は、「都会」に対して、そのイメージの中に、ある意味では卓越したかたちで、「不便さ」をも抱え込むことによって、ファーストに疲れた人間像に対して揺るぎのない癒しの場を与えているといっていよう。

本研究の目的は、以上で述べてきたような現代の田舎学の意味世界と可能性を、以下で詳述するような、福井県地域ブランド創造活動推進事業、今立 古民家・匠・ロングステイプロジェクトの活動と経験を事例としながら検討しようとするものである。その際本研究においてとりわけ焦点化する事柄は、その事業の活動過程を通して生まれた「遊作」というコンセプトである。以下では、事例で報告されることがらの位置づけをより明瞭化するためにも、本研究において主題化する「21世紀の田舎学」ということからの関係で、この「遊作」という経験の可能性についてあらかじめ述べておきたい。

4. 今立型モデル - 遊作という経験の可能性について

1) 地元学から遊作塾へ

NPO 森のエネルギーフォーラムでは、今立の古民家や、伝統産業としての和紙とグリーンツーリズムをつなぐ形で古民家・匠・ロングステイプロジェクト（いまだて遊作塾）を立ち上げ、「福井県地域ブランド創造活動推進事業」の補助を受け 2004 年より活動を開始した。運営を担っているのは福井県今立町(2005 年 10 月から越前市)および近隣在住の有志による実行委員会であった。

ただ「自分たちがこれまで考えてきた『環境の時代』とその乗り越えの作業ということとの関係で、この事業をどのように考えるか」という問題があった。古民家再生は今や全国ブームであり、そこにどのような新たな意味を込めていくのか。そうした中で浮かび上がってきた言葉が『遊作』というコンセプトであった。

遊作塾を支える視点は、古民家を軸とした活動においても「古民家を守る」のではなく、それを環境の時代の中に新たにいのちを吹き込まれたものとして活かす、それはあえて言えば現代社会の中で古民家の再創造という視点であり、古民家からこの時代を見つめ直すことであった。

そのためにはどうすればいいか。古民家の中におかれた表具、障子、囲炉裏、いわばどれ一つとっても日本文化の粋が集められている。それを再生するためにはさしあたりどうしても多くの匠たちに、協力してもらわなければならない。しかしそれを現代に活かす、現代に生きる人が暮らす生活の場として再創造し環境の時代を乗り越えて行く何かを作っていくためには、匠たちにも、自分たちの世界の中だけに立てこもるのではなく、そこから踏み出してもらわなければならない。胸襟を取り払って若者とも交わり、現代にふさわしい何かを作り出していく自由な“場”が必要だとも考えてきた。それが遊作であり、遊作塾の活動を繰り返す中で、「匠と遊び、匠も遊ぶ」というような“遊作塾”の原風景が実行委員のメンバーの中で共有されるようになって来た。

2) 背景

この遊作塾の背景には、NPO の活動の一つとして、今立の月尾谷を中心に循環型社会のモデルとなるような地域づくりやそのための地域資源を見直そうとした地元学的調査がある。月尾谷の中には、今は捨てられたが、眠れる宝がたくさんある。今は捨ておかれた、古民家がそうだし、たくさんの放棄された田畑が、都会からの田舎暮らしを望む人たちを待っている。こうした中でリーダーの増田氏が、今立の仲間たちと語り合い辿りついたのが、『古民家再生からの地域おこし』であった。そこでは、古民家を舞台とするとともに、こ

の地域の和紙の工芸技術の伝承を含めてグリーンツーリズムの事業が考えられたのである。

しかし、その中で都市から来る来訪者に田舎暮らしになじむために、どのように農村体験をしてもらうか、伝統技術に親しんでもらうかは大きな課題であった。このような中でプロジェクトが、その基礎においた「遊作」というコンセプトとその実践は、さしあたりこのプロジェクトの実行委員会の中で討議され、生まれたものであるが、その沿革には、後に述べるような1970年の後半、旧今立町を中心に展開した今立和紙展やその活動の背景となった芸術家の河合を中心とした、当時の今立の青年を中心にした、地域資源のあるもの探しと芸術をつなぐ遊作的活動があったことが大きい。

3) 今立という地域性

都市生活者の農村体験にもさまざまな次元や対象がある。よく知られているような棚田の保全や田植え、田植えなどの農業体験はその重要な項目である。しかしこうした体験にかかわる論点は、一つの〈自然体験〉として考えられている場合が多く、自給的な田舎暮らしの中で重要な手作りの意味やその伝承や創造という側面については、これまで必ずしも明示化されない場合が多かった。田舎に暮らす人は、確かに農民が多いのではあるが、その農民は同時に自給的世界を生き抜く百の仕事をこなす百姓であり、それぞれの仕事に芸を持ち、常に伝統を創造しなおす、豊かさを有していた。

本研究が対象とする今立は和紙の里として、田園工芸の長い伝統を有し、そこに様々な匠を有している。この〈技能〉を、今日の田舎志向の中で都市から来る人たちがどのように身につけ再創造していくか、これは他の地域と比較して〈手作り性〉という重要な課題を検討していく上で卓越した優れた対象事例となってくるといってよいだろう。

実際、プロジェクトの中心軸も、今立に古くから伝わる伝統工芸体験と豊かな歴史をものがたる古民家再生に据えられていた。和紙講座や古民家再生講座を定期的で開催し、福井県内外の方々に広く参加を呼びかけてきた。しかし、これらの伝統の技をただ単に体験して終わってしまうのではなく、より深く、より本格的な充実した講座を私たちは目指している。そして和紙や古民家といったモノだけではなく、食べ物や音楽、今立の生活スタイルまで味わえるような講座を目指した。

4) 〈匠と遊び〉〈匠も遊ぶ〉

こうした都市と農村の交流の中で、現代の田舎学を体現し、田舎学を生み出す触媒として期待されるものが遊作という試みだといえるだろう。その際、匠と参加者の間に田舎に暮らす協働者として関係をも見る。確かに地元学を構築する上で匠からいろいろな技術を学ばなければならない。しかし遊作塾は、それだけでは足りないと考え、匠も現代の地域社会の変化の中でともに呼吸し、若者とも交わり、伝統を現代に生かす〈仕事〉にも乗り出していただけたらと考えているのである。

今立にはたくさんの匠がいる。その匠とのかかわりにおいて、遊作塾では匠から学ぶということも勿論あるが、匠の人にも遊んでもらい、匠の人と遊び、匠の人にも遊んでもらい、匠の人と遊ぼうとってもらおうということを「遊作」のコンセプトの中心においてきた。

すなわち遊作塾では「遊作」という活動を、「匠に学ぶ」というよりもむしろ「匠と遊ぶ」、「匠も遊ぶ」といった自由な雰囲気の中で、未来に向けて地域資源を掘り起こし、ともに再創造する場を作り出していくことなのである。そしてその展開の向こうに時代が顧みなくなったモノたちに、もう一度いのちを吹き込み、その活動の場を通して、環境の世紀を生きる私たちの小さな希望と連帯の和が育っていけばと考えるのである。

匠から伝統技術を学ぶのは恐れ多いが、その中で匠の人たちに参加してもらい、地域のために、時間を割いてもらい、遊んでもらえば、そこから何か生まれてくるのではないかという気持ちを持ってきた。子供や青年、そして第二の人生を迎えたような人がこの遊作

の里に集まるとしよう。匠を囲み、その技術を体験してみる。多分そこに集まる人がすべて技術の継承者になって行くわけではないが、そこに人生をかけてきた人と向き合いそのエトスや経験を共有し、一緒に遊ぶ機会が生まれたならそこには豊かな人生が大きく膨らんで行くだらうということはいえるだろう。

しかし遊作塾の活動を開始するに当たって、何よりも一つの障壁のように思えたのは、匠の方々が、「うん、いいよ」という形で対応してくれるかどうかということだった。2004年の最初のシンポジウムの時、私たちの思いを切り出した。そうするとそこに参加した匠の方々が、「うん、いいよ」と言ってくれたのである。あまり考え込むことなどないことなのかもしれない。しかしこの遊作塾にとっては、一つの原点であり、一つの原像なのである。

とくにこれまでやってきた遊作塾の活動の中で印象的なものは遊作ライブの活動である。和紙や囲炉裏の製作をした後で、匠も踊る、直井棟梁などは若者のライブを聞きながら、「わしはやっぱり演歌がええ」といっていたが、結構若者の音楽を楽しんで聞いてくれた。そして家族の世界の中では実現している世代間の共働、学びあいの世界が遊作塾のもう一つの原点といえるだろう。

5) <遊作という場> 遊作自由大学

以上で述べてきたように、ここで中心的な研究の対象とする今立遊作塾という活動は、みんなで楽しみながらモノづくりを行う場であり、そこに参加する一人一人の人にとっては、それを通して自分の生き方や暮らし方を問い直すひろい意味での自己教育の場でもある。遊作塾は将来に向かってどこに向うのか、そんな問いを語る議論の場で、実行委員会の中に遊作自由大学という構想が生まれたことがある。

いまだ明確なかたちをもたない構想ではあったが、とてもおもしろい広がりのある議論であり、そこには今立にふさわしい地元学の展開の場としての学の構想があった。たとえば越前和紙学、講師には岩野さんや梅田さんがノミネートされていた。それから古民家学、食学、漆学、環境・自然エネルギー学など通常の大学の中には入りにくい、生活の学の体系化と高度化が意図されている。地元学が世界性を持ち、工業化・都市化の時代を超える新しい価値を体現するものとして、地域の中から世界に何かを発信していくためには、現代の田舎学の構築ということにつながるような、こうした気宇壮大な地元学の深化発展が必要なのだということであった。

そしてこういう田舎学の構築ということに関して重要なことは、なによりもまず、それが開かれた共同体として生きていくということである。後に詳述してのように遊作塾の活動では、老若男女、さまざまな人が集まってきた。建築屋、農民、パン屋、大学教員、芸術家、本当にいろいろな人がおり、「匠も遊び、匠と遊ぶ」という遊作塾の世界は異なる人の共存を前提とした新しい試みであった。そこには、日本の中ではあまり例のない<異種共存>の活動の世界が広がっていたのである。

今立遊作塾は、さしあたり、福井県地域ブランド創造活動推進事業、今立 古民家・匠・ロングステイプロジェクトの活動とともに展開したものであり、現在も実行委員会の形でボランティア的活動として続けられているが、公的な事業との関係では2年間に満たない形で閉じることになった。そこには後に詳述するような行政的な仕掛けとそこで具体的に活動を担う自主的組織運営のジレンマという現代社会のNPO活動が一般に抱える問題もあった。本研究は、現代の田舎学の課題と方法をこうした今立モデルにより沿いながら、遊作塾の経験を精査するとともに、その問題点をも明らかにし、現代農村の中ですでに進行している田舎学の諸相との対話を行い、「遊作」という新たな視座が有する現代田舎学構築に向けてのその可能性を検討しようとするものである。

第2章.今立における地元学の展開過程とその意味

増田頼保

一般¹に地元学といわれる考え方は、近年特に地域ブランドともてはやされる以前から、地元根付いている農業を中心とした地域の文化や食文化を中心に、いろんな体験や伝承、その他伝統工芸などを生かそうとする地元人による地元の内省的活動を意味する。すでに冒頭で述べたような、水俣の吉本哲郎、東北の結城登美雄など地域の「あるもの探し」に向けた実践者たちの試みの中に、現代社会の中での地元学の最も優れた取り組みを見ることができるだろう。

今立における地元学の展開は、このような現代の地元学の潮流と比較してもきわめて興味深い視点を有している。今立における地元学の展開においては、その言葉が一般に流通する以前にすでに、その地元学もしくは自分中心学的意識で世界を見ていた人間がおり、今日の「いまだて遊作塾」の活動の基盤を作り出していた。そのもっとも影響を与えたと思われる一つの大きなインパクトが、故河合勇とその賛同者をめぐる活動である。

それは、現代美術の画家・河合勇の試み「ハツ杉現代美術研究所」(1976年～1980年)であった。河合は常に「自分がいるところが世界の中心だ」と言っていた。

その活動から端を発し、地域の若者に多大な影響を及ぼし、短期とはいえ、そこで生まれた芸術的な思考が「今立現代美術紙展」(1979年～現在まで)や「ハツ杉陶芸教室」(1979年～現在まで)そして、環境を考慮したまちづくりは、後の「いまだて結い村構想」(1992年～1994年)へと続いていた。

そしてこの流れのもとに、「いまだて結い村構想」の何人かのメンバーが中心となって、NPO法人森のエネルギーフォーラム(2002年～現在まで)を結成した。NPO活動の中で、「地域資源・地域文化調査事業」を旧今立町から受託し、アクションリサーチという手法を発展させたのが、「いまだて遊作塾」へと繋がってきたのだ。

これから、この一連の活動を中心に引っ張ってきた「いまだて遊作塾」の代表である増田氏と増田智雪さんにその成立の一端をひも解いてもらう。

1. 河合勇の試み(1976年～1980年)から結い村構想へ

河合は地域の若者と様々な活動をともした。その一つが演劇。はたして、その演劇はどうだったのであろうか。地元のロックバンドが音楽を担当し、衣装を着てドウランをカラフルに誰が誰かもわからないくらいに顔に塗った。愛とは何か、自由とは何か。50人近くの出演者がそれぞれの与えられた役以上に、熱のこもった場面が繰り広げられ、全てお祭りのように楽しかった。

当時を振り返って増田智雪は、河合勇展のカタログにこう書いている。

中略

「シナリオはこうである。一匹のヘビが人間自動販売機にお金を入れると、次々と人が登場してくる。そしてお金で、愛や自由をむやみに売買している。

そこに、ムチ男が登場して、愛や自由を統率してしまう。それから暴動が起こり、戦いが始まり、人も物も全てを失ってしまう。そして、バラの花売りだけが『愛と自由』を求めて花を売る。 中略

その半年ほどの間に出演者はどんどん増え、50人ほどになった。ここでキーポイントになるのが、決して演劇をやりたい人だけが集ってきていたわけではないということだ。

『絵が描きたい』『造型を作りたい』『写真をやりたい』『陶芸をやりたい』『バンドをやりたい』『詩を書きたい』『シナリオを書きたい』『演劇をやりたい』『展覧会をやりたい』『文集を作りたい』『版画をやりたい』etc, etc,

¹ 例えば吉本の著作を参考にせよ。

河合イサムの前では、皆、なんだってやってみたいの連続。

そんな一人ひとりが全て出演し、(劇中)何らかの形で自分のテリトリー(居場所)を満足し、征服したのではなかったろうか。演劇、舞台美術、音楽、絵画、シルクスクリーンでの版画、ポスター、チラシなどを制作し、さながら八石分校は芸術コミュニティだった。」(1996年福井県立美術館「河合勇展」図録より)

一人の人間がある目的を持って集り、その中で一つの役割を演じる。あるいは、予想もしなかった自分の動きに驚いてしまう。遊作という言葉には、こんな意味もあるのではないかと思う。

河合勇の語録を思い出してみると、

『ないものねだりはするな!あるものでどんどん応用してゆけ!でも、絶えず言い続けることだ』

『誰の物まねでもない、独自の描き方を考えろ』

一枚の絵画の中に『奇跡を七回起こせ!』

『画集は見るな!本物を見る!美術画壇なんて気にするな!』

『この今立の環境の中で、ずっと育まれてきている文化の歴史を、自己表現形態に置き換えて描かれることが、何より素晴らしい作品だ!』

『捨てる神あれば、拾う神あり』

1) 河合勇が若者に与えた影響

1976年12月、河合勇が今立の旧八石分校にアトリエを構えた時から今立は大きく変わった。その当時まだ若者の意識は都会に出て故郷に錦を飾るという意識しかない時代、高校を卒業し地元に残る若者の気持ちには発散されないエネルギーが充満していた。そこへ『日本の美術界・画壇なんて欧米のまね文化でしかなく、世界に通じる文化を生むのはここにしかない』、『ないものねだりをするな』、『ここが世界のへそだ』という河合が居た。

河合にとって死の間際あと十年は生きたかったと言っていたように、実質3年で何ができたのか?なにしろ78年10月には癌の手術を受け、後は闘病生活であっただけに、答えは何もできなかったが正解かもしれない。

今も旧八石分校は何もなかった様なたたずまいのまま。しかしその3年間に残した発想は30年を過ぎても、世界に誇れるわたしたちの文化を育てる壮大な構想を後押ししてくれているといえる。今立における遊作塾に繋がる一連の動きの発端は、現在、代表を務める増田頼保の活動の原点が、河合勇の設立した「ハッ杉現代美術研究所」である。

福井県の田舎である旧今立町(現在は武生市と合併して越前市、当時の人口約一万五千人)で生まれた河合勇の「ハッ杉現代美術研究所」を中心にした芸術運動の基盤は何だったのか。

河合は、アルパークにある芸術家村に招待され制作している。芸術家に最大限に恵まれた環境であっただけでなく、インディアン居住区があり、広い地平線の広がる大陸の地はまさしく河合には自分の原風景だったといっていた。河合の今立での芸術村構想はここが原点である。また、ここは本多勝一氏が『アメリカ』を執筆する際にも河合が同行して案内している。

敗戦を味わって、世界の文化最先端だと信じる若者がNYに集った時代。アーティストや、ミュージシャンなど様々な分野において、日本で一流だと脚光を浴び意気揚々と渡米し、アメリカにおいては日本人がカラー(有色人種)に所属し差別を受ける、そういう環境に行き場を失った多くの日本の若者が河合の下にも集っていた。世界はこんなにも広く様々な生き方や価値観のはず、しかし、アメリカでの差別は、最先端の技術は学べてもアメリカには経済しかなく思想はないと思わせるようなアメリカの合理主義。世界経済の合理主義の行き着く先は戦争しかない。八石分校にいても常に、ラジオをチェックしてFEN(米軍キャンプ用放送)ソビエトと中国の日本語放送は必ず聞き、時の世界情勢を茶番だ

と評していた。

2)「ハッ杉現代美術研究所」の活動 絵画教室

絵画教室といえば、画材を買い揃え絵画技術を学ぶ場であることは今日も変わらない。しかし河合のアプローチは違った。まずキャンバスを制作させた。ノコギリや金づちを使った大工仕事である。つまり中学や高校の技術の時間に学んだ技術で十分の作業は、美術など知らない田舎の若者に大きな門戸を開いていったのである。若者が集るのを喜ぶ大人が、丸鋸に電動カンナなど次々と道具を提供してくれた。ついには工場で要らなくなった木工機械や学校の片隅に眠っている木工台など、そうして絵画教室の道具は充実したと同時に、どのような絵を描くためのキャンバスかではなく、キャンバスをうまく作れる若者が、タイミングよく『カッコいいのができたな』と河合に褒められてしまうことが絵画教室に導入されていった。

次に、何を描くか・・・それぞれが頭を痛めるときにはすでに、いわゆる『市民文化祭に展示する』と河合はいう。とにかく考えるより手を動かせるの発想。そういった地元の文化祭には常に文化人たるメンバーがいて、机上の知識を振りまいて文化論を豪語させているのを横目に、何の美術的知識もない若者の初めての作品2点ずつが、河合にかかれればニューヨーク近代美術館に飾っても恥ずかしくない素晴らしい作品群だというのだから、その魅力にとりこにならないはずがない。

この展覧会のことを、『ニューヨーク郊外、ニュージャージー公民館でのニューエージ誕生の劇的展覧会やな』その『ニューヨーク近代美術館って何なんやって?』というのが良いといていた。更に、『ピカソのゲルニカの横に並べても引けをとらない』というのだから驚きだ。ゲルニカが何であるかも知らない若者に、あるいは描いた手法によって、あるいは描こうとした世界観によって次々と世界の有名作家の名が飛び出し、それぞれの作品を探求の道にいざないどんどん思考を広げさせる。そういう認識のさせ方。

3)「ハッ杉現代美術研究所」の活動 演劇や舞台芸術

演劇や舞台美術、創作ミュージカルと音楽は、実験劇場「大いなる愛と自由の夜明け」そして講演活動を計4回実施して若者の文化活動に刺激を与えた。

演劇も河合には、『圧倒的舞臺美術の迫力と舞臺の上でどれだけ自由に動き、語ることができるか』が、主流であるから、やっぱり大工仕事の手始めだ。滑り台を作りブランコを作り、地元の損紙を使って次々と張りぼてを作っていく。次にいらなくなった農機具や大八車などがどんどん集ってきて、そういうものを利用する場面を脚本に盛り込んでいく。

繊維工場から半端な布地が100人分も衣装ができるほど手に入り、内職で使っていた工業用ミシンが来る。デザインは生地を足首が隠れるほどの長さで半分に折り首をくりぬき裾から肩にかけて少々左右対称に斜めに切り、袖をつけ、手首から裾までを一直線に縫うだけ。出演者はどんどん増えるから、できるだけ衣装は作れと指示する。

4)「ハッ杉現代美術研究所」の活動 紙の実験展から今立現代美術紙展へ 紙の実験展の経過

1979年の3月、「グループ“無”」展という二十五歳以下の若者だけでつくった展覧会を武生市公会堂と旧今立町社会福祉センター（現在のもくせい会館）で巡回した。公会堂と社会福祉センターそれぞれで、シンポジウムを開催したとき、郷土史家の渡辺光一氏から、『皆さんは和紙など地域の素材を考える展覧会があっても良いのではないかと、むしろ、これからの現代美術の方向性を示すことになるのではないかと』という意見が出された。早速、その場で電話をして頂きサンプルになるような紙を手配してもらった。

河合勇の意見で、『会期中、展覧会というものは展示したらそのままというのではなく、毎日変化することもやってみるべきではないか』という、会期中であっても新たな作品作りをすることになった。そして来場者にも参加してもらえるようなスペースを設けた。

和紙以外にも、地場産業のリボンや織物などをもってきた。それまで、和紙を使った作品展は折り紙や和紙人形くらいしかなかった。それを、現代造形美術作品にしていって。また、照明と造形作品で会場構成する空間芸術の分野にも着手することになった。

私（増田）は実行委員長になり、グループ無を中心に「現代美術今立紙展『紙の実験展』」を旧今立町勤労会館の体育館で開催した。当時は美術館も芸術館もない時代で、表現の場所として選んだ体育館は、自由な空間として位置づけて天井から軽トラックを吊ったり、様々な紙のウェーブをつけたりするのに非常に役立った。半分を河合勇の作品展、もう半分を和紙による自由な表現の場として演出した。夕方のテレビのニュースで紹介された時、斬新な紙の演出ときれいな映像が非常に印象的だったらしく、地域の人が訪れるようになった。

この展覧会に漕ぎ着くまでは、地元製紙業を営むお宅を一軒ずつ訪問し、最低でも2時間以上をかけて説明した。心情的には、この地域の河川環境の自然を回復する意味を込め製紙に関わる人たちにアピールしたいという思いと、それを反対運動にするのではなく、そのできた紙製品の使われない部分を使って、逆に芸術作品にしようという試みだった。

僅か三年という歳月の中に凝縮された闘病中の河合勇と若者との交流は、ゴミ焼却場に棄てられた和紙の廃棄物である損紙を再利用しようと思案した『紙の実験展（展覧会）』を始めたことにある。現在の今立現代美術紙展の出発点となった。（写真参照：第一回紙の実験展パンフレット）

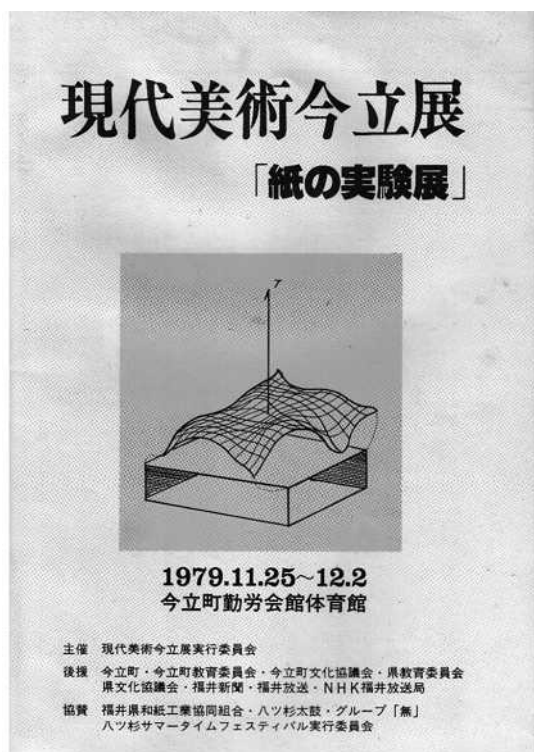


写真1：現代美術今立紙展『紙の実験展』のパンフ

写真2：『紙の実験展』展覧会場風景

5)「ハツ杉現代美術研究所」の活動 ハツ杉陶芸教室

陶芸教室はまず登り窯を作るという約束で、今立町役場から50万円を投入された。6月の補正予算で組み込まれたにもかかわらず、1978年10月までは実験劇場「大いなる愛と自由の夜明け」の準備に追われ陶芸を始める気配はまったくなく、さんざん催促され、8月に町長から呼び出された。そのとき河合が嘆願したのは、登り窯を作るというのは土地が山になっていなければならず、ちょうどそのころ町のあちこちでは、農地改良で土砂を運ぶ大型トラックが盛んに往来していて、その廃土をぜひ登り窯用に無償で校庭に運ばせて

欲しいということだった。次々と土砂が運ばれ、ヨイトマケの日々が始まった。見かねて、土建屋から機械が貸し出され、効率よく基礎固めが進んだ。次に花壇を囲っていた石を掘り起こし、窯の土台の枠に敷き詰め、その間を校庭に投げ捨てられていた大量の瓦を縦に敷き詰めた。ようやく予算を使って買い始めたのは、チェーンソー（薪切断用）大型カッター、溶接機、L字鋼、トタン板、セメント（釜小屋用）、

角材、ベニヤ板（レンガの支え用）、ふのり、金属酸化物、乳鉢（上薬用）。それぞれ請求書が教育委員会に回るたびにこれは陶芸の材料ではないと、その用途の説明を求めに来ていた。

その時点ですでに予算は底を尽きていた。はたして窯用のレンガは、廃業した瓦屋から出てきた使用済み耐火レンガを2000丁手に入れることになった。まだ足りずに、もう一軒、改修工事をした瓦屋の使用済み耐火レンガを運び込んだ。いよいよ築窯。

地元の青年団だより。校庭に水を張り、藁を混ぜその土をレンガにかぶせてようやく出来あがり。しかしこのままでは火をくべるわけにはいかない。

プロでも難しいといわれている登り窯、素人集団で作上げたものに河合自身信用が置けない。しかも制作した粘土を入れて焼くためには棚板も鞘もその他の調達が必要になった。さっそく信楽のあちこちに連絡し、相談させてもらうことになった。信楽では素人の登り窯制作集団が来るということで、窯制作会社の人々が興味津々で集っていた。われわれの登り窯はその人々を驚嘆させ、納得させ、使用済み棚板や鞘をあちこちで調達して格安でもらえるよう協力してもらった。

薪はすべて廃棄される古い家屋の建築材で、ここ福井では立派な松の柱や梁がどんどん運び込まれ、チェーンソーは大活躍。その後、地元法務局の建物を移築し陶芸教室が本格始動し、ハツ杉陶芸教室は世代交代が進んで、現在でも年二回定期的に窯焚きが実施されている。

6)「ハツ杉現代美術研究所」の活動まとめ

以上のように、河合勇の考え方は、当時、高度経済成長としての社会の風潮に対し、新しい時代への方向性をアンチテーゼとして示したといえる。更に、世界でも最先端といわれていたニューヨークの文化を体験しながら、しかし、今立には今立独自の文化があるのだという意識を持ち込み、『自分のいるところが世界の中心だ』とする河合勇の思想を同氏の没後も、私（いまだて遊作塾代表の画家・増田頼保）や彫刻家・増田智雪、今立現代美術紙展実行委員会の沢兵栄、上木孝、宮森昭宏、鹿浦正文が継続発展させてきた。

河合は、1960年から1973年の間、



写真3：河合勇が作ったハツ杉陶芸教室の登り窯



写真4：ハツ杉現代美術研究所での増田智雪と河合勇（右）

ニューヨーク・ソーホー地区で居住運動を行いながら芸術活動する経験と、二度に亘る世界旅行を経験したことで、人類の根本についての思考を深めたことにより、芸術の社会参加のあり方を考えていたのかも知れない。それは、アフリカの普通の市民が、時には農業や牧畜を自然の生態系の中で営む姿や、マコンデ彫刻やティンガティンガなどの絵画の分野に力量を発揮しながら生活を送っている姿に可能性を見たようだ。

日本でも百姓という呼び名の通り農業だけでなく百通りの職業を持っていなくては田舎では暮らしにくいことと対比できる。それが、世界に通じているという意識がこの活動にとって非常に重要な視点だったと思う。

2. 結い村構想研究会（1992年～1994年）

この研究会は、当時の若泉町長といまだに芸術館長川津祐介（俳優）との対談で『今立には千年以上長持ちするという和紙の歴史が今でも息づいています』ということに端を発し、千年未来を考える長期構想を、今立に住む住民が自由意志で集まり3年間にわたって研究した。その成果を報告書という形でまとめたのが『結い村構想研究会報告書』である。

最初に、結い村構想の理念についてのワークショップでは、次のようなことが語られた。

「ここで生まれた子どもたちが、山や川やたんぼや畑やものもいわない生き物や弱いもの達の声をしっかりと聞きながら、チャレンジするうれしさ・たのしさを味わい、その中で自分の可能性が花開き、不安や争いのない本当の生き方を選びとり、安心して生きていくことができるように。わたしたちは、ふるさと（地域）との結びつきを大切にしつつ、ゆっくり時間・ゆったり空間・ゆとりをもって（前向きに夢を抱き）ほんとうに大切なものを発見し実感し伝えることができる場所を作っていきたい。」『結い村構想研究会報告書』より

先ず、話し合われたのは、今立に何を残したいかということをおもいつくままに一人一人が語っていき、それを理念という形で一つの文章にまとめたのが、上記に示した文章である。

それから、毎月二回のペースで2年半の間ずっと集まって話し合った。途中、他の実践地も見たいと滋賀県の茗荷村（授産施設）に皆で行ったり、各自自分の興味のあるところを提案し、視察したりして会に報告した。

全体の構成として、前半部分は理念と現状認識をまとめ、後半部分はそれぞれ考えうる具体的な提案を示している。この構想は、私たちの生き方・暮らし方を、質的に豊かにするための構想と考え、独創的で革新的な地域としての伝統という歴史的な基礎に立って、千年先の未来を見据えてゆく創造力と感性を大切に、自然と共に生きる文化を探るものである。そしてこの地域には、技という世界があるが、技は共同作業の世界にも通じる。そこには、技を磨いた経験と実績が大変重要な役割を担っていて、定年といったような年齢で社会参加を拒絶させられるような事はない。

現在、盛んに学歴偏重社会と言われながら、学校も親も余裕のない状況にある。自然の中で体験し学ぶ事は、生き物の世界の発見や観察など、生命を大切にする意識を植え付けるのではないだろうか。

先ず、歴史的に遡ってこの今立を考えると、伝統を誇る織物と越前和紙の産地として、全国に伝播していったように、技術の蓄積とそれを打ち砕く新しい試みによって、技術が飛躍してきた。この地における切磋琢磨する意識が、革新的な地域の伝統という歴史的な基礎に立って、千年先の未来を見据えてゆく創造力と感性を大切にしていこうとする人達が集まって結い村・芸術村構想研究会が発足した。

現在の私たちを取り巻く状況（産業・文化・生活・環境他）は、様々な課題を抱えている。今こそ現状をしっかりと認識し、本来私たちが求めようとしている生き方・暮らし方を探り、21世紀ではなく31世紀の未来を目標として私たちから次の世代に伝えるべき、哲

学・産業・文化・生活・環境のあるべき姿を問える場をつくりたいのである。

そのため、そこに集い・考え・実験し・理解者を広げながら、地域の人々に広めていくための場作りと考えている。そして、従来提案されたことがある芸術村構想（芸術家を国内外より招いて創作活動や町民及び・和紙・織物・漆などに携わる人々との交流を図り、今立を発信基地にするアーティスト・イン・レジデンス）を参考としながらも、この機会に原点に帰り本質的な考え方に立ち返って構想をたてる必要があった。

私たちの町には、今年 26 回目を迎えた今立現代美術紙展の発展に見られるように、人間にとって本当に大切にしなければならないこと、今立にあるもの・事・人、今立に来て初めて理解できる風土、そういった一つ一つの要素が、結び合い独自の文化が存在しているからこそ注目されてきたと思っている。

人口一万五千人の小さな町で、世界とつなぐことができる文化・芸術基盤を作ってきた。私たちは、この基礎をより多角的に、より先鋭にして、地元にも理解されやすい構想を提案してきた。このような芸術村構想の発想は、すでに述べた河合を中心としたハツ杉現代美術研究所の経験とつながるものである。例えばエコロジー精神としての廃物利用。すべて手作りのものであるという発想。情報産業・地域文化の視点から見た時、文化的に時代の先取りをした活動。イベント性があり、今立だけでなく全国的に通用するもの。地域振興・観光資源としての意味を有し、地元には何らかの形で還元されてくる波及効果・購買力・交流がある。若者の情熱と住民の協力の下、地域の共同性を復権するという。伝統と前衛の刺激と調和。活動が国際交流の糸口になるということ。体験学習・実習。地球環境にやさしい発想を育むという点。永遠の価値への開拓精神など……。

21 世紀という新しい時代の担い手として今を生きており、福井での 20 世紀の芸術文化を語る上で欠かせないのは、丹南地域を中心に福井を、ひいては全国をも巻き込みながら活動して来た拠点としてのすでに述べたような、『ハツ杉現代美術研究所（旧八石分校）』の活動だった。この間に育まれた芸術、文化活動を、更に大きく発展させて行く為に、「結い村構想」の中には、次のような計画書が書かれている。

（１）[モラル意識の確立]

現在、失われているモラル（節度）の意識を啓発する。ハツ杉現代美術研究所では、24 時間開かれた芸術創造空間、徹底したリサイクル精神とクリーンエネルギーが提唱され、グローバルなものの考え方で色んな人々が交流してきた。何かを表現する一人の人間として自分自身のモラル（節度）ある態度・精神を維持し、無欲に無心に自己を追及してきた。こうしてはじめて、自己認知と自己改革 個人の自立 家族 その背後にある地域社会 日本 世界の改革・変革をめざすことができる。

（２）[芸術村の基盤整備]

いま全国的に、高齢化社会への対応が問題にされているが、若い世代にとっても見過ごせない問題になっている。若い世代にとっては仕事と家庭と両立させなければならない上に、お年寄りの面倒を見るとなると、かなりの収入と時間がなければ解決しにくい問題ではないだろうか。高齢者の役割としては、今立でも今立シルバー人材センターが開設されて、老後の余暇をうまく利用して生きてゆくことができるようになり、生き甲斐をより大きく膨らますことができるようになってきた。さらに今後は、若者の町を目指さなければ、町は活性化されてこないし、素晴らしい人材も増えてこないのは目に見えている。町外に流出する人口をとどめるために、より魅力的な町づくりのひとつとしての芸術村は、体験学習や国際的文化交流の環境に慣れ親しんでいくものだ。そのためには、次のような基盤整備が必要である。芸術村における芸術の概念は、狭い意味の芸術だけでなくアルス(ARS)本来の意味に基づいて使用する。芸術村に求められるシステムを十分に生かすことができ

る為に、ソフト部門の趣旨が理解されなければならない。

(3)〔人材育成〕

出会い・育て・響きあう場の提案：伝承すべき技術の喪失、教育環境の固定化、知的人材流失がすすんでいる。私たちは、来る 21 世紀から 31 世紀に向かって何を伝えようとしているのか、そのひとつが芸術・文化なのだと考える。一人一人の思考は様々なのだが、本当に求めていた“もの・事・人”は同じだということのを再認識し、表現によって伝え残していくことが、次の世代を底辺から支える大きな力になっていくだろう。そして、伝統の上に立った芸術・文化のあり方を啓発することによって、人間の輪としての芸術・文化の花が咲く事であろう。

(4)〔公共事業に芸術導入〕

人は表現する事で、自分の思考を構築したり、他人に伝えたりして、現在に生きた痕跡を残している。また、結い村計画の中にも芸術的アプローチを求めていきたいと考えている。現実的な面も重視しながら、公共事業の中に芸術的なアプローチを組み込んだ本当のデザインを提案する場にしたいと考えている。

私たちにできることはあくまで、一つの啓発を促すことでしかないと思う。また結い村に、全ての理想郷を求めることも不可能だと思われるが、少なくとも自分たちでできるところからの出発を第一に考えていく事が、それぞれに関わる人へ伝えていく大きな要因になるのではないかと考える。

『ハツ杉現代美術研究所(旧八石分校)』の中に芽生えた一つの地元学が、21 世紀に向けての地域づくりの総括的な構想として結実し始めたのである。

3. 地域資源調査から遊作塾へ

平成十六年度、NPO 法人森のエネルギーフォーラムが旧今立町より（現在は合併して越前市）地域資源地域文化調査活用事業を受託し、調査の過程で地域資源・地域文化の大きな枠組みとして、今立には当たり前のものや無くてはならないものを拾い出しそれをひとつの形にまとめるワークショップを実施した。

1) NPO 法人森のエネルギーフォーラムと地域資源調査

NPO 法人森のエネルギーフォーラムは、エネルギーについて考えている人々の集まりである。エネルギーといってもいろいろとあるが、特に風、水、太陽、火、バイオマスなどの自然エネルギーに関心をもつ人々が集まったものである。

エネルギーという言葉には、それぞれの人がもっているエネルギーも有効に生かそうという考えも込められている。名称の中の森という言葉には自然エネルギーの象徴としての意味だけではなく、エネルギーをもった人々が集う場所というようにも考えている。メンバーのひとりひとりは普段はそれぞれ独自の領域で活動している。そうした活動をゆるやかに有機的に結びつけることが森のエネルギーフォーラムの第一の目的である。

そうした結びつきの中から地域社会、エネルギー生産県としての福井で何ができるのかを考えていくことが最終的な目的である。2004年4月から、グリーンツーリズムを活用した地域振興をめざした福井県越前市南坂下地区の地域資源調査も開始した。

活動は基本的にはたて型構造ではなく、プロジェクト型のフォーラム形式を採って、「この指とまれ」と仲間を集めている。活動は特に会員のみを対象に限定しているのではなく、外に向かって開かれたネットワークづくりにも力をそそいでいる²。

このように、モチベーションの違う人間がエネルギーというキーワードの下に集って、自分のやりたいプロジェクトを立ち上げてゆく。その中に互いをサポートするような人間関係を作ってゆこうとする NPO では、その核となる以下のような大きな指針がある。

- 一つには、自然エネルギーを普及啓蒙する役割を担うこと
- 二つには、森に始まるコミュニケーションの場作りを勧めること
- 三つには、地域の文化や資源を生かす活動をする事

このことを核として、伝統的な技や工法を持っている人間に焦点を当て『匠』というブランドを最大限に生かせる方法を模索し、福井県の推進する地域ブランド創造活動推進事業に企画応募した。そして『今立 古民家・匠・ロングステイプロジェクト（通称：いまだて遊作塾）』が認定された。

空き家・古民家を調査実施していく過程で、旧今立町岩本に『卯立つのある一軒の商家』を発見した。所有者の方に話を聞きに行ったが、約四十年以上空き家にしていたという。誰かこの建物を維持できる人を待っていたと聞き、『妻入り卯立つ』というこの今立地域特有の建物は、築百三十年を経過してかなり痛んできていた。NPO 法人森のエネルギーフォーラムで、この古民家を再生し地域で利用できるようにするため、この建物を購入した。



写真5: 田んぼのオーナー事業で集まった都市からの参加者たち（蕎麦の実を石臼で挽いている親子）

² NPO 法人森のエネルギーフォーラムのリーフレットより

この建物は、過去に和紙問屋の商館として活躍した。歴史的建造物を町並み復興の起爆剤とし、伝統的家屋の木造建築技術を保存・改修・継承して行かなければ、町並みの景観も技術を持っていた人材もどんどん失われてしまう。

千五百年の歴史を持つ地場産業の越前和紙。この地域には、人間国宝の岩野市兵衛さんを始め、福井県無形文化財の岩野平三郎さん、今年亡くなった伝統工芸士の梅田太士さんなど、そしてそういった伝統工芸に携わる方のみならず、建築用インテリアにいたるまで幅広い産業に携わる方々の存在が息づいている。

それにより一層、今日的発想に大きな影響を与えたのは、昭和五十三年より活動して来た今立現代美術紙展の存在だ。また、「紙の文化博物館」(和紙の資料館)、「パピルス館」(和紙体験観光施設)や「卯立つの工芸館」(伝統工芸士による紙漉き実演)、若手職人育成の施設「手わざ工房」(伝統工芸研修生施設)も充実する中、作り手と使い手の交流はほとんどないのが現状である。



写真 6：古民家カフェの参加者たちと遊作塾で作られた和紙の展示

エコ・グリーンツーリズムに代表される長期滞在型の拠点にしたり、地域の環境学習プログラムの活動拠点(大人と子どもの憩える交流の場)にしたり、和紙作品の展示会や古民家カフェなど、越前和紙を通じた地域住民との交流の場と、越前和紙生産者と芸術家を始めとする和紙を使う側の人間との交流する拠点を作ること、地域の和紙工芸に関わる環境学習の拠点になるだろうと考えている。そして、外部からの知の導入も重要な要素である。また、福井の住文化、精神文化、地域文化としての和紙の発展にも貢献したいと考えている。



写真 7：岩野市兵衛氏と共に NPO 関係者が古民家カフェで記念撮影



写真 8：母親クラブと稲刈り

NPO 法人森のエネルギーフォーラムの環境に対する活動が一つの雇用を生み、地域を支える人材として認知されることが、将来の財政基盤を安定化させると考える。一つには、若者が地域に定着する意欲を高める効果があるということである。発足当時は、個人の住宅で活動を支えていたが、NPO 法人森のエネルギーフォーラムの活動が実績を上げ、委託事業や助成事業などの収入が少々見込めるようになったのを機会に、旧今立町南坂下の古民家を一軒借りて、古民家 CASAL（CASAL はスペイン語で公民館的な公共の集会場）と名付けた。そこは、農業を中心とする環境保全活動の拠点である。

自然体験型の環境学習プログラム『田植えや稲刈り』など昔ながらのやり方を体験する場所として位置づけ、『エコロジー体験講座』では、午前中に畑や田んぼなどの農作業と、午後からは世界の子どもの暮らしなどを、大学研究者や国際青年協力隊の OG・OB の方々から話を伺うミニレクチャーを組み合わせた講座としてはじめた。更に、『子どもアートセミナー』では、古民家での暮らしを体験し、演劇やダンス、絵画など芸術的な手法で自己を表現する場として整備してきた。若者だけでなく、お年寄りの一人住まいが増えている中、その人たちがどこへも出かけず取り残された気持ちで日々を送っている現状を見ると、若者と一緒に集える場所の確保が、生きがいへと変化してゆく効果が期待できるのではないかと考えている。

4. 認識から創造へ

今日、多くの耳目を集めている地元学は、さしあたり地元に住む生活者の内省の学としての意味を強く有している。たとえばそうした中でもとりわけその源流の一つをなしてきた水俣の吉本は、地元人が地元のことを調べるところから出発する。そのことを吉本は次のように語る。「地域の風土と暮らしは外的要因、内的要因による変化を常に受けている。その変化を適正に受けとめ、地元になじませていくのは当事者である住民（生活者）だ。しかし、都市化が進む中、暮らしの急激な変化、住民の流動化、情報過多などの理由から生活文化創造の担い手としての意識は急速に希薄になっていった。ただ住むだけの住民から、地域を守り育てていく当事者への意識変革は、まず、住民自らが地域を調べることから始まる。」

地元学においては、「あるもの探し」が地元を調べる第一歩である。地域の風土と暮らしを「あるもの」で探していく。価値観、宝、資源、名所、旧跡とかではなく、地域の生活現場に当たり前にあるものを探してキラリと光るような「あるもの」を「地域情報カード」にしていく。そのために現場に出かけて調べるのが基本だ。吉本は「自分の足を運び、見て、聞いて、そこにある事実在即してものごとを調べ考えていく」という。

もちろんこの地元学における「調査」は厳密な科学的な手法とか数値化の方法とかことさら問われるということはない。「こうじゃないかと推測し、自分の直感で見抜いたり、独断で遊ぶことが大事で、どちらかという地元見聞録に近い。見聞さしたことに驚き、感動し、考える感性のことをいうのである」と吉本は述べ、この地元学は証明の必要はないとも言う。

しかしこのような自己の世界の調査を自らに課し、そこに「あるもの」を探してゆくのは、日常の生活の中で埋没し、明晰さを失った自己を生活から少し一歩離れて、考え直す機会を持つことだ。このような生活の知的な内省の視点からみるならばすでに見てきたように、芸術家河合をその一つの源流とする遊作塾につながる今立の地元学は、少し異なるところに力点を置いてきたといつてよいだろう。それは地元にあるものを起点にするという意味では、同じ価値を共有するが、それを現代の中で再創造するというところにより重点をおくものだといえるだろう。和紙を素材として芸術的な紙展につながる展開やそこに演劇などを通して若者などを吸引する力などは一つの可能性を示しているともいえるだろう。

多くの地元学においては、生活者が生活の只中にいてなかなかその枠組みから逃れられない中で少し距離を置き、内省するという視点を重視するとするならば、今立の地元学ではあくまでもモノづくりという生活者の立場に立ちながらそれを〈芸術〉という創造の世界から自らの生活を認識し直し、固まった生活の澱を解きほぐし、新しい生活の視点を取戻そうとしたのだといつてよいだろう。

今立の遊作塾につながる活動の中でも NPO 法人森のエネルギーフォーラムが行った「地域資源・地域文化調査」などは認識の学としての「地元学」に近い側面もあるがどちらかというアクションリサーチが強調された。創造のためにはその場の深い認識が必要であるが、河合を源流とする今立の活動のモチーフは、創造の過程が持つエネルギーをより志向したものだといつてよいだろう。

しかし地域社会という全体から見れば、あくまでも突出したエネルギーの放逸という側面も持つことになり、田舎志向を含む〈田舎〉の世界の自覚的な主体の捉え返しという側面に関しては中途の状態でとどまっていた。むしろ今日地域全体の中での人々の新しい価値の発見ということから見るならばグリーンツーリズムなど今立にも押し寄せるようになってきた都市の人たちの新しい価値志向のエネルギーが持つ意味の方が大きいともいえるだろう。「いまだて遊作塾」はこうした今立における内発的な地元学の流れ、今日の田舎志向をめぐる動きが重なり合う中で展開したものであったといえることができるだろう。

3章「遊作」という経験と田舎学の構想

増田頼保 杉村和彦

1. 今立 古民家・匠・ロングステイプロジェクトと遊作塾

1) 今立 古民家・匠・ロングステイプロジェクトの出発

これまで見たように、約三十年前、河合勇という芸術家が今立に住み着いて「自分のいるところが世界の中心」という独自の考え方から、当時青年だった河合と関わった多くの人間がその思考形態を発展させてきた。芸術・文化としての「今立現代美術紙展」は、アーティスト・イン・レジデンスとしての「アート・キャンプ」、そして公募展としての「今立現代美術紙展」が隔年で開催され現在も続いている。これには伏線があり、横山大観画伯と下村観山画伯が、思い描いた和紙が出来るまで、今立に逗留しながら紙漉き職人、初代 岩野平三郎氏とのやり取りがあった。そして、麻紙の復活を実現した。これを現代風に言えば、アーティスト・イン・レジデンスの走りである。

政策として発展した「いまだて結い村構想研究会」は、千年先を考えるまちづくりで、研究会参加者の将来への視点がうかがえる。また、この研究会から「いまだて環境調和型エネルギービジョン 31」を住民主体で策定した。「NPO 法人森のエネルギーフォーラム」の設立や、「エコ・フェスティバル」、福井県内環境系 NPO のシンポジウムを開くなど様々な取り組みを行ってきた延長線上に、「今立 古民家・匠・ロングステイプロジェクト 通称：いまだて遊作塾」が生まれたのである。

NPO 法人森のエネルギーフォーラムやモラル・エコノミー研究会など様々な人間が集う場所として地域資源・地域文化研究調査事業を行うまでは、増田個人の住宅で会合などを開いていた。その会合の中で、これまで増田がこの住宅を改修してきた経緯などを話している中から、一つの面白い効果を発見したことを皆に伝えたことに端を発したのである。

2) 限界集落からはじめる地域調査 アクションリサーチ

そういう色々なドラマを熱く語ると、「なんか面白いこと」と受け取られるようだった。私（増田）自身も、なんかもすごく楽しいことと自慢するし、苦労話や後で手が痛くなった体験談を皆にしていると、「自分もやってみたい」と思うらしい。そういう伏線が一方にあり、NPO 法人森のエネルギーフォーラムが今立町と交わした委託による地域研究調査の事業がスタートしたところだった。

地域調査を行う場合、アクションリサーチという手法で調査地に拠点施設を設定して、地域の住民との融和を図りながら調査を進めるという方向性を決めた。今立における限界集落といわれる月尾谷の一番奥の集落の南坂下から調査をすれば、大体今立全体の普遍的特性が把握できるのではないかと判断したからであった。

この南坂下は、ハツ杉森林学習センターの田中氏の推薦もあって、中心市街地から南坂下、ハツ杉千年の森（森林学習センター）へとつながる一つのルート開発にもなるからである。（図参考：赤丸が南坂下）

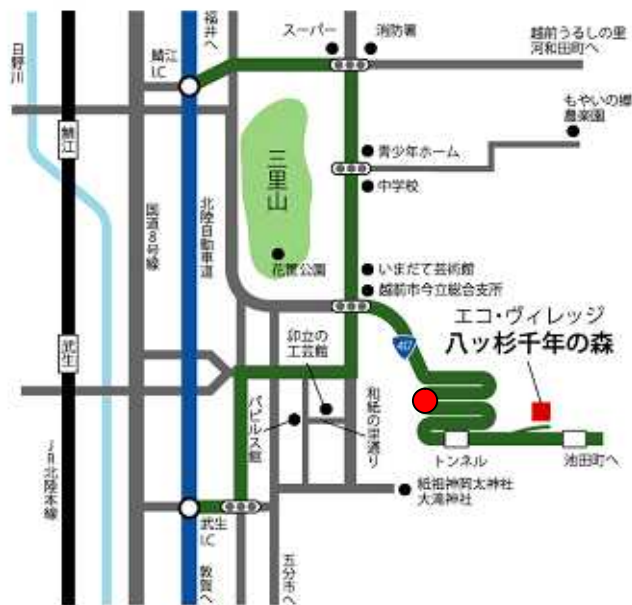


図1. ハツ杉千年の森（森林学習センター）へのアクセスマップ

それには、どうしてもどこかの家に居候するか、空き家など探してそこを拠点にしなければいけなくなったからだ。目をつけた農家（後に農家民泊を受け入れる）に話を持っていったら、普段付き合いしていない人間がいきなりやってきて居候したいと言っても怪しまれるだけだった。しかし、その家の道路を挟んで反対側に一軒、十年以上空き家状態で、この地域独特の伝統的な民家の外観を持っている家があるのがわかり、さっそくそこを管理している方に頼んで中を見せてもらった。



写真9. 玄関の板がシロアリの被害で抜けている

玄関を入ると、板の間は大きな穴が開いてかなり傷んでいたが、造り自体はしっかりしたものであったので、さっそく持ち主の家に行って一年間借りるためをお願いに行ったところ、「私は、朽ちるがままで良いと思っているので、なんにもお金をかけようとは思っていない」という返事だった。しかし、何とか調査のために同意だけは得られるように説得し

たものの人間が住むためには、水道、トイレ、風呂、台所など日常の生活に必要なものが全て明治時代の後期から大正前期の建築様式なので、現代人がすぐに住める状態ではなかったのだ。そもそも、汲み取り式のトイレを見たことがない県立大学の学生や若者は、わざわざ近くの家や寺院のトイレを借りに行く始末、そこで用を足すこと自体考えられない空間だった。

そこで、この家を改修するプログラムを講座制にして見てはどうかと提案すると、NPOの理事や調査員のメンバーは増田の家の改修話を聞いていた関係で皆同意した。福井県でも、3年間の事業の50%を助成するという「ふくい地域ブランド活動推進事業」を募集していたところだった。とりあえず、申請書類を書いて見たところ、いくつかのキーワードがあることに気付いて、それを順番に羅列したのが「今立 古民家・匠・ロングステイプロジェクト」だった。

それは、申請書に書かれている今立由来の歴史、工芸、芸術、農業、林業などの地域資源を活かして、匠といわれる人から生き方を学ぶため、伝統的な建築技術や改修技術や古民家での滞在(ロングステイ・ホームステイ)をしながら学習できるプログラムを開発し、都市市民の田舎暮らしを受け入れていくプロジェクトにした。

もっと分かりやすく言うと、今立に住む住民が活き活きと活動できる場を創造すること。そのことを中心に、歴史的な奥行きと人的な広がり、さらに創造という普遍性を多くの人と作り上げていこうとしている。そして、千五百年という伝統に裏打ちされ、引き継がれてきた匠の技や知恵を、21世紀における新たな伝統に向けて更に、共に創造していくことが目的だ。

県には全部で21件の提案書が出されたようだ。結局、審査の結果、我々の提案書の他1件が通った。正式名称：「今立 古民家・匠・ロングステイプロジェクト」通称：「いまだて遊作塾」は、難関を突破して認定された。

3) 実行委員会の組織

当初、NPO 法人森のエネルギーフォーラムのメンバーが中心となってスタートした。NPO 法人森のエネルギーフォーラムは、福井県を活動の拠点とし、国際的視野に立った地域の自然エネルギーの有効利用を学際的・総合的に考え、一般市民に対して地域の森林文化や森のエネルギーについて住民参加型学習、環境教育、フォーラム等の事業を開催している団体である。また、地域の特性を生かした技術開発を行う等、資源循環型地域社会の実現に寄与することを目的とし、自然エネルギーを基調とした地域の自立的発展を目指して活動している。

このプロジェクトのワークショップでは、NPO 法人森のエネルギーフォーラムの基軸である、自然エネルギー・地域経済活性化・住民発の地域自律を基本理念とし、これまでにない活動分野を切り開こうと発足した。

こうして集まったメンバーで“いまだて”の残しておきたいものや、自慢できるものを羅列するなどして話し合う中、『学び伝える新しいライフステージ今立』、『匠の心の伝承』、『ものづくりで遊ぶ遊作の里』がキーワードとして出てきた。

私達は、越前和紙の里に代表されるものづくりの匠の心や、古民家に集約された技や伝



写真 10：建築家松井郁夫氏を招いた実行委員会の様子

1 実行委員会に参加した旧今立町出身の山岸美穂さんは、福井大学の卒業生。このプロジェクトの発起人として、NPO 法人森のエネルギーフォーラムを設立した。このプロジェクトは、NPO 法人森のエネルギーフォーラムが主催する「地域文化創造プログラム」の一環として実施されている。このプログラムは、地域文化創造課程 生涯学習コース「文化資源を活かしたエコ・ツーリズムが地域に及ぼす影響～今立遊作塾の取り組み～」より一部引用

統を見つめ直すことで、新しいライフステージを築きたいと考えている。また、これらを今立の財産とし、そこから新しい“地域づくり”を目指している。

自然エネルギーという難しく聞こえるが、つまりは誰でも使えて、どこにでもあって、誰も損をしない、無くなることのない普遍的なエネルギーということである。それを先人たちはうまく使いこなしてきた。無理のない、癒しの空間と言ってもいいだろう。自然に近い形で住居を作ること、ある意味で危険なことである。しかし、ギリギリのところまで危険を克服してきたのが古民家だ。

先人の知恵が結集した古民家から、我々は何を学び、何を伝えようとしているのか？土壁における断熱効果、太い柱に支えられた梁のある高い空間と土間、自然をうまく取り込んで人間が暮らす場所を作ってきた大工の技。世界に誇れる『和』を求めて日本を訪れる海外の人々の中には、福井へ来ると、そこには小津監督や黒沢監督が描いた懐かしい日本の風情があると言う人もいる。今立には、今でも蓑笠を羽織っている人を見かける。

増田は小さいころから、おばあちゃんの家は大きくて、暗くて、怖くて、不便だと思っていた。しかし、その大きな梁に麻縄を掛けてブランコを作ってくれた。そうして遊ぶことが、とても気持ちよかった。子どものころ古民家で遊んだ記憶が今も頭から離れることはなく、いまは、その古民家に住んでいる。幼い頃の思い出、いまも残る懐かしい風情。

これらは、かけがえの無い財産である。自分のものであろうと人のものであろうと関係が無く、失われるのを見過ごしておくことは出来ない。その価値は、失って初めてわかるものなのかも知れないが、失ってからでは取り戻すことが難しい、大切な文化だからだ。

「いまだて遊作塾」は、代表を旧今立町出身で芸術家の増田が務めており、その事業の出発時点においては、事務局と執行部からなる約15人のスタッフによって運営されている。事務局は1人のスタッフが務め、その仕事は企画会議の進行役や講座のちらし案などを中心となって製作した。その後、現在の事務局は、ボランテ



写真 11：台所でこんにやく談義

ィアや福祉の活動に積極的に関わってきた経験のある越前市のお坊さんが務めている。執行部は、古民家再生部、和紙・工芸体験部、商品開発部、エコ企画部の4つに分かれており、スタッフはどれかに所属している。しかし、この区分は厳密に規定されているわけではなく、企画会議では区分を超えて話し合いをしたり、講座のスタッフとして動いたりした。

「いまだて遊作塾」のスタッフは、その母体となった「NPO 法人森のエネルギーフォーラム」のスタッフの他に、彼らが呼びかけた知人や、その知人の知り合いなどのつながりで集まった。中には、たまたまホームページで見つけた「いまだて遊作塾」に興味を持ったことがきっかけで、スタッフとして参加するようになった人もいた。

スタッフは、ボランティアとして参加した。彼らは、週に1回集まり企画会議を行った。会議の会場は、南坂下町の古民家 CASAL で、囲炉裏を囲みながら毎週木曜の夜8時から、およそ2時間半かけて行なわれた。会議では、予定されている講座の責任者のスタッフが作成した企画案をもとに、スタッフ皆で話し合う。この会議では、予定されている講座のほしい1ヶ月前くらいから、講座の細かい内容を検討し始め、徐々に詰めた。

また、スタッフには旧今立町出身の人や武生や鯖江などの近隣の市町村だけでなく、都市出身でこちらに移住した人や、都市で生活した経験のある県内出身のスタッフが多いことも特徴的だ。若手の和紙職人のスタッフたちは、東京などの都市部から紙透きを学ぶために旧今立町に移り住んだ人たちだった。また、都市出身のあるスタッフは、3年前から旧今立町よりNPO法人森のエネルギーフォーラムに委託された「地域資源・地域文化調査」のため、南坂下町の古民家 CASAL に移住してきた。実際に農村の暮らしを体験し、地元住民とコミュニケーションを取りながら調査をしている。彼の存在は地元の住民に広く知られており、住民からは「頑張っている」という意見が多数出ており、住民と良い関係を築いている。彼は県のプロジェクト終了後も、NPO法人森のエネルギーフォーラムの事務局長として仕事を続け、現在は越前市のNPO全体を支えるネットワーク作りの仕事も支えている。



写真 12：スタッフも昼食を参加者と共に

いまだて遊作塾に協力している人や、体験講座に欠かせない講師陣についても紹介したい。旧今立町のハツ杉森林学習センターのマネージャーである田中さんは、「いまだて遊作塾」の活動が始まった当初から施設を「いまだて遊作塾」の活動の場所に提供し、その活動をサポートしている。また、南坂下町の堀田さん夫妻は、「いまだて遊作塾」メンバーとして古民家宿泊を受け入れ、農業体験などの講師も引き受けている。

当初、民家宿泊を受け入れているのは旧今立町で三軒のみで、堀田さん宅はその内の一軒だ。南坂下町で古民家宿泊を受け入れているのはこの一軒である。現在では、六軒に増えている。また、古民家再生講座や和紙製作講座の講師として参加している匠も素晴らしい顔ぶれだ。これまで数々の重要文化財の修復・再建を手掛けてきた宮大工棟梁の直井光男氏や、手漉き和紙の人間国宝である今立町在住の岩野市兵衛氏など、伝統の技術を今に伝えるものづくりの匠たちが集まっている。いまだて遊作塾スタッフの中には、紙漉きの修行に来ている若い職人がいるので、彼らも講師として参加している。



写真 13：NPO が借りている古民家の外観

活動の舞台となる南坂下町の住民との関係作りは、やはりスタッフが気を使っている部

分である。地元の住民に「いまだて遊作塾」エコ・ツーリズムを理解してもらうために、毎月 27 日の夜に南坂下町の寺で行われる村の総会への参加は欠かさない。その総会には、必ずスタッフが最低 1 人は参加するように心がけているという。そこでは、「いまだて遊作塾」の活動予定や、実施した活動を住民に報告している。このような努力もあってか、少しずつだが住民との関係が良くなってきているように感じているという（スタッフアンケートより）。

あるスタッフは、「いまだて遊作塾を住民にすぐに理解してもらおうとは思わない。1 年や 2 年でできるものじゃないし、時間ももっとかかると思う。少しずつ理解してもらえばいい。この活動は 1、2 年で終わるつもりはない。継続して続けていきたい」と話していた（企画会議でのスタッフの発言）。

このように、決して「いまだて遊作塾」の活動を地域住民に理解させようと押し付けるわけではなく、ゆっくりと関係を築いていければいいというスタッフの姿勢がうかがえた。このような、ゆったりとした雰囲気は、スタッフになるのも抜けるのも自由という部分からも伺える。考え方が合わなくなった人は自然に抜けていく。その代わり、活動に興味のある人なら誰でもスタッフとして迎え入れてくれるという、緩やかな組織なのだ。

「いまだて遊作塾」はこのようなスタッフたちの力によって作られている。そのスタッフは、職業も出身地もさまざまな人が参加する珍しいグループだということ、そしてスタッフの入れ替わりが自由なゆるやかな組織ということが見えてきた。「いまだて遊作塾」を一緒に作っていききたい人は、誰でもスタッフとして参加できるし、スタッフは温かく迎え入れてくれる。

「いまだて遊作塾」の事務所の古民家 CASAL では、企画会議の際にスタッフが友達を連れ、スタッフたちに紹介するといった光景が良く見られる。このようにさまざまな人が集まりながらも、「いまだて遊作塾」のスタッフ同士が良い関係のあるのは、彼らがものづくりに対する熱い思いを共有していること以外にも、互いの存在を尊重し合うグループであるからだろう。学生も社会人も関係なく、エコ・ツーリズムを支える重要な存在として認め合っているように感じた。

2. 古民家という宇宙と手作りの世界

1) スロービルディング

『田舎の家（民家）は、三代で建てるものだ。』と、よくお年寄りから聞くことがある。一代目で木を育て、山から木を切り出して乾燥させ、二代目で屋台骨を造り荒壁で止め、三代目で壁を塗って仕上げる。私（増田）が育った福井には、田の字を書いたような昔ながらの間取りの民家がたくさん点在している。私の家は、私が幼少の頃まではわら葺屋根であった。思えば子どもの時に、その民家の真っ黒い梁（はり）に麻縄を掛けてもらって、ブランコなどして過ごした。この経験が、ずっと私の記憶の原風景として残っている。築百三十年以上経った家のわら葺屋根は無くなり瓦葺になり、囲炉裏は無くなり薪ストーブになり、竈（かまど）はガスコンロになり、五右衛門風呂はボイラーに取って代わったが、立派な漆塗りの大黒柱や土壁や松の縁板はそのまま使っている。

最近、松の縁板さえも手に入らなくなったらしく、「この時代に何を考えていましたのか」と製材所の人に言われる始末で、匠の技術さえも無くなりかけた状況は、今後更に懸念される。私は、この古くなった民家をもう少し長生きしてもらえるように残したいと思い、子どもと一緒に思い出話をしながら壁を塗ったり、家族で床や見えないところに手を加えたりしている。

このところ、若者とちよくちよくお邪魔するお宅には、囲炉裏がまだちゃんと使われていて威風堂々とした趣（おもむき）があり、そこに集う者たちを和やかにする場を提供してくれた。そこのご主人の堀田さんは、長年山仕事と農業を続けてこられて、一年を通して資源を循環させるという、一見何気ないことに時間と労力を惜しまず、コツコツと薪作りをする生活を身に付けておられるのでいつも感心している。

何が贅沢（ぜいたく）とあって、これほど豊かな「自然と共に生きる」暮らしは他では味わえない。身近にある山の素材で暖をとり、木を切り、山で何年も寝かしてから建てた民家は百年以上長持するし、擬人的な言い方をすれば家は家族の歴史を見守ってくれている。振り返ってみると、百三十年以上経ったこの家でも、天然素材そのままの状態であれば、ちょっと匏（かんな）をかけてやれば新品同様だし、そのまま古材として使えば、漆や拭き艶で底光りして味が出てくる。どのようにしたら長生きするように扱えるかどうかを、使う側に問いかけているようである。

人生も同じことが言えるのではないかと。私たちは、年季が入って黒光りするように味が出てくるまでには色んな努力をしなければならない。特に、現代の社会現象を見るにつけ、私たちにはこの価値観が問われているのかも知れない。私たちは、結構古いものに憧れる傾向があるのか、建築にしても、家具や装飾品など色々目を見張ることが多い。それは、先人たちの技を磨いた結晶でもある。

2) 匠の技の集積する世界

古民家には地元の全ての匠の技（大工、漆、打ち刃物、和紙、機織、表具、金細工など）が凝縮されている。中世のころより、福井県は北東アジア（中国や朝鮮半島など）からの最先端の大陸文化の伝承地として日本の歴史文化に深く関わってきた。そして、今立・武生地域には、今も当時から途絶えることなく匠の技が引き継がれており、日本を代表する和紙や織物、宮大工、漆器、打ち刃物などが崇高な芸術としてだけでなく、伝統工芸として人々の生活にも深く根ざし、身近なものとなって日常に活かされてきた。

古民家に住まうとはどういうことか。食べる。くつろぐ。寝る。

語る。楽しむ。様々な人々の営みがそこにあり、それぞれを下支えする場がしつらえてある。古民家には、広い土間があり、開けっぴろげの空間がある。そこに隣家のおばさんがふらりとやってきて話をしてく。土間に腰掛けて村の世界の出来事が語られ始めてゆく。土間にも様々な歴史がある。羽目板に長短の板がモザイクのようにぴしっと組み込まれている場所がある。白蟻がついたとき板をめくって修繕したところだ。村の匠が直してくれた。

棚が部屋ごとに色々なかたちと寸法で作られている。家の中にすむ人の中にも入れ替わりの時がある。たくさん子どもたちがそこに育ち、柱には背比べのキズが刻まれている。台所には大きなカマドが残っている。また黒光りする大きな釜もある。この釜では10人にもものぼるような人達の食事が作り出されていたのであろう。こうしたカマドは今日の核家族の時代には少々大きすぎるものではあるが、しかし今日のグリーンツーリズムなどで模様される共同の食事の場では役立ったりもする。

古民家は広い間取りであり、遊びのある空間でもある。広い間取りは部屋の内部を様々な形で作り変えることもできる。今日古民家のリフォームが様々なところで試み始められているが、これはもともとの古民家そのもののつくりと深い関係を有している。



写真 14：玄関から入った板の間での櫓の古材を使った囲炉裏講座の様子

3) 古民家巡回バスツアー

遊作塾の活動の舞台となった古民家にも地域ごとに様々な特質がある。豪雪地域の自然状況に耐えられるためということから、取り分けがっしりとした構造が特徴である。平成16年3月12日、『今立 古民家・匠・ロングステイプロジェクト』の事業“いまだて遊作塾”第六回目となる「古民家再生講座」として“古民家探訪ツアー”を開催した。今立町を中心に福井県内にある古民家を巡り、古民家の歴紙や建築様式を学ぶバスツアーである。このバスツアーでは、専門家の解説を聞きながら、明治元年に建てられた山村にある古民家から、古民家風現代建築まで幅広く探訪し見学した。実際に目で見て楽しく学び、古民家での暮らしを感じて頂けるように充実のプログラムを組み、多数の方にご参加頂いた。講師には福井大学より専門家の先生を招いた他、これまで“遊作塾”に協力して頂いた様々な匠の協力の元、様々なタイプの民家を拝見する貴重な機会となった。

午前中の座学の後、午後はバスにて移動し、明治元年以前に建てられたとされる今立町に残る貴重な古民家を見学した。講師による説明を聞きながら、解体直前の古民家を見学。古民家の造りの他、当時の様子を家主から直接拝聴し、古民家の持つ歴史の重みを肌で感じる講座となった。次に雪の残る池田町へと移動。同じく貴重な古民家を見学した。現在は町外に住む家主が出迎え、写真などを用いて昔の古民家の様子を説明。当時の生活だけでなく、その土地の歴史や文化にいたるまで貴重な話を下さった。両家ともこれに加え講師である福井氏の専門的な説明も加わり、より深い講座となった。雪が降る寒い中であつたが、参加者らは熱心に説明に耳を傾けていた。見学後、両家とも家主と共に記念撮影し、和やかな雰囲気のまま見学が終了した。

翌日3月13日今立町より移築された茅葺き民家が保存されている“おさごえ民家園”へバスで移動。一軒一軒特徴の違う民家が並んでいるので、順番に講義を聞きながら見学した。移築前に建てられていた場所・風土による特徴の違いや、用途による特徴の違いなど、多角的に古民家について学んだ。講義終了後はオーガニックカフェ“オーニク”のお弁当を、おさごえ民家園の囲炉裏を囲みながら食べた。昼食後、参加者一人一人が自己紹介を行い、ツアーに参加した理由や古民家への想いを熱く語った。東京からの参加者からは、こういった経験が都会の喧噪から離れられる貴重な体験となり、物づくりへの興味を強く持つ機会になったという声も上がった。

午後からは古民家ではなく、古民家の特徴を生かした現代の民家を見学した。一軒目は“遊作塾”の講師でもある直井棟梁が手掛けた現代民家である。昔ながらの手法で新しく建てられた民家に感嘆の声が上がった。民家裏の山から伐採された木材を使い、横の田んぼで寝かせた泥を用いて漆喰の壁を造り、家主も自ら漆をかけたという民家で、そうした過程から生まれた家主の家への想いや、古民家風に建てた理由等を伺った。古民家暮らし



写真 16：外気温と変わらない室内で解説を聞く

を検討している参加者は特に熱心に聞きいている様子であった。

二軒目は現在建築中の民家へと移動し見学した。こちらも同じく遊作塾の講師である織田清氏が手掛けている住宅である。建築中のため、民家の骨組みを直接見学することができた。県産の木材を使った民家の骨組みで、建築を専門としている参加者らは大きな勉強の機会となったと口にしていた。この見学が今回のツアーの最終地であったため、中にはツアー後もその場に残り、織田氏に引き続き説明を受ける参加者も見られた。



写真 17：古民家風現代建築

4) 茅葺屋根の再生

平成十七年 10 月 22 日(土) 23 日(日)の古民家再生ワークショップでは京都から講師に尾坂勝氏(茅葺屋根職人)を招いて茅葺屋根の再生の試みを行った。参加者総数:31名(一般参加者 29 名、モニター参加者 2 名)。尾坂氏は、京都美山町鶴が丘建築で勤めた後、フリーの茅葺職人として伊勢神宮の屋根吹き替えなども携わる。また、海外のマイスターとともにイギリスの茅葺屋根の葺き替えを行うなど、ヨーロッパの伝統的な茅葺建築への造詣も深い。

そのワークショップの中では、23 日の日に、茅葺の材料である茅を実際に刈り取った。小雨の降る中での作業ですが前日習った「男結び」などを実際に練習しながら茅を束ねていた。午後からは午前中行った茅刈りおよび昨日の実習を振り返った。昨日の講義後の印象と実際に体験した後の違いや感想を参加者に話してもらい最後に講師の先生からコメントをいただいた。午後からは、中井邸に戻り集めた茅を乾燥するため立てた。途中で仕事を終えた直井棟梁も飛び入りで参加して下さった。



写真 18: 尾坂氏より茅葺きの手ほどきを受ける参加者

最後の茅が立ったのは夜であったが、最後まで残り 12 時間近くがんばった参加者もいた。今回の講座は「古民家」を『屋根』という切り口から捉え、茅葺き屋根の修復現場と茅場での講義・デモンストレーション・体験実習を行ったが、時間があっという間に過ぎていく中身の濃いものであった。講師からの専門的なアドバイスと、具体的な共同作業の中で「古民家」の持つ価値や今まで受け継がれてきた知恵を学んでいきたいと考えている。

そしてもう一軒、22 日には、武生にある藁葺の民家が、現在雨漏りするようになっていたので、遊作塾の仲間たちとその復旧のお手伝いをさせていただくことになった。ところが、屋根の原料である藁やススキが手に入らないという大きな壁に直面している。そこに生活をする人がいる以上、あるいはこのような建物を残そうとする人がいる以上、ぜひとも福井伝統の風景として残したいと思っている。

近代化された産業界からも“モノづくりの技”に対する再評価が盛んになってきて、いま現在、我々はこうした尊敬すべき伝統の技を関係者だけでなく、広く一般の方にもその伝統に触れてもらい、モノづくりに参加し、新しい活動を興すことで“モノづくり”を次の世代に繋げて行きたいと考えている。この取り組みは、地域にありながら世界と繋がっていた地場産業に対し誇りと共に、それを知り、もっと深め、強固なものにすべく、この土地に住む私たちが手を取り合って生み出して、自力で育てなければいけないものだと考えたからである。

一つの波紋が、次から次へと伝わってゆくことを私は、『生きるエネルギーのダイナミズム』とか、『行動意識の連鎖反応』と呼んでいる。一人ひとりの行いは小さな事かも知れないが、その波紋が描く環(わ)は、絵を描く者にとって一つの立体的な『遊作の里』の絵になる。しかし、民家を博物館のように改修するような昔の郷愁に浸るのではなく、民家のある町並みを楽しんだり、近代的要素も取り入れ便利にさせたり、古いものの中に自分たちの遊べる素材となるよう新たな価値認識を将来につなげて行きたいと考えていた。それは今日都市から田舎に新しい価値を求めてくる人たちのコラボレーションということも見据えたものだ。そうしたことを実現していくためには、それぞれがこれまでの生き方にしがみついただけでは不可能だ。そこには、ともに生き方を再創造する遊びと遊びの場が必要だ。「遊作」という言葉のもとにはじめた活動には、都市と農村の交流を前提とした地域資源の掘り起こしの作業が求められているのである。

残念ながら、現在茅葺きのこのお家は瓦屋根になってしまった。しかし、近所の別の家は、全面改修に向けて取り組み始めたので、側面から行政に働きかけるなどの応援をしている。



写真 19：茅の刈り取り作業休憩時間に記念撮影



写真 20：刈り取った茅は束ねて立てて干す

3. 「遊作」という言葉の誕生

1) 今立 古民家・匠・ロングステイプロジェクトのねらい

「福井県地域ブランド創造活動推進事業」として発足した『今立 古民家・匠・ロングステイプロジェクト』は、今立の歴史、工芸、芸術、農業、林業など、今立由来の地域資源を、古民家での滞在(ロングステイ・ホームステイ)をしながら学習できるプログラムを作成し、都市市民のエコ・グリーンツーリズムの企画・運営などを受け入れていくプロジェクトである。今立に住む住民が生き生きと活動できる場を創造することを中心に、歴史的な奥行きと人的な広がり、更に創造という普遍性を多くの人と作り上げ、伝統に裏打ちされ引き継がれてきた匠の技・技術の21世紀における新たな展開を、共に創造していこうとするこの試みであった。

実際には事業は2004年の8月から始まることになっていたが、この年は福井豪雨が7月にあり、その影響でこのプロジェクトにおける県の対応や、また事業の担い手の実行委員の対応の中にも遅れがあった。事業は8月終わりから古民家を借り受けた。古民家ではこの改修のための活動がはじまり、この事業をどのようなことを目標として行っていくかということについては、実行委員会の中でも様々な意見があった。古民家の改修に絞って事業を展開しようというような意見から、今立の匠を生かしたモノづくりを中心に事業を展開しようという考え方など。またロングステイということにより自然を中心としたグリーンツーリズムの重要性を指摘する意見もでた。

そうした中で何度かの実行委員会の会議を通じて生まれてきた言葉が「遊作」というコンセプトであった。今立はモノ作りの里だ。そのことが旧今立町に入ってくる入り口のところに書かれている。手作りを生かしたモノづくりは今日田舎志向の人にとって重要だ。しかしあまり生真面目なモノ作りでは都会から来る若い人たちにアピールすることができるだろうか。都市の人たちは田舎に来る楽しさやくつろぎを求めているのであり、そうしたことに答えられるコンセプトが必要でもある。

こうした<都市>の人たちのニーズに対する感覚に関しては、実行委員会がNPO法人森のエネルギーフォーラムのメンバーを主体としており、ハードな事業より「遊び」の要素を入れようという志向性が強かったことが大きいといえるだろう。モノ作りの伝統を活かしながらもそこに「遊ぶ」ということを取り入れるというわけだ。

しかし問題は実行委員会の中でこのよう合意があったとしても工芸の担い手であるそれぞれの匠がそれを認め参画してもらえなければこの事業計画は成り立たない。それは本当に匠も入ってもらう形で可能か。実行委員会はこうした「不安」を持ちながらの出発ではあったが、このコンセプトの遊作事業をするためにまず、公開のシンポジウムを行ってこうしたコンセプトの可能性も考えてみようとしたのである。

準備委員会はほぼ毎週旧今立町南坂下の古民家CASAL(通称カサル)で開かれ、人が人を呼ぶという形で様々な芸を持った人が集まってきた。その人たちが一同に会してさらに多くの市民の人たちを交えて、自分たちのやろうとしている事業の意味を考えてみようというのがこのシンポジウムであった。<遊作>がはじめて「匠」の人たちも交えて表に立ったのはこのシンポジウムの前夜であった。



写真 21：前夜祭に古民家堀田邸を訪れた実行委員会メンバー

2) 前夜祭で

前夜祭にはパネリストとなる岩野市兵衛氏（越前生漉き奉書紙・人間国宝）直井光男氏（大工棟梁）西岡常一棟梁（薬師寺改修を手がけ、今立の紙祖神が祭られている国の重要文化財 大瀧神社・岡太神社の改修も手がけた）杉村和彦氏（アフリカ研究・福井県立大学教授）司会：松井郁夫氏（一級建築士 有限会社松井郁夫建築設計事務所 代表取締役社長）などが集まった。

人間国宝の岩野さんは洒脱で現代的な人間国宝でもある。宴もたけなわ、お酒が入って盛り上がってきたところで、実行委員会のメンバーから遊作のコンセプトが説明されると、岩野さんは紙漉きの遊びの世界を語り、「一緒に遊びましょう」ということになった。

匠：「昔から紙漉きの歌つうのがあるんやね。いっぺん、何でこんなことになったんか知らんけど、紙漉き歌つてのがあるんやけども。あのね、紙漉きってというのは昔から始まることですから、こんなお箸で、てんてかてんてん、こんなんじゃないんですね。ですから、水のこの、紙漉いて、私は紙漉きを“ちゃっぼんちゃっぼん”って言うんですけど、“ちゃっぼんちゃっぼん”とこのリズムに合わせて歌った歌ですから、お囃子に合ったり、それから面白かったりそんなことは絶対ない。でね、神の授けをそのまま継いでっていうのは、神様から習ったちゅうのが越前和紙の伝統なんですね。ですから神の授けを神の教えをそのまま継いで、親も子も漉く、孫も漉くっていう歌詞があるんです。ですからそれ、一つだけ。ずーっとあるんですよ。いっばいあるんですけど、それ一つだけやります。」

～神の授けをそのまま継いで 親も子も漉く 孫も漉く～

匠：「もう一つ歌わなあかんのか。七つちゅうのは七歳ちゅうことや。七つ八つから紙漉きを習うて、紙漉くときに原料かき混ぜたかって原料ちゅうもんは沈むでしょ、水の。例えばこんだけの水に原料入れたかって沈むでしょ。ですからのドロアオイの液体をドロっと少し入れて、この中を粘りをつけてあるから原料は沈まないんです。明日見てくださればわかりますけど、ドロアオイちゅう液...あれはネリって言うんですよ。ですからその液体を入れて、かき混ぜて、原料を沈まないようにしておいて、そこをくみ上げて漉くっていうのが、これが私はノーベル賞やと思うんですけど。ドロアオイの液体を入れて漉くのが、紙漉き、手漉き和紙の漉きって言う。ですから七つ八つから紙漉きを習うても、ネリの合わせ加減が難しいっていう歌なんです。じゃあもう一回。」



写真 22：越前紙漉き歌を披露する岩野氏

～七つ八つから紙漉き習うて ネリの合い加減 まだ知らぬ～

匠：「堀田さんとこ行かれたか、皆さん。で、囲炉裏があってご主人が座るとこは横座って言うんやね。で、ここから火たいてらっしゃったんですけど、横座でここ、私らは横座の向こうですから、向かい座って言うんですね。で、ここにたき木があったからここをクドって言うんやね。で、クドから火をたくから、この囲炉裏の四角のこの場所をクド座って言うんやね。で、クド座のここはだいたい、横座の向こうが向かい座ですから、ここがだいたいお料理を運んでくださるので、鍋を置くから鍋座って言うんですね。で、家のご主人は横座へと座って、紙漉きの場合は今日一日終わったら、あんたは今日も紙漉いたから、明日は紙漉いてくれ、あんたはどここへ用事があるから行って来てくれとか。」

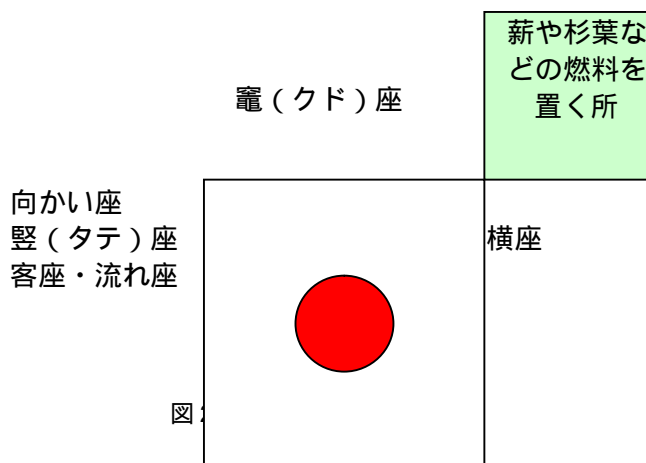
んでね、こっちのひとりの方もまた今日の様にがんばってやってくれとかっていう、そういう横座に座って、横座弁慶って、弁慶さんは偉い人ですよ。横座弁慶っていうのは偉い人が横座に座って、横座弁慶で、人をまわすっていうね。

ですからお前あそこ行ってこうしてくれとか、こういう感じ。あごで喋るっていう感じやね。だからそういう歌もあるんです。」

今立町五箇

匠：「一つの集落、いわゆる、不老・大滝・岩本・新在家・定友ってこれをひっくるめて五箇って言うん。ですから五箇に生まれて、紙漉きを習うて、横座弁慶で、っていうのは今言うた横座に座って、何をしてくれているように、横座弁慶で人をまわすちゅうのは、明日こういう風にしてくれっていう意味のことを言ってるっていう歌。もう一つだけね。」

～五箇に生まれて 紙漉き習うて 横座弁慶で 人まわす



3) <遊作>の発明

匠から伝統技術を学ぶのは恐れ多い。しかしそれを承知の上で、実行委員は地域社会の一員として、たくみの人たちに参加してもらい、地域のために、時間を割いてもらい、遊んでもらえば、そこから何か生まれてくるのではないかという気持ちを持ってきた。

「子供や青年、そして第二の人生を迎えたような人がこの遊作の里に集まるとしよう。匠を囲み、その技術を体験してみる。多分そこに集まる人がすべて技術の継承者になって行くわけではない。そこに人生をかけてきた人と向き合い、そのエトスや経験を共有し、一緒に遊ぶ機会が生まれたならそこには豊かな人生が大きく膨らんで行くだろう」というようなことを考えてきた。

しかし遊作塾の活動を開始するに当たって、何よりも一つの障壁のように思えたのは、匠の方々が、「うん、いいよ」という形で対応してくれるかどうかということであった。昨年の最初のシンポジウムの時、実行委員のメンバーはその思いを切り出した。そうしたらそこに参加した匠の方々が、「うん、いいよ」と言った。あまり考え込むことなどないことのように、さしあたりそのハードルは越えられたのである。しかしこの「遊作」塾にとっでは、それが一つの原点であり、一つの原像である。

そして人間国宝の岩野さんは次のような話をして、「遊ぶ」世界を次のように、肯定する。

「紙漉はなかなか難しいですが、今立の4つの小学校は卒業証明を自分たちでがんばっ

て喜んで漉きます。ですからその気になればかなりいい物が出来ます。紙は材料によって単価が変わったり場所の問題がありますが、小学校の卒業証書は今立町が応援してくれています。学年に1 - 2人くらいは上手な子がいて『将来、紙を漉かんか?』と試してみますが、首を立てには振ってくれない。けれど、ああいう子供には、備わっているものがあるので、他の物を作らせても上手だろうと思うんです。そういう子と遊べるなら私も遊びたいので、遊作塾のような機会をぜひ増やして下さい。遊びましょう。」

今立 古民家・匠・ロングステイプロジェクトにおいてその中心軸は、今立に古くから伝わる和紙を中心にした伝統工芸体験と豊かな歴史を物語る古民家再生に据えられている。和紙講座や古民家再生講座を定期的に開催し、福井県内外の方々に広く参加を呼びかけてきた。しかし、これらの伝統の技をただ単に体験して終わってしまうのではなく、より深く、より本格的な充実した講座を私たちは目指してきたところに他の地域おこしとそれを支える〈地元学〉の関係との間に少し違いがあるといえる。

4) 第1回公開講座

この事業のオープニングイベントとして、平成16年(2004年)11月22日「いまだて遊作塾第一回公開講座『今立のモノづくりと新しいライフステージ』」を開催致した。地元で活躍されている匠の御協力のもと、“今立のモノづくり”のバックボーンをより広い視野から改めて見つめ直し、その意味について共に考える公開講座となった。講師をお願いした方々はいずれもその世界では第一人者の巨匠達である。第二部では匠の案内による見学会を実施致した。総勢100名以上の方々にご参加頂き、いまだて遊作塾第一回公開講座は大盛況のうちに終了致した。

目的：講師、スタッフの交流および遊作塾について討議

日時：平成16年(2004年)11月22日 19:00～

場所：旧今立町南坂下古民家 CASAL

参加者総数：30名

講師参加者：

- ・岩野市兵衛氏(越前生漉き奉書紙・人間国宝)
- ・直井光男氏(大工棟梁)西岡常一棟梁と薬師寺改修を手がけ、今立の紙祖神が祭られている国の重要文化財 大瀧神社・岡太神社の改修も手がけた
- ・杉村和彦氏(アフリカ研究・福井県立大学教授)
- ・司会：松井郁夫氏(一級建築士 有限会社松井郁夫建築設計事務所 代表取締役社長)

第一部 パネルディスカッション

テーマ：「今立のモノづくりと新たなライフステージ」

日時：平成16年(2004年)11月23日 10:00～12:00

場所：旧今立町 卯立の工芸館

参加者総数：約100名

講師：

- ・岩野市兵衛氏(越前生漉き奉書紙・人間国宝)
- ・直井光男氏(大工棟梁)
- ・織田 清氏(おだ住建主宰 大工棟梁)
- ・杉村和彦氏(アフリカ研究・福井県立大学教授)
- ・山崎洋子さん(福井三国NPO 法人田舎のヒロインわくわくネット代表)
- ・司会：松井郁夫氏(一級建築士 有限会社松井郁夫建築設計事務所 代表取締役社長)
- ・サブ司会：増田頼保(芸術家 今立 古民家・匠・ロングステイプロジェクト実行委員長)
- 主催：今立 古民家・匠・ロングステイPJ実行委員会

協力：NPO 法人森のエネルギーフォーラム、NPO 法人エコプランふくい、NPO 法人エコプランさばえ、福井・木と建築の会

後援：福井県、旧今立町、旧今立町商工会、福井県和紙工業組合、福井新聞社、NHK 福井放送局、FBC 福井放送、FM 福井、月刊ウララ編集部、丹南 CATV

ゲリラライブ

日時：平成 16 年（2004 年）11 月 23 日 12:00～13:00

場所：あみだそば（和紙の里内）

地元の蕎麦屋にて、昼食（希望者のみ）

ゲリラライブ...地元の有志「夢の会」らによるストリートライブ。



写真 23：「夢の会」ゲリラライブ

第二部 見学会

1) 町中見て歩きガイド：石田慶昭氏（石田工務店代表 大工棟梁）

日時：平成 16 年（2004 年）11 月 23 日

13:00～16:00

場所：和紙の里～岩野市兵衛氏邸まで

概要...旧今立町岩本地区～大滝地区にかけて、いま尚残る古い町並みを参加者と共に散策。卯立のあがった古民家や地元の古い神社等を、石田棟梁による解説を交えながら見学した。



写真 24：岩本神社前



写真 25：妻入り卯立つのある『ねまっ邸岩長』前で

2) 岩野市兵衛氏（人間国宝）の和紙制作現場訪問

場所：岩野市兵衛氏邸

概要...岩野氏による和紙についての解説や原料の説明、および和紙制作現場の見学が行われた。参加者から質問を受け付けるなど、詳しい解説を聴講した。



写真 26：人間国宝岩野市兵衛氏による製紙工房で生漉き奉書紙の解説

3) 直井光男棟梁と大瀧神社・岡太神社にて古建築の見学

場所：大瀧神社・岡太神社（旧今立町大滝町地区）

大瀧神社 岡太神社：千五百年前にこの里に紙漉きを伝えた川上御前を紙祖伸として祀る岡太神社と並び建つ、今立を代表する古建築。直井棟梁が修復した本殿を中心に見学。

なお、大瀧神社本殿及び拝殿同附書は国の重要文化財（江戸期：天保 14）。旧今立町指定文化財大瀧神社奥の院本殿（江戸中期）、岡太神社奥の院本殿（江戸初期）

イベントは、「今立 古民家・匠・ロングステイプロジェクト」のオープニングイベントとして、また、今後続いて行く「いまだて遊作塾」第一回講座として開かれ、途中参加者などを合わせ、県内外から約 100 名もの参加者が集い、盛況のうちに終了致した。

このイベントを通じて、今立に残る古民家や匠の技の素晴らしさを改めて認識することとなった。また、今後の遊作塾の在り方や当事業の方向性が確立されたように思う。この今立に残る素晴らしい資源を生かした町づくりに向けて、今回のイベントをもとに、より一層の発展を遂げていきたいと思っている。



写真 27：直井棟梁が修復した国の重要文化財 大瀧神社・岡太神社を見学する参加者



写真 28：大瀧神社・岡太神社の改修を担当した直井棟梁が、桧皮葺の作り方を実物模型で説明



写真 29 : 檜皮葺きの模型と竹釘で打ち付けられた檜皮

4. 遊作の体験

1) 古民家の中の遊作

(1) いまだて遊作塾第二回講座「古民家再生講座釘を使わない本棚づくりと和紙制作体験講座」

日時：平成 16 年（2004 年）12 月 11 日（土）～12 日（日）

場所：ハツ杉森林学習センター、卯立の工芸館（和紙の里）、旧今立町南坂下古民家 CASAL、旧今立町杉尾地区楮畑

参加費：13,000 円（一泊二日）

講師：

- ・ 岩野市兵衛氏（越前生漉き奉書紙・人間国宝）先祖代々「市兵衛」を襲名し、講師の岩野氏は九代目。先代市兵衛に技術を習う。生漉き奉書一筋に専念し現在に至る
- ・ 直井光男氏（大工棟梁）西岡常一棟梁の下での薬師寺再建、国の重要文化財である武生市の大塩八幡宮や旧今立町大滝神社等数々の修復を手がけた日本屈指の宮大工
- ・ 石田慶昭氏（石田工務店代表 大工棟梁）

釘を使わない古民家講座（実技）

日時：平成 16 年（2004 年）12 月 11 日 13:00～17:00

場所：ハツ杉森林学習センター

講師：直井光男氏（大工棟梁）・石田慶昭氏（石田工務店代表 大工棟梁）

参加者数：9 名

講師に直井氏、石田氏を迎え、古民家の技法を応用した木製の本棚づくりを行った。釘を 1 本も使わずに制作する技法を用いて、古民家に用いられている技法の利点や特徴などを学んだ。



写真 30：直井光男棟梁による手斧（鑿・チョウナ）と槍鉋（ヤリガンナ）の実演



写真 31：古民家再生講座 釘を使わない本棚づくり

(2) 古民家再生講座 建具の組子と枕屏風の建具組み立て

日時：平成 17 年（2005 年）2 月 20 日 9:00～12:00、組子の組み方

場所：旧今立町南坂下古民家 CASAL

参加者：受講者ならびにスタッフ、ならびに講師

参加者数：4 名

講師：上坂哲夫氏

概要：日本の伝統技法とも言える建具の組子の組み方を模型を使って説明。参加者らは模型を手に取り、実際に組み立てながら、奥深い組子の技法について学んだ。

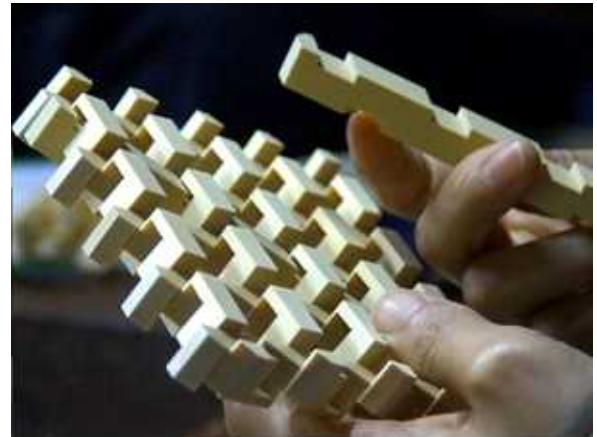


写真 32：コースターになった組子の組み立てだが、複雑な形状なので簡単には出来ない

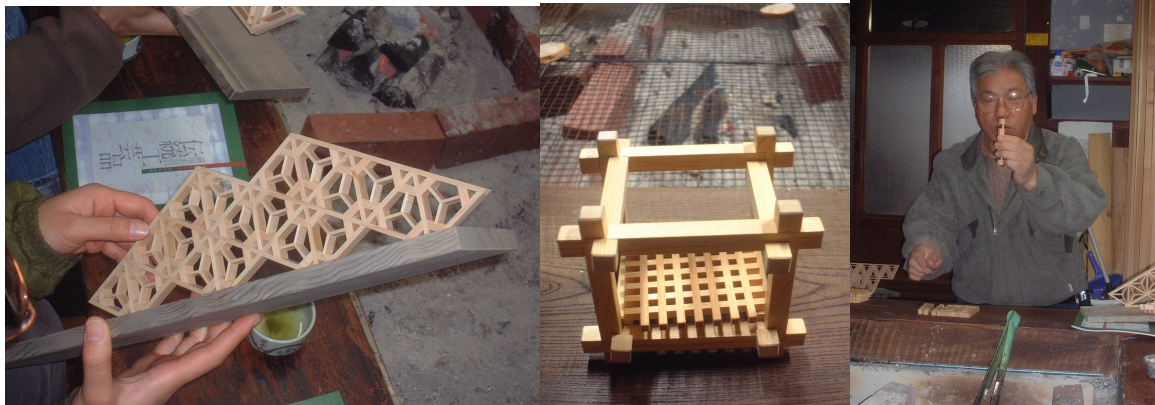


写真 33：組子が出来あがったところ

写真 34：組上げて捻ると完成する

写真 35：講師の上坂哲夫氏

日時：平成 17 年（2005 年）2 月 20 日 13:00～17:00、枕屏風の建具組み立て

場所：旧今立町南坂下古民家 CASAL

参加者：受講者ならびにスタッフ、ならびに講師

参加者数：4 名

講師：上坂哲夫氏

概要：古民家で不要になった古材である建具（障子）を再利用し、枕屏風を制作する講座。建具の匠を講師に招き、障子を組み立て直し屏風へと再生。組み立てた仕上げたものに越前和紙を貼付け新しいタイプの枕屏風を創り上げた。枕屏風は古民家で「寝る」際に、欠かせない道具でもある。古民家での暮らしを感じながら、参加者はそれぞれ制作のテーマを掲げイメージを膨らませ取り組んだ。また同じく古民家での暮らしに欠かせない「木炭」を枕屏風に貼付けるなどの斬新なアイデアも生まれた。尚、使用した和紙は、当プロジェクトメンバーの若手紙漉職人らが今講座の為に手漉きし用意したものである。

（3）囲炉裏を作る



写真 36：古材である建具（障子）を再利用した枕屏風に備長炭を取り付けた参加者 写真 37：右は完成作品

古民家再生講座（実技 / 囲炉裏制作）

日時：平成 17 年（2005 年）1 月 22 日 13:00～17:30、23 日 10:00～16:00

場所：旧今立町南坂下古民家 CASAL

講師：

・直井光男氏（大工棟梁）

・石田慶昭氏（石田工務店代表 大工棟梁）

参加者数：10名

古材を用いて、移動式の囲炉裏を制作。炉台、炉淵、椅子の三班に分かれて制作した。直井棟梁が墨付けを行う等、伝統的な手法を披露。参加者は棟梁らに学びながら制作し、完成した。

私（杉村）は、そんな魅力ある古民家を実際に訪ねてみて、ある点に注目した。それは、囲炉裏である。初めて囲炉裏を見て、初めてそこで食事をした。とても新鮮な感じがした。そこにはテレビがなく、食事中聞こえるのは人の声のみ。普段当たり前につけているテレビがないのに、最初は違和感を覚えた。だが、すぐにそんなことも忘れ、そこには会話と笑い声が飛び交った。みんなで自然食に舌鼓をうち、語り合う。教授、生徒、他大学の生徒、遊作塾代表者……こんな人のコラボレーションもまた、新鮮でおもしろいと感じた。囲炉裏を囲んで、食をとりまいた人間関係、生活のありよう、などの様式、思想がうまく生き活きと融合していた。

そして、食卓を囲んで食事を共にすることの重要性を、改めて感じた。食べ物をわけあえる集団を持つのは人間だけという。食のファースト化が進む現代社会において、囲炉裏は「日本の食文化というものを再確認させてくれる場」であると感じた。食の「スローダウン」を見直して、食の快楽を蘇らせてくれる。この囲炉裏を囲んだ食卓の時間は、スローフードだけでなく、時間も忘れたスロータイムを経験させてくれた。囲炉裏というほんのある一部を取り上げたただだが、この古民家には、素晴らしい技、歴史、匠の思いなどの他に、現代社会（前にとにかく進むこと＝ファースト化）に埋もれた「スロー」をもたらしてくれる要素がたくさん詰まっていることに気づいた。スローにある多くの発見や再確認を、この古民家でもっと体験してみたいと感じた。

第三回講座

『今立 古民家・匠・ロングステイプロジェクト』の事業である“いまだて遊作塾”も第三回目を迎えた。今回も地元で活躍されている匠の御協力のもと、「古民家再生講座」と題し充実のプログラムを組み、多数の方のご参加頂くことが出来た。講師には日本屈指の宮大工である直井氏の両氏を迎え、一般の方が尊敬すべき伝統の技に触れながらモノづくりに参加することができた。この講座を“モノづくり”を次代に繋げていく機会になればと思っている。

また今回は、“食”をテーマとした講座とし囲炉裏を制作し、“食”の観点から古民家再生を考え体験するプログラムにした。単に古民家を再生するだけでなく、様々な観点から古民家の持つ魅力を探る「古民家再生講座」の第一回目となる。囲炉裏を囲み、郷土料理を味わい体感することで、古民家の意義、魅力に触れることができる講座となった。



写真 38：織田清氏の仕口講座とうんちく座学

いまだて遊作塾 第三回講座「古民家再生講座」

日時：平成 17 年（2005 年）1 月 22 日（土）～ 23 日（日）

場所：ハツ杉森林学習センター、旧今立町南坂下古民家 CASAL、旧今立町杉尾地区楮畑

参加費：18,000 円（一泊二日）

参加者総数：11 名（一般参加者 7 名、モニター参加者 4 名）

講師：

- ・直井光男氏（大工棟梁）西岡常一棟梁の下での薬師寺再建、国の重要文化財である武生市の大塩八幡宮や旧今立町大滝神社等数々の修復を手がけた日本屈指の宮大工。
- ・織田清氏（おだ住建主宰 大工棟梁）。日本の伝統的な木造建築にこだわりながら、新しい感覚を取り入れた家作りを手がける。
- ・石田慶昭氏（石田工務店代表 大工棟梁）

（４）ウンチク座学

古民家再生講座 座学

テーマ：古民家再生講座 「古民家の様式、古民家での暮らしと工夫・間取・素材・設備・メンテナンス」

日時：平成 17 年 1 月 22 日 10:00～12:00

場所：旧今立町南坂下 堀田邸

参加者数：10 名

講師：織田清氏（大工棟梁）

おだ住建代表・大工棟梁。日本の伝統的な木造建築にこだわりながら、新しい感覚を取り入れた家作りを手がける。

概要：囲炉裏を囲みながら、古民家の様式などについて学ぶ座学講座。織田氏が実際に携わった古民家再生などについて解説。



写真 39：仕口（ミゾ・ホゾ・センなどの細工）の実物模型と、スライドで古民家再生の現場を語る織田清棟梁

（４）古民家の未来をデザインする 第 1 回～第 6 回の連続講座

日時：平成 17 年（2005 年）9 月 22 日
（土）～23 日（日）

場所：旧今立町岩本地区 旧小林邸・
旧根岸邸

参加費：30,000 円（6 回連続講座）

参加者総数：6 人

講師：石田慶昭氏（石田工務店代表 大
工棟梁）

この家は以下に示すように、この土地
を代表する来歴を持った家の修復再生作
業に入る前にこの家の歴史を持ち主であ
った根岸氏に聞いた。参考資料として福
井市商工会発行の「福井県の歴史（印牧
邦雄著）」より一部引用する。

和銅 5 年（712）越前ほか 20 力国に綾錦を織らせたことが「続日本記」に記され、延喜
5 年（905）若狭・越前など 36 力国から絹帛を調として納めさせた。慶長 5 年（1600）結
城秀康が入部したころ、光絹・絹平・玉紬などの絹帛があったが、秀康は玉紬を“北庄紬”
（北ノ庄紬）と改称して品質の改良と販路の拡張をはかった。後に、“北ノ庄紬”は“奉書
紬”に改称された。

近江長浜の宝生紬をまねて本場をしのぐほどになったので、越前宝生紬の声価が高まっ
たが越前は奉書紙の産地として著名であったことから自然に混訛し“越前奉書紬”と改称
された。明治 18 年の冬、今立郡出身の絹業者の小林清作商店（横浜）からアメリカ向け輸
出用羽二重の注文が入ったという。

五箇村の奉書の漉き屋は五箇各村に分布していたが、大滝がもっとも多く、製紙の中心
であり、これに対照的なのは、岩本で、漉屋が少なく仲買が発達していたといわれる。



写真 40：二階部分の物置

この建物の購入目的は、「妻入り卯立つ」という今立由来の伝統的民家の保存活用と、「いまだて遊作塾」の活動を地域の人に認知してもらおうと同時に、協力者を増やし気軽に来てもらえる関係を築くことにある。そして、会員を増やす活動を古民家で実施したり、古民家に関わるグッズや、和紙を使ったグッズを開発したりして資金を確保すること。また、古民家カフェを

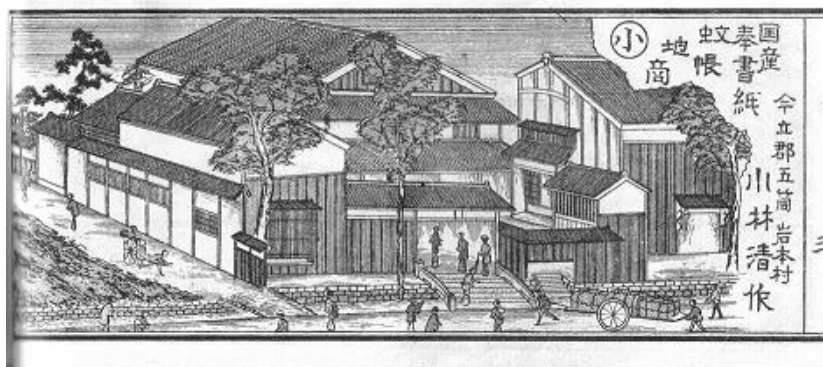


図3：明治20年に発行された福井縣下商工便覧（武生ルネッサンス復刻版）

開催し、事あるごとに活動の趣旨を説明して理解者を増やす努力をすること。HPでの情報を発信しながら、未知の人々へのぷらっとホームになるような努力をする。メディアをフルに活用することで、PRにかかる経費を極力抑える。講座による会員を募ること。

この小林清作商店の本店であった家を根岸長兵衛氏が購入し、その後、NPO法人森のエネルギーフォーラムが購入した。この「旧小林邸=旧根岸邸」を「ねまっ邸岩長」（岩本の長兵衛を岩長と土地の人は言っているし、番傘や半纏などに屋号として書いてある）と改称した。

古民家再生ワークショップ呼びかけ文

和紙の里 今立の町中にある根岸邸 明治時代より和紙の間屋として栄えたこの民家もいまはその役目を終え、空家としてたたずんでいます。

明治大正時代から時が止まったようなこの民家には、私たちが忘れてかけている日本の文化や、途切れつつある匠の技が一杯詰まっています。

そんな日本人としての大切な心のふるさとを何とか現在によみがえらせたい……そして再び賑わいを戻したい……

私たち 今立 古民家・匠・ロングステイプロジェクトではこの旧根岸邸を再生させるプロジェクトを開始いたしました。

このワークショップにご興味のある人、古民家再生に興味のある人、古民家をどのように再生させようか悩んでいる人、是非この機会にこのワークショップに参加していただき、議論・そして実践してみませんか？

南越丹生

なんえつ にゆう

宗富 井 兼 厚

今立 築130年、和紙問屋として繁栄

あなたの手で

今立古民家・匠・ロングステイプロジェクト実行委員会増田幹保代表が企画した、同委員会は昨年など、今立独自の地域資源を生かし郡会入に田舎暮らしの良さを提供している。いまだに「お宝探し」を続けている。

ワークショップは、参加者に古民家の再生過程を学んでもらうとともに、地域活性化の拠点として地元住民に親しまれる場所をつくるのが狙い。大学教授や建築家、宮大工らが実行委員として参加者をサポートする予定。

再生するのは、同町岩本の約百十坪の木造二階建ての空き家。明治元(一八八八)年に建てられ一九五〇年代には空き家になったという。母屋の作業小屋や使用人部屋がある。



ワークショップで再生される築約130年の古民家

古民家の再生

て和紙問屋として築いた約百三十年の空き家の改修作業体験である。古民家再生ワークショップが、九月下旬から今立町内で始まる。ゆくりある古民家の良さや、忘れられつつある日本の匠の技を後世に伝えていく。古民家での居住を考えている人や建築方法を学びたい建設関係者ら幅広く参加者を募っている。

実行委、参加募る 利用方法模索も

初回は九月二十三、二十四の両日に開催。以後、毎年二月まで毎月一回泊まりがけで、改修に向けた家屋の調査や直し作業を見学、体験する。改修後の利用方法も、地域住民らとともに話し合っていく。古民家全体の再生には数年かかるため、ワークショップでは家屋の一部を部分的に改修する。事務局の中西昭雄さん(左)は「今立を古民家再生のメッカとして全国にアピールしてまわす」の目標を掲げたいと話している。

原則すべての回に参加するのとが条件。受講料は三万円で、各回の宿泊費は別途。申し込み先、問い合わせは、町実行委 ☎0778-1430071。

◆今立町内の築約百三十年の空き家を舞台に、古民家再生のワークショップが始まる。実際に家を見学してきたが、即立ち上がり、めくりある日本家屋の価値が再認識された。古民家の再生しては任せてほしい。一方、多くの大工に建築技術が伝承されていない現状もある。ワークショップが、日本文化伝承の拠点を築き上げていると、昭和二十

図4：2005年9月8日の福井新聞記事

ワークショップ(宝を探そう)

日時：平成17年9月23日(金) 13:00~16:30
 会場：ねまっ邸岩長(旧根岸邸)
 講師：根岸氏(旧所有者)
 概要：生涯学習センターで3つのグループ(爛熟年グループ・HOTSグループ・宝グループ)に分かれそれぞれ自己紹介を行った後、前オーナーの根岸さんからこの家の歴史を語っていただいた。その後、古民家の現場に行きフロアを回った。当時の和紙見本や出荷前の商品もあり、昭和30年代そのままの雰囲気が感じられ、タイムスリップしたかのようであった。学習センターに戻ってからはどんな目的で活用するかをグループ単位で話し合った。

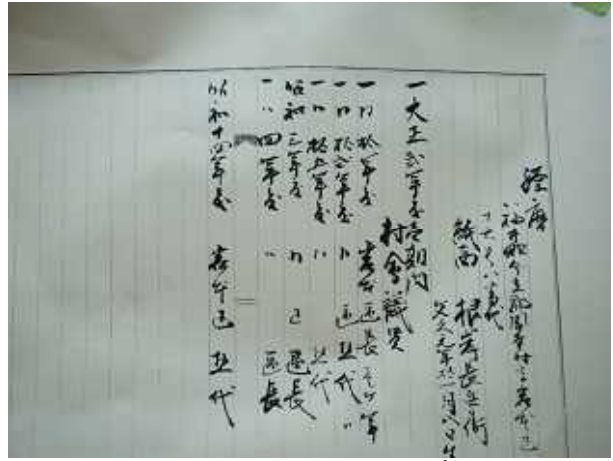


写真41：古民家再生講座ワークショップ来歴など聞く

大正6年に普請の資料があったので、こういう風に使うかは自由だが、これまでの歴史があるので伝えることをしたい。1611年には根岸長兵衛の名前が見つかる。岡本村岩本 16-17-18

根岸紙商店
 機械漉きなどをつくり始めた、日本封筒から合名会社根岸商店に変更。高利貸しもや

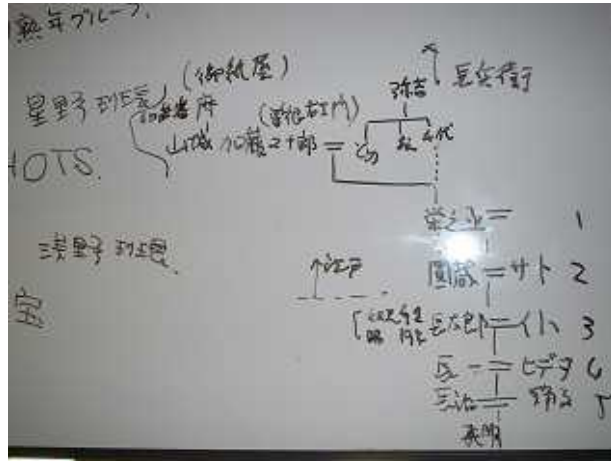


写真42：家系図と家の関係を簡単に図式化したもの

っていたので地域の人にはあまり歓迎されていなかった。

5人の御紙屋、根岸、加藤播磨、加藤山城、三田村掃部など。

爛熟年グループ：内山秀樹班長、杉村和彦、熊野重雄

HOTSグループ：星野康二班長、長田俊、辻守、杉谷美緑

宝グループ：浅野英治班長、石山俊、竹内健一郎、大屋宇一郎

ワークショップの流れ

- ・実際に現場を見る
- ・戻って、意見を交換する
- ・方針を決める
- ・手段を決める
- ・発表する
- ・テーマを決める
- ・具体的な使用目的として各部屋を割り付ける
- ・今立町に埋もれた作品の公開

↓
→ ギャラリー、展示スペース
・飲食店が近隣に少ない

↓
→ カフェ、喫茶
・気軽に集う場所

↓
→ サロン
・若者の技能の研修生、宿泊（滞在）場所がない

↓
→ 宿泊施設、中期滞在施設
体験工房
セミナーハウス

「越前を感じ体験する場所・・・The Echizen」、「心の湯治場」などの意見が出された。

爛熟年グループ：発表者の熊野さんは、テーマを「こころの湯治場」とした。

「地域交流サロン何のために情報ツールを満たして試す生き方をデザインする。若い人が自分をどういう生き方をしたらいいのか、自分自身を見つめなおすというような場を提供したらどうかなと思います。



写真 43：大瀧神社と和紙の里を結ぶ観光ルート開発



写真 44：爛熟年グループ：熊野重雄さん発表



写真 45：具体的な利用イメージ図面

事務所としてこの地域の色々な匠やら、紙漉き場などを紹介して二三泊しながら見て回る。ギャラリーとして利用したり、絵手紙などの教室に利用したりしたらいいのかなと思っています。二階は、思索工房（試作工房）蔵なんかを提供したらどうかなと思っています。昨日も話したように、場所が奥まった場所なのでインターネットなどを利用したらいいのかなと思います。観光バスやなんかで来ても、ここまでは来られないかもしれないので、ユースホステルなんかのような安く泊まれるようにしたら良いと思います。パピルス館や卵立つの工芸館などとは違ったものを提供したら良いと思います。ここを拠点に、和紙だけでなく、陶芸や漆器なども近くにあるのでそういう情報を出せる事務所機能があるといいと思います。紙に関するものが色々揃っている方がいいので色々なことを提供する場として、じっくり自己発見の場所、生き方工房というようなものがあるといいと思います。山形に暮らし考房というのがある。」

HOTS グループ：発表者の星野さんは、
「試しの作品を作れるようになるといい。アウトレット工房。昔あった空間を地元の人が使って、地元でとれた野菜などを販売したり使って調理したりしたらいいと思います。」



写真 46：HOTS グループ：星野康二班長発表

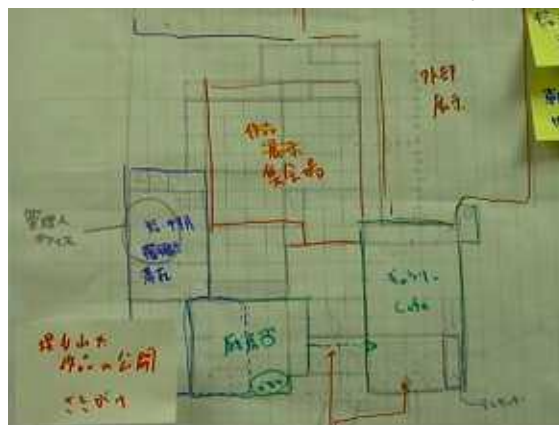


写真 47：具体的な利用イメージ図面

宝グループ：発表者の浅野さんは、思索（試作）工房として再生してはどうかという意見だった。



写真 48：宝グループ：浅野英治班長発表

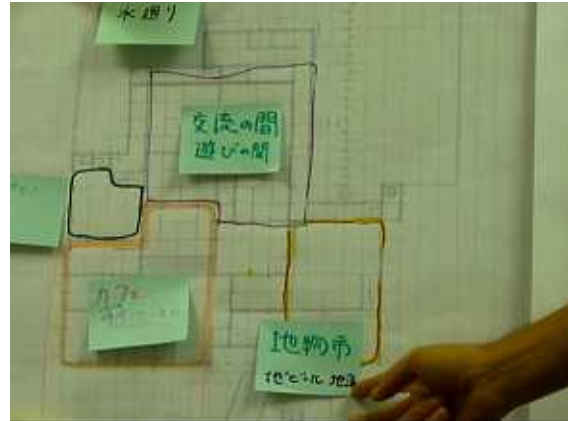


写真 49：具体的な利用イメージ図面

ワークショップ（古民家を活かす）

日時：平成 17 年 9 月 24 日（土） 10:00～16:30

会場：生涯学習センター

講師：中西昭雄氏

概要：爛熟年グループ・HOTS グループ・宝グループが前日撮影した写真を、平面図に貼り付けた。更に、周りの立地条件を考慮することでよりその再生しようとする場所の意匠性を理解できると思われるので、周辺の環境や文化遺産など丁寧に見て回る。



写真 50：古民家再生講座ワークショップ 写真を貼り付けてイメージを膨らませます

日時：平成 17 年 9 月 24 日 10:00～12:30

場所：生涯学習センター

概要：前日デジカメでとった画像を参考に、2 日目は根岸邸での一日をイメージして物語をつくり発表していただいた。また周囲の立地条件も考慮して地域の中で再生しようとする意味も感じ取れるように、周囲の散策も行うことでより具体的な生活の流れを物語風に発表してもらった。1 階・2 階・中庭・蔵のそれぞれのスペースをギャラリー、カフェ、宿泊所などいろいろなアイデアが出された。



写真 51：ワークショップの様様



写真を図面に貼り付けてイメージを具体化させる参加者

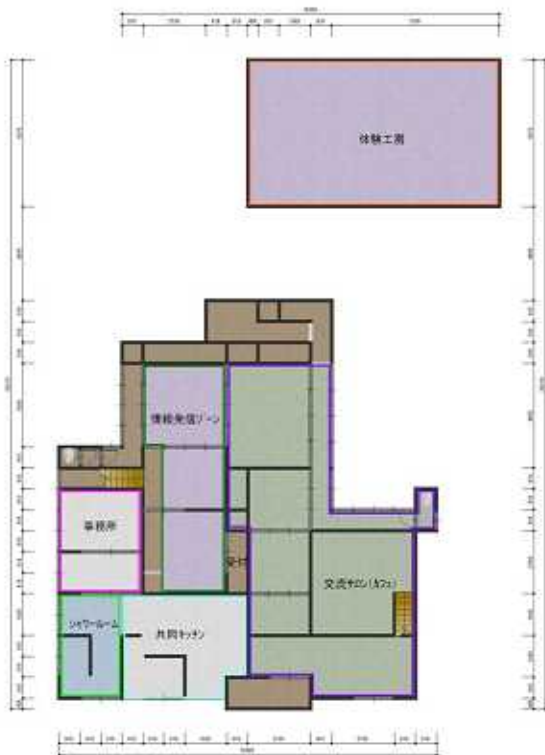


図 5：左側一階と蔵部分の図面

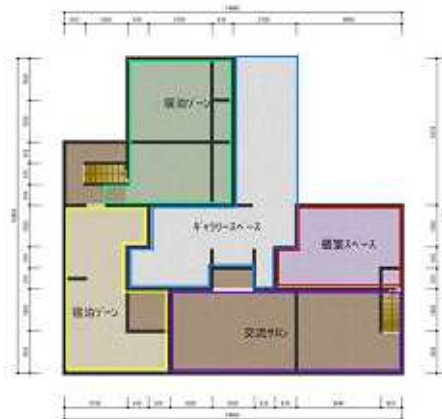


図 6：右側二階部分の図面

2) 伝統の和紙の講座

古民家の手作りの世界とともに今立の和紙作りの講座も行われた。今回第二回目の講座では、地元で活躍されている匠の御協力のもと、「古民家再生と和紙制作体験講座」と題し充実のプログラムを組み、多数の方のご参加頂くことができた。講師には人間国宝である紙漉職人・岩野氏、日本を代表する大工棟梁である直井氏の両氏を迎え、広く一般の方が尊敬すべき伝統の技に触れながらモノづくりに参加することができ、和紙講座においてはこの後和紙の原料から作り出し、超スローな手作りの世界を体験する企画も組まれた。

(1) 古民家見学と昼食

テーマ：古民家再生講座「古民家見学と囲炉裏での昼食」

日時：平成 16 年（2004 年）12 月 11 日（土） 10:00～12:00

場所：旧今立町南坂下地区 堀田邸・旧今立町南坂下町古民家 CASAL

参加者数：10 名

講師：石田慶昭氏（石田工務店代表 大工棟梁） 辻 守氏（1 級建築士）

概要：現役大工棟梁や建築士による、古民家の解説を行った。

また昼食は、参加者、スタッフを交えて囲炉裏端で田舎料理を味わった。



写真 52：古民家堀田邸で囲炉裏を囲んでご主人のお話を聞き、田舎料理の昼食を食した。



写真 53：堀田邸外観



写真 54：楮の黒皮剥き作業



写真 55：岩野市兵衛氏に直接紙漉きを習う

（ 2 ）楮畑刈り取り体験

テーマ：和紙講座「楮畑刈り取り体験」

日時：平成 16 年（2004 年）12 月 11

日 13:00～14:00

場所：旧今立町杉尾町地区楮畑

講師：岩野市兵衛氏（越前生漉き奉書紙・人間国宝）

参加者数：5 名

旧今立町杉尾地区にある楮畑に赴き、越前和紙の原料となる楮の刈り取り体験を行った。単に紙漉体験に終わるのではなく、モノづくりの真髄に触れることが目的で、紙漉きの原料を栽培している楮（こうぞ）畑に行って刈り取り作業から体験し、実際に目で見て触れることで、再生可能な楮の植生についても学習した。



写真 56：楮（こうぞ）畑に行って刈り取り作業

（ 3 ）和紙制作体験

日時：平成 16 年（2004 年）11 月 23 日 14:00～16:00

場所：卯立の工芸館（旧今立町和紙の里内）

講師：岩野市兵衛氏（越前生漉き奉書紙・人間国宝）

参加者数：5 名

卯立の工芸館にある紙漉工房にて、岩野市兵衛氏（和紙職人・人間国宝）の指導で紙漉体験を行った。

岩野市兵衛さんの話では、「私は、これまで和紙は漉いてきたんやけど、楮の刈り取りからというのは初めてで、理屈ではわかっているんやけど中々難しいもんやの。この鎌は切れんであかんわ。」しかし、その岩野さんは、「私は初めてなんやけど」と言いながらどんどん刈り取って行く。他の参加者の十倍以上のスピードもあろうか。そのうちみんなの指導を始めた。「切り口が南を向くようにしないとイケないんです。」と、ちゃんと切り取りのコツも心得ている。

会場を移して卯立つの工芸館では、刈り取られた楮を蒸して皮を剥いだ状態の楮を一晩水に漬けたものを足で踏みながら一番外の鬼皮をこそげ落とした。

5. 「遊作」の多元化

今立 古民家・匠・ロングステイプロジェクトにおいては、このような古民家に関わる様々なわざと同時に今立の伝統ともいえる和紙作りをプロジェクトの中心においていた。しかしすでに述べたような「遊作」というコンセプトは伝統の技を復元し保存するという次元を超えた様々な側面に広がっており、都市の人の多様なニーズを取り込むより“遊び”の要素を取り入れたものに展開していった。

1) 田舎の遊作

(1) 田舎の夏休み ～和紙で作るオリジナル時計～

和紙講座 (和紙漉き)

テーマ：和紙漉き

日時：平成 17 年 8 月 20 日 10:30～12:30

場所：今立和紙の里 パピルス館

講師：梅田太士氏、コーディネーター：鈴木順子氏

参加者数：11 名

概要：講師の先生には「落水」などのプロが和紙づくりに使う技法も教授していただいた。参加者には素材・色・技法を自由に選んでもらったところ豊かな発想力で独創性あふれる和紙をどんどん作っていった。午後からは、卯立工芸館・和紙の里会館を講師の先生に案内してもらい和紙づくりの歴史や製作工程を学習した。



写真 57：伝統工芸士 梅田太士氏のウンチク座学と工場見学

(2) 和紙講座 (和紙時計作り)

テーマ：和紙時計づくり

日時：平成 17 年 (2005 年) 8 月 21 日 10:30～12:30

場所：旧今立町南坂下 古民家 CASAL

参加者数：12 名

コーディネーター：鈴木順子氏、熊沢和美氏

概要：前日漉いた和紙を用いて、世界にひとつしかないオリジナル時計を製作した。紙

漉き同様、参加者の個性が存分にあふれ出た個性的で楽しい時計がたくさん出来上がった。



写真 58：和紙時計の文字盤を作る



写真 59：和紙時計の文字盤に時計ムーブメントを組み込み完成

(3) ランプシェード 杉村和彦

ランプシェード制作講座

日時：平成 17 年（2005 年）2 月 13 日 9:00～12:00、13:00～16:00

場所：ハツ杉森林学習センター創造庵

参加者：受講者ならびにスタッフ、ならびに講師

参加者数：10 名

コーディネーター：青木里菜、鈴木順子、熊沢和美、白崎宏幸

概要：一日目、二日目に自分で漉いた和紙を用いて、ランプシェードを制作。材料には和紙の原料である楮を用い、参加者が思い思いの形で制作し、個性豊かなデザインのランプシェードが数多く出来上がった。時間内で仕上げようと夢中で制作している参加者の姿が印象的であった。完成したランプシェードは記念撮影後、付属のライトと共に持ち帰って頂いた。



写真 60 : 和紙の基本的な作り方を説明した後、オリジナルな和紙に挑戦し、楮の枝を使ってランプシェードを作る

今立の和紙で作るランプシェード作りに参加した。都会の店頭に並ぶランプシェードを見ているととても芸術的な香りのするものも多く、興味はあったが、こうした「手わざ」の世界に自らも参加することは簡単にできるものだとは思っていなかった。遊作塾の企画も様々なものがあったが、中でも特に華のある企画の一つがこのランプシェードづくりであった。そういうわけか、この日の企画には、いつになくたくさんの方が参加していた。うまく作ればそれぞれの個性の生かせる面白い手わざの世界だ。そうしたことに多くの方が関心を持っているのだろう。舞台は旧今立町のハツ杉森林学習センターの木工施設だ。

今日のランプシェード作りを指導してくれる白崎氏がランプシェード作りの材料となる楮の枝を持ちこみ、また部屋には色鮮やかな様々な和紙が持ち込まれている。和紙は遊作塾のメンバーの和紙職人を中心に漉き込んで今日までに仕上げたものだ。和紙の繊維がかもし出す独特の形や色彩は、それ自身が芸術的な感覚を呼び起こす。こうした和紙をふんだんに使って全く自由に創作のランプシェード作りをしようというのが今回の試みであった。

参加している人は全く初めての方がほとんどだが、遊作塾のリーダーである増田さんなどは、長年今立の紙展なんかも主催してきており、家の中で自らも作ったランプシェードを置いている。暗闇でうっすらと和紙の繊維を通してあかる光は幻想的であり、心を和ませる。こうしたことが多くの都会の人たちを魅了するのであろう。作業は全体の枠組み作りから始まった。どんなかたちにしてもいいのだ。楮の枝は弾力性があり、いろいろな形へ変形することができ、いろいろなかたちを生み出すことができる。何を作ったらいいのだろう。正直こうした自由な「創作」という時間から離れて何十年も経っているように思う。自分が作り出したいものといっても、少し困ってしまう。



写真 61：ランプシェード制作風景

増田さんは何を作っているか覗いてみる。さすがてきぱきと手が進む。また遊作塾のリーダー格の福嶋さんもいるのでそれも覗く。それぞれそれらしい個性を出して造形を始めているようにも見えるが、自分と同じようにあまりにも<自由さ>に戸惑っているように見えるものもある。何でもいいのだともう一度出発点に戻って考え直してみる。何せ自分で作りたいものでいいのだから。考えてみたらこれよりはこういう形の方がいいなという自分の好き嫌いはあるのだ。よく分からないけど自分の好きなものを重ねていくことにしよう。そう思うと楽になった。小さな経験だが、素直に楽しい経験だった。これは小さいが確かに一つの創造過程なのだ。それは人には意味のないことかも知れないが、作った人はどうしてもそこに愛着を持っていく。そこに自分の思いを込める。その思いの時間が重なっていけばそこに生まれる愛着は自然に増す。まさしくこれはスローなものづくりであり、参加する中で生まれる一つの価値だ。そこには小さいが作った人の個性があふれ、それを多くの人が見て鑑賞し、評価しあうものづくりの世界がある。機械的生産の世界ではないものづくりが人と人の関係を生み出していくということの端緒がそこに展開しているのだということもできるだろう。

それと興味深かったのは、作られた形の中に見られる個性もあるが、一緒に作っていると作る過程の中に人それぞれの表情を見出すことができる。作品にももちろん個性はあるが、作り方や作る表情にも個性があるのだ。それがみんなと一緒に作っているとよく分かる。一つ一つの作業をほんとに寸分の違いもないように丁寧にする人もあるし、アバウトな作業をするが、かたちにはこだわり、思いのほか個性的なものにする人もいる。手作業のスピードも一人一人違うのだ。考えれば年を取ってからこういう経験の場に出ることもなかった。形作りが一通りできると次にはそれに和紙を巻いて貼り付けていく。どのような色にするかということでもいろいろな個性がある。また和紙を厚く巻くか少しだけ巻くかあれこれ考え込んでいる人たちを見るものも楽しかった。一緒に作っている人には老いも若きもいる。そういう他の人の作品の仕立て方を見ながらまたあれこれ自分の作品を考えた。

作っていると不思議なもので<技術>はないながらもそれなりに自分にとってはとてもいいものになってくる。もちろん枝の曲げ方束ね方などはもう少しまくなければ自由な創作も自由にならない。しかしそうした点でうまかろうがまずかろうが、かたちのモデルや紙の選択はすでに一つの<創作>の域に来ているようにも思った。ランプシェードを2回3回と作っていくとどうだろう。



写真 62：和紙のランプシェードには個性が溢れる

私(杉村)にとっては、全くの初体験だったが、これを繰り返していくとどうだろうか。確実に深まることの一つは素材とモノとの関係だ。初めてだと素材をどのように使っているのかまずよく分からない。こういうことに対する感のようなものが深まっていくとモノづくりはさらに面白くなっていくだろうか。<技能>や<わざ>というものは大変おもしろいものだ。ある人とある作業工程がどこまで詰まって熟練しているかを正確に測ることはできない。体で覚えることは正直楽しいことだと思った。

かたちを思い浮かべ、そこにそれを張る紙の色を思い描く。作り出すために自らが関わっていく手作りだ。皆それぞれに楽しそうにしていた。そこには作り上げたもの、それはその仕事の成果であり、さしあたりその人の小ささが創造の世界だ。他人から見るとこれはどうかとあまり見栄えがよくないな、もう少し大きく作った方がいいのにというものもあっただろう。しかしそれぞれのそうしたかたちや色に対する小さなこだわりがあり、そういうこだわりとの関係を楽しんでいる。それが面白かった。

ランプシェードをそれぞれがまさに、遊作としてつくる過程は楽しかったが、それではこの楽しさはどのように伝えることができるのだろうか。「楽しかった」と語ることはできるが、それは体験しなかった人にはなかなか伝えることができないものだ。このような身体に蓄えられている楽しさが最もその根幹にある「遊作」ということの意味であるならば、それは民芸論のように生活者が作り出したか完成されたモノの中に<美>を見出すような民芸論が語る<手作り>の復権ではない。そこにあるもっとも重要なことは参加することの中につむぎだされる<何か>を主題化することであろう。

このような視点から見る時作品ができた後でもう少し参加した人同志でゆっくりと<創作>のでき不出来を話し合い相互の見つけた小さな<わざ>を忌憚なく語り合う場があってもよかったように思う。もちろん参加した人のレベルはそれぞれまちまちであり、また参加した人の動機も大きな差異はあっただろうが、作品を作りながらの井戸端会議が弾めば、「遊作」の意味はより深まったように思う。

2) 遊作の“農”や“食”への展開

遊作の多元化の一つは田舎暮らしということとつながるわざの復権。“農”や“食”を取り込んだ“遊作”のイベントが行われた。

(1) 野菜収穫体験「ENJOY 田舎暮らし」～田舎暮らしは面白い～

テーマ：『スローフードライフの充実』

日時：平成 17 年(2005 年)7 月 18 日、19 日

場所：旧今立町南坂下

講師：笠島 清氏(農家)、堀田幸雄氏(農家)

概要：田舎の良さを再発見して頂こうと、午前は田舎暮らし体験として野菜収穫体験を行った。その後に、みなで収穫した野菜をふんだんに使って昼食をいただいた。午後は今

立町の方々、都会からの講師を招き田舎について話をしていただいた。田舎の良さを再発見、再認識できる楽しい一日となった。

夏は、ナス、キュウリ、トマト、ピーマン・・・など旬の夏野菜が毎日食べきれないほど実る。普段、スーパーに並んでいる野菜しか見たことのない参加者も、農家の畑に入り、農家の人たちと一緒に収穫を体験！そして、野菜づくりの苦労や楽しみを教わった。講座の帰りには土手に生えているニラを採るなど、田舎ならではのひと時を過ごした。

また午後には田舎暮らしをめぐってパネルディスカッションが行われた。タイトルは「座談会 ~ 田舎暮らしは面白い~」

講師：

- ・越道正芳氏（大阪：田舎専門の旅行代理店）
- ・中村成男氏（京都：フロイデ株式会社 代表取締役）
- ・石山 俊氏（福井：森のエネルギーフォーラム 事務局長）

まずパネラーの方々に田舎への思いを話していただいた後、参加者全員がそれぞれ都会に住む人の田舎像、田舎に住む人たちなどの苦労や楽しさを話し、終始笑い声が絶えない座談会となった。今立に住む人たちは今まで気が付かなかった今立の良さが、都会に住む人たちは今立に住まなくては見えない楽しさがわかり、田舎と都会の交流の場となった。

翌日は「かかしづくり」を行った。山から切り出した竹でつくられた骨組みを参加者が各1体ずつ持ち古着やタオルなどを着せていき、かかしの顔・身体を作っていった。完成した案山子は里山の田圃に設置したが、都会の家まで持って帰りたいたいという参加者の声もでていた。



写真 63：シンポジウムには県外や外国の方も参加した



写真 64：案山子（かかし）には人の匂いが染み付いた服を着せて害獣の侵略を防ぐ効果があるという

（２）天然酵母パンと農園訪問講座 ～手づくり石鹸の体験講座～

日時：平成 18 年 2 月 17 日 10:00～16:00

会場：オーニック、平澤農園

参加費：1,000 円

参加者：10 人（男性 3 名 女性 7 名 県内 10 名、県外 0 名）

講師：持田氏、平澤一広氏（今立有機農業研究会会員 平澤農園主）

自然と共生できる田舎暮らしをより具体的に進めるために、いまだて遊作塾ではグリーンツーリズム講座を開催した。今回は自然油脂でつくる手作り石鹸講座で、肌や環境にも優しい製品を作る講座を企画した。自然素材からとれる油を使い、石鹸作りを行った。



写真 65：手作り石鹸の様子と有機無農薬ほうれん草の味を楽しむ参加者

(3) 農園見学

日時：平成 18 年 3 月 18 日 10:00 ~ 16:00

会場：オーニック、平澤農園

参加費：1,500 円

参加者：10 人（男性 3 名 女性 7 名 県内 10 名、県外 0 名）

講師：平澤一広氏（今立有機農業研究会会員 平澤農園主）

概要：無農薬栽培についての講義を聞いたあと、実際に栽培しているほうれん草を試食して味の違いを体感してもらった。現代において自然と共生するにはどのようにすればよいか。いまだてで作られている農産物を身近に感じてもらうことと、体に優しい製品作りをとおして環境を活かす発想を育てていければと思う。また、農園で野菜を買ったり、予約できるシステムも構築することで、いまだてを身近に感じてもらえればと思う。



写真 66：平澤農園でほうれん草の栽培技術や有機農業研究会の活動の話聞く参加者

(4) 天然酵母パンと農園訪問講座 ~手づくりパンの体験講座~

天然酵母パンづくり講座

会場：オーニック

講師：栗原悟郎氏

概要：酵母とパン作りの話をさせていただいたあと、成型を行った。農園訪問後に焼きあがったパンを食べ、参加者の親睦を深めた。



写真 67：平沢農園で採れた有機無農薬ほうれん草を入れた天然酵母パンを試食する参加者

(5) 食と遊ぶ

石臼蕎麦うち体験

日時：平成 16 年（2004 年）12 月 12 日 10:00～13:00

場所：ハツ杉森林学習センター

参加者数：9 名

ハツ杉森林学習センターのプログラムである「石臼蕎麦うち体験」を遊作塾のプログラムに取り入れ、石臼でそば粉をひくところから始まる本格的な蕎麦うちを体験した。



写真 68：石臼挽きと蕎麦うち体験

夕食（郷土料理）

日時：平成 17 年（2005 年）1 月 22 日

場所：調理...旧今立町南坂下古民家 CASAL、食事...ハツ杉森林学習センター

参加者：受講者ならびにスタッフ、ならびに講師

調理者：ちとせの会プロフィール...旧今立町内で地産地消に取り組む味噌づくりグループ。町内産の大豆や米を使い味噌づくりを行い、町内の全小中学校の味噌を手掛けている。

<メニュー> じゃがいものちんころ煮、手作りこんにゃくのゆず味噌付け、落の葉っぱの佃煮、やたら漬け、すこ、みょうがの酢漬け、ぜんまいの炒り煮、豆汁、甘酒、白あえ、こんにゃくのピーマン炒め、きつねご飯、米粉、そば粉のシフォンケーキ、揚げご飯など旧今立町の郷土料理を中心とした料理。特にこんにゃくは“こんにゃく芋”から手作りし、参加者の中にはこんにゃく芋を始めて目にする者もあり、注目を集めていた。



写真 69：郷土料理の色々

昼食

日時：平成 17 年（2005 年）1 月 22 日、23 日 12:00～13:00

場所：旧今立町南坂下古民家 CASAL

参加者：受講者ならびにスタッフ、ならびに講師

調理者：栗原悟郎（福井市内のオーガニックカフェ「オーニック」店長）

昼食は両日とも、栗原氏の手掛ける自然素材を使ったメニュー。スタッフも交え談笑しながらの和やかな時間となった。

22 日...玄米粥、温野菜など

23 日...きのこリゾット、キッシュ、ミネストローネなど



写真 70：こんにゃくの刺身や玄米粥、温野菜などを食す参加者と拡大した一部料理

囲炉裏座談会（火おこし）

日時：平成 17 年（2005 年）1 月 23 日 16:00～18:00

場所：旧今立町南坂下町古民家 CASAL

参加者：受講者ならびにスタッフ、ならびに講師

調理者：永井昭子等

概要：完成した囲炉裏に、記念として参加者らの名前を記し、無事に完成となった。完成後は囲炉裏に初の火入れとなり、その火を囲んで、手作り団子、焼き栗、焼き魚などを味わった。自ら手掛けた囲炉裏を使っての、囲炉裏ならではの食事に、参加者らの感激もひとしおの様子であった。



写真 71：囲炉裏に火を入れ完成を共に祝った



写真 72：囲炉裏完成後に参加者全員がお茶で乾杯し魚を食す

(6) 食学

日時：平成 17 年（2005 年）2 月 19 日 18:00～19:00

場所：旧今立町南坂下古民家 CASAL

参加者：受講者ならびにスタッフ、ならびに講師

参加者数：10 名

講師：栗原悟郎氏（カフェ・オーニックオーナー）

メニュー：野菜の水炊き・ホイル焼

概要：極力今立町の食材を用い、地産地消にこだわったスローフードを提供する栗原氏による「食学」講座を設け、囲炉裏を囲みながら夕食前のひとときを、食について学ぶ時間とした。まな板を用いた料理は比較的最近の調理法であることや、料理と宇宙観などについて語り合った。夕食には参加者やスタッフの他、農家民泊でお世話になっている堀田夫妻を招待。今立町に伝わる郷土料理や田舎暮らしについて、和やかな雰囲気の中、お話を伺った。その他、ロゼーケーキやクッキーなどの差し入れがあり、終始和やかで美味しいひとときとなった。



写真 73：野菜水煮、ロゼーラのクッキーとヨーグルトロゼーラケーキ

遊作 食学の講座

平成 17 年（2005 年）2 月 11 日（金）・12 日（土）・13 日（日）

講師：栗原悟郎（福井市内のオーガニックカフェ「オーニック」店長）

概要：いまだて遊作塾では人々の暮らしにおいて重要な「食」にも焦点を当て、単に物づくりを学ぶだけの講座に終わらない、本物のスローライフを体験できる内容となっている。講座中の食のテーマを「今立を食べる」とし、今立町内で地元のお蕎麦を味わうなどを盛り込んだ。また、一日目夕食、三日目昼食は、オーガニックカフェのオーナーに今立町の食材を用いた料理を用意してもらい、食文化での今立も十分に堪能できる内容となった。

出来る限り今立町産の食材を用いて地産地消を目指し、いまだて遊作塾ならではの味わい深い食事となった。また、いずれもスタッフも交え談笑しながらの食事となり、物づくりだけではなく、人と人の触れ合いにも重点を置いた和やかな時間となった。



写真 74：囲炉裏を囲んで軽食を取りながらオリエンテーションを行った

日時：平成 17 年（2005 年）2 月 20 日（日）

概要：いまだて遊作塾では人々の暮らしにおいて重要な「食」にも焦点を当て、単に物づくりを学ぶだけの講座に終わらない、本物のスローライフを体験できる内容となっている。一日目夕食の他にも、二日目朝食や、モノづくりの合間には欠かせない休憩時のおやつなど、全て手作りのものを提供している。



写真 75：二日目昼食

二日目軽食

軽食とオリエンテーション

日時：平成 17 年（2005 年）3 月 12 日 16:00～17:00

場所：旧今立町南坂下古民家 CASAL

参加者：受講者ならびにスタッフ、ならびに講師

参加者数：18 名

コーディネーター：杉谷美緑氏

バスツアー終了後、南坂下古民家 CASAL へと移動。古民家で囲炉裏を囲んで軽食を取りながらオリエンテーションを行った。軽食は、大根等の地元今立町の食材を使ったおやつを用意。和やかな雰囲気の中、スタッフも交えながらの懇談となった。前々回の古民家再生講座で作成した囲炉裏や、南坂下古民家 CASAL にも参加者は興味津々の様子であった。

石窯ピザ焼き講座

日時：平成 17 年（2005 年）6 月 4 日 12:30～16:30

場所：ハツ杉森林学習センター

参加者：受講者ならびにスタッフ、ならびに講師

参加者数：25 名

講師：栗原悟朗氏

極力今立町の食材を用い、地産地消にこだわったスローフードを提供する栗原氏による「石窯ピザ焼き講座」は、今立つるし柿の天然酵母の説明に始まり、命の根源である食について講義をしてもらった。栗原さんの講義を覗くと次のような話だった。



写真 76：吊るし柿の天然酵母菌を利用したピザ生地を捏ねる 石釜でピザを焼く

講師：「今日は生きてる酵母を皆さんに触ってもらいます。皆さんなるべく長い時間こ

ねてもらいます。そうすると菌がですね、手からしみこんで皆さんだんだん元気になってきます。天然酵母のパンを手でこねているとすごく元気になります。そういうのも皆に体験してもらいましょう、という風に思います。あと、パン屋さんは手がスベスベです。

どんな化粧品より酵母触ってるっていうのはいいですね。お祖母ちゃん、手ゴツゴツだけであんなツルツルなのはきっと、ぬかをこうやって混ぜてるからかもしれないですね・・・

いいですか。皆さんちょっと集まってください。天然酵母をお見せします。・・・これ自体は物凄く強いです。ちょっと位パイ菌が付いたところで全部跳ね除けてしまいます。それでこの菌自体をずっと、今は大体三ヶ月くらい今つないでる、継ぎって言って、なくなったら増やしてなくなったら増やしてしてるんですけども、だんだんと人と一緒に風邪を一回ひくと、次もうひかなくなります。それとか寒い所で、くたーとなった菌は、次寒いとこ置いたときにもう、くたーとなりません。それを耐性が付いたって言います。そうやって覚えてくんですね。例えばパンのクロワッサンなんか作るときってというのは、一回冷凍させます。冷凍させるとほとんど死ぬんですけど、それをこうやってまた増やしていくと、残った菌は絶対冷凍しても死なない菌になります。・・・。」

そして、実際に生地をこね、それぞれ好みの具を盛り付け、ピザを石窯で焼き、出来上がった。参加者らは、生地をこねる段階から自分で作る楽しさを感じているようで楽しい雰囲気の中、石窯ピザ焼き講座を終えました。一つの充実したプロセスであった。



写真 77：石釜の様子



写真 78：生地を捏ねる杉村



スタッフもピザの焼き上がりに満足

スタッフの一人は遊作塾の世間での見方と「遊作」のもとに展開してきた経験とのギャップを次のように指摘している。

「どこのメディアもそうですけども、遊作塾っていうのは色々な講座をやっている所だよっていう認識の、そういう風に受け取れるような記事の書き方をされている。、そうじゃなくてね、全てが一つの流れであって、和紙を漉くこと、自然の素材で自分で食べ物を作って自分で食べることとか、で、夜はちょうど蛍の季節だっていうので蛍...夜、野外でライブをやらせてもらいました。バラバラな講座でもないし、バラバラなイベントじゃないと。それを全部繋げて自然との関わり方とかっていうのを体感してもらおうという講座だと僕は認識してるんですね。けど新聞にはいろんな講座をやってるよ、っていうような紹

介のされ方をするんで、ちょっとそれが残念かなと思いますね。」

流しそうめん

日時：平成 17 年 8 月 20 日 15:00～17:00

場所：旧今立町南坂下古民家 CASAL および堀田幸雄邸

参加者数：25 名

概要：旧今立町南坂下地区に場所を移動し築 90 年近くの古民家の軒先を借りて、流しそうめんを行った。かえしを十分きかせた麺つゆと畑から取れたての茗荷を薬味に使い、長さ 4 メートルの特製そうめん台に流れるそうめん、そば、うどんに舌鼓をうった。食後は古民家の室内を見学し、囲炉裏暮らしの話に耳を傾けた。



写真 79：流しそうめんを楽しむ参加者と近所のおばあちゃん



写真 80：囲炉裏のある暮らしを体験

4) 音と遊ぶ - 遊作ライブ

遊作ライブ 夕食および懇親会

日時：平成 16 年（2004 年）12 月 11 日 18:30～22:00

場所：ハツ杉森林学習センター

参加者：受講者ならびにスタッフ、ならびに講師二名（岩野、直井両氏）

参加者数：30 名

出演者：ジミ AWATABE（辻 守氏、遊作塾メンバー TM プロジェクト一級建築士事務所代表）& 白崎宏幸氏

概要：旧今立町在住のミュージシャン二人によるセッションライブ参加者の宿泊先であるハツ杉森林学習センターにある八角堂にて、夕食および懇親会の時間を持った。岩野氏も参加。各自自己紹介やモノづくりへの想いなども語られ、終始和やかな時間となった。



写真 81：参加者と共に囲炉裏を囲んで歓談 写真 82：遊作ライブでデュエットする岩野氏 右はジミ氏

日時：平成 17 年（2005 年）1 月 22 日 18:30～22:00

場所：ハツ杉森林学習センター

参加者：受講者ならびにスタッフ、ならびに講師

参加者数：30 名

出演者：ライブ：マーティー・ブレイシー（もんた&ブラザーズ）ジミ AWATABE（辻守氏、遊作塾メンバー TM プロジェクト一級建築士事務所代表）他県内ミュージシャン 3 名

概要：参加者の宿泊先であるハツ杉森林学習センターにある八角堂にて、夕食および懇親会の時間を持った。直井棟梁や弟子らも参加。各自自己紹介やモノづくりへの想いなども語られ、終始和やかな時間となった。また恒例のライブコンサートには今回のモニター参加者でもあるマーティー・ブレイシー氏を中心に、県内ミュージシャンが演奏を披露。大いに盛り上がった。



写真 83：マーティー・ブレイシー他セッション 写真 84：杉村もアフリカの歌“マライカ”を披露

日時：平成 17 年（2005 年）2 月 12 日 20:00～22:00

場所：ハツ杉森林学習センター

参加者：受講者ならびにスタッフ、ならびに講師

参加者数：20 名

出演者：ジミ AWATABE（辻守氏、遊作塾メンバー TM プロジェクト一級建築士事務所代表）中心のライブイベント

ゲスト：ウベ・ワルタ氏（ドイツ出身尺八奏者・大道芸人、京都府美山町在住、世界各地で公演を行う他、CD リリース、NHK 出演など幅広く活躍）他に保志明夫

氏、マイク・エリス氏、白崎宏幸氏が参加

概要：ジミ AWATABE 氏の呼びかけにより、遊作塾のコンセプトに賛同したミュージシャンらが全国より駆けつけ行うライブは、遊作塾の恒例イベントとなりつつある。今回も参加者の宿泊先であるハツ杉森林学習センターにある八角堂にて夕食および懇親会の後にライブが行われた。ライブ前は参加者も含めた各自自己紹介やモノづくりへの想いなども語られ、終始和やかな時間となり、大いに盛り上がった。

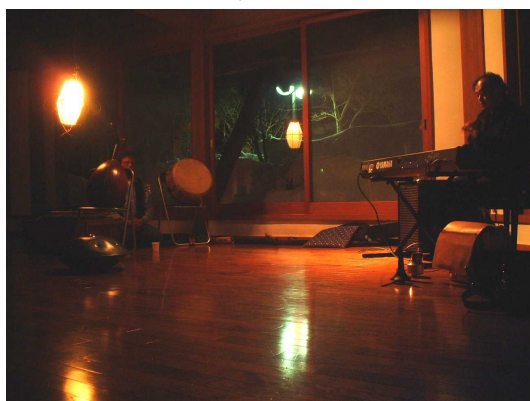


写真 85：ウベ・ワルタ氏、ジミ AWATABE



写真 86：遊作ライブの様子

遊作酒蔵ライブ

日時：平成 17 年（2005 年）3 月 20 日 19:30～22:00

場所：旧今立町大滝 寿喜娘酒蔵

参加者：受講者ならびにスタッフ、ならびに講師

参加者数：約 100 名

出演者：

ヴォーカル：アニバル クリストファー（ブエノスアイレス出身）...カチョ バルデスという芸名で 1970 年大阪万博に初来日

ドラムス：マーティー・ブレイシー（シカゴ出身）...元もんた&ブラザーズのドラムス。

ベース：小澤宣明...ジミ AWATABE BAND の BASS

パーカッション：柴田英邦...米国でプロ活動後一昨年 NY から帰る

パーカッション：保志明夫...アフリカの民族楽器を自在に奏でる。

トランペット：白崎宏幸...当 PJ メンバーで映画音楽も手がける。

コルネット：マイク エリス（イギリス出身）...福井市内の英語教師

トランペット：岩堀敏和...名古屋より賛助出演

キーボード：ジミ AWATABE（辻 守氏、遊作塾メンバー TM プロジェクト一級建築士事務所代表）で多彩な顔ぶれとセッションを行っている



写真 87：多彩な顔ぶれとセッションが繰り広る酒蔵遊作ライブ

遊作塾の懇親会で、ほぼ毎回ライブを開いている当スタッフでもあるミュージシャンの呼びかけにより、遊作塾のコンセプトに賛同するミュージシャンが県内外から集まってライブコンサートを開いた。16年度の集大成とも言えるべく賑わいとなり、大成功となった。ライブ途中には、遊作塾の講師でもある岩野市兵衛氏が飛び入りで参加。今立町に残る民謡・紙漉きの歌を披露してくれ、盛り上がりも最高潮に達した。今回の参加者だけでなく、これまでの参加者や遊作塾に興味を抱いている人や音楽好きの人々など多数の来場となり、遊作塾を広める絶好の機会となった。

ビデオを見るとみんな無理に楽しそうにしたりしている人はいなくて、心の底から楽しんでいる様子が伝わってきた。それに、演奏している側も受けている側も一つになっていて、お互いの意識がぶつかりあっているような印象も受けた。

このライブについて増田は次のように述べている。

「・・・発見って意味ではですね、僕は遊作ライブっていうのに意外な発見を見たというか。もちろん、ライブをやる人、で、それを聞く人っていうのがいるわけですね、音楽で言うと。ところがですね、当たり前のことなんですけども、やる側も誠心誠意を込めて音楽をやる。で、受ける側もそれを応援しようっていう、そういう掛け合いっていうかね、そういう意識のぶつかり合いみたいなものが、ライブとはいえどもですね、そこがまさに一つの生命体みたいな感じで、振動するっていうか振幅してくっていう、そういう実感を物凄く受けたっていうのが物凄い印象的に残ってますね。」

後にビデオを見た学生は、その感想を次のように述べている。

「このようなライブは全員が楽しんでいなければ意味がないのだなと感じた。このように遊作塾での活動は見ているだけでも楽しそうで、是非参加してみたいと思えるものがいっぱいあった。説明を受けただけではわからない魅力もビデオを見て感じる事ができた。」

そしてさらに次のように続ける。

「ビデオを見て遊作塾とは何かということを考えてみると、遊作塾とは異質で普段交わることのない人と人とのコラボであると感じた。匠と一般の人とは普段かかわることがない。しかし遊作塾のコンセプトの一つでもある『匠と遊ぶ、匠も遊ぶ』という言葉からもよくわかるように、同じ目線・同じ土俵に立って交わっている。匠がこの遊作塾に協力しようと思ってくれたのも、普段匠だけで仕事をしているときにはできない、若い人や素人の人と一緒にやることでこれまでになかった新たな発見をできたり、影響を与え合ったりできるからなのだろうと思う。ランプシェード作りのときにも述べたように匠はどのようなものを作れとは強要していなかったし、素人の発想で作るものを見るのも楽しかったのかなと思う。」

こうした<イベント>の中で作られる人のつながりという贈り物は遊作の世界の華である。遊作塾の活動の中ではこうしたライブは、和紙作りの後でもしばしば行われ、「遊作」の意味を体感させていった。



写真 88 : アフリカン遊作ライブの様



写真 89 : 最後はよさこい須賀連と一緒に

5. <遊作という場> 遊作自由大学

すでに見てきたように、遊作はさしあたり具体的にみんなで楽しみながらモノづくりを行う場である。しかしそこに参加する一人一人の人にとっては、それを通して自分の生き方や暮らし方を問い直すひろい意味での自己教育の場である。遊作塾では、2005年に古民家を購入して、その改修過程を一般の人にも参加も交えたかたちの講座を行ってきているが、その講座の中のワークショップの中で、その古民家の機能として、定年や、人生の転職を抱える人が、中長期間滞在して自分の人生を見つめるような場とするというような意見が出た。

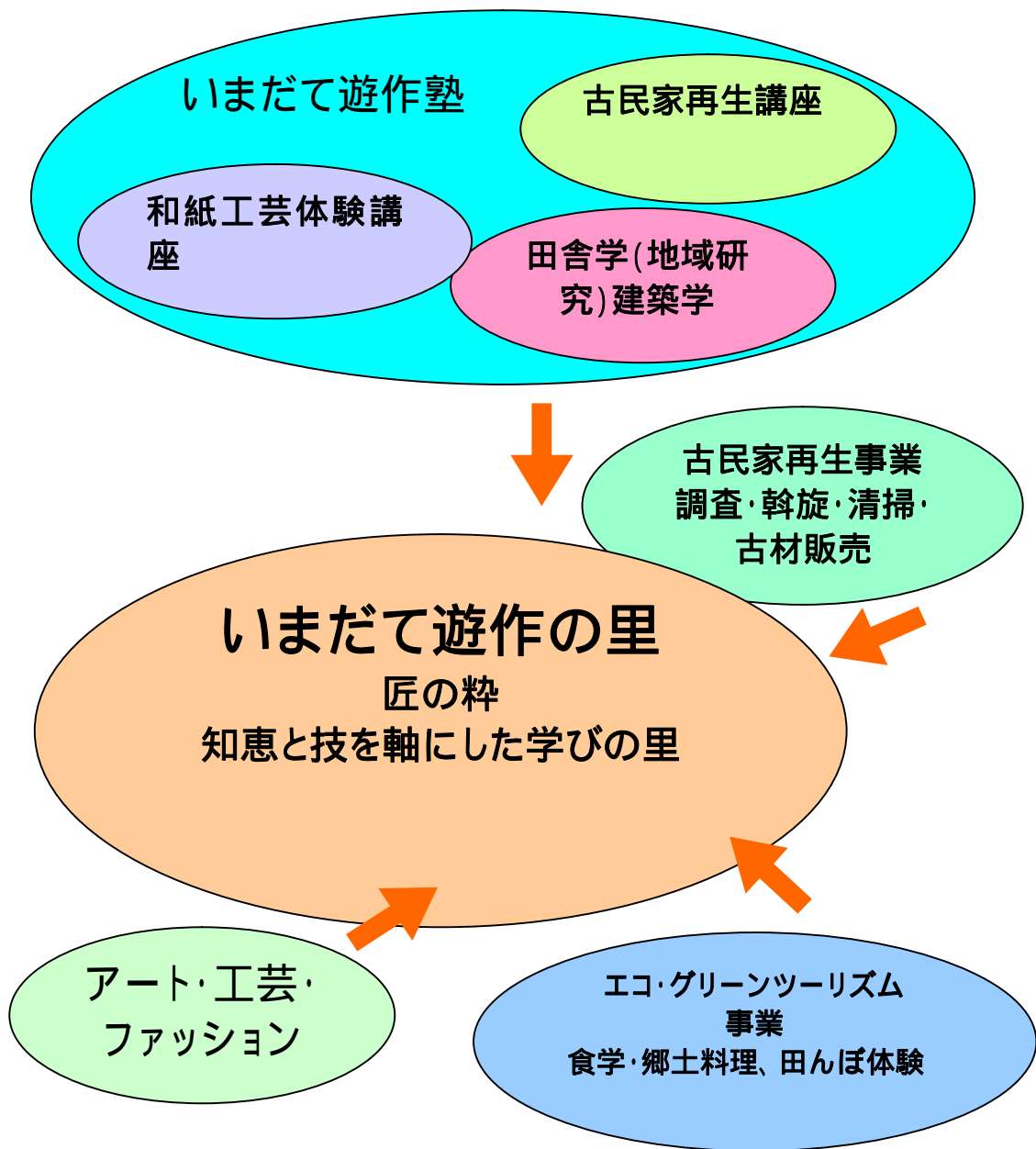
また遊作塾は将来に向かってどこに進むのか、そんな問いを語る議論の場で、実行委員会の中に遊作自由大学という構想が生まれたことがある。これは特に、このプロジェクトを財政的に支援している県の側のイメージと実行委員のイメージが大きくズレた時だった。プロジェクトはそもそもロングステイを掲げており、グリーンツーリズムの中でもより深く地域にコミットするリピーターの存在を重視しており、将来的には、そのような過程の中で、今立に古民家を借り、購入したりして住むような人がでてくることを期待していた。

だから当初より、大量の入り込み客を期待するのではなく、少数者ではあるが、質の高い関心層にターゲットを当てていたのだが、県の側はグリーンツーリズムといってもあくまでも<観光>というところに焦点を当て、参加人数の量的側面からプロジェクト評価をするので、実行委員とのあいだに対立点が生まれるという事柄があったのである。その場面において委員会の中で、プロジェクトの方向をめぐって議論が重ねられ、その中で出てきたものは、こうしたグリーンツーリズム的活動をすることによって何を実現するかということであった。その中で出てきたのがひろい意味でも<教育の場>としての遊作ということであった。

今立 古民家・匠・ロングステイプロジェクトの実行委員会が母体となって作られた、遊作塾の活動が、まず目を向けたものは紙すきや囲炉裏、建具、古民家再生など人が道具を使いながら手作りで作り出していく世界である。この手作りの世界を追い広げてそれを生活世界の学として深めてみるという試みとして“教育の場”がそこにあるのだ。

都会人が田舎の中に見出そうとする手作りの世界とは現代社会を取り囲む近代的技術の世界と対比してどのような特質と意味があるのだろうか。大学で学ぶ西洋の近代科学やそれに支えられた技術知と違って手作りの世界は肉体活動である。身体に刻まれたその知は、むしろ無意識の世界の中の知のあり方だということもできるだろう。都市から田舎暮らしを志向する人の中には、この「手作り」ということへの思いが内包されており、遊作塾に参画した人の多くにもこういうことがらへの強い関心が共有されている。このような背景には21世紀を生きる現代生活がすでに手作りの世界を失い、ほとんど全て機械による商品の世界に囲まれた生活を強いられているということがあろう。

図5. 今立 古民家・匠・ロングステイプロジェクト遊作塾の活動概念図



グリーンツーリズムは確かに一つの観光事業ということもできる。とくに今日の農村の活性化論との関係で考えられていることは、どちらかというと経営学的な視点が多い。しかしグリーンツーリズムの中で他のツーリズムとの比較として強調されるものは、リピーターとしての存在であり、それはその地域の住民との強いつながりを持つことが強調される。リピーターがそこで行っていることは、いわば田舎暮らしの生活の学びである。

このような生活の学の体系的な提示が通常の学とは異なり、そこに住む人の中で求められる。これはまさに次の世代を支える地元学であり、田舎の世界の意味を都会に対して主体的に問い返すという意味で21世紀の田舎学の祖型となるものである。

その場ではまだ明確なたちをもたない構想ではあったが、とてもおもしろい広がりのある議論が展開した。そこで発想されたものは、今立にふさわしい地元学の展開の場としての学の構想である。たとえば越前和紙学、講師には岩野市兵衛さん、岩野平三郎さんや梅田太士さんがノミネートされている。それから古民家学、食学、漆学、環境・自然エネルギー学など通常の大学の中には入りにくい、生活の学の体系化と高度化が意図されて

いる。そしてそのわざを支えるエッセンスとして都会のファーストに対して田舎のスローが位置づけられる。地元学が世界性を持ち、地域の中から世界に何かを発信していくためには、こうした気宇壮大な田舎学の深化発展が必要なのである。と同時に越前和紙学などと並んで有機農業学、自然エネルギー学などが並立されているところが、環境問題を基盤に組織化されたこのメンバーの構想のユニークなところであろう。



写真 90：故梅田太士氏による和綴じ本の講座

第4章 都市-農村交流の組織としくみづくり

-いまだて遊作塾と安心院グリーンツーリズム研究会の事例から

石山俊 内山秀樹

1. 今立と安心院の接点

1) 草の根型地域の興隆と組織

地域おこしは、高度経済成長時代以来、過疎化に悩む農村の大きな課題であった。近年、日本の農村地域ではグリーンツーリズム旋風が巻き起こっている。過疎や農業離れなどの諸問題に長年直面してきた農村にとって、グリーンツーリズムは地域おこしの決定打として期待される。

しかし、必ずしも大多数の農村住民がグリーンツーリズムに関心を抱いているわけではない。グリーンツーリズム先進地といわれる地域においても、実践に直接携わる人々の数は地域人口の一握りであろう。しかし、それでもグリーンツーリズムが持つ地域創造、新しい都市-農村交流の可能性は、多くの農村地域に活性化という希望をもたらしている。

日本におけるグリーンツーリズムの歴史は、ここ数十年と浅い。それ以前から、現代のグリーンツーリズム的な試みは少なからずなされてきたが、グリーンツーリズムという用語が定着したのは1990年代後半になってからである。西欧から発したグリーンツーリズム理念を啓発することを目的として、農林水産省によって「グリーンツーリズムモデル整備構想策定地区」が指定されたのが1997年のことであった。現在、グリーンツーリズムの先進地事例の多くは、この事業のモデル地区として指定された地域である(青木2004)。

この事業を基盤にして、グリーンツーリズムの実践が盛んになった時期は、1990年末である。その結果多くの地域で、試行錯誤が繰り返され、日本の実情にあった日本型グリーンツーリズムが形成されてきた。日本型グリーンツーリズムの典型的なタイプは、「農村民泊型」、「ワーキングホリデー型」、「地域ツーリズム大学型」の3つである(前掲書)。

本研究に事例を供する、今立遊作塾は、厳密に言えば、グリーンツーリズムとは異なる側面も持ち合わせる。今立遊作塾の中心的なテーマは、古民家再生である。しかし、ハードとしての古民家をただ再生するわけではない。捨てられた古民家を単にハード事業として修復するのではなく、地域文化の重要な要素のひとつである、古民家を再生する過程そのものに重点を置いている。再生の過程において、伝統建築だけではなく、今立地区に残る越前和紙をはじめとした伝統の技に都市民が触れる機会を提供することも今立遊作塾の目的である。計画立案は地元有志が中心になされ、古民家再生は、地域文化の再評価・創造、人々が集う場といった複合的な意味合いをもつ。そして、農村の古民家だけではなく、町の商家の再生をも視野に入れている。こうした点でこの事業は、農村を強調する、グリーンツーリズムの枠には収まりきらない。

今立遊作塾の事業は、地域の有志によって支えられている。その事業は、実行委員会によって企画、立案され、実行される。

公的機関が主体となる地域おこし事業は、予めよく組織されているのに対し、今立遊作塾のような地域住民が主体となってなされる、いわゆる草の根型地域おこしでは、組織面が脆弱な場合がある。草の根型の活動の場合、確固たる組織力が必要か否かは議論の余地が大いにある。しかし本章では、そうした議論を視野に入れながら、10年来精力的に活動を継続し、グリーンツーリズム界において確固たる実績を積み上げてきた安心院町グリーンツーリズム研究会と今立遊作塾の2つの草の根型地域おこしを組織としくみづくりから考察し、地域住民主体の地域おこしの可能性について考えてみたい。

2) 今立遊作塾と安心院町グリーンツーリズム研究会

遊作塾の設立経緯と活動については、すでに2章に詳しく記した。遊作塾が安心院町グ

リーンツーリズム研究会の存在を知ったのは、2005年11月におこなわれた、「遊作の里全国サミット」の機会であった。このサミットの目的は2つあった。1つめは、全国の地域おこし関係者とのネットワークを深めること。2つめは、それまで1年間にわたり継続してきた今立遊作塾の活動の意味づけを深めることである。

サミットのパネラーとして参加してもらったのが、大分県グリーンツーリズム研究会事務局、望月陽子氏との最初の出会いであった。望月氏は、県レベルのグリーンツーリズム研究会事務局という立場で参加したが、同時に安心院町グリーンツーリズム研究会のメンバーでもあり、農村民泊(以下「農泊」)の実践者でもある¹。

パネラー選びのポイントのひとつは、行政主導ではなく、地域住民が主体となっているグリーンツーリズムの実践グループの事例を紹介してくれる人を選定することであった。パネルディスカッションでの氏の話は、遊作塾メンバーに大きなインパクトを与えた。望月氏の話の中で、遊作塾メンバーにとって特に印象深かったポイントをまとめると以下の3点となる。

- 無理をしすぎないこと
- 来訪者をお客さん扱いしないこと
- 地道に活動を継続させていくこと

たとえば、個人的な都合であっても受け入れ者の都合が悪い場合、宿泊を断ることができるシステム、宿泊者を客ではなく親戚として位置づける親戚券を発行するシステムも、上記の望月氏の強調点の一端であろう²。

また望月氏は、安心院町がここまで来るのに10年間の歳月を要した点も何度も強調した。この3点は望月氏固有の考えではなく、安心院町グリーンツーリズム研究会の全体方針でもある。

「遊作の里全国サミット開催」が開催された4ヶ月後、安心院を訪れた私が強く感じたことは、安心院町グリーンツーリズム研究会の活動が非常に組織化されていることであった。地域住民主体の地域おこしの場合、その活動は、発案者の個人的なネットワーク、性質に大きく依存したものになりがちである。しかし安心院町グリーンツーリズム研究会の場合、一定の方針が会員の中で共有され、それぞれの実践者は全体方針の中で、機能的に個々課題に取り組んでいる印象をうけた。

以下では、2006年3月におこなった調査結果から、安心院のグリーンツーリズムに関わる諸組織の活動と経緯を概観しながら、安心院でグリーンツーリズムがどのように取り組まれているかを考えてみたい。

2. 安心院におけるグリーンツーリズムの有機的組織

1) 西の横綱

日本のグリーンツーリズムには東西横綱と目される取組がある。東は岩手県遠野、西は大分県安心院である。遠野のグリーンツーリズムは、

他方安心院のグリーンツーリズムは、農村民泊をその中心に据えている。安心院方式と呼ばれる農村民泊は以下の経緯と特徴をもつ。通常有償で客を泊める場合、旅館業法による営業許可が必要であった。同法によれば、一定面積以上の宿泊施設が必要で、トイレの増設まで余儀なくされるのだ。許可を受けるための条件を満たすには、多額の投資が必要となる。さらに食品衛生法もからんでくる。泊まりにきた人に自由に食事をだせなくなるのだ。

1 安心院町グリーンツーリズム研究会では、農村民泊ではなく、農村民泊を推進する。その理由は、農村民泊であると宿泊受け入れは農家に限られ、農家以外の宿泊受け入れが制限されるからである。

2 望月氏によれば、親戚券の発行は、法的規制に対処する意味合いが強かったそうだ。また、親戚になることでより深い人間関係が、訪問者と受け入れ者の間に築かれることも狙いであったという。

数々の規制を乗り越えるために、安心院グリーンツーリズム研究会がとった方法は、農村民泊を会員制にすることであった。宿泊者は宿泊代ではなく謝礼を払う。食事の準備は宿泊者が一緒にする体験という位置づけだ。こうして安心院の農村民泊は実績を積み 2001 年度には 2000 人も宿泊者を受け入れるに至った。安心院方式の背景にあったのは「農村民泊は都市 - 農村交流事業で、営業目的の宿泊ではない」という安心院グリーンツーリズム研究会による農村民泊の位置づけであった。

その実績に対して大分県は、旅館業法で県が判断できる簡易宿所の適用を安心院の農村民泊に対してしたのである。食品衛生法も県条例で客専用の調理場を設けなくてもよいように改定した。これが安心院方式あるいは大分方式と呼ばれるものである。そしてこの前例が認められ、2003 年に「農林漁業体験民宿を営む施設は簡易宿所に認める」という旅館業法施行規制の改正にいたったのである。こうして安心院方式はグリーンツーリズムの先進地として名を馳せ、西の横綱とまで言われるようになった。

2) 安心院町グリーンツーリズム研究会

- 生い立ちと活動

安心院町グリーンツーリズム研究会の設立は、1996年であった³。しかし活動の起源はさらにそれ以前にまでさかのぼる。1992年に農家を中心とした8名でアグリツーリズム研究会を組織し、のち「安心院町グリーンツーリズム研究会」と名称変更した。アグリツーリズムという概念では、農業関係の活動に制約されがちになるからである。名称変更・再発足とともに、研究会の活動分野は農業以外にも広がることになる。研究会が示すグリーンツーリズムの理念では、新しい農村経営形態、農村と都市の共生、町内における世代、業種の垣根を越えた全体的な発展、婦人の地位・意識の向上といった実質的な目標と、夢や誇りといったイメージ的な目標が掲げられている(表1)。

表1. 安心院町におけるグリーンツーリズムの理念

グリーンツーリズムとは、地域に生きる一人一人が農村での日頃の生活を楽しく送る中で、外からのお客を温かく迎え入れることのできる(豊かに輝く農村)を目指した、新しい農村経営を求める運動である。
グリーンツーリズムとは、都市(消費者)と農村(生産者)のこびることのない心の通った対等な交流を通じ、「知縁(情報で結ばれた親類)関係」となり、共生の道を探すものである。
グリーンツーリズムとは、村における連帯意識を生活を通じ景観から産業まで一体的とりくみを職業的かつ年代的垣根を越えた連携を図る中に行うことにより、地域経済の発展と町全体の活性化を目指すものである。
グリーンツーリズムとは、閉ざされた農村社会の過去のイメージを払拭し、農村婦人の地位と意識の向上ならびに自立を図り、男女共同にして成り立つ「ムラづくり」と魅力的家族関係を作る運動である。
グリーンツーリズムの根付いた農村には、恵みに豊かな自然環境が大切に守られていて、その中で生きる人々の自身に満ちた笑顔がある。それを求め、心のせんたくのために足繁く訪れる旅人により町の品位は高まり、経済も潤すことができるものである。
グリーンツーリズムの普及により町が息づけば、次世代を担う子供たちに明るい夢を与え、誇りを持つことができる。

(出典：安心院町グリーンツーリズム協議会・安心院町 2005)

³ 安心院町は、2004年4月に宇佐市、院内町と合併し、「新」宇佐市となった。合併後も安心院町グリーンツーリズム研究会は、名称をそのままに活動を継続している。

こうした目標を達成するための第一歩として、研究会設立半年後の1996年9月には実験的に農泊をはじめている(表2)。

表2. 安心院グリーンツーリズム研究会年表

平成4年	(1992年)	5月	「アグリツーリズム研究会」発足
平成8年	(1996年)	3月	「安心院町グリーンツーリズム研究会」に改称、再発足
		9月	実験的農村民泊挙行(8戸)
		11月	無尽講方式による第1回ヨーロッパ研修
平成9年	(1997年)	3月	安心院町議会が「グリーンツーリズム推進宣言」議決
		10月	安心院町グリーンツーリズム推進協議会発足
平成11年	(1999年)	11月	第1回全国藁こずみ大会挙行
平成12年	(2000年)	4月	国の地方分権一括法にて旅館業法、食品衛生法が県の管轄になる。
		6月	大分県グリーンツーリズム推進協議会設立
		10月	大分商業高校が本格的体験学習の先駆となる。10月23日～11月1日で4回に分けて実施。
平成13年	(2001年)	4月	旧安心院町が商工歓交課内にグリーンツーリズム推進係設置
平成14年	(2002年)	1月	毎日新聞夕刊トップ「JR九州農泊商品化」記事掲載
		3月	大分県生活環境部より旅館業法、食品衛生法適用規制が緩和「3.28グリーンツーリズム通知」が出される。
		4月	大分県グリーンツーリズム研究会発足(旧17市町村)
平成15年	(2003年)	4月	厚生労働省令による簡易宿所延べ床面積33㎡以上廃止
		6月	大分県グリーンツーリズム研究会が大分県議会にパカンス法制定の請願を提出
		8月	大分県議会が「パカンス法制定を求める意見書」を国に提出
		9月	安心院町議会がパカンス法を議決
		10月	国土交通省農林水産省認定観光カリスマ100選に、会を代表し会長選ばれる
平成16年	(2004年)	3月	大分県グリーンツーリズム研究会 NPO 法人認可
		4月	安心院町が宇佐市、院内町と合併し、新宇佐市が誕生
		10月	安心院町グリーンツーリズム研究会に専属の事務局員1名設置
		11月	安心院町グリーンツーリズム研究会 NPO 法人認可
平成17年	(2005年)	4月	大分・安心院グリーンツーリズム実践大学開校
		5月	(財)日本修学旅行協会と安心院グリーンツーリズム研究会 窓口業務委託提携
		7月	大分県グリーンツーリズム研究会代表者会議にて九州知事会にパカンス法議決の請願議決
		9月	新宇佐市議会がパカンス法を議決
平成18年	(2006年)	2月	(財)日本修学旅行協会と大分県グリーンツーリズム研究会 窓口業務委託提携

		3月	新宇佐市議会にてグリーンツーリズム宣言議決する
--	--	----	-------------------------

(出典：安心院町グリーンツーリズム協議会・安心院町 2005)

グリーンツーリズム研究会発足時の会員は30名程度であったが、現在会員数は400名以上にまで増加した。会員のうち半数以上は町外者であるという。NPO法人格は2004年に取得した。

アグリツーリズム研究会、グリーンツーリズム研究会が設立された時期は、前述した農林水産省・グリーンツーリズムモデル整備構想策定地区よりも以前のことである。次代のニーズを先取りした、民のイニシアチブによって安心院のグリーンツーリズム事業が幕を開けたのである。

- 活動内容と組織

農泊が、クローズアップされがちな研究会であるが、実はそれ以外にも多岐にわたって活動を展開している。それぞれの活動は、研究会の組織の中に位置づけられ6つの専門部の活動として運営されている(図1)。

図1 安心院グリーンツーリズム研究会の組織運営図



専門部活動の約束事
2カ月に1度の定例会は総会に近い意見発表の場であり、承認宣伝・情報発信の場であり、一流の講師の講演を計画していく。
自主・独立している各専門部内で決めた事は、原則として最大限尊重し部長会議で承認。そして、定例会等で発表し、全員で応援していく。
後継者育成の為に専門部の活動はオープンとする。
各専門部は部長、副部長、事務局等を設置し、各部長は研究会副会長とする。

(出典：安心院グリーンツーリズム研究会ホームページ)

専門部の構成は、情報発信をうけもつ広報部、祭りイベントや町内ガイド研修などを企画する企画開発部、農業体験のアグリ部、町レベルの環境運動を推進する環境美化部、農泊を受け入れ、伝承料理の研究もする農泊部、ネットワークの拡充を担う応援団部から成る。

2002年には県レベルで大分県グリーンツーリズム研究会が発足し、安心院町グリーンツーリズム研究会は、17ある県グリーンツーリズム研究会構成団体のひとつである。大分県グリーンツーリズム研究会設立には、安心院町グリーンツーリズム研究会が大きな役割を果たしている。安心院の積極的な取り組みと成果が、県内他地域のグリーンツーリズム熱を促し、県レベルのグリーンツーリズム・ネットワークが拡充されてきたといえる。

3) グリーンツーリズム研究会への支援状況 - 商工観光課グリーンツーリズム推進係

2004年にNPO法人格を取得した安心院町グリーンツーリズム研究会組織は、宮田静一会長を中心に有志によって運営されている。しかし、現在の安心院の「横綱の地位」を確立できたのは、研究会に対する外部からの支援によるところも大きい。

研究会内では応援団部がその支援役を担っているが、研究会の外からの支援もある。その中でもっとも重要なものは、安心院町商工観光課であろう。

安心院町グリーンツーリズム研究会が設立された翌年、1997年に安心院町議会は、「グリーンツーリズム取り組み宣言」を採択した(表3)。

表3. 安心院町によるグリーンツーリズム取り組み宣言

グリーンツーリズム取り組み宣言
<p>安心院町の特性を生かした「居住空間」「余暇空間」を形成し、農林業をはじめとした産業の振興と地域の活性化を図る必要があります。「安心院の里」の特徴ある「グリーンツーリズム」を町の重要な施策として位置づけ、長期的に取り組むこと宣言します。</p> <p>町民の合意と主体的な取り組みを基本に地域が一体となって「グリーンツーリズム」を推進するため、次の要綱を定めます。</p> <p>一、地域経営の視点に立った取り組みの推進 地域の産業・文化を守り育みながら、都市との交流と共存による新しい連帯の下で、地域経営の視点に立った農村の自立と活性化に努めます。</p> <p>一、安心院らしき景観づくりの推進 鏝絵や清流やぶどうなどの地域の資源を活用しながら、安心院らしき景観づくりに努めます。また、自然との共生や環境の保全に配慮した「やすらぎ」と「誇り」のある農村風景で新しい旅文化の創出に努めます。</p> <p>一、都市との交流基盤整備の推進 滞在施設や関連施設の整備を促進し、女性の積極的な関与や情報発信等にも配慮した都市との交流基盤の整備に努めます。</p> <p>平成九年三月二十一日 大分県 宇佐郡 安心院町</p>

宣言では、町がグリーンツーリズムを重要な施策として位置づけ、長期的に取り組むことがうたわれている。この宣言によって民と官、両面からのグリーンツーリズム推進基盤が整った。

それに先立つ1996年、安心院町は「グリーンツーリズムモデル整備構想」を策定し、グリーンツーリズム事業に対する側面支援の準備を進めていた。そうした中、企画調整課でグリーンツーリズムを担当したのが河野氏であった。グリーンツーリズムに対する行政によるサポート体制はすでに整っていたが、河野氏は形だけのサポートには満足せず、行政マンとして積極的にグリーンツーリズムに取り組んでいった。しかし河野氏の姿勢はあくまでも住民主導のグリーンツーリズムに対する支援であった。そうした取組と実績が次第に内外からの評価をうけるようになる。

2001年、商工観光課の中にグリーンツーリズム推進係りを設けられることになった。河野氏によるとグリーンツーリズムと観光は一線を画すもので、観光の部署にグリーンツーリズム係が入ることに違和感を覚えたという。そこで河野氏が提案したことは、課名を「商工歓交課」とすることであった。この提案は町長に認められ、ここに安心院町商工歓交課グリーンツーリズム推進係が誕生する。「歓交」とした理由は「飲んで交流する」という安心院のグリーンツーリズムの精神を反映させたからであった⁴。

グリーンツーリズム推進係は、安心院のグリーンツーリズム事業の行政からの支援をするとともに、修学旅行などの多人数訪問者の重要な受入窓口ともなっている。

4) 地域に根ざした地域のためのグリーンツーリズム

- グリーンツーリズム事業と「一般」住民

民官一体となって推進される安心院のグリーンツーリズム事業は、日本有数の先進事例となった。その要因は、研究会による積極的なイニシアチブと、行政による強力な支援にある。

といっても、安心院町の大多数の住民がグリーンツーリズム事業にかかわっているわけではない。先にも記したとおり、安心院町グリーンツーリズム研究会の会員は400名程度で、そのうち町内者は半数以下である。会員の比率は人口8000人あまりの町民のおよそ2.5%しかない。さらに農泊受け入れ家庭は、最大60戸ほどで⁵、全国的な注目度の高さの割には関係者が少ない印象を受ける。

しかし、安心院のグリーンツーリズムの理念は、農村の活性化を強調しており、地域のためのグリーンツーリズムを提唱している。文章によって明言された理念によって、安心院のグリーンツーリズムは地域のためであると積極的に表現をしている。こうした事業の社会化と行政への働きかけが、町によるサポートを喚起させた大きな要因でもあろう。

- 実践者間で共有される活動指針

グリーンツーリズム研究会が3年おきに提起する「具体的取組と方針」は(表4、表5)、表1で示した、研究会によるグリーンツーリズムの理念においては明記されていなかった具体的な取り組み目標が提示される。

4 安心院町商工歓交課は、合併後も宇佐市安心院支所内で継続し、グリーンツーリズム支援体制を敷いている。

5 農泊受け入れ家庭は、受入態勢によって「松」「竹」「梅」の3段階に分類される。「松」は来訪者を家庭で積極的に受入る家庭で、次いで「竹」「梅」という順になる。当初は内部的な呼称であったと思われるが、後述する2004-2006年度取り組み・方針に「竹組」という表現が用いられた。

60戸は「松・竹・梅」をすべて数えた場合の数値である。

専門部活動の充実、自主的な運営そして連携を研究会の中心活動とする。これを通じて町内全域に GT に対する理解と連携を深めていく。
無尽講方式の積み立てによるヨーロッパ先進地域研修を実施する。
応援団拡大に努め、情報交換を密にする。
年間を通じて農村体験のできるマップを作成する。
学校 5 日制を考慮した幅広い情報発信や活動に努める。
県内・九州・日本における GT 志願者や実践者との連携を図る。
下流域との交流ネットワークづくりに努める。
教育・環境・福祉との連携を密にする。
幅広いネットワークとの連携の元、規制緩和そしてグリーンツーリズム条例もしくは農泊条例の制定に向けて努力する。
グリーンツーリズムは感動産業であり、町内全体に経済的にも精神的にも、潤いをもたらす運動となるように努める。

表 4. グリーンツーリズム研究会の 2001-2004 年度取組・方針

(出典:安心院グリーンツーリズム研究会ホームページ)

表5. グリーンツーリズム研究会の2004-2006年度取組・方針
 安心院町GT研究会の理念に基づきステップアップするための具体的取組と方針
 (2004～2006年度)

NPO 法人取得後安心院町グリーンツーリズム研究会専属の事務局員をおき年中無休のグリーンステーションを設置し、あらゆる情報の発信や収集をおこない、グリーンツーリズムの産業としての確立に努める。
専門部活動の充実とそれを基にしたグリーンツーリズム実践大学校の設立を目標にする。
現在いる親愛なる国内応援団員数 240 名を当面 3～4年以内に 500 名位までを目標として増員をしていこう。(平成 15 年度末現在の総会員数 430 名)
修学旅行の対応を安定的にしてゆく為農泊部応援団(竹組)の仲間づくりをしよう、簡易宿所の認可の手続きをしてもらっていこう。尚、周りの市町村との連携も計っていこう。
九州グリーンツーリズムシンポジウムの開催と近年中に九州グリーンツーリズム研究会の設立を想定していこう。いつの日か「グリーンツーリズムは九州へ」と九州はひとつになっていこう。
新宇佐市にとり海と山は一体になった。交流や親睦を深めお互いが喜び合える仲間になっていこう。
県下 18 市町村で結成されている大分グリーンツーリズム研究会に積極的に参加して親睦とグリーンツーリズムの質の向上を目指して行こう。そして県下五つの目標をもとに心をひとつにした平成 14 年 4 月 27 日の想いを忘れずにいよう。
バカンス法(長期休暇法)が出てこそ日本では本格的にグリーンツーリズムのスタートになる。事あるたびに声を上げていこう。大分県下のグリーンツーリズムの中間、そして安心院グリーンツーリズム研究会のメンバーは特にこの任を背負っている事を忘れないでいて欲しい。

(出典：安心院町グリーンツーリズム協議会・安心院町 2005)

最初に出された 2001 年度-2003 年度の取組・方針では、各専門部の活動の拡充とともに、ネットワークづくりに重点がおかれている。こうした方針の成果として、2002 年には大分県グリーンツーリズム研究会が設立された。県レベルのグリーンツーリズム研究会発足には、安心院町グリーンツーリズム研究会が大きな役割を担ったのも想像に難くない。

続いて示された 2004 年度-2006 年度の取組・方針には、グリーンツーリズムの産業としての確立、グリーンツーリズム実践大学校の設立、応援団の増員などの、それまでの安心院での活動の拡充とともに、九州グリーンツーリズム研究会発足といったネットワークの具体的な広域化も視野に入れられている。

研究会では、設立以来定期的に勉強会を開催し続けてきた。また農泊受入希望者に対しては、一定の研修を義務付けている。こうした場において、研究会の方針が確認され、実践者のグリーンツーリズムに対する意識を形成していく。そしてこれらの具体的な取組・方針は、実践者たちの間で共有されることになる。

実際、安心院のグリーンツーリズム実践者たちに話を聞くと、個人的な熱意とともにグリーンツーリズム研究会の方針がよく引き合いに出される。それぞれの実践者は、個々の実践が安心院のグリーンツーリズム全体の中でどのような意味合いを持つのかということを確認に意識しながら、それぞれの課題に取り組んでいるのである。

3. 安心院農村民泊視察調査

安心院は大分県の中央部から北西部にかけて位置し、安心院盆地を中心として東西 12 km, 南北 18.5km に広がっている。平成 17 年 3 月 31 日の合併により宇佐市になり宇佐市安心院地域となった。地域の人口は 2002 年の国勢調査によると 8,034 人(市全体では 62,349 人) 米とブドウを中心に畜産(豊後牛)、野菜、花き等の複合経営に取り組む典型的な中山間農業地域で、約 20 年前よりワイン祭りに取り組んでいる。

このような環境の中で取り組んでいる農泊の受け入れは最大 60 戸、そのうち常時受け入れ可能なのが 15 戸とのこと。我々は 2007 年 3 月 28 日から 30 日に滞在し、このうちの 2 戸に宿泊しながら、ホストへのヒヤリングや GT 関係者へのヒヤリングをおこなった。以下、今回の視察で民泊させていただいた二つの家について報告する。

1) 『百年の家 ときえだ』

安心院地域の北、緩やかな山の谷あい位置する佐田地区且尾集落。神戸港からフェリーで別府港経由でたどり着いたわれわれを県道端まで迎えに来てくれたのが時枝仁子さん。高台の上には百年の歳月を超えた時枝家が我々を待ち受けている。

自動車が一台通れるほどの坂の途中の左手に農機具小屋があり、昔の古い農具が新しい農機具と一緒に架けられている。坂をのぼると本宅の玄関に至る。本宅に向かって右手には若夫婦の離れが、左手には農泊者を受け入れる蔵があり、その玄関では電球を組み込んだ和紙のオブジェがわれわれをやさしく迎えてくれた。

こじんまりした蔵の中には農泊受け入れを機に設けた囲炉裏があり、壁際の小さな机の上にはこれまでの時枝家のグリーンツーリズムの足跡ともいべき写真や本、記事の切抜きなどが所狭しと並べられている。また簡単な流し台もあり炊事も可能である。二階への折れ階段の部分は吹き抜けになっており、その先に、天井は低いが 8 畳程度の素敵な和室がしつらえてある。

早速、この家の主であるおじいちゃんをご挨拶に。とても 83 歳とは思えないかくしゃくとしたおじいちゃんが笑顔満面に登場。続いて同様に元気でにこやかなおばあちゃんも登場。囲炉裏端で 1 時間ほど歓談した



図 6 . 安心院地域の位置



写真 91 : 客を暖かく迎えてくれる千歯こきと照明



写真 92 : 土蔵 2 階の客寝室

のち、仁子さんの運転で旧安心院町時代に一億円創生基金で町内各地区につくった温泉に。ここは地元運営で、まさに地域のコミュニティの場となっている様子が窺える。十分温まったところに迎えに来ていただいて、時枝家に戻ると夕食がまっていた。

(1) 家族となべをつつく

時枝家は祖父母、若夫婦、長男、長女（ともに社会人に）の典型的な三世同居。お客には土蔵の囲炉裏で食事を供することもあるのだが、今回の夕食は本宅の炬燵でいただくことに。

本日のメインメニューは地元ではなじみのある鍋で、小麦粉をこねて手で薄く長く伸ばしたものでホウトウに似たなべ料理。保育士をされている娘さんも一緒になべをつついて、アットホームな夕食。自家製ワインも賞味させていただき、満足のいく食事だった。安心院 GT の基本ルールである家族と同様の食事を貫いている。

(2) 農村社会の古い価値観の中で民泊に踏み込んだ若奥さんの作戦

当地も典型的な農村地帯で、「お金をもらって泊めるとは・・・」、「女は一步下がって・・・」という古い価値観が支配していた。研究会に参加し、民泊への思いが募った仁子さんがとった作戦はある意味で GT の真髄に触れる賭けにも似たものであった。

お客を止める前日、おばあちゃんに「黙っていたのは悪かったけど、研究会でもう決まったことなので、今回だけはお願いします」と懇願。そして当日を迎えるが、それでもおばあちゃんの胸はおさまっていない。畑仕事のかえりに切花を抱えて帰ってきたおばあちゃんを待っていたのはお客さんの感動の声「まァ～！きれいなお花、素敵なおばあちゃん！」。さらにお漬物も「おいしい、おいしい」と食べてくれた。このことが祖父母の心を一変させ、以後、「百年の家ときえだ」は祖父母が主役になったとのこと。

他人を泊めることへの抵抗はなかった？

おじいちゃん：親類は泊めるが、他人を御前の前に泊めたことはない、時代が変わったもんだ。客と話すとまァ、同じ人間だなとつくづく思う。交流をする時代になったんだなとね。

耳は遠くなっているが、年のわりにはかくしゃくとしているが・・・

仁子さん：ほんとに元気なんです。実はおじいちゃんは数年前に脳梗塞で倒れて半身麻痺になったのです。それ以後、人（前列左から時枝仁子さん、おばあちゃん、おじいちゃん）前に出なくなったのです。ところが、民泊のお客さんから笑顔をほめられたことがきっかけで、人と接するようになったのです。

おじいちゃんにとってはリハビリに？

仁子さん：そうなんです。そして子供たちにすごくつかれます。それは、おじいちゃんの時間の流れが緩やか（せかさない）なこと、子供のすべてを受け止め、真摯な態度で接することがその理由です。たとえば修学旅行生を受け入れたときのこと、将棋をしていたのですが、決して手を緩めないわけなんですよ。「たまには勝たせてやったら？」という、「それは子供に失礼だ」というんですよ。（笑）

一方のおばあちゃんも今では大分・安心院グリーンツーリズム実践大学で講師を務めるほどで、老いてはますますパワーアップされてるとのこと。



写真 93：時枝家の皆さんと

(3) 時枝家から学ぶこと

時枝家から学ぶことは、農村民泊とうたっているように、農村の家族生活を味わっていたかという姿勢、そしておじいさんの将棋に代表される客への真摯な姿勢、コミュニケーション重視の対応といえよう。また、注目すべき効果としては、交流が人を劇的に変える、場合によってはハリハピリ効果も生じるということが時枝家の取り組みから理解できる。

2)『舟板昔ばなしの家』 中山家

中山家は安心院の中心部の南西、時枝家の反対方向に位置する深見地区舟板集落にある。時枝家が谷の出口の里山環境であるのに対して、ここはどちらかといえば里地である。

この地域は左官業が盛んだったこの地域の風習として、家の建築に携わった左官が2階の壁に残す額縁状の「鏝絵(こてえ)」で知られている。野外での藁の保存を目的とする藁小積み(わらこづみ) 小さなお寺の鐘つき堂、アーチ式石橋、清らかなせせらぎ、つくし、耕地整理していないヒューマンスケールの農地、元馬小屋、菜の花、ヤギ、崩れかけた土蔵・・・すべてが日本の原風景の素材である。

県道から約100m、石積みのアーチ橋を渡った先の山裾に中山家がある。隣家は空き家となっている。つるべも現役の井戸、本宅の左手にある作業小屋の軒先には戦前戦後の農具が所狭しとかけられている。

(1)もてなしの達人

迎えてくれたのが中山ミヤ子さん。「日本の母」ともいえる懐かしい感じのする方である。農泊ではカリスマ的存在。中山家では時枝家と異なり、接客はすべて本家隣の古い建物で対応している。建物の入り口には今でも使えるかまどや石臼などが戦後の生活を思いおこさせてくれる。中に入ると時枝家同様囲炉裏が切っており、食事がしやすいように囲炉裏の天板を普通より広めにしている。中で迎えてくれたのが宇佐市内で教員をしている娘さん。

囲炉裏端に腰を下ろして、まず、われわれを感動させたのがランチマット代わりの和紙に書かれた「ようこそ安心院へ」という歓迎の言葉と椿の生花の橋置き。そこには中山さんの粋と心がこもっていた。

ちょうどかまどで炊きあがったごぼうとトリの炊き込みご飯をおにぎりにして、竹かごに並べる。「こうすると適度に湿気が飛んでおいしくなるのよ」と。そうこうするうちにご主人が現れご挨拶を。対外的な対応はご主人の役割としているとのこと。「体験をしたいなら庭先のしいたけだけでも」というお誘いをうけ、外に出て数個のしいたけをとって囲炉裏の火で炙る。



写真 94：わらこ積みがのどかな里地景観を演出



写真 95：石積みのアーチ橋



写真 96：味のある看板と飾りつけ

二階の二間続きの部屋が客の宿泊用。階段を上った西側には縁側と手すりが設けてある。手すりつき縁側はこのあたりの伝統的な様式のように思われる。そこには籐椅子が置いてあり、腰を下ろすとその眺めにほっと一息。

夕食には時枝家でも登場したが、ブドウの産地だけあって中山家でも自家製ワインが振舞われた。フルーティで非常においしい。手作りこんにやくの田楽、にら、もろみ、豚肉のすき焼き、圧巻は安心院産のドジョウ、酒で酔わせてのから揚げ、いずれも美味で、豚肉以外はすべて地場の食材である。次の日の昼食はぶっかけうどんです。そのうどんも自前で打っており、同行の石山がその手伝いをした。



写真 97：気持ちの良い2階縁側

(2)きっかけはワイン祭り

農泊のきっかけは？

中山さん：この囲炉裏は農泊のために作ったのではないんです。老後の楽しみにつくったんです。初めて農泊を受け入れたのは約10年前。そんなつもりはなかったんです。私の兄は役場において河野さんの上司だったんです。町のイベントの時に兄が農泊を受け入れることになってたんだけど、父の病気で受け入れられなくなって、なんとか受け入れてくれないかと・・・ということで、急ぎょ受け入れることになったわけです。「一回くらいならいいよ」という感じだったんです。こんなところにお客さん来るはずがないとおもいながら引き受けたんです。ところが一週間後、初めて泊まれた方が別の客を連れてこれたのね。「へえ～なんで？」という気持ちだった。

そしてある日、これも『ワインライフ』という雑誌の取材に田崎慎也さんがひょっこり私の家にこられたの。でも田崎慎也さんが来るとは知らされずに、玄関をあけたら田崎さんが立っているわけです。それでも名前が思いだせず「あなたはワインの...ですね、ワインの...ですね」というしかなかったの(笑)「どうしてこんな何も無いところに？」とたずねたところ、田崎氏いわく「何がなにもないことか、菜の花、野蒜のびる、つくし、スッパわだちのある農道、湧き水、サワガニがいるじゃないか、シジミもいるじゃないか、家の周りには農機具もあって、井戸、五右衛門風呂、囲炉裏もある、絶滅危惧種のメダカまでいる、ありとあらゆる日本の原風景があるじゃないですか。それが都会の人が一番喜ぶものですよ」それで、私も都会の方が来てくれる理由がわかったんです



写真 99：さ



写真 100：ちょうど盛りにつくし

よ。それまでは都会の金持ちの暇な人がまあ田舎にくるんだなあというぐらいの認識だったの。じゃあ私はありのままにこう、こういうものを求めてきてくれるのなら私は自然のままにこうと、心に決めました。これ以降、中山さんの農泊カリスマへの道のりがはじまる。

(3) 安心院 GT の課題は？

会員が増えていくにつれ課題もあるのでは？

中山さん：増えるにつれ質が落ちてきている。15 軒に増えた時点でも質が落ちている。会員自らが律する“自律”が必要なのね。

会社組織でないので、垂直的に伝達されていくことは不可能。次の世代が同じ感動を再生していく仕組みを作る必要があるのでは？今のままを維持していくのでは難しいだろう。再生産には失敗してもいいから若い人にやらしてみる事も必要。

中山さん：私たちが感じている危機感をようやく時枝さんが持つようになった。

やはり最初の思いを忘れてはいけない。忘れかけている人がいる。外にばかり目を向けるのでなく、中をもっと丸めて固めていかなきゃ失敗しますよ。

(4) GT の本質は一般客にあり

GT の本質は

中山さん：修学旅行生は怖い、来たくて来ているわけではない。受け入れ側も意識が違う。私たちが、ただ人をお泊めしようという思いで始めたのと、「これは儲かる、客が来るな」という思いで始めたのとではずいぶん違うんですよ。研究会段階の 7 人の気持ちと NPO 段階の 14 人の気持ちとずいぶん違う。これがもうすぐ 27~8 人になる。私としては怖い。

団体客は怖い、何か事故があったら安心院

全体にこなくなる。私は修学旅行を受け入れるべきではないとおもう。期待するリピーターにもならない。地元の小中学生には体験してほしいが。

視察客も本当の客でないかも？

中山さん：いや、視察客はリピーターになる。次は家族を連れて、その次は他の家族を連れてというようにね。

一般客の中でも特に関心ある層といえる？

そうそう

(5) 新婚旅行で来たカップル

中山さん：東京で付き合っているときに二人で先生の話聞いたとき、うちの固有名詞だけが出た。結婚したら中山さんちに行こう！という思いを 3 年間募らせてきたというカップル。今度、北海道にもそういうカップルが一組できました。全国に娘や息子がいる。行った先にいるんです。

癒しと縁結びの安心院？

中山さん：大手旅行代理店がどれだけきたかわからない。そういうのは由布院に連れて行ってくださいよ、と私はいつも言う。団体旅行客が来るような所ではない。教育部門では地元の学校と近くの学校だけでいい。彼らに安心院のよさを教えて外に出してやりたい。せめて思い出だけでもね。(学校の受け入れも)それから始まったんですよ。



写真 101：農泊のカリスマ中山ミヤ子さん

(6) 修学旅行で大変貌した女子学生

生徒はどう変わる？

中山さん：校長先生ならいざ知らず、安心院町長が挨拶しているときにも野次を飛ばすような女の子を受け入れなければならなくなっ

た。そのときほど連れて帰りたくなかったと

きはなかった。家に連れて帰る途中で銀行に

よったら、その子が「小遣いくれるの？」と。人からモノをもらうという時には、必ず先に相手に何かを与えなければならない、自分だけもらおうってそんなことは通らんのよ、と諭したわけ。そしたらそれからシ

ュンとして、あとはどんどん普通の子と同じいい子に。夜、その子に向かって「あんたきれいになったね、昼間は怖い見れん顔やったのにね。こんな美人なのになんであんなこといったの？」もう次の日は帰りたくないと泣いていていました。そして帰りの挨拶は別人のようにちゃんとまっすぐ向いて座っていた。

真剣に向き合ってくれる人がいない？

中山さん：いないんだと思う。先生方も怖がらずに真正面にぶつかって悪いことは悪いと

いってあげたらいいのになと思う。



写真 102：後中央、中山ミヤ子さん

(7) 中山家から学ぶこと

研究会段階から関わっている中山さんから学ぶべきことは多い。まず都市住民が求めているものは何か、それは作られた農村環境でなくあるがままの農村。よって受け入れ側は自然体であるべきだし、食事についても可能な限り地場の食材であることが重要である。

さらに、都市住民を問わず求められているものとして、時枝家のおじいちゃんもそうであったように真摯な態度、姿勢が今の時代に求められていることであろう。

ふたつめに、GTの本質に関して、受け入れ側にとっての意義を問い直す必要がある。それは、真摯な姿勢、コミュニケーションではなからうか？そのことからすると団体客ではなく個人客を対象に展開すべきで、一軒一組の原則は重要な対応である。それが真の心と心の交流やふれあいを育み、双方の精神的活力源になるのではなからうか？

3) 「量よりも質」の論理

先に見た、具体的な取組・方針において、私が重要であると考ええる点は、量的な目標数値よりも、質的な面を強調していることにある。地域住民にとってのグリーンツーリズムの意味と可能性を前面に据え、ネットワークづくりを主に提唱しているのである。数値目標が登場するのは、2004年-2006年方針の応援団員についての一箇所のみである。グリーンツーリズムにおいて数値的目標を設定してしまうと、その達成に躍起になるあまり、質の面でおろそかになってしまう可能性が生じる。

さらに、取組み・方針では、細かい戦略ではなく方向性を緩やかに示している。実務上の問題解決は、各専門部会や個々にまかせ、研究会は全体の舵取りをしていく姿が、この取組み・方針の中から読み取ることができる。

ここまでの考察をふまえて、安心院町グリーンツーリズム研究会がここまで展開できた3つの要素をいかに示す。

方針を文章によって明確化し実践者・会員の価値観共有

量よりも質を追求 行政・地域との連携

私たちが安心院訪問中に宿泊した、農泊家庭でもてなしてくれた女性たちは、それぞれの個人的なモチベーションや経験談を惜しげもなく披露してくれた。そして自らが携わる農泊事業も、グリーンツーリズム研究会の全体の取組方針に沿って説明する場面も多かった。たとえば、農泊の質を落とさないための研修制度の重要性、グリーンツーリズムの大分県下への拡大、バカンス法の重要性・・・などである。そうした全体方針と重なり合いながら、活動の喜びや将来展望について、それぞれのヴィジョンを創造している。全体と個が融合しながら、実践者それぞれの日常に充足感をもたらし、将来への希望を膨らませていく。個人の充足感と地域発展のバランスがとれた結びつきは、安心院町グリーンツーリズム研究会のソフト面での活動戦略の大きな成功要因であろう。

4．関係づくりの重要性

安心院のグリーンツーリズムの特徴は、宿泊者を客扱いしないという理念にある。現実には、農村民泊の宿泊者は「客」として訪れるわけだが、親戚に対するものと同様な感覚で来訪者に接することが農村民泊受け入れ側に要求されるのである。親戚として受け入れられたか否か、親戚として受け入れたか否かという判断は、個人的な主観にもとづく要因が大きいが、安心院の場合、そこにひとつのしかけづくりをしている。

そのしかけとは、「親戚券」の発行である。親戚券とは、裏面に10個のスタンプ押印欄を印刷した名刺大のカードである。農泊に来た人は1晩の宿泊ごとに1つのスタンプを押してもらおう。宿泊者と受入者をはかる指標として使われるのは、「遠い親戚」、「近い親戚」という概念である。つまり初めて宿泊し、1つめのスタンプを押印してもらった人は、「遠い親戚」として受入者と擬似親戚関係をはじめるのである。そして宿泊回数が増えるごとに、つまり親戚券にスタンプが増えるにつれ「本物」の親戚に近づいていく、というしくみである。

擬似親戚関係を魅力的なものにしているのは、地域の親密な人間関係なのである。修学旅行で農泊を体験した生徒の感想文の中には、「おばちゃんとお兄さん親子の信頼関係、とても羨ましいです」、「安心院は近所の方が家族のように仲が良くてうらやましかった」、「とても良い環境の安心院は、周りの人々がとても温かく、道を歩いているとあいさつしてくれたり、素晴らしい町だと思いました。なかでも小学生の子たちはこっちから話しかけてもフレンドリーで嬉しかったです」(「心のせんたく」Vol.9より)といった人間の触れ合いを評価する声が多かった。来訪者にスタンプを押してリピーターになってもらうというしくみ自体は、今日多くの商業施設でもおこなわれる。しかし単なるスタンプカードではなく、そこに安心院の理念ともいべき「非客扱い」を重ね合わせたことに、親戚券システムの独自性がある。金銭的利益よりも、宿泊者と受入者間の交流や双方の関係性を強調したグリーンツーリズム研究会が打ち出した方針を、農村民泊受け入れ家庭で共有し、親戚券方式によってお互いの距離感が近づくことを可視化せしめたことが安心院の農村民泊を成横綱に導いたといえよう。

5．今立遊作塾の経緯と主題

1) いまだて遊作塾とは何か

近年、多くのシニア世代の都市住民が、田舎暮らしに対する関心を抱いている。空気がよいところで、畑仕事をしながらのんびりと暮らす。こんな生活スタイルを定年後のひとつの理想像として描いているようだ。しかし田舎暮らしに関心を持つのはシニア世代だけではない。

いまだて遊作塾は、田舎暮らしに関心を持つ老若男女を対象に、古民家再生講座を軸とした長期的なセミナー開催を目的に実施されてきた。開催の中心地は福井県旧今立郡今立

町である(今立町は2005年10月1日、西隣の武生市と合併し越前市となった。そのため旧今立町は越前市今立地区と呼ばれるようになった)。

セミナーの目標は、受講者を満足させることだけではなく、地域の人的・物的資源を生かした地域づくりの可能性と、都市 農村交流によるあらたなネットワークという地域活性化にも重点をおいている。

都市住民の農村体験による都市 農村交流は、近年盛んになってきたグリーンツーリズムが掲げる大きな目標である。いまだて遊作塾のセミナーには、農業体験も含まれる場合があり、グリーンツーリズム的要素も内包するが、農業・農村という対象だけではなく、モノづくりを中心にすすめることによって地域資源を生かしたより広い視野の都市 農村交流を目指している。さらに農村だけではなく、今立地区の町屋も活動ベースとしているため、都市・地方(非都市)間の交流といった方がより適切であろう。

いまだて遊作塾という名称は、正確に言えば、「今立 古民家・匠・ロングステイプロジェクト」が企画する一連のセミナーという位置づけである。しかし「今立 古民家・匠・ロングステイプロジェクト」という名称は長すぎるため、プロジェクト自体もいまだて遊作塾と呼ばれるようになった。正式名称は、公式書類以外に用いられることは時が経つにしたがって少なくなった。本稿でも、必要が生じない限りいまだて遊作塾の名称を用いている。

いまだて遊作塾の一連の企画は、実行委員会によって担われる。実行委員会を構成するのは、地元の有志たちである。この点、いまだて遊作塾は、ボトムアップ型の活動であるといっていよい。

本研究の大きなテーマのひとつは、地域資源を生かした地域おこしの可能性を検討することにある。地域資源を考える際、ハード資源だけではなく、地域のマンパワーなどのソフト資源もまた重要である。特にボトムアップ型活動の場合、ソフト資源の重要性を見逃すことはできない。地域のハード資源を、いかに有用に生かしていくかは、ソフト資源によるところが大きいからだ。標準化されたパッケージを利用して、安直に活動を組み立てていくのではなく、試行錯誤を繰り返しながら自分たちなりの活動を作り上げていく楽しさが、参加者にとってボトムアップ型地域おこしの最大の魅力であろう。また、その手作り感覚に対して、活動に参加する都市住民が魅力を感じることによって、企画する側と参加する側の距離が近づき、より親密な都市 非都市交流が生まれてくる。

2) いまだて遊作塾設立の経緯と目標

いまだて遊作塾が立案されたのは、2004年6月のことであった。

このプロジェクトの母体は、NPO法人森のエネルギーフォーラム(以下森のエネルギーフォーラム)で、当初NPO活動の一環としてこのプロジェクトに取り組もうとしていた。森のエネルギーフォーラムは、風力、太陽光、バイオマスなどの自然エネルギー利用に関心を持つ仲間が集まって2002年に設立された団体である。2003年に特定非営利活動法人格を取得した。当初の活動は、自然エネルギー利用の啓蒙・普及といったものが中心であった。

森のエネルギーフォーラムの活動内容が広がりはじめたのは、2004年あたりからである。たとえば、2004年からは青少年を対象にした、「子どもアートセミナー」、連続講演会「ひろば」、2005年からはハイビスカス・ティーのフェアトレード、青少年対象の「地域を感じ世界を知るエコロジー体験講座」が企画・実施されるようになった。

事業内容多様化のひとつのきっかけは、2004年度に当時の今立町から受託した地域資源調査である。いまだて遊作塾はこうした事情を背景にして、森のエネルギーフォーラムの事業として企画されたのである。

しかし、いまだて遊作塾の目的のひとつとして、地域に経済的利益をもたらすという営利事業的な面も考慮したため、NPO法人森のエネルギーフォーラムとは別組織としてスタートすることになった。こうした経緯からいまだて遊作塾と森のエネルギーフォーラムと

密接なかかわりを持ち、互いに連携しあって活動している面が強い。

いまだて遊作塾が古民家再生を活動の中心軸に据えた最大の理由として、代表の増田氏自身が築 130 年の古民家に暮らすことを挙げることができる。個々の生活スタイルにあわせて、専門家のアドバイスを受けながら自らの手で工夫をし、古民家を改装する面白さ。天井に横たわる横柱の曲線美と機能性、時代を経た木材の重厚さ、これらが増田氏の強調する古民家の魅力である。現代風に手が加えられたとしても、自然素材を基礎にした古民家はそれだけでエコロジカルな存在で、ケミカルな現代の建築材料とは根本的に異なるものであるという。こうした古民家に対する増田氏の情熱が、古民家再生を中心に据えたプロジェクト構想を暖めてきた。

そのような折、2004 年、福井県は福井県地域ブランド創造活動推進事業の公募を開始した。地域ブランド創造活動推進事業（以下福井ブランド事業）とは、福井県内の地域資源を有効利用しつつ、ビジネス化し、地域・地域産業の活性化を推進しようとする補助事業である。

増田氏は、それまで暖めてきた構想を実現するべく、数人の有志とともに、古民家再生を軸にした計画を提出した。この計画は県の審査を通過し、いまだて遊作塾（申請書類上の名称は今立 古民家・匠・ロングステイプロジェクト）は実現段階に至った。

先にも記したが、いまだて遊作塾の事業は、古民家再生を主たるキーワードとしている。しかし、それぞれの実行委員の関心は多様で、古民家に関心を持つものだけが参画しているわけではない。古民家再生を主軸としつつも、さまざまな地域資源を利用した、創造的な活動、それがいまだて遊作塾の目標である。多様な関心事をリンクさせ、人々のネットワークを構築いくことがいまだて遊作塾の大きな目標でもあった。

3) いまだて遊作塾における関係構築

いまだて遊作塾の理念は、安心院に同じく、これまでの観光型とは一線を画す、体験型の滞在である。しかも当初の目的は、正式名称中の「ロングステイ」の名が示すように長期的滞在前提としたものであった。しかし、2004 年から 2006 年にかけて開催された講座は 1泊2日、長くても2泊3日程度であった。

他方、長期滞在と並ぶいまだて遊作塾のもうひとつの「売り」は、ものづくりである。古民家再生、和紙漉き、指物づくり、農家、食といった広い意味での伝統技術を、匠と一緒に体験することで「本物志向」を前面に出していた。参加者は匠の隣で伝統の技に触れることが可能であった。

安心院の擬似親戚制度と遊作塾の手わざは対照的な性格をもつ。親戚制度は、宿泊者と受入者の緊張関係を解きほぐす役割がある。他方、手わざは本質的には張り詰めた緊張感がともなう。その緊張感を変換させるためのコンセプトが「遊作」という言葉には秘められている。実際、仕事に厳しい匠たちは、交流会の場では穏やかな一面を見せる。手わざの緊張感と交流会での和やかさというコントラストが、伝統工芸に生きる厳しさと楽しさを表象する場であったのだ。

4) 安心院と今立遊作塾の違い

安心院と今立 2 つの事業を比較した場合、以下の違いを指摘できる。

	主なテーマ	付属テーマ	誘引装置
安心院グリーン ツーリズム研究会	都市 - 農村交流	農村民泊 農村体験	親戚
いまだて遊作塾	伝統工芸 ロングステイ	食文化 田舎ぐらし	手わざ

表 6. 安心院といまだて遊作塾の比較

安心院グリーンツーリズム研究会が前面に出すテーマは都市 - 農村交流である。その手段が農村民泊であり、農村体験なのである。安心院の「売り」は「何もない農村」である。しかし、滞在してみると何もないはずの農村には豊かな暮らしが息づいていることに、訪問者は気づく。その豊かさのひとつが、人間関係であることは修学旅行生の感想中にも記されていた。そして親戚券の利用によって訪問者は来るたびごとに安心院の住民に近づいていくのである。

他方、今立遊作塾は、伝統工芸とロングステイが主なテーマであった。特に伝統工芸は安心院のテーマである交流とは違い、可視的である。古民家を再生し、伝統工芸に触れるというモノを作り出していく喜びが今立遊作塾事業の本質にある。その一環として文化としての地域の食材、新しいライフスタイルとしての田舎暮らしを組み込んだのである。

しかし、今立遊作塾の場合、伝統工芸、食文化、田舎暮らしという 3 つの要素が今のところ完全には融合していない。

先にも記したように、安心院の望月さんは「10 年かけてつくりあげてきた事業」であることを強調している。その 10 年の過程で試行錯誤を繰り返しながら、現在のスタイルを築き上げたのだ。そして、旧安心院町という狭い町域の中で、民の先導、官の支援という両輪が噛み合ったことも安心院の活動が継続し、横綱といわれるまでに評価されるようになった大きな要因である。今立遊作塾が、活動が始まってまだ 3 年そこそこである。この先、いかにして活動を継続させ、地域の人々、都市の人々を巻き込んでいくかが今後の課題であろう。

5章 世界とつながる田舎学

増田頼保 杉村和彦

1. フランス・レンヌとの交流

1) 研究者同士の発想から

最初に、フランスのレンヌとの繋がりについて文化人類学者の雨宮裕子氏¹と経済学のマルク・アンベール氏（二人は夫婦）の出会いから話さなければいけない。両氏は、当初地産地消の研究会「ブルターニュと日本の比較分析研究」（農産物、畜産製品の産直ネットとそれを基盤とした都市と農村の相互交流、人間的で持続性のある村おこしのあり方とは何か）を行うために、レンヌ市から助成を受け、レンヌ第一大学（経済・法学・数学など）および第二大学（文化・語学など）や有機栽培農家などとともに立ち上げた。

これは、レンヌに留まらず、日本の研究者を巻き込んだ交流研究会に発展した。日本側の受け入れ先として、東大社研、帝塚山学院大、名古屋大、福井県立大、遊作塾、NPO 法人森のエネルギーフォーラム、多古産直センター、大妻女子大、埼玉大、京大、帝京大、近畿大、宇都宮大のメンバーが選ばれてそれぞれに研究事業を共有する形で進められた。レンヌのあるブルターニュ地方は、フランス随一の酪農地帯で、乳製品の他には、豚、鶏、カリフラワー、アーティチョーク、じゃがいもの生産地としても知られている。ところが、スーパーに並ぶ野菜は、パリに較べて品薄で、新鮮さにも欠けているという。これは一度全てパリに出荷され、そこで売れ残った二級品が戻ってくるからさうで、近郊に農村がありながら、新鮮な野菜が手に入らないというのは、変な話である。けれど、日本のような野菜 Box の宅配はない。

ブルターニュ地方では、80年代に畜産の規模拡大が奨励された。ところが、近年では、それに伴う水質汚染が深刻化し、市内の小中学校では給食にミネラル水のボトルが配られていた。集約農業は、日雇い労働者の仕事を奪い、内陸部の村はさびれて、学校も店も教会も閉まってしまった。村には高齢者がひっそり暮らすのみで、18世紀あたりから盛んに行われてきた、「パルドン祭」という伝統の村祭りさえ、途絶えてしまった村が増えた。祭りは、村の人びとの絆を深める年中行事だ。人の輪を復活させ、祭りを再興させるには、村に若者を呼び戻せる経済活動が不可欠である。この二点を結びつけた先に見えたのが、日本が創始した農産物の地産地消、いわゆる産直である。それをブルターニュに導入できないか、と考えたとのこと。

都市の消費者と農村の生産者を、顔の見える距離に結びつけるのが提携産直である。そこには従来の市場経済とは違った分かち合いの精神がある。農産物は、我々の命の糧で、見かけや安さを基準に売り買いされていていい商品とは違う。お金さえ出せば何でも手に入るという消費者の幻想も、石油が底を尽き始める10年後を思えば、吹き飛ぶのは時間の問題である。生産者と消費者が、そして都市と農村が、分かち合う暮らしを確立していけば、道路にジャガイモがぶちまけられたり、県庁に牛の糞が投げ込まれたりするような、農民の怒りと絶望のデモ行為はなくなるのではないかと考えているようだ。

それでは、提携産直を、行政や教育機関も巻きこんで地域社会に定着させていくには、どうしたらよいか。従来の流通システムを覆し、環境保全を志向する安全な農業を推進していくには、説得力のある研究成果を提示するよりない。水俣病や工場の煤煙公害からいち早く、安全な生産と消費を目指す提携産直を創始した日本、海洋と酪農のブルターニュ地方、両者の農業事情を比較検討し、次世代に安全で安心な食文化を継承できるよう、様々

¹ レンヌ第2大学日本語科主任、社会人類学研究室 LAS 所属のレンヌ大学日本文化研究センター所長、専門 民俗学、ブルターニュの民俗、口頭伝承宗教美術研究、1999年からは、日本の中小企業の文化特性研究をマルク・アンベールと共同研究。

な立場、研究領域の協力を要請したというのが主旨である。

2) 仏日産直研究プログラムの主眼

農産物、酪農畜産加工製品の産直ネットの様相をブルターニュ地方と日本の各協力地で調査研究し、農業の安全で持続的な発展を可能にする人、モノ交流の新しい形を考察する。都市部の消費者と農村の生産者との間に、信頼と責任のある関係を取り戻すには、どうすればよいのか。地元の生産者の生活を保証しつつ、量産よりも安全で良質な生産を可能にする流通方式はないのか。産直ネットの組織化とそれを基盤にする村おこしの可能性を、様々な角度から比較研究することである。

そのためには、流通機構の再検討はもとより、国の農業政策、地方行政の都市計画、学校教育のあり方へも視点を向ける。環境汚染、生態系、食品の安全性、肥満、アレルギー、栄養と健康管理、学校給食の役割など、食をめぐる問題は児童の教育と切り離しては考えられない。地産地消型の産直は、都市と農村の交流を活性化し、環境保全に努める、安全な農業や畜産を可能にするであろう。その基盤に不可欠なのは、子どもたちの健全な成長を支える、“食”の多面的教育であることも浮き彫りにしていきたいとのことだった。

以上のような目的で雨宮氏、マルク氏は、本研究提案代表者である福井県立大学学術センター教授（現センター長）で NPO 法人森のエネルギーフォーラム当時副理事長（現理事長）の杉村と、NPO 法人森のエネルギーフォーラム当時理事長（現副理事長、今立 古民家・匠・ロングステイプロジェクト実行委員会代表）の増田にレンヌ大学の「ブルターニュと日本の比較分析研究」共同研究参加への申し入れのために 2003 年 8 月福井に訪れた。

マルク・アンベール氏は、この「ブルターニュと日本の比較分析研究」とは別に、PEKEA という国際組織を中心で動かしている人物であり、我々が NPO 法人森のエネルギーフォーラムにいたる活動に対して、同じような認識を抱えて国境を越えて模索してきた背景を語り合った。そして、福井での活動をその共同研究に生かしたいという要請があって共同研究会および PEKEA にも参加することとした。

そして、増田は、『越前和紙から今立現代美術紙展へ、結い村構想から遊作という創造現場の活動報告』という形で、2005 年 11 月 4 日から始まる PEKEA 国際会議レンヌ大会と 11 月 7 日の産直研究会レンヌ集会での発表参加にいたる。産直研究プログラムのこれまでの経過と今後の展望の説明を雨宮氏が担当し、参加者自己紹介のあと日本、ブルターニュの各研究チームの現状報告が行われた。研究の 4 つの基本テーマに沿った発表をもとに、日仏討論会が行われた。

増田は、ここで二十歳代から一連の活動の総括という意味で『越前和紙から今立現代美術紙展へ、結い村構想から遊作という創造現場の活動報告』を行った。増田は遊作塾の活動をスライドと DVD による動画で紹介し、フランスの人達はその活動と〈遊作〉に大変興味を持った。〈遊作〉という活動は日本の中でもまだ生まれただけであり、現代世界の中では「日曜大工」の伝統を市民が持つフランスを始めとするヨーロッパの人達の方が先に興味を持ち広げていってくれる可能性もある。言い換えれば、家族単位の遊作ということも出来よう。

現代フランスの田舎学という視点では、週末の別荘生活、バカンス中の別荘生活などが日本と根本的に違った局面を呈することになる。

3) フランス交流研究会「都市と農村の交流の 21 世紀」

2006 年 5 月 13 日から 16 日にかけて、「ブルターニュと日本の比較分析研究会」と日本側の交流研究会を福井で実施した。これはきわめて遊作的な交流会となった。

最初の受け入れとして、フランス ブルターニュ地方より 14 名もの視察団を歓迎したあと、NPO 法人森のエネルギーフォーラムが年間通して行っている農業体験プログラム（田植えの後、田んぼの近くで手作りの多国籍料理の田んぼレストランも行った）を経験して

もらった。NPO 法人森のエネルギーフォーラムの活動実践視察体験及び、日仏共同研究者の国際会議開催、福井県内の地産地消による活動視察、池田町（ファーム F とこっぼい屋の取り組み）越前市（風ものがたり、百姓の館など産直店、越前市長表敬訪問）福井市（ファーマーズレストランさんさん、モニュメント型風力発電メーカー協同組合プロード）及びインタビューを越前市中心に、エコ・グリーンツーリズムや有機農業、村おこしとしての地産地消の現場を視察・交流した。



写真 103：NPO の田植えに参加したフランス研究者たち 写真 104：田んぼレストランと称して昼食

特に期間中、多くの方に参加していただけるよう、地域の寺院を会場にして一般に対し公開プログラム、交流シンポジウムとした。このシンポジウムでは、開催の挨拶で杉村はいまだて遊作塾と、NPO 法人森のエネルギーフォーラムが進めてきた遊作という活動が、仏日の地産地消交流の共通点を見出し、互いに理解しあえる関係を構築し、田舎による「農産物の地産地消による村おこしの可能性」について検討したいと挨拶。

構成としては、最初に日本のグリーンツーリズム報告で、杉村と内山秀樹（仁愛女子短期大学助教授）による安心院でのグリーンツーリズム調査報告と、今立のグリーンツーリズム報告で、『「遊作」という活動が目指すもの - 都市と農村の交流のもう一つの形』というテーマで増田（いまだて遊作塾代表）が発表した。

ブルターニュからは、『有機農業と地産地消ネットの試み - ブルターニュの産直農家のアンケート結果から』と題し、Yvon Le Caro 氏、Ronan Daniel 氏が、続いて『ブルターニュの有機農業と地産地消ネットの試み - グローバル化する社会におけるブルターニュの農業と文化の未来』を Marc Humbert 氏がそれぞれ発表した。



写真 105：交流研究会での会場風景

シンポジウム終了後、いまだて遊作塾のメンバーがその受け入れを担当し、遊作ライブを実施した。このライブには、「楽衆玄達（がくしげんたつ）」というその年出来たバンドのメンバーは、ジャズ、ロック、和楽など多彩に取り入れた楽士（衆）たちだ。これも、遊作塾の中心メンバーである、ジミ AWATABE 氏を中心に「遊作の里全国サミット」で集ま

ったメンバーが大多数で構成されたものだ。ここでも、岩野市兵衛氏に登場願って越前紙漉き歌を披露していただいた。そしたら、フランスグループでも、飛び入りで地元の歌を披露して双方有意義な時間を共にした。



写真 106：楽衆玄達を迎えて福井の音楽をフランス研究者と交流した地域の人たち

4) 日曜大工とフランスの手作りの世界

フランスにも存在する田舎志向性の中で日本の中にはまだ十分展開していないものが田園工芸といったものだ。日本では日曜百姓はあっても日曜大工の伝統はない。すでに見てきたような今日の田舎志向の中でも工芸を趣味とする人は必ずしも多くないといっていよう。家作りはもっぱら工務店の仕事だし、そこに生活する人が参加することはそんなにない。設計やインテリアなどでこうしてほしいと要望するといった程度であろう。ところが、「遊作の里全国サミット」で話し合われたフランスでの内容は意外と面白い。ここに名古屋大学教授嶋田氏の講演報告を簡単に紹介したい。

「遊ぶというコンセプトを語る前に、サハラ砂漠の研究をしてきたがアフリカでもサハラ砂漠のシンポジウムをするとたくさんの方が参加される。しかし、熱帯雨林の研究だとそういう訳にはいきませんが、、、笑。

ナツメヤシのあるオアシスはサハラ真珠といわれる都市。その他にヨーロッパの研究も行っており、フランスを中心に一般的に遊びというのをヨーロッパでは、トランプでもスポーツでもゲームをするという意味が強いのですが、それに対して、日本では遊びというハンドルの遊びというように、また遊休地というように何も使っていない、余暇とかまったく実用ではない世界を意味するものが強いかもしれません。ゲームをするプレイというものを考えたいのですが、私もこれまでずいぶん好きなことばかりやってきたなと思っています。ゲームというのは、目的がはっきりしている。そのためには、スポーツ選手はものすごい苦勞をするわけです。

やっている人はとても一生懸命で、遊びは真剣にやっている。高校野球などでもそうです。危険が伴えば伴うほど面白い。真剣さがないと面白くない。人間の人生は、苦勞しても本人にとってはちっとも苦勞ではない。

人生において遊びに対して、何も語らない。遊びの目的がはっきりしている。これに対して、女性の方が40万50万とかいう服を買うことが本当に幸せなのかなとおもう。フランス人は大抵、8月のパカンスをどう過ごすのかということを中心に生活を考えている。

今立の方では、増田さんを中心に古民家を再生している活動をしています。フランスの人たちにとって普通家を買うというのは、古民家を買うということです。昔の家は、ほとんど石造りで出来ているのですが、意外と内装が壊れやすい。核家族でだんだん家に人が居なくなり、おばあちゃんが一人で住んでいるとどんどん内装が痛んでくる。家

はどんどん悪くなっていくので、売りに出される訳です。フランス人は働かないので有名ですが、そんなフランス人は5時に帰って来て、いったい何をしているかという、家を直している。それをブリコラージュという。

十数年前に買われてコツコツと直してゆくのですが、地下室には大工道具がすべて整っている。フランスではホームセンターの3倍くらいの規模のホームセンターがあり、鏡などでも自分で金箔など塗って直す。寝室を直して居間にしたり、庭などもお客さんを部屋の隅々まで案内する。寝室まで案内する。招待される人も同じことをやっていますから、そこで会話が弾んで色々アドバイスなどが飛び出す。

日本では、すぐに「何十万円かかったのよ」ということが重要ですが、(フランスでは)家の価値は上がってくる。下がるのではなくて。コツコツなおして十年二十年かけて直してきた。だんだんそういう大工仕事が出来なくなっている。旦那さんが家の仕事をしなくなってきた。離婚の原因もこういうところにあるのではないかと思われる。フランスでは鳩小屋を持っている、馬小屋なども持っている。女性もいろんな手作りを作って楽しんでいる。手作りの文化が発達している。

私自身がアフリカで家を作ったというお話しをします。城壁があってそれを超えてフランスに行った人が強制送還されて、フランスのレストランで働いていたので、アフリカでもレストラン並みの厨房がある。学者は知恵があるので、現地のものだけを使って料理をして、掘っ立て小屋みたいな家を作って、竹のいすなども日本円で100円くらいで出来るし、翌年行くと儲かっている。現地のものだけで近代的なものを一切使うなどいっているの、結構、身体障害者の人なども結構くるので、いろんな人が関わってくる。自分たちの実践が、多くの人を巻き込んで行くさまを見てきたので、最初の木の一本から始まったものですが、こんなに立派なレストランになったと自負しています。私には立派に見えますが、、、。こういうことをしないと生活できない。自分で家を作ると多くの者と関わり、誰にでも出来る、自分で作ればみんなも協力する。家をぽって作っても近所の人とお付き合いできない人がいますが、アフリカとフランスの例をみて実感しています。」

このような田園工芸の世界は、生活のアート化という事柄とつながるものだ。壁を塗る。棚を作る。いすを作る。自分の世界をそこに作ることは、自分の生活の豊かさをそこに取り戻して行くことだ。ヨーロッパの中では日本と比べるとはるかに早くと都市化と工業化を経験し、手作りの世界は都市の中から駆逐されていった。しかしそれゆえにこそ、手作りの世界無しには完結しない人生の意味の重要性をヨーロッパの世界では世界に先駆けていち早く体感したのかもしれない。産業革命の進行するただ中で手作りの世界の復権を求めて活動したイギリスのモリスなどの生活の芸術化への希求がフランスの中にもみる先進的な日曜大工の伝統の中に見出すことができるのかもしれない。

2. 豊かな自給性と技能の自在性 アフリカ

都市と農村の関係性という視点から「田舎」を捉えるとしても、「農村」の存在形態には地域ごとに大きな差異があり、「田舎」の意味にも大きな違いが生まれる。日本の中では、農村のグローバリゼーションは遅く、「遅れている」と考えられるが、世界の中で比較するならば日本の農村もすでに都市化・工業化の中に組み込まれ、かつての自給的世界から大きく変貌している。

この日本も含めた先進社会の農村とは異なり、極めて自給性の高い農民を維持してきたのが、アフリカの農村社会である。これは現在第三世界の中で東南アジアや南アメリカなどと比較しても突出した特徴を有している。これまではこの自給性は一義的に停滞性を示すものであったが、冒頭に述べたように、今日の田舎志向性は改めてむしろこの自給性の豊かさを語り始めている。

日本の消費者団体の中で、エコロジーに強い関心を有する関西よつばの事務局から「地産地消」という考え方の延長線上に今日でも卓越したアフリカ農村の自給世界について話

が聞きたいということで、筆者はよつばグループの人たちにアフリカでの農業の自給論を講演する機会を持った。よつばグループの人達は都市にすむ消費者視点ではあるが、一つの新たな「田舎学」を考えようとする人たちともいえる。その人たちの視点とアフリカの自給的世界の視点がクロスすることになった。

ここではこのアフリカ農村世界の自給性に関するこれまでの研究の一端を示すとともに、その中で 30 年以上にわたり内発的な発展に尽力されてきたタンザニア在住の椿延子氏が来日された折に開かれた日本・タンザニアの「田舎」比較についての議論をまとめておきたい。ここではまず、杉村が関西よつばで行ったタンザニアの自給農業についての講演の一部を採録しておこう²。

² 以下のサイトを参照せよ。 http://www.ne.jp/asahi/institute/association/bulletin/20060810/study_report.htm

1) アフリカ農業の自給性について

(1) アフリカ農村の停滞

「アフリカ諸国に対しては、さまざまな国際機関や各国政府の援助協力が続けられていますが、途上国全体の中でも、アフリカの停滞ぶりは突出したものになっている。そこから、「どうしようもない」「困ったものだ」という評価が生じるわけですが、その一番の原因として考えられているのが農業です。アフリカの自給的農業こそがアフリカの停滞を支えている、発展を阻害している、というわけである。

私たちはこれまで、「南北問題」の構図を踏まえ、多くの場合、南なら南にある程度類似した経済なり農業というものを考えようとしてきました。しかし今や、「南」そのものの内部差が非常に大きくなっています。東南アジアとアフリカと比べれば、同じ第三世界といっても経済規模は全く違います。そのため最近では、南北問題の中で南を捉える場合、「南の中の南北問題」「低開発の中の低開発」という視点が出されています。アフリカは、まさにそうした地域と見られている。

一方で、「アフリカの停滞」と言われるものを、例えば「従属論」のように「外部との関係」だけで捉えていいのかが、アフリカ独特の特質を再考すべきではないか、東南アジアなど他の第三世界と比べて、質的な差があるのではないかと - そんな意見も出されています。

では、その「停滞ぶり」は実際にどんなものか。様々な統計、例えばアジアとアフリカの 1 人あたりの GNP に関する比較などを見れば、だいたい 1970 年代までは、まさに「第三世界」と言うに値する同質性があったことが分かります。ところが、その後、アジアが急成長を遂げる反面、アフリカはそのまま。とりわけ農業について見ると、アフリカでは生産性が伸びていない。したがって、土地生産性から見てアフリカには成長がない、となるわけである。

(2) 「緑の革命」を拒否する世界

第三世界では 70 年代くらいから、「緑の革命」と呼ばれる現象がありました。第三世界は生産性の低いところだから、なんとか近代化をさせて、高収量品種を導入して、農薬や化学肥料を投入して、土地生産性を上げないといけない - こういう主張がなされ、南アジアや東南アジアでは実際、さまざまな試みが行われました。その結果、当然さまざまな問題も生じているわけであるが、一方では生産性が一定高まったことも事実である。

実は、アフリカでも同時代、同じように「緑の革命」が導入されました。ところが、アフリカはどうにもこうにも適応しなかった。「緑の革命」を拒否した唯一の社会だとも言われます。だから、援助国はどう対処していいかわからない。とりわけ農業においては、手をこまねいている。他の国の ODA が縮小される中で、日本は唯一 ODA を増額し、多くの人員も投入し、農業開発をたくさんやりましたが、しかし一向にラチがあかなかつた。これがアフリカの現実である。

そういう中で現在、アフリカの農業とはいったいどういうものなのか、もう一度内部からとらえてみる必要があるのではないかと、という反省が出てきているように思われる。

アフリカ農民社会についてどう考えるのかということですが、この点をめぐって、これまで声高に言われてきたのは、とくに生産性論、それから搾取論という二つの視点だと言えます。生産性論というのは、土地の生産性の高低を軸にした議論です。搾取論というのは、先進国による収奪、従属的な状況を強制される、そうした構図を軸にした議論です。

この二つはいまだに声高ですが、しかし、もう少し考えてみる必要がある。例えば、国際機関の統計などでアフリカの土地生産性を見れば、たしかに低い、ダントツに低い。そうになると、「やはり『緑の革命』しかないね」という話になる。実際、「アフリカに『緑の革命』を！」と主張する論客もいる。

(3) 混作のひろがる世界

しかし、それはどうか。実は、そこにはいくつもマジックがある。例えば、この写真(下)はザイールの焼畑の混作畑です。単に木が茂っているだけに見えますが、木ではない。全部食

べられるものです。キャッサバやコメ、トウモロコシ、バナナですね。熱帯降雨林の場合は、この四つが必ず一緒に植えられている。これを見たら、誰も畑とは思いませんが、でも、これも畑である。

私が訪れたザイールのクムという村は、基本的に混作農業です。彼らの言葉には「ティコ・アンジャ」、日本語で「いい畑」とか「美しい畑」という言葉がありますが、何が「ティコ・アンジャ」と言えば、とにかく何でもかんでも植えればいいという、そういう畑です。この中にはだいたい 30 種類ぐらい植えられているはずである。



写真 107：クム農村における混作

実際、この熱帯降雨林の生産力は大したもの。熱帯降雨林の焼畑だと、1 戸の農家が 1 年に 1 ヘクタールくらい開拓しますが、その際、だいたい 3 分の 1 で食料は十分賄えるぐらいの生産量です。日本では、アフリカと言うと「飢餓」を連想する人も少なくありません。しかし、場所にもよりますが、実際には、あまりに食べ物が溢れていて、ほとんど捨てているような状況である。

ただし、一般的な統計で、そういう熱帯降雨林の土地生産性を計るのは難しい。というのも、キャッサバやコメ、トウモロコシ、バナナの四つが必ず一緒になるわけで、1 ヘクタールの中に四つ植えるうちの一つを単独で取り出せば、単位生産高は低いに決まっている。しかし、合計したらどうなるか。一応、推計してみた。

(4) 熱帯雨林の生産力

違うものを組み合わせるのは困難ですが、とりあえずカロリー計算したらどうかという形で出したのが、表 7 です。つまり、化学肥料なども入れた日本の水稲と比べて、アフリカのまったく何もしない農業、除草もしない植えっ放しの、まさに自然農法の中の自然農法という、そういう農業でこれだけのカロリー量がとれている。

A. ザイール (混作)	B. 日本 (水田単作)
a. キャッサバ	a. イネ
9,000 キログラム (粉にすると 28%)	4,800 キログラム
8.95×10^6 キロカロリー	11.28×10^6 キロカロリー
b. リョウリバナナ	
3,000 キログラム (果肉重 50%)	
1.80×10^6 キロカロリー	
c. イネ	
800 キログラム (白米重 66%)	
1.88×10^6 キロカロリー	
カロリー量合計 12.63×10^6 キロカロリー	11.28×10^6 キロカロリー

ザイールは、安溪 1981 によるソングーラの例である。日本は、祖田『日本の米』岩波ブックレット、1988 による。

1kg あたりの日本のイネのカロリー量は、ザイールの数値と同じものとして計算している。

表 7 混作と単作の生産力の比較

水は天水ですが、熱帯降雨林の場合は雨が常に降りますから、水に困ることはありません。もちろん、降水量が少ないところでは当然、水の問題もあります。場所によって状況はかなり異なりますが、少なくとも、「アフリカ＝貧しい」というイメージで考えると、まったく話になりません。

表 8 は、先ほど紹介した焼畑の生産性を一つの手法で示したものです。私が訪れたザイルのクムが該当するのは、「a」のコンゴのところですか。右端にある「Er」は、エネルギー効率で、投入したエネルギーに対するヘクタール当たりの生産性を示したものです。

一見して分かるように、「c」のアメリカの場合、たしかにエネルギー産出量は高いですが、エネルギー投入量も膨大です。だから、エネルギー効率は非常に低い。それに比べて、焼畑のエネルギー効率がどれほど高いか、よくわかると思います。「生産性が低い」という我々の通念とはまったく逆の世界が、実はアフリカにはある。

(5) 「情の経済」と「共食」

こうしたことを踏まえて、アフリカの「低生産性」をどう見るのか、あるいは消費経済価値が非常に包摂し難い領域をどう捉えるのか。1980年代に、そうした問題に関する論争が起きました。その従来の考え方では、アフリカの農民は資本主義社会や植民地支配にがんじがらめに縛られ、収奪されているから貧しい。だから、アフリカの農民にも開発という形で市場に基づく刺激を与えれば、生産性も上がる、ということですね。

これに対して、アフリカの農民は実は、そうした近代的な原理に捕捉されていない。アフリカでは自給的な世界が非常に強い。近代的な原理に捕捉されるところが「自由の場」だとすれば、アフリカの農民は自由だからこそ、うまく成長しない。こういう反論がなされました。これは従来のアフリカ停滞論に対する、非常に強い反論です。考えてみれば、アフリカの世界はほとんど自給です。もし、外部から供給が絶たれても、自分たちでなんとか食える世界です。ハイデンさんはそこを軸にして、「情の経済」という概念でアフリカの世界を括ったわけです。

要するに、アフリカの農民にはともかく情に篤い家族世界がある、ということです。人類学では「拡大家族」と呼びますが、私たちのようなやせ細った家族ではなくて、何親等もまとめて一つの家族とするような世界がまだ生きている。そういう中でお互いのつながりを維持するために、物を分け合いながら生きていく社会が必要となる。アフリカの世界がうまく資本主義化されなかったのは、そのためだ。そういう理論です。

これは国家もうまく捕まえられないし、市場もうまく捕まえられない。開発

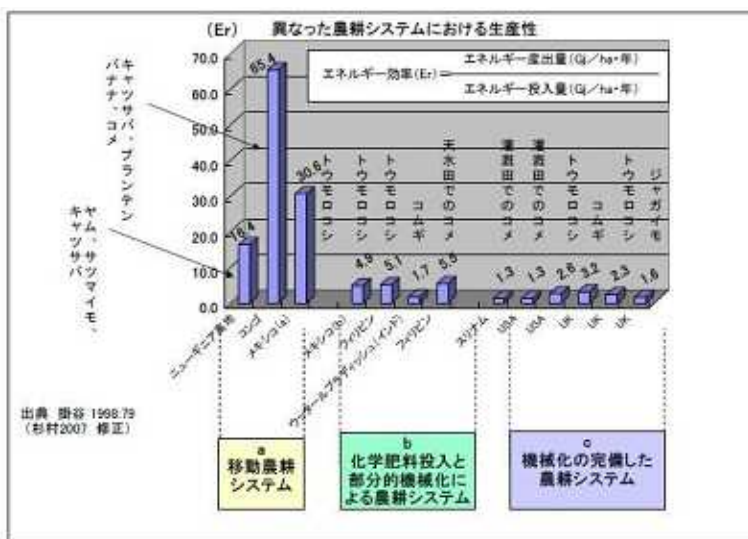


表 8 . 異なる農耕システムにおける生産性



写真 108 : クムの共食の場

しようとしても、うまくいかない。

この点に関連して、私が訪れたザイール・クムの農民には、「共食」という慣行があります。村人が寄り集まって食事をする。日本でも、ハレの日に大勢で食卓を囲むことはありますが、クムではそれが日常です。毎日、朝と晩に2回、だいたい5軒から10軒ぐらいと一緒に食事をする。

具体的に言うと、写真のような小屋に集まってきて、各家庭で作ったものを持ち寄る。それを全部供出して、男、女、子供と三つに分け、それぞれに別れて食べます。こういう共食慣行、つまり、食事が10人ぐらいで共有される世界、言い換えれば「分ける」世界が今でも非常に色濃くあるんです。これはアフリカ社会について説明する際の、一つの典型的な慣行だと言えます。

日本にも「お裾分け」という慣行がありますが、アフリカの場合は一方的な贈与と言いますか、とにかく分けてしまう。とくに、食べ物は基本的に買うものではなく、分けられるものだという、非常に強い信念がある。

アフリカの村の中での人間関係には、基本的に物は分ける、とくに金や富を持っている者が、持たない者に分けるのは当たり前だという規範が、今なお非常に強く生きています。だから、村の中では富の差というものが生まれにくい、非常に平準化された経済が存在しています。富の蓄積が起こりにくい、資本家が育たない社会なんてすね。そういう互酬制が、単に小さな家族だけではなく、村という単位の中で行われている。

(6) クムの山羊が表すもの

この写真(下)を見てください。これはクムの村を写したもので、ウロウロしているのは山羊

です。この山羊は、クムの農民社会を象徴するものですが、同時に、私としては、アフリカの農民社会の一原型とも言うべきものと考えています。そういう重要な山羊ですが、実は、日常的には何の役にも立っていません。

乳も搾れませんし、一応飼われてはいますが、ほとんど勝手に生きています。時々フラ

っと村人の家にやってきて、食べ物を漁っていく。そして邪慳に追い払われて、またウロウロする。そんなパターンです。

私はクムの村で生活していたとき、こんな非常に差の少ない社会、常に共食を繰り返して、富の平準化が貫徹される社会の中で、貧しい人と豊かな人はいるのか、と村人に訊いたことがあります。実際、彼らの言葉の中にも、「富者」「貧者」(スワヒリ語で「タジリ」と「マスキニ」という言葉はあるわけです。その際、村人が教えてくれたのが、この山羊だった。

それまでは「何の役にも立たない」と思っていたので、話を聞いて非常に驚きました。この山羊は、実は、結婚のための「ポーチ」、贈り物なんてすね。結婚以外にも、何か社会的なトラブルがあったときに、この山羊を贈り物にして和解をする、そういう機能を持っているんです。

クムの世界は一夫多妻ですから、山羊をたくさん持っていれば、嫁さんも増えるし、嫁方の家族と自分の家族が合わさって家族が拡大する。つまり、クムの人々は勇壮な焼畑をやっ



写真 109 : クムの山羊

すような世界を非常に重視している。自分の親戚や友人といった人間関係を拡大していくことこそが、彼らにとって富であり、豊かさだということですね。クムの山羊が表しているのは、そういうことです。」

2) 椿さんの語るタンザニア経験

(1) 椿さんの来日

タンザニア在住の日本人の中でも、椿さんほど長期にわたって、国際協力の前線で、しかも民際協力という立場で、現地の人と手を携えながら歩んできた人はいないといっているだろう。今回の椿さんの来日は、10年ほど前から椿さんとその仲間が、タンザニアの「あるもの探し」として現地で始めたロゼーラ(ハイビスカス)ティーの栽培と販売の事業を、日本でもフェアトレード事業で支援しようとして活動してきた、福井県のNPO法人森のエネルギーフォーラムの招聘によるものである。

4年ほど前からはじめた福井でのフェアトレードの試みは、扱ひ量こそ少ないものの、イベントや広報活動を通して、一定の活動成果を上げてきたが、今回は生産国のカウンターパートを招くことによって、この事業の深化、発展を期するものである。またこの活動は当初よりロゼーラ(ハイビスカス)ティーの日本サイドでの販売に限定したものではなく、むしろ積極的にロゼーラのフェアトレードを媒介とした日本とアフリカの「双方向的なつながり」を考えようとしてきた。椿さんのこれまでの試みはタンザニアにおける田舎学ともいえる。

椿さんは、1946年9月2日に北海道に生まれ、帯広畜産大学を出て、1969年新卒で釧路市庁の農業改良普及所厚岸駐在所に赴任。日本で生活改良普及員4年、普及員を退職して参加した協力隊派遣でタンザニア農業省6年、その後、現地採用で6年、農業省を退職してEGAJ(地球緑化の会)に8年、復職して5年。農業省を無事通過し、2006年9月2日をもって、正味25年間勤めたタンザニア農業省を退職した。

(2) 青年海外協力隊の時期

椿さんはこの間の自らの歩みを次のように語っている。

「タンザニアへ来たきっかけは、1973年にJOCVボランティア(青年海外協力隊)として派遣されたことで、農業省に6年間勤めておりました。その後、タンザニアで同じ農業省の公務員として現在まで過ごしておりますが、その間に8年ほど日本からのNGOのお手伝いもさせていただきました。

1973年にはじめてタンザニアに来た時はスワヒリ語ができなかったので、語学研修を兼ねて“ショート”という村に1ヶ月住みました。その時のタンザニアの印象が今までずっと続いています。まず、タンザニアに来て“日本から離れた”ということではなく、私の育った環境からすると“故郷に帰ってきた”という感覚でした。1973年に村で暮らした時には、山があり、朝霧がかかっている、ニワトリの声で目が覚めるという環境でした。

ところが日本の場合は、一生懸命近代化をして、養鶏においても雄鶏の声は聞こえずという状況が始まってしまっていたので、非常に違和感を抱いていました。しかし、タンザニアの場合は未だにニワトリが朝起きる合図になっている、家が草葺・土壁で、食事は非常に単純ですが飽きずにそれをずっと繰り返している、農業そのものも機械化されずに鋤を使って、水もバケツで汲んでいる。日本の中でも途上国という感覚の場所である、私が育った北海道の村での生活と、生活そのものが農業そのものという自給自足に近い、30年前のタンザニアの村の生活とが非常に似ていました。

(3) 日本農業の近代化の中で

1946年戦後に生まれ、小学校、中学校、高校まで農家の両親の元で育ちましたが、60年代は近代化、近代化ということで、農業も置き去りにされないようになんとかついでにこうと必死になって近代化に努力をしていました。その結果、農家は非常に生産をあげる

ことはできたのですが、農業資材がたくさん要る、その資金は手元に持っていない、よって借金で賄う。それと同時に、近代化することで資材を使い、農薬を使い、機械化することで体に無理がきて農夫症となり健康を害する。そういう状況が出てきたことに対して非常に疑問を持ち、我々が目指すのはどういう近代化なのだろうか、どういうことを目指しているのだろうかということの答えを見つけたいと思い、農学系の大学で勉強しました。

しかし、大学自体が農学というのは泥臭く、あまり認められないということで、よりアカデミックに、化学、工学を取り入れ、学問の世界でも農学が認められるようにという状況であったため、私の答えを得ることはできませんでした。

日本の農業改良普及所では生活改善、農業改善を目指しており、1969年から73年まで、そこで農家の技術指導を通して農民の自立を促すという目的の仕事をしていただきました。やはりそこでも同じように借金と農夫症に悩まされている農家の生活は非常にきついものでした。近代化によって物質的には非常に変化して見た目には良いという感じがするのですが、実際の農家は現金収入がなかなか得にくく、生活そのものも生活改善することによってお金がかかり、農業そのものも資材が必要になってきてお金がかかる。そして、お金を得るためには都会の方が得やすいということで、若い人たちは都会へ流れていく、という状況でした。そのような中で、農家の生活改善というのは何を目的にしたらいのかと疑問に思っていたころでした。

青年海外協力隊には途上国への技術移転をもとにして自国の自立をサポートするという意味合いもありました。遅れているから何かできるとは思いませんでしたが、「もう一度戻ってみたい。近代化前の生活様式の何が問題だったのかということをもう一度原体験してみたい。」ということで応募した協力隊がたまたまタンザニアと結びつけてくれたわけです。

(4) タンザニア30年

そしてタンザニアに来て、非常にホッとしたというか、故郷に帰ったような安心感を得ました。非常に不思議だと思ったのは、北海道は開道100何年で非常に歴史が浅いのですが、その時の農家の生活と、人類の発祥の地といわれるアフリカの特にタンザニアのずっと長く深い歴史のあるその村との生活が非常に似通っていて、なぜ日本はこれだけの急激な変化についていったのか、そしてなぜタンザニアは悠然とそのまま繰り返すことに意味をもっているのかということでした。

その中で、30年間農業省の職員として、あるいはNGOの活動を通して、あるいは農家を営みながら感じたことは、発展の嵐が日本にもタンザニアにも吹いて来たのですが、日本の場合はその嵐の中で遅れていることに対する劣等感というか、ついていこう、追い越そうと真剣に走り続け、タンザニアの場合はあるがままの状態に対して、経済の物指しなどでよそからいろいろと言われても、聞き流すというか、悠然とそのままの生活を続けているという違いがあるということでした。走って追いつき追い越したことでいろいろな問題が生まれてきたので、本当に走り続けた私たち日本の方が良かったのか、それとも遅れているといわれてもまだ悠然としている、その中に良さもあるのかなという感じがしました。

なぜ変化についていけないのかと言うと、タンザニアの場合はとにかく共有する、あるいは分け合うということが基本となっています。小さい子供たちが何かおいしいものを持っていると、躰の一つとして、大人がその持っているものを子供に「ちょうだい」と要求します。そしてサッと出さなければケチです。基本的な躰として、持っている物を出さないということは生活の中ではあっては困ることなので、持っている物をサッと出せるようなそういう躰をします。お互いにあるときは出す、ないときはいただく、そうやってモノが蓄積しません。ある人は分ける、もらう人はもらいっぱなし。

(5) モノを分ける世界

でもいつか自分も人より持っている時には分けられる。たくさん持つことに誇りを持つ

のではなく、持っているたくさんの人に分けられるという立場に満足感を持っています。したがって、今求めている近代化、モノを資本としてそれに拡大再生産をしていくということが非常に合わないのではないのでしょうか。例えば、今年はどこかの場所で不作だったとしても、どこか他のところがあれば、それが何らかの形で、親戚あるいは知人を通してそれでまかなっていくという拡大家族の関係が日本とは非常に違っています。

いとは兄弟と同じくらいという感覚で、おじさんにそれなりの経済力があれば他の甥っ子、姪っ子みんな学校にやってもらえるというように、モノが高い所から低い所へ流れていく、そこで平均化されてしまいます。したがって変化が求められない。変化を求めようとするれば、近代化を求めようとするれば持ち抱えてしまわなければいけません。みんなに分けていたのでは成立しません。そういった点でなかなか変化しにくい状況があるのではないかと思います。

キロサでの経験ということに戻りますと、いろいろな所から生活改善なり農業改善のために具体的なアイデアが出されますが、“お客さん”が持ってきたものは、一応受け取りはする、拒否はしないけれど、帰ってしまうとまた元に戻ってしまうという例が非常にたくさんあります。例えば、キロサの場合5つ程のサイザル畑があり、各農場は3,000ヘクタールあるいはそれに匹敵するほどのかなり大規模なものでうめられていて、それが作業の中心になっていました。しかし、10年ほど前から少しずつ減ってきて、今は影も形もなく、元の原野に戻りつつあります。1973年に（青年海外協力隊として）私が来た時、あるいは農業省から派遣されて、タンザニアサイドのコーポレーションのあるタンガの農場にいた75年～79年までは、タンザニアサイドのコーポレーションは何千ヘクタールという単位の農場が72あったはずですが、その時は公社という感じで、今は個人の経営者になりましたが、サイザル農場自体はほんの少数しか残っていません。

（6）援助の中で

キロサの場合は、そのサイザルをできるだけ加工したらいいのではないかと、付加価値をつけることによって経済的なレベルアップを図ろうと、確かヨーロッパの国からの援助によりカーペット工場を約10年かけて作ったと思いますが、その10年後には影も形もありません。乳牛牧場も約10年かけて完成しましたが、その10年後の今は影も形もありません。

例えば、牛の場合私たちは牛乳をよりたくさん出す乳牛を良しとして改善してきました。改善することを目的とした家畜の場合、よりたくさん牛乳を出すということは当たり前のように思います。

しかしこちらでは、子牛に飲ませて余ったものをいただくという感じで、それが5であろうが10であろうが、余ったものをいただきます。ただ、産業としての畜産となるとより多くの牛乳を出すために改良されていき、繁殖あるいは子供のためにある牛乳をそれ以上に出すものを良



写真 111：椿さんの農村改善作業所

しとし、中にはたくさん乳牛を出すよう乳房が必要以上に大きいつまり奇形が現れます。農産物に関しても同様に、より多くの産物を得ようと思うと、次の世代を作るための種が、そうではなく、よりたくさんの実をつけてくれなければいけないということで、全体の植物からすると奇形、繁殖器官をより発達させるということを求め、結果どうしても弱いものになって、農薬のお世話にならなければいけない。そういう悪循環を繰り返しているように思います。

(7) 生活の中から考え直す

また、例えば環境保全という意味で、薪を節約するようにと改良かまどが普及されますが、セミナーや勉強会に出席してちゃんと作るのですが、なかなかそれが受け入れられません。なぜかという、こちらがテクノロジーをもっていく場合、できるだけ熱を節約して少しの薪で煮炊きをできるようにと思い、その熱を効率よくするためにふさいでしまいます。3つの石があってそこで煮炊きをするのが基本的ですが、そうすると熱効率は非常に悪くなります。しかし、台所の中で3つの石を使って煮炊きをしている場合には、灯りにもなる、寒いときには暖房にもなる、その灯りを求めて子供たちやお母さんが一緒にそこに集まることによって団欒の場にもなる。

そういう多目的な事項であるということと、もう一つは、タンザニアではお客さんが来たいつでも出せるように、フレキシブルでいなければならないので、かまどを作ってその家族の量だけ入れるスフリアンにセットしてしまうと、たくさんお客さんが来た時にサッとそれを広げるわけにはいきません。3つの石というのは非常に基本的で、フレキシビリティでタンザニアの生活を象徴しています。いつでも場所は動かせる、お客さんの数にあわせて石を広げればそれだけの準備ができる、というような多目的であるということ抜きにして熱効率だけを主張すると、最終的には認められません。

あるいは、綿の栽培を普及する時に農業の技術者は、混作は虫がついたりするので拒否して単作を奨励しますが、農家の人たちは食べるものも併せて作っています。いろいろな作物を混ぜて耕すことが基本になっているので、単作は非常に不自然に感じられ、なかなか認めません。調べていくと、バランスをとる、食料もとれるし関係作物もとれるなど混作にもそれなりの意味があります。このように基本的に地の中にある混作にはそれなりの意味があるということを理由もなく主張し続けているようなところもあると思います。」

(8) 樁さんを通した日本の田舎学とタンザニアの田舎学

樁さんは、2007年の7月～8月にかけて、日本



写真 112: 奈良でのワークショップ 1



写真



写真 114: 宇都宮での有機農家との交流

タンザニアの間で行われているフェアトレード事業の進展のために日本に来日するとともに、日本の各地の支援地の有機農業・自然農法の実践者をおとずれるとともに、“あるもの探し”を軸にその交流のためのシンポジウムなどをおこなった。これは奇しくも日本とタンザニアの新たな志向性を有する「田舎」同士の交流ということを実現することにもなった。

奈良では棚田の保全を行っている星野氏のグループが椿さんを迎えてくださり、その案内で自然農法家として知られる川口由一氏に会うことになった。また福井の越前や芦原では有機農業でトマトやメロンを作る農家の人達と交流を行った。一方宇都宮では、アフリカ的な混作農業をはじめている津田さんや有機農業を軸とした産直農業を実践しているベジファーム中屋氏との交流を行った。また北海道では、ガイヤの農園で交流会を、熊本では地球緑化の会との交流事業を行い、自然農法家の片野学氏との交流も行っている。

いずれもが現代の日本の中で近代農業のひずみを受け止め、それを乗り越えようとしている人たちだ。都市化・工業化という近代化のパラダイムを捉え返そうとしている人たちだといってよいだろう。このような意味で現代の田舎学構築の先頭に立ちうる人でもある。こうした人たちとの交流を踏まえてアフリカ農民・農業の視点からの感想は興味深いもので、日本の有機農業や自然農法は「とてもがんばってやっているが、とてもハードで大変に見える」というものであった。



写真 115：宇都宮での研究会

アフリカの人と自然の中では、融通無碍な関係が広がり、土地に合わせて作物や農法を変えていくということが存在し、そんなに多くのものを土地から取り出そうとはしない。あまりが頑張らない農業だし、スローライフの世界がそこに広がる。逆に言えばそうしたスローライフの世界の中に有機農業や自然農法も埋め込まれているともいえる。しかし日本の有機農業もあえていえば何もしないことを主張するような「自然農法」どこかピリピリとして緊張を強いる。そしてまた農業が社会の中で置かれている世界が異なる。

日本ではすでにほとんどがグローバル化した中でそれに抗した動きとしてこうした農法への志向もあるが、それは大海の島のように孤立して、しかも商品経済との関係をしいられるなかで展開しているが、アフリカ農村はまだ市場経済が及ばない世界であり、有機農業や自然農法も豊かな自給世界の中でありのままのものとして行っている。

アフリカの農業の世界では土地を使ったら休ませ、そこを過度に利用することはない。人間の世界でも栄養剤やカンフル注射をして体力を保つというのがあるが、基本は疲れたら体を休めることだ。そのような中での人と土地との関係を椿さんは次のように語る。

「日本の場合は、畑はあくまでもそこで、山の肥料を運んでくる。ただ向こうの場合は、勝手に生えてきた草なり、枯れたものを、そこに木



写真 117：札幌でのワークショップ

が生えてきたらその木を使って、運搬作業なしで、人が動いていく。運搬作業なしで、牛が動いていく。畑というか土地にあわせて人が動く。自由なときはそれができた。

それができなくなって、定着しだすとまた・・・消費量がごくごく少ないからそれができるけど、こんだけ・・・それで物が必要なんだという前提になったら・・・生産するものと消費するものとのバランスがものすごいかけ離れて、距離的にも、そこで加工・運搬、そういうところで・・・入ってくるからね。エネルギーがすごく使われないと満たされない。」

日本の有機農業世界とアフリカの自然農法の世界の両方を見据えてやってきた椿さんを通して 21 世紀の「田舎」のあり方と田舎学が取り出していかなければならないことがらを考える時、これまで世界の中で遅れた世界と考えられてきたアフリカの中に、むしろ一周遅れの最先端として近代を乗り越えようとする今日の田舎学が構成しなければならない多くの「あるもの」が浮かび上がってきたともいえる。

第6章 遊作と現代の田舎学の可能性

杉村和彦 増田頼保

1. プロジェクトの限界とプロジェクト後の展開

1) プロジェクトの限界

(1) プロジェクトの主体と助成

このプロジェクトは、自然エネルギー、地域経済活性化、住民発の地域自立を基本理念とし、これまでにない活動分野を切り開こうと発足した。こうして集まったメンバーで残しておきたいものや、自慢できるものを羅列するなどして話し合う中で、『学び伝える新しいライフステージ』、『匠の心の伝承』、『ものづくりで遊ぶ遊作の里』がキーワードとして出てきた。

本研究の目的は、農村の地域資源、文化資源を現代的に生かし、21世紀における福井県地域ブランド創造活動の推進をめざす、今立 古民家・匠・ロングステイプロジェクトの活動と¹⁾の活動と経験を事例として検討し、現代社会の中での地域社会と地域文化の存続のための「田舎学」のあり方を考えていくことである。とりわけ今立を中心に、グリーンツーリズムを基調とした、都市と農村のインターアクションの中での開かれた農村像とその社会・文化の存続の可能性を検討し、それを通して以上の課題に迫ろうとするものである。

本研究で中心的な研究対象とする今立 古民家・匠・ロングステイプロジェクトにおいては、「古民家」というこれまでは捨てられていた資源を活かし、また和紙などの伝統技術の現代化を図ろうとしてきたが、とりわけその中で生まれた概念としての今立の「遊作塾」は、「匠」の創造的な伝承の場として、またその場を通して「人と人」のつながりの回復を図る、興味深い展開をしていた。

しかしながらプロジェクトの主体となった実行委員会のメンバー事業の基盤となる行政側の視点には、活動の展開の中でいくつかの大きな齟齬が現れてきた。その問題の一つは事業全体をどのようなものとして見なし、事業の成果を評定するのかということにかかわる問題である。福井県が地域ブランド創造活動を予算化して助成金を出そうとした背景には、福井県の観光事業の遅れや、知名度の低さの中でいかにしてそういう状況を打破していく起爆剤として多くの県外者がこの事業を通して福井県に訪れるようになるかというようなことが問題であった。

その中で今立 古民家・匠・ロングステイプロジェクトとしては、その事業の内容に関しては伝統的な古民家や匠の存在を前面に押し出して、しかも長期滞在型のグリーンツーリズムを目指していたものであるから、その出発点において、少数のリピーターの形成を軸として、しかもそれが田舎に定着するようなプロセスを想定し、それによってこれまでただ捨てられるだけの「宝」だった古民家が利用され、それらが財産として蘇ってくるということが想定されていた。

(2) 助成する側の視点

それに対して県の側の視点は、ロングステイプロジェクトに託されたこれまでの観光事業と異なるリピーターを主体としたグリーンツーリズムの意味内容をあまり評価せず、あくまでも観光事業の一つとして位置づけ、量的な入り込み客の存在を成否判断の基準としていた。このような視点からは、都市民と農村民が長期の交流のプロセスの中で生み出していく関係性やそれが財産として農山村の次の世界を作り出していくというような視点は持ち得ない。実際のプロジェクトは、こうした行政側からの指導や方針の督励にも関わらず、基本的にボランティアなかたちで出発した実行委員会がこれまで捨てられた農山村の資源を蘇生させ、それに関わる技能知を復権させるような活動を展開していったが、短期

¹⁾ 福井県のブランド創成事業として2004年度から三ヶ年にわたって実施されている。

の期間の中では、そうした事柄へのファン層を確実なものとする事ができず、当初 3 年計画だった事業も行政側から 2 年に縮減されることになって、活動大幅に縮減されることになっていった。

(3) 活動主体の視点

ここには、NPO を主体に立ち上げた事業として以下のような限界が存在した。一つは財源的な側面で、行政サイドからの独立した活動をするには自主的財源が乏しく、主体的な活動に大きな制限が加わったことである。二つ目はグリーンツーリズムなどの長期の交流によるリピーターの形成というような視点からするならば、期間が短く活動の内容の深化発展を熟成させることができなかつたことである。三つ目はこうした活動を地域内部にあってしっかり支える面的な側面での協力関係が必ずしもうまく展開していかなかつたことである。第 3 章ですでに述べたように、今立は地元学や田舎学のさきがけともいべき経験があり、そうした人脈はリーダーであつた増田を中心に一つのまとまりを持ったが、それらがより広い層の中で理解されていくためには、もっと長い長期的な視点が必要であつた。

村の中では、すでに述べたように、遊作塾の原型となるような「あるもの探し」とその芸術的展開がこの地を訪れた河合勇とそのもとに集まつた当時の青年たちの手でなされ、それは当時梁山泊の趣を呈していた。今回のプロジェクトのリーダーの増田やその夫人の智雪氏もその活動の中で育つたのであり、今立はその時代に育つた若者たちが今や地域の様々な場においてリーダーになっている。またこの活動を受け継ぐかたちで 1990 年代の初めには村づくり運動として結い村構想事業が起こり、福井県の農村部の中にあつては、環境問題などについても卓越した視点を持った、先進的な村づくり運動を展開している。

森のエネルギーフォーラムによる今立の中での地域資源調査は、こうした事柄を引き継いだ「地元学」でもあつたが、こうした活動展開の経験を持っていることによつて、活動が早く動いたことは間違いない²。しかしそれでも地域全体の押し上げというものには程遠く活動の限界を作つていった。しかし以下に述べるように、県の事業が終わったあとも主体的な活動は古民家再生事業を中心に行われ、またこの古民家を拠点として、古民家カフェが定期的に行われ、都市と農村をつなぐ「ぶらっとホーム」としての役割がより高まつてきている。

ここではまず、プロジェクト後の事業展開と今後の構想をリーダーの増田氏にまとめていただいた上で、遊作塾の活動の中に現れた現代の田舎学の構築というものを考えていく上での可能性についてまとめていくことにしよう。

2) プロジェクト後の展開

(1) 困難な現状

このプロジェクトは、地域の伝統ある越前和紙の技術を継承する人間国宝を始めとする、無形文化財、伝統工芸士の人たちや、宮大工や大工棟梁を生業とする人たちを中心に、農業や食に関わる人、音楽や絵画、デザインなど様々なジャンルの人との交流から、別の世界へ誘う飛躍を期待して進められたのであるが、遊作塾が製作した DVD で「ジミ・アワタベ」こと辻守氏が言っているように、「誰かが中心で動かしているのではなく、集まっている全員が全員を發揮できる」というような関係を遊作塾は実現してきた。

きわめてライブ性が強くその場に居合わせないと共有体感できないものが「遊作」であり、思いがけない発想や予想しなかつた展開を生む要素がこの遊作には存在しているからこそ、その広範囲に亘る活動が一言で言い尽くせないことにより、焦点がはっきりしない説明に終始し、あまりにも複雑な関係性を言葉では伝えにくいことによる弊害が出てきている。また、地域資源・地域文化を調査している過程で発見した「妻入り卵立つ」のある

2 この事業の短期間での準備と展開に関しては、<増田>の今立におけるネットワークによるところが大きい。

古民家を NPO 法人で購入してここを再生の第二の拠点とした。しかし、固定資産を取得し維持するにはかなりの資金が必要になってくる。どうしても、会費収入だけでは無理で、様々な助成を当てにしなければ立ち行かない状況である。この古民家は横浜からアメリカへ輸出するきっかけとなった来歴をもつ家だった。しかし、40 年以上も放置されていた古民家に、地域住民が集るようなまちづくりは 1 年や 2 年ですぐ何とかなる訳ではない。むしろ、住民不在で毛嫌いされているほど地域に迷惑とまでは言わないまでも、幽霊屋敷などと煙たがられていた現状があった。

しかし、2006 年 NHK の生放送でこの活動が全国に放送されて以来、地域の眼も少しずつ変化してきたように思われる。

(2) 具体策

この古民家に私たちが手を入れることで、地域の住民に対して、若者を始め、お年寄りや子供たちが気軽に集ってくる『ぶらっとホーム』の場として、地域の理解を得やすくなるように努力し、憩いの場になるよう心がけようと考えている。私達は、越前和紙の里に代表されるものづくりの匠の心や、古民家に集約された技や伝統を見つめ直すことで、新しいライフステージを築きたいと考えている。また、これらを地域の財産とし、そこから新しい“地域づくり”を目指している。地域と密接な関係を築くために必要な経済的応援を求めている。もし応援していただけるのであれば、以下のような活動ができるようにこの古民家に事務所を開設して地域の『ぶらっとホーム』としての機能を持たせるよう活用してゆきたいと考えている。

1. 和紙の里を巡る一つの観光ルート開発を行うことができる。
2. 地域の文化や人的資源を再発掘し、協力を要請することができる。
3. 和紙組合や教育委員会、地域自治会などと共に連携活動を深めることができる。
4. 小学校・中学校などに働きかけフィールドワークの拠点活動を行うことができる。
5. 環境芸術家や環境活動家などと連携して、和紙の造形作品を中心に水環境の大切さを訴えることができる。
6. 地道な地域への働きかけを行うことができる。
7. 公民館活動とは違ったものであるが、地域のシンクタンク的な学習センターとなるべく知を集結することができる。
8. 古民家でフォーラムやセミナーの開催を行い、地域の歴史的文化などを共有することができる。

3) ぶらっとホーム

伝統的民家(妻入り卯立つ)の保存と社会福祉目的に利用するために購入した古民家を自分たちの手で約 3 年かけて掃除・整理してきた。今年末には、登録文化財として越前市より福井県庁経由で文部科学省に推薦してもらうことになったが、老朽化による雨漏り、汲み取り式の便所や、薪炊きのお風呂、薪のかまどなど、健常者でも利用しにくい施設でもある。そのため、文化財としての形状を維持しながら、建物の耐久性を高めるとともに、社会的弱者をはじめ地域住民が気軽に立ち寄れる地域の「ぶらっとホーム」として改修整備する必要がある。若者を始め、お年寄りや子供たちが気軽に集って来れるように、地域の「ぶらっとホーム」となる目標を当初から掲げて取り組んできた。

施設の改修によって、文化財の保全を行い、建物の耐久性を向上するとともに、現在 2 ヶ月に 1 回の割合で開催している「古民家かふえ」が毎週末開催でき、地域のお年寄りや障害者・若者・子供たちなど社会的弱者の拠り所になれる。要介護者等の社会的参加を促せる取組みをこの場所で実現したい。

2. 現代の田舎学の射程とその担い手

1) 田舎志向と現代におけるライフスタイルの転換

(1) 現代の田舎への志向性

現代の都市住民の田舎への志向性は、すでに序章でのべたように、グリーンツーリズムやJターン、Uターン、Iターンというような現象の中に如実に現れている。こうした人の中には都市の生活の「癒し」として、また都市とは異なる「豊かさ」を求めて自覚的に参画し、深い関わりを作り出すとともに、中には農業者に自らもなろうとする者もいる。グリーンツーリズムに参加している人を見ても、リピーターの人の中には、現代社会の中で自然や農村を志向する深い動機を有している人もたくさん参画している。こうした人の中には都市の生活とは異なる「豊かさ」を求めて自覚的に参画し、深いかわりを作り出すとともに、中には農業者に自らもなろうとする者もいる。

現代にはかつてのように農村から都市への人の動きだけでなく、確かに都市から農村への流れがある。ここにはすでに述べてきたように、現代の田舎学の射程はポストインダストリアル社会のありようをにらんだ一つの価値世界のあり方のゆらぎを深く連動して生み出されていくものと見ることができるだろう。

このような「田舎」を志向する人々の動きの中で、興味深いものの一つは生活スタイルのあり方の問い直しとして、すでに多くの人々によって行われ始めている生活のあり方だ。近代社会の農村に対する視点は今日でもなお、農民はこれまでの自給的なあり方をやめて、それぞれの農民が農業者として産業を担っていく専作的なものになっていかなければならないという考え方であった。そこでは、自給志向は克服すべきことがらであり、兼業農家はそういうことができない半人前の農業者と位置づけられてきた。しかし現代の農村ではむしろ兼業形態の方が一般的であり、むしろ安定的な生活を提供している。そしてこうした生き方をむしろ肯定的に捉え、むしろより未来的な積極的な生き方として捉えようとする視点が新規参入者や都会からのリピーター達の中に育っている。

たとえば茅葺の里として有名な京都府の美山町には、このような都会からの流入者が多い。全人口の約一割が都会からの移住者で、その中には一定の現金収入の職業を持ちながら一方で小さな自給的農業をしている人が多い。このような新しいライフスタイルを有する田舎志向人を塩見は「半農半X」という言葉で捉える³。

(2) 半農半Xというライフスタイル

塩見が提唱する「半農半X」という生き方は、半自給的な農業とやりたい仕事を両立させる生き方であり、「自ら米や野菜などのおもだった農作物を育て、安全な良材を手に入れる一方で、個性を活かした自営的な仕事にも携わり、一定の生活費を得るバランスのとれた」生活を目指す。これは一つの兼業形態であるが、産業社会の形成過程に乗りながら企業人としての農業形態からズレたものとして自らを家付きのサラリーマンとして位置づけ豊かさを享受する者達とは異なる。半農半Xとして生き始めた人は、どんなに小さな経営でも心は農業者であり、そこに時代を乗り越える生きがいを持ち、しかもなお産業社会とつながりながら生きざるをえない者として自らを位置づけ、できる限り個性を生かせる仕事をやっていこうとする。

半農の「農」は自らの生活を守る砦で、エコロジカルな農的生活のベースとなる。「X」は使命(ミッション)をさす。自分の個性、特技、長所、役割を活かして社会へのなんらかの貢献を目指す。このミッションとしての仕事においては、できる限りこの時代を超える仕事をそこに引き受けて、しかも収入が得られるようなものを生み出していこうとする。

具体的には、塩見が具体的な事例として出すNさん。1999年秋に美山町に移住してきた⁴。彼女は30代前半で、字幕翻訳をしながら田んぼは二反、畑は三畝を耕している。そして

³ 塩見, 2002

⁴ 塩見, 2002:28-33

Nさんは自分の生き方をこの半農半Xという考え方と重ねて次のように語っている。「天職と信じている職業をまっとうすることと、田畑を耕すことは必ずしも相反することではない。長とかかわりながら、プラスアルファで自分の能力を発揮できる分野を持っているとしたら、実はこんな幸せなことはない。『X』は変数で、無限に変わる。人によって違うから『X』だし、同じ人間でも真の使命に行き着くまでに、さまざまな紆余曲折があるかもしれない。私の場合、その『X』がたまたま字幕翻訳だった。『半農半X』に出合って、私はやっと自分の存在に自信が持てた。私は私のままでいいんだと初めて思えた」⁵。

その中で金や時間に追われない、人間らしさを回復するライフスタイルを追求するというわけだ。彼らは都会から離れて<土>に着こうとする。<土>への接近の中に次の未来を読み取ろうとしている。しかし彼らが着こうとする<土>は、<農業生産>という場を越えた豊かな価値を語り始め、伝統的農業世界への回帰を意味しているのではない。そこに生まれる世界は様々な「X」を持ち、様々な希望を持つ異質な人々が共存する場である。そうした人達がどのような場の中で共存していけるのか。塩見がそうした場のあり方の一つとして、「分ける世界」「シェアリングの世界」を語りかけるのは興味深い。

このような世界像は、現在ある田舎の中に存在しているわけではない。田舎の中にも田圃や畑の一片に至るまで、所有の世界はいきわたり、持つものと持たないものとの間の人間関係こそが中心的に社会を動かしてきたのも日本の農村の中に作られてきた「田舎」であり、今日でも都市からの参入者が田や畑を手に入れ、「村人」になることは大変難しいことだといわなければならないだろう。

それゆえ塩見が語る「分ける世界」「シェアリングの世界」は、新しい田舎の創造とともに作られゆく世界のあり方であるが、「田舎」に託された価値の内容としては極めて重要なことだろう。「分ける世界」「シェアリングの世界」は他者の排除ではなく、他者との共存のための重要な道具である。「シェアリングの世界」の中で競うあう世界が溶解し、さしあたり金を持たなくても生きられるような社会があれば、確かに「田舎」志向の人が求めているスローな社会への一歩が始まることにもなる⁶。

2) 価値の転換と現代の田舎学

(1) 現代社会における深い価値転換

現代の田舎学は現代社会における深い価値転換ということがらと共鳴しながら、そこに姿を現してきている。それはこれまで遅れたもの、不便なものとして一義的に見下されてきたものの意味の再定式化ということがらを内部に含みこんでいる。それはすでに冒頭で述べたような、一周遅れの最先端という現象が、現代の田舎の中に広がってきている。世界遺産とまでは行かないまでも捨てられた古民家に新しい意味を与え、それを再生産していく行為はそこにこれまでの社会になかった新しい価値転換の萌芽がある。

田舎志向を有する者にとっては、捨てられた田畑も雑木山もまさにそこから新しい夢の広がる資産だ。納屋の片隅に捨てられた雑木や田植えのために使われる道具も都市民との交流のための道具でもある。田舎の中に転がる古い道具に光が当てられ、命が吹き込まれる時、歴史に生きたモノたちは、そこに様々な物語をつむいでいく。

このような<田舎>の世界をめぐる価値転換について興味ある事柄は、京都府の旧美山町の農村に市民農園を開き、グリーンツーリズム行ってきた大野の次のような言葉だ。大野は田舎の持つ「不便性」の便益を次のように語る。

「(田舎は)交通距離としては不利な条件にあるが、このような『自然の価値』においては逆にそういった場所であるからこそより空気や景観は美しいのであり、農業+としての価値は大きく高いことになる。」

それゆえその高い価値だけ都市近郊の農園より、江和ランドの貸借料を高いものとして

5 塩見,2002:32

6 塩見,2002:136-138

設定することの妥当性が出てくる。

「・・・だからそういう意味では、都市から離れば、離れるほど、こっち（自然的価値）の付加価値は市民農園の中に入ってくると言うことや・・・」⁷。

<不便性>そのものを主体的に位置づけ、そこに意味を込めるというその視点は、一周遅れの最先端という価値の反転を展開している、「田舎」の現場の様態を伝えるものの一つであろう。都会からの田舎志向の人達が持つこれまでとは異なる視点、その新しい価値を受け止めてこそ、そこにはじめて現代の田舎学は出発する。

（２）グリーンツーリズムの起業者の視点と<田舎>の具体的生活

大野の事業が、ムラに住む人にとっては全く理解をこえるものであった。ムラの内部の常識から見ると、彼の思い描いた<妄想>はそれほどまでに理解を越えたものであった。ムラの人々が理解してきたことは、ムラの資源はそれによって売れるべきモノを作り、それを商品として販売し、それが売れてこそ現金になるものである。何もせず、それを美しい、良いといってくる人を待って金を稼ぐということは、これまで思いもかけなかったことといったらよいだろう。このように村の資源に別の価値を見だし、それを売ることができるという立場に立った段階で、彼は精神的には完全にムラのこれまでの常識からの逸脱者になったのだといったらよいだろう⁸。

大野に対してこのような視点の転換をもたらしたものは、都会からやってきた高木という一人の芸術家であり、中学校の教員であった。高木は大野が中学校だった時に美山町の知井地区にあった八ヶ峰中学校の美術の教師として赴任してきた人のことである。大学出たての若い教師であったが、それまでの教師とは全く異なる教師であった。赴任してきたそうそう、還暦の時に着る、赤いちゃんちゃんこのような服を着て来るので、村の人々も呆気にとられて眉をひそめたという。しかし彼は不思議と生徒の心は掴み、圧倒的な人気があったので、村人も高木のことを叱正することはなかった。高木は、美山町の自然の風景、ムラの景観をたくさん描いている。高木が教えてくれたものは、まさに「自然の価値」という今まで自分がそこに生きていた美山や江和の自然そのものに宿る価値であった。高木が八ヶ峰中学校にいた期間は3年間あまりに過ぎないが、高木は村人に大きな印象を残し、とりわけ多感な青年達は、高木の考え方と生き方に傾倒した人が多かったという⁹。

ムラの世界はある意味では上意下達の約束ごとにながらめになった世界である。ムラの人々があまりにも「当たり前」と考え、疑ってこなかった生き方や考え方を、高木は、それらは「疑いうる」ものであるということを経験した村人の身近な世界で見せたのかもしれない。秩序を重んじる立場から見れば、高木は煙たい存在であっただろう。高木は、美山町を去った後もある意味で、激しい生き様を示してきた。日展に何度も入選する実力を持った人であったが、その権威的な体質になじめず、日展の会員を辞して在野の芸術家として生きていった。そうした高木自身の生き方を支えたいいくつかの本を、大野に薦めてくれた。大野はそれらの中でも司馬遼太郎の『竜馬がゆく』が好きであり、また高木はミヒャエル・エンデの『モモ』や宮沢賢治の本を読むことを薦めてくれた。現代の田舎志向の人々の心の底にある価値転換を受け止める起業家の誕生のためには、現代の常識を超えようとする深い覚醒が起こっている¹⁰。

（３）<田舎>人の田舎再建のゆくえ

興味深いことは、今立における今回の資源価値の転換を目指すプロジェクトもその淵源を辿っていけば上記で述べたような村人の内部の精神的な覚醒や価値の転換という事柄と

7 杉村, 鹿取, 2001:186

8 杉村, 鹿取, 2001:177-178

9 杉村, 鹿取, 2001:176

10 杉村, 鹿取, 2001:178-179

極めて類似した経験を見ることができることだ。第三章で見たように、遊作塾のリーダーである増田氏には外部から農村にやってきて村人の心を変え、様々な村人の芸術活動を生み出すアジテーターとしての河合勇との出会いがある。河合は今立という場においても上意下達のがんじがらめの世界に風穴を開け、今日言うところの村の資源のあるもの探しを始め、村の誰もがそれぞれ芸術家であることを理解させた。

<芸術活動>という事柄に限定された一つの活動ではあったが、誰もがそこに参加し、小さいが自らの<創造>活動を可能にする場を開き、とりわけ村の青年達を鼓舞したのである。そのような経験が、今立において、1990年代において、村の新しい環境の世紀を生きるための村づくりの構想を考えるための結い村研究会を成功させることを可能にした。今立 古民家・匠・ロングステイプロジェクトが中心にすえた「遊作」塾は、このように、村の青年達と一人の芸術家との交流の中で生み出され、経験された一つの価値転換のための活動が、その背景として下支えしている。

このように今日の近代を超えようとする<価値転換>をうちに秘めた田舎志向の動きは、<近代>が<伝統>に戻るということでは解決し得ないものを有しており、<田舎>人そのものが、こうした新しい<田舎学>の成立の中で自らの生活の場を内省し、これまで作られた「がんじがらめ」の村の精神を一度は脱構築し、新しい場へと再創造するような経験が重要となってくる。21世紀の田舎学がそこによって立つ場は、<田舎>に住む<田舎人>の心の中にも、また<都会>に住み、<田舎>を希求する人の中にもそれぞればらばらなものとして成立するわけではない。重要なものは、今始まっている小さいが<都会>と<田舎>という異質な、ある意味では対立するしかない価値のせめぎあいの中にこそ、もっとも重要な契機があり、不協和音を生み出し続ける不器用な対話の過程こそが、21世紀の<田舎>再建に向かうための培地として主題化されていかなければならないだろう。

3) 現代の田舎学の「場所」とその担い手

(1) 田舎志向者の類別

このように今日の田舎学は、都市と農村の関係、しかもその中で都市から田舎へと向かうベクトルを媒介にして生み出されていくが、その田舎を志向する新たな流れの中にもいくつかの層がある。こうした田舎から都市へと訪れる人の田舎志向性の強度の差異は、さしあたり以下のようにグリーンツーリズムの中でのリピーターのあり方の中に現われる。このことを例えば先にあげた大野の市民農園をめぐるグリーンツーリズムの事例の中で見てみよう。

一つは、ホストとほとんど具体的な接触がないような人達である。このような人達の中にはとくに自然や農村に関心があるわけではなくとも宿泊料や気安さで選択している場合もある。それゆえこういう層とは大野も「商売と割り切っただけつきあう以外はあえて繰り返して来てもらおうとは思わない¹¹。むしろ意識的に深くつきあわないようにしている」という。その中にはしばしばマナーを欠いた利用をする場合も多く、またエコ・ツーリズムをベースに置こうという大野の考え方とは相反して、「施設の不便さをあげつらうものには遠慮なく注意を与え引き取ってもらうようにしている」という。そういう客も客には違いないが、まず人としてのつきあいがあるというのが大野の考え方である¹²。

これに対して江和ランドを訪れる人の中には、都市に生きる者として何らかの「痛み」や農村に駆り立てる深い動機を持っている人達がいる。たとえば子供が喘息などの病気を持ち、本当は空気の良い農山村で育てたいのだが、仕事から離れることができないので、多くの人と共同のセカンドハウスを持つというような意味で江和ランドを生活の中に位置づけようとしている人である。また本当は農村に住み農林業で生活を立てられたらいいと考えているのだが、今のところ適当な場所もないのでそうした目標の過渡的な選択として

11 杉村,鹿取,2001:181

12 杉村,鹿取,2001:181

江和ランドに通おうとしているのである¹³。

(2) 深い関与をするリピーター

一方江和ランドを訪れる客には大野とコミュニケーションを持つリピーターという以上にすでに江和ランドに深いつながりを持ち、客としての存在以上にボランティアとして経営を支える人達の層が出来始めている。たとえばNHKのディレクターのO氏、農園の参加者であるとともに江和の自然と遊ぶ人の一人である。昨年からは夏の川づりを始めた。年に20回以上は訪れて滞在して過ごす。彼は休みの時には頻繁に訪れ、夏のシーズンなどの忙しい時などには、「大野さん少し手伝いましょうか」というかたちで客のための配膳や後片づけなどを手伝ってくれるという。

このような江和ランドの最も内側にいるゲスト層に対して大野は、「この仕事は彼にしたら遊びなんです。例えば、あそこの主と一緒に仕事が出来るというように、江和ランド作りに自分も一役かっていることを密かに誇りに思っている」と分析する。このようにこれらの人はこうした江和ランドを核とした、自分にとっての第二のふるさと作りを一つの趣味として生きているのである。そしてホストである大野も、これらの層を「客」というよりも一種のボランティア、準スタッフとしてとらえている¹⁴。

すでに前章でみた安心院の親戚券などは¹⁵、こうした中でも第三番目のカテゴリーを育てようとするものであるということが出来るだろう。これに対して農村の活性化やそのための収益の増大を一義的に目指すようなグリーンツーリズムの中では、観光名所や国立公園を目指すのではない普通の農村への訪問であるとしても、さしあたりそれを観光としてとらえ、最初のカテゴリーの客層の増大を目指す論点を掲げてきた。都市住民に広く読まれる田舎雑誌は、一義的にこうした観光的グリーンツーリストの農村体験を対象として、記事内容が特集されている。そこでは癒しを提供する田舎暮らしのしんどさや苦しさは隠されている。

(3) 地元学の主体との差異

一方これに対し農村を舞台として、その住民とともに展開した地元学は、あくまでも都市住民とは異なる農村の人の内省の試みであり、その枠組みの中からは基本的に排除されている。地元学の提唱の出発点となった吉本によれば、地元学とは、「地元学とは、郷土史のようにただ調べて知るだけでなく、地元の人々が主体になって、地元を客観的に、地域外の人々の視点や助言を得ながら、地元のことを知り、地域の個性を自覚することを第一歩に、外から押し寄せる変化を受け止め、内から地域の個性に照らし合わせ、自問自答しながら地域独自の生活(文化)を日常的に創りあげていく知的創造行為である」と地元人の自覚過程を重視する。

この地元人による地元の自覚過程を吉本の言葉で「土」の地元学とするならば、地元以外の人々が参加する過程を含んだものが、吉本の地元学の中では「風」の地元学だ。そのことを次のように述べている。「地元の人たちによる地元学を「土の地元学」とすれば、「風」の人たちの地元との協働による創造行為を「風の地元学」と称することができる。「風＝外の人たち」は、変化や情報、知的刺激をもたらす、思いがけない地域の資源や力に気づかせてくれるなど、その役割は大きい。また、風になる人は地域の外の人とばかりとは眼らない。集落コミュニティを越えればお互いに風の人となる」¹⁶。

吉本の中でも異邦人としても外来者が知的刺激をあたえることの重要性は位置づけられてはいるが、しかし地元学に対してそのもつ意味はあくまでも「土」の学の補完としての

13 杉村,鹿取,2001:181

14 杉村,鹿取,2001:182

15 石山による本報告書第4章を参照せよ。

16 吉本,2001:213

位置しか与えられていないといえるだろう。しかしすでに見てきたように田舎志向性が 20 世紀のパラダイムの転換を図るということを内部に宿しているのだとすれば、その転換に際しては、都会だけでなく、地元の田舎人の生活世界そのものの見え方が変わるという過程が必要となってくる。

4) 地元学と現代の田舎学の間

(1) 地元学の活動方向

このように田舎学は、都会と田舎の関係性とその混濁の中から生まれるが、それが主題化する都会性に対する田舎性への回帰とは農村で地元学を語りかけてきた視点とどのようなつながりとズレを示しているのだろうか。すでに述べたように、< 田舎の主体性 > の復権という意味においては、現代の田舎学も共通したモチーフから出発する。しかし農村における地元学は、農村に生きる人による農村のための農村資源価値の再発見であり、それはすでに田舎の生活者として生きる人が、むしろ日常の生活から距離をおいて、内省していく立場だと言ってよいだろう。

それゆえ地元学の中では、様々なことを調べる行為が前面に展開する。そのことを次のように述べる¹⁷。「地元学とは調べ、考え、創りあげていく連続行為である。調べるだけでは単なる資料にすぎない。その意味、あり方、方法などを考え、さらに深く調べ、考え、生活文化を創造していく反復行為が地元学であり、考える期間は創造のための発酵期間ともいえる。調べるのは基礎的、基盤的な調査と個別、具体の調査の大きく二つに分けている。基礎的基盤的な調査とは、地域の地形、地質、地味、気候、気象などの水・土・光・風に植物や生物などの自然、風土、それに伝統、歴史、民俗、文化などの暮らしとその移り変わりという歴史を調べ、地域の個性を把握していくことである。地域の風土と暮らしの固有性という地域の文脈を把握することは、それを今に新しくどう生かすのかを考えるための個別・具体の調査に入る時に必要な基礎的な事柄である。」

このように地元学では、生活者が、生活から一呼吸をおいて、一旦< 観想の学 > の立場に立ち、次の新しい時代に向かう新しい視点を取り戻そうとしているのだといえるだろう。これに対して、現代の田舎志向から出発する田舎学が、むしろ繰り返し強調することは、農村の体験であり、農村にできればできるだけ滞在して、等身大で田舎を体感するということである。

(2) 生活者としての田舎人の視角

近代システムに囲まれた都会の世界は職場の仕事に人が追い立てられ、まさに自らの< 生活 > を取り戻そうとするところに田舎志向が生まれ、田舎性においては、都会性のイメージさせる職業集団の世界とは異なる生活集団としての世界が一義的な価値を持つ。田舎生活が都市の人に呼びかけるものは、バーチャルな過剰の情報の世界から離れ、等身大の身体に刻まれる知のあり方を取り戻すということだろう。このような意味で、地元学と現代の田舎学の間には、そこに主題化される知的次元での位相の差も存在しているのだといえるだろう。

このような視点から見る時、現代の田舎学にとって重要なことは、田舎人と田舎の応援団ともいえるようなリピーターを軸としたつながりの中で、しかも田舎の「主体性」を取り戻し、「都市性」の中に「田舎性」のもつスローネスや農村的価値を回復していくことであり、「遊作」価値を軸にしたぶらっとホームとしての拠点作りもこうしたところに意味を有しているのである。農村の応援団としての都市住民の重要性は、日常生活の中に埋没した価値を救い出す異邦人としての都市住民のまなざしである。グリーンツーリズムの源流であり、親戚券などのユニークな試みで持続的な都市 - 農村交流を生み出してきた安心院の受け入れ農家の人たちにとっての「出会い」と「交流」の意味は代えがたい重要性を有

17 吉本, 2001: 195-196

するものだ。

農村と都市が結合し向かいあうという視点の中にしか 21 世紀の田舎学は胚胎してこない。田舎だけでもだめだし、都会でもだめであり、21 世紀の田舎学は、その結び目の中から生まれていくのだが、その向かい合う交流の場が熟成してこなければ結合の中に生まれてくる新しい生活の形がより大きな輪となって広がって行くこともない。そしてとりわけ重要なことは、この〈交流〉ということとを与件としながらも視点の位置が、〈都会〉から〈田舎〉にうつされ、田舎の主体性と田舎性を取り戻すような学、しかも環境の世紀に相応しい「田舎」の新しいかたちを求めていくような学の創造が必要になってくる。

5)「田舎」の新しいかたち

(1) 生産の共同体を超えて

これまで遅れたものとして見捨てられてきた田舎への志向性は、都市化・工業化という現代社会への価値を反転する動きであり、その中には生産力主義やファーストライフのなどへの懐疑のまなざしが付与されている。但しこのような現代社会が抱える価値の反転としての田舎志向は、近代社会を離脱して伝統に戻ることは必ずしも解決しない側面を有する。近代化の精神を超えようという今日の新しい視角から見て興味深いのは、伝統と近代の接合状況において近代化に適合した社会とそれと著しく適合性を欠いた社会の差異が改めて浮かび上がってその種差性と意味とが問われ始めていることだろう。

近代に適合する社会にも様々な差異があり、非西洋社会でも日本のように、その先頭を走ってきた社会と遅れて追隨している社会の差異がある。例えば日本の伝統としての「イエ」の原理¹⁸。「イエ」は、そこにタテ社会といわれる一定の上からの規律が存在していたとはいえ、他方で一つの親和的な「情の経済」が宿されている。そしてこの〈イエ〉は、戦前においては資本主義化の桎梏として捉えられていたが、高度経済成長の中ではむしろその先頭を支える、会社組織の内部をささえるハビトゥスとして考えられ、産業社会を押し進めた日本の経営の機軸を成す社会原理として取り上げられてきたからである。トヨタにしても松下にしても〈イエ〉の原理が会社を下支えし、世界のトップを競っている。ここでは産業主義と伝統はむしろ表裏をなすものなのだ。これまではこの差異が大きく主題化されてきていたといえるだろう。しかしながら、今日のグローバリゼーションの中では、そうした適合の地域差はあるにしても、それらが概ね近代化へと離陸していることは明らかであり、これまで近代化を拒否していたように見えた東南アジアやインド、中国などの急速な近代化への歩みは目を見張るものがある。

(2) アフリカ社会のユニークネス

こういう新たな近代化へと向かう国々と比べた時、大陸全体として極端に遅れた歩みを示しているのがアフリカの国々だろう。南南問題といわれる南の内部差を語る視点の中で、アフリカと他の開発途上国の間の差異の方が、今日では、先進国と開発途上国の差異よりも大きくなっている側面があり、近代に乗り遅れた、あるいは乗れない社会としてのアフリカ社会の特質が問われている。しかし、すでに述べた近代化を捉えようとする今日の新しい価値志向のあり方からするならば、そうした社会は、むしろ近代の精神にうまく適合しえなつたがゆえに、新しいパラダイムを探ってゆく上での重要な参照枠として浮かび上がってくるともいえる。

実際にアフリカ社会研究の中で語られてきた〈分与の経済〉、再生産、スローフードの原点ともいえる共食の文化など、現代農村の新しい田舎作りの動向の中で語られている共同性や生き方の質と共鳴する事柄が存在する。このような新しい動向の中にあるものは、ポストインダストリアルといった状況の中での〈農村〉をめぐる視点であり、産業社会を貫いて展開した〈生産力主義〉的近代への批判のまなざしとともに、近代社会の価値の中

18 杉村,2004:413-414

では<未開>とされた世界をも参照するような視点が浮かび上がってきているのである。

このような伝統の内部差と近代プロセスの差異の間での適合性という視点から見る時、現代の<田舎>志向性が向かうものは、そのまま近代が<伝統>へ立ち戻ることではない。伝統そのもののあり方、ここでは、近代の培地となった<田舎>のあり方とそのかたちが問い直されなければならないのである。

(3) 「田舎」をめぐる歴史的位相

このような現代日本の「田舎」をめぐる存在状況を、ここでは農村社会に関する人類史的視角から取り出してみよう。その際ここでの議論との関係で重要な視点の一つが、伝統と近代という二分法ではなくて、伝統社会のありようを近代の源泉としての農業社会とそれ以前の自然社会に分けて、伝統と近代の接合と非接合を弁別する視点をあたえた上山の人類史の三段階論であろう¹⁹。

上山は産業革命以前の世界を、紀元前 4000 年頃にエジプト、チグリスユーフラテス、インド、中国で相次いで成立した文明以後と文明以前に分かつ。上山によれば、文明以前の世界は、重層化の発達しない社会であり、上山はこのカテゴリーを自然社会と呼び、このカテゴリーの中には、図 8 に示されるように、狩猟・採集、牧畜、農耕社会が位置づけられる。

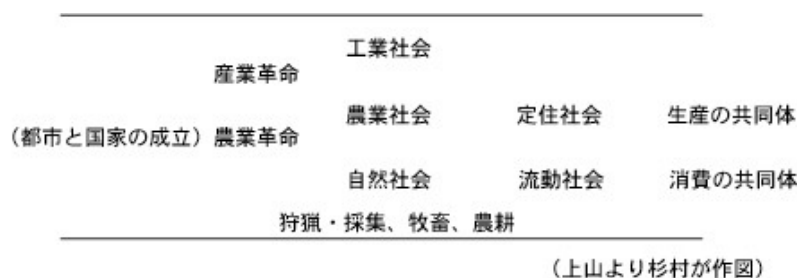
これに対して、文明以降の社会においては、重層社会が生み出されてきた。そして社会としては、これまでの流動的な血縁社会に対して、家族、地域共同体、国家という構造を持つ定住社会が生み出されてきた。そしてこ

の「農業革命」以降の農業社会が、「定住社会」としてそこに富を蓄積する装置を作りだし、重層社会として国家に至る指向性を持ったのに対して、アフリカの多くの焼畑農耕社会は、「非定住的」な流動的社会としての特質を有している²⁰。

近代のパラダイムは伝統社会一般からではなく、重層化し、国家という制度に支えられて生み出されてきたものであり、農業社会が成立して以来、例えば<農学>もそこに組み込まれて創出されてきた。もちろん農業社会も地理的、歴史的に作り出された地域ごとの固有の性格もあるが、今日近代世界システムが、世界大にひろがり、各地域システムを包摂していく中では、経済動態の地域的差異を含みながらも「生産の共同体」を背景とした社会が様々な地域差を孕みながらも離陸している。これに対して、自然社会の中には、貢納という制度のない社会での営農があり、自らの安寧は、一義的に横のつながりとその分与の経済の中に作られてきた。「消費の共同体」に支えられた、その徹底的に生存維持的方向に仕組まれた農業のあり方は、外部社会への余剰を作り出し、近代世界の中での商品化を進めていくためには困難なパラダイムをその学の中に内包している²¹。

(4) 近代を超えるパラダイム

しかし 20 世紀の近代化の成功ゆえに引き起こされた環境問題や南北問題への自覚は、こ



社会組織の発展段階
図 8. 社会組織の発達段階

19 上山, 1966

20 杉村, 2004: 434

21 杉村, 2007-a: 29

れまでのパラダイムを越えていくことを要請しており、ゆるぎない近代の価値規範から下された「遅れた」世界という見方にも変化の兆しが見られる。例えばエネルギーを最大利用する高エネルギー社会を進んだ世界としたこれまでの見方に対して、エネルギーを抑えた低エネルギー社会こそがむしろ今日では未来的な生き方を持ち始めているのである。また、このような「生産力」を超える価値指標の中には、その一つとして、GNP（国民総生産量）という考え方に対する代案として、GNH（国民総幸福量）というような考え方も提起されている。物的生産至上主義とは異なる、自然や人の共生の視点に立つとき、これまでとは異なるもう一つの豊かさを示す社会として、アフリカの小農世界を参照することがある一つのリアリティを持ち始めているのである。

図 9 に示すように、日本の農業・農村は、今日においても産業社会の中に組み込まれ、それは、「生産力」と

「国家」という 20 世紀の農学の基本的なパラダイムの中になんじがらめになっており、今なお研究者はその中心にいる。しかし 20 世紀の近代の成功ゆえに引き起こされた、環境問題や南北問題への自覚は、これまでのパラダイムを越えていくことを要請しており、すでに見てきた

ように都市から農村へという新たな流れもある。図 9 はこのことを図式化したものである²²。

まず興味深いことは、この動きが生産者サイドからではなく、消費者サイドから出ていることであろう。そこには産消提携などを媒介とした、真の「消費とは何か」ということをめぐって、スローライフというような、これまでの「生産性」や「効率性」という 20 世紀のパラダイムを食い破る価値の次元を組み込み、「消費の共同体」に支えられたアフリカの社会とも共鳴する、現代的な「コミュニティ」をそこに作り出そうとする姿を読み取ることができる²³。

例えば今日の農村の中で展開していることの一つは地産地消の推進など、農村地域の生産者と消費者が一体となってタベモノ共同体を生み出そうとする動きである。農村に生活する人も農村の近代化という時代を超えて今日の食の安全性などに関する議論と関わる、今や自らの食べ物を再考する時代を迎えており、食を軸として地域のあらゆる再編が希求されている。このような農村内部での内発的な動きと都市からの田舎志向性の中でのグリーンツーリズムのリピーターなどの間は、これまで必ずしもつながらない別々の動きであったが、こうした動きをつなげていくことがこれからの田舎学の中には求められているのである。これまでの閉じた共同体としての田舎学ではなく、開かれた共同体として、21 世紀の「田舎」が構想されていかなければならない。

（５）開かれた共同体

<産業社会>を終着点とするこれまでの歴史観では、「未開」の社会は遅れた社会ということで、現代社会がそこから学ぶ何の意味も見出さなかった。しかし今日の世界は、この

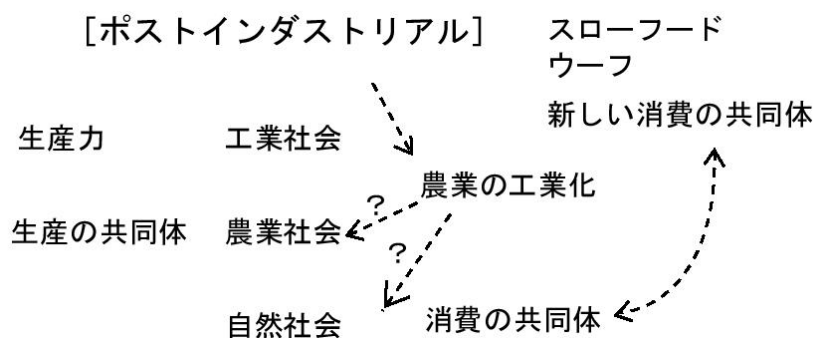


図 9 . 生産と消費の共同体

22 杉村, 2007-a: 30

23 杉村

<産業社会>のあり方そのものの中に揺らぎがあり、その限界が問われ、これまでの価値観とは全く逆転するような田舎志向が生まれているのだ。このような視点から見れば、アフリカ社会も近代社会に適合しないものであったがゆえに、むしろ一周遅れの最先端として、新しく形成されてゆく社会が参照すべき興味深い事例となっていくのだといってもよいだろう。

実際にサーリンズなどが、「未開の豊かな社会」として描いたような、いわば生産の最大化を目指さず満足を知るような社会は、今日脱産業社会論が見出すもう一つの発展論や、持続的発展、共生社会論などとも共鳴するところが大きい。都市化・工業化の価値体系を超えようとする志向性を持った田舎志向のパラダイムは、より自給性の高い「生活の場」の創出を語り始めているが、しかしそれはかつてのような閉ざされた地域社会の創出を語るものではない。

田舎志向の中で展開される「田舎」のありようもそれはある意味では、グローバリゼーションが一方で展開される中で生まれていくものであり、現在、都市社会との不断の交流の中で再構成されていく「田舎」はそもそも開かれた共同体としての特質を有することになる。そしてこの「開かれる」ということの意味の中には、田舎の生活の中においても、インターネットが行き渡るといような時代状況がセットとしてその状況を下支えすることになり、国家を超えた世界とのつながりの中で、そこに息づく「田舎」の世界が現出していくことになる。

(6) 共存を可能にする場

かつての共同体は閉ざされた共同体であり、その中の同質性が他の地域のコミュニケーションの規範性を生み出してきた。日本のかつての共同体社会の中にもっとも典型的なモデルを見出すような、「閉じた」共同体のイメージからすると、21世紀の共同体としての田舎は、軽やかに流動し、再編成を繰り返していくような共同体のあり方の中にその特徴を見出すことになるだろう。このような視点から見る時も、杉山らが、アフリカを舞台にその共同性のあり方について見出そうとしてきた、離合集散する共同体のあり方とその再編を組織化する生命の再生産に基盤を置くような物を分け合うような社会としての「消費の共同性」といようなあり方が重要になってくる。土地に合わせるというようなアフリカ農民の「自在性」をもった技術のあり方は、このような社会の共同性とは適合するものとして存在しているのであり、次に述べていくように、このプロジェクトの中で生まれた「遊作」というコンセプトを支える社会の原像をそこに現しているのである²⁴。

そしてこういう田舎学の構築ということに関して重要なことは、なによりもまず、それが開かれた共同体として生きていくということだといってよいだろう。昨年からはまった遊作塾の活動でも、老若男女、さまざまな人が集まってきており、その中には、建築屋、農民、パン屋、大学教員、芸術家、本当にいろいろな職種の人があります。「匠も遊び、匠と遊ぶ」という遊作塾の世界は異なる人の共存を前提とした新しい試みであり、そこには、日本の中ではあまり例のない<異種共存>の活動の世界が広がっているともしえるだろう。

そして都市や地域との間に交わされる交流が、多様かつ多層で厚みのあるものになれば、それを土台として、地域が世界と直接つながる「姉妹ムラ」、「姉妹マチ」といような、21世紀の国際時代にふさわしい新たな展望も可能となろう。こうした世界に開かれた自立的農村像とそれを支える、各地の内発的、主体的な「地元学」を束ね、「人間の生活の場」としての「田舎」の意味を現代的に復権する「田舎学」を創出していくことは、JターンやIターンばかりでなく、解体されたコミュニティを新たに21世紀にふさわしいかたちで編みなおし、地元の若者の積極的な定住を喚起していくことにもつながっていくと考えられる。

24 杉山,2007:103-118

3．遊作と現代の田舎学の可能性

1) 現代の田舎学と遊作の位置

(1) 田舎志向と手作り

これまで人々は田舎から都市へひたすらに移動し、その生活のあり方への関心を広げてきたが、ここにきてむしろ都会から田舎へと関心を示すようになり、IターンやJターンに見られるように、一度<土>から離れた人々が再度<土>に着くような現象が生まれてきている。そしてその現象はグリーンツーリズムなども含めて先進社会の中では普遍的に見られるものであり、これまでとはとりわけ農と工の対立の図式の中で捉えられてきた。

例えば、祖田が提唱した「着土論」はこうしたものの最も代表的な視点であろう。しかし<土>にイメージを絞り込むことによって、<田舎>イメージが作る全体像とはズレた側面も持つことになる。都会の生活に対して田舎暮らしががもし出すものは、生活全体の自給的な暮らしのあり方であり、そこでは農業に限らず、生活の様々な事柄を自ら工夫するスローライフが可能となる世界であり、そうした事柄の一つが<手作り>の世界だといっていよう。大量生産、大量消費、大量廃棄の世界としての近代社会は、その巨大な生産力を支えるために、<近代技術>に対して絶対的善として光を当ててきたが、そういうものがもたらすひずみが多くの人に理解されるようになり、同時にその中で失ったわざの世界の意味が再び浮かび上がってきた。都会の世界ではそうしたものに触れようとしても、全てはすでに作られた商品の只中に投げ出されており、人はモノとの自由なふれあいを閉ざされている。このような中で田舎を志向する人達の中ではこうした<手作り>を希求する人が多い。

実際都市の世界で生きる手わざを失った人にとって、癒しの源泉としての<田舎>の意味は、これまで全く経験のない、しかも自然とも対峙しなければならない<農業>の世界よりも田舎料理体験のような、むしろ身近にふれることのできるものとしての<手作りの世界>かもしれない。こうしたことから、今日<田園工芸>という視点から各地の事例が取り上げられ始めている。例えば農文協の現代農業の『田園工芸』の特集号は²⁵、こうした田舎暮らしの人達のクラフトのクラフト、手作りの現在の状況が報告されている。アケビで作ったつるかご、ドライフラワーのリース、草木染の帽子や財布のデザインを取り入れたランプシェード、そうした作品の中に認めることのできる手わざの芸人というだけでなく、そこにはそれぞれの世界の中に小さいものかも知れないが<差>を求め、自らの芸術を表現しようとする営みを感じさせるものがある。そこではそれぞれの生活の生きがい耕されており、そこには手わざが開く豊かな暮らしが語られる。

25 『現代農業』1999

(2) 遊作塾の活動と田園工芸

今立遊作塾の事業は²⁶、田舎の中に展開するこうした側面を主題化したものだ。そして例えば古民家をリフォームする時には、そこでまず、使う鉋という道具の研ぎ方や使い方を覚えることから作業は始まる。われわれはもうすでに、日常の世界の中で「鉋」という一つの道具を手にする事のない生活を生きており、家の修理が必要になっても、それは工務店の人にお任せということになる。ほんの昔まで多くの人の生活の中で身近な道具だったものが、都会の生活の中では人々の暮らしの中から取り除かれてきたのだ。遊作塾ではそういう切り離された人と道具の関係を取り戻し、日常の生活の中に人の小さなモノ作りの世界を回復しようとしたのだといえるだろう。

このように農村の中に田園工芸の伝統を有する今立のグリーンツーリズムが主題化したものは、こうした「田舎」の中に今なお深く広く維持された「手作り」と「技能」の世界との出会いである。このような手作りの世界への着目は、ヨーロッパの中では日曜大工などが男のたしなみとして大変人気があるのに対して、日本の中ではまだまだごく少数者ととどまっており、今日その<近代技術>そのものが排除してきた世界そのものの意味にまともに向き合うことはなかった。

(3) 手作りからグリーンツーリズムを捉え直す

そして田舎志向の中で、そこにはこうした手作りの世界への新たなまなざしが芽生えているとはいえ、農村体験といわれる時のグリーンツーリズムの枠組みの中では、まだマイナーな存在であるといつてよいだろう。かつてはそこに豊かなわざの世界が存在した。農村の中の百姓とは様々な技を持つだけでなく、それぞれその中にその家や地域ごとの熟練もあり、その地域に生きる人にとっての生きがいともなる現場の価値世界を作り上げていたのである。そして今日この田舎の社会を覆うグローバル化の動きの中でわざの世界はいき絶え絶えになっているが、そこに域を吹き入れれば再度展開しうるような場が都会と比べれば大きくなってきているのだ。

この豊かな潜在的な資源としての手わざの世界と都会に膨れ上がった手作りを希求する思いをどのように結び付けていくか、そのような思いは今までにグリーンツーリズムや I ターン、J ターンという田舎を志向する人の中に満ちているが、それを田舎という培地の中でどのように育てていくのが問われているのだといつてよいだろう。今立 古民家・匠・ロングステイプロジェクトは、古民家という舞台の中に匠とロングステイプロジェクトを希望する人を置くことによって、こうした領域を主題化するものであった。

そしてその事業の中から生まれた<遊作>というコンセプトは、いまだ一つのアイディアではあるが、21 世紀の田舎学がその中に内部化しなければならない技術論のあり方、その前提となる豊かな自給性をそこに語りかけている。ここではこの<遊作>というコンセプトが現代の田舎学構築に向けて有する意味を<手作りの世界>から再検討しておきたい。

2) 手作り志向のパースペクティブ

(1) 現代の中で失われた手作り世界

今立 古民家・匠・ロングステイプロジェクトの実行委員会が母体となって作られた、遊作塾の活動が、まず目を向けたものは紙すきや囲炉裏、建具、古民家再生などが道具を使いながら手作りで作り出していく世界である。都市から田舎暮らしを志向する人の中には、この「手作り」ということへの思いが内包されており、遊作塾に参画した人の多くにもこういうことがらへの強い関心が共有されている。このような背景には 21 世紀を生きる

26 しかし、それだけではなく、やはり、日本の昔からの仕来りに根差しているところもないではない。たとえば、レヴィンストロースにも、「ブリコラージュ」という「手造り」に似た概念があるようであるが、これはどちらかというと、英語の「ホビイ」に近く、遊びの要素が含まれているかに思う。「手造り」はやはり遊びというよりは仕事である。日本にも、盆栽令弟造りのような、趣味に傾くものはあるが、これは「手造り」の中には入らない

現代生活がすでに手作りの世界を失い、ほとんど全て機械による商品の世界に囲まれた生活を強いられているということがあろう。

近代社会における工業的生産は、熟練的な労働力のかわりに、機械の生産工程を施し、機械による均一の製品を作り出すことに成功しているが、モノづくりの過程に個々の技術者の個性がかかわることはむしろ排除し、マニュアルにそってやればだれでもできる、単純な工程をシステム化している。いいかえれば、伝統的な生産に代わって近代的な技術過程が導入された時、そこで不要なものとして取り除かれたものは、手作りの世界、いわば職人たちによって作られていた技能の世界であった²⁷。

(2) 工業的生活と「労働」

近代の工業的生産では、一つの仕事を単純な労働に分解し、労働効率を絶対的基準としてそれぞれ作業時間を秒単位まで計る。それを集計して全体の仕事の時間を計算する。そこには細切れにされた「労働」があるだけだ。テーラーシステムに範型を持つこのような工業的生産は、全て機械の流れに従って行われる。しかし現実の労働存在は有機体であり、人間が個々人が自然の労働のリズムを有しているが、それらは全て均一のものともみなされ、代用可能なものとされて扱われ、そのことが心身の疲れを生む²⁸。

チャップリンの映画の中に描かれたような近代生産技術の広がりの中では、モノ作りの過程の中で人が育つという大きな「教育の場」がそっくり無駄なものとして排除され、そこで育っていく人の成長過程が行き場を失っており、そのことが、改めて今日人間の生活の原像としての「田舎」の暮らしに目を向け始めさせているのかも知れない。

もちろん現実の農村は全てグローバル化の只中にさらされており、農業の機械化・化学化・装置化も進んでおり、農村であっても生活の中の技能的世界は縮減している。但し、全て商品連鎖の中で暮らす、作られたモノを消費するだけの都会の世界と比較するとそれでも田舎にはなお、そうしたモノとの直接の関係を取り戻すことを許容させる世界が残されているともいえよう。

(3) 農村生活におけるわざ

かつて農村は農業を自給するだけでなく生活全体を自前で行う世界であり、そこには腕自慢の人がおり、それぞれが技や芸を持っていた。このような世界では、労働に対する見方として、量よりも質に対する関心が高く、力能の成熟としての「技能」が発達した。里帰り派としての田舎暮らしの志向が有するものの一つは、そのことを通して、今日近代技術によって取り囲まれ、ほとんど失われようとしている「技能」の世界に思いをさせ、そこに新たな光を当てようとする志向性だと言ってよいだろう。

こうした視点から重要なことは、現代社会において手作りを許す場としての田舎とそれを軸とした現代の田舎学の意味だ。商品化されたモノの連鎖の中で生活が成り立つ都会では、そもそも人が自由にモノを作り出す行為からはずされている。モノと対峙して自らの腕を振るということを可能にする世界の豊かさをそこでは与えられていないともいえる。その中で矢継ぎ早の商品との対応の中で消費行為がファーストライフを作り出していく。これに対して手作りを許す世界は、モノと人との関係の中に、遅さと時間の投入を求める。そしてそのようなモノづくりを通して、相互にそれぞれの生き様を評価しあい、その中で、人と人の厚いネットワークの構築を生み出すスローライフを作り出していく。

(4) 手作りの世界としての田舎

「田舎」とは現代においてそういうことを許す場であり、そのためにはそこにそういうことを自ら選び取ることを許す豊かな自給性が必要になってくる。現代社会は、商品を買

27 渡植, 1986, 1987a, b

28 渡植, 1986: 111

りに張り巡らした便利なファーストライフの極限の中で、モノづくりに参加できない不幸、そうした自らの世界の貧しさがようやく浮き彫りにされ、そこでそうした取り戻しの場としての「田舎」の世界が語られるようになってきているのである。手作りの作業は現代の中では、スローライフを確立する生活の組み方の中でしか実現しない。それはファーストの世界から離脱し、田舎暮らしをするという生活の組み替えの中で初めて可能になってくるといえるだろう。現実には田舎暮らしというところにはいたらないまでも、都市からの一時的な避難所としてグリーンツーリズムにリピーターとして繰り返し参画する中で、〈手作りの世界〉を身近なものとするのが可能となった。このような手作りの世界の回復という視点から現代の「田舎」の意味を捉えるにあたって、今立は田園工芸の伝統の薄い他の農村と比較すると厚い匠の層を有しており、この側面を主題化するに当たって優位性を持っていた。

今立 古民家・匠・ロングステイプロジェクトの行われる越前市の今立の場合には、都市からのIターン的な人の動きとしては、農業志願者というよりは、若者を中心に和紙などの伝統的工芸への志願者があり、旧武生市を含む、越前市には、大工、打刃物職人などの優れた匠たちがおり、それをたよって見習いに来る者たちも多い。遊作塾の活動においては、古民家再生や和紙伝統の活用ということがさしあたりの中心的な活動となったので、こういう若者たちが活動を支えることになった。こういう半農村ともいえる今立という〈場〉から出発したがゆえに、この手作りや技を主題化することが可能となり、グリーンツーリズム論がこれまで明示化していない、しかしその底流に存在する重要な田舎志向の経験のありようを探り当てることになったともいえる。

3) 技能の世界とその多元性

(1) 技能知の未来

それでは都会人が田舎の中に見出そうとする手作りの世界とは現代社会を取り囲む近代的技術の世界と対比してどのような特質と意味があるのだろうか。「物的生産力」というような視点から見れば手作りの世界は、機械以前の道具使用の世界として遅れた低い段階の技術としてのみ捉えられるのかもしれない。しかしそこに参加する人間主体の立場から見れば、近代的技術と手作りの間には大きな質的な差異が存在する。この異なる世界の意味こそが多くのヒトを田舎へと誘い入れている。

西洋の近代科学やそれに支えられた技術知はそもそも、意識中心主義の知の世界の中で育ったものだが、技能はまず肉体活動である。そして技能は、「こつ」のごときものが体得されはしても多くの人にマニュアル化して教えることは困難である。しばしば言われるように、言葉をもって伝えることが困難であり、弟子は師匠から「盗む」というように、自分の力でつかみ取るほかはないという特色を持つ²⁹。

渡植はこの技能の世界の知のあり方を〈技能知〉と名付ける³⁰。技能はそれぞれの人の肉体に備わったものであり、身体に刻まれたその知は、むしろ無意識の世界の中の知のあり方だと考えなければならない。こうした人間の知のあり方はフロイトなどの無意識世界の発見に始まり、ポランニーの暗黙知などの発見の中でも語られるが、こうした技の世界がもし出ず深い知恵に関しては、むしろ日本人の多くの人になじみのあるものとして理解してきたといっていよう。

(2) 技能の熟練と田舎人の生活

この技能知の特質の一つはそれがそれぞれ人の中に成熟し、その成長を確認していくのであり、わざへの到達点の中に、人は人生を重ねることができる。そして伝統社会においてはこのような人の技能の熟練ということは物の生産という場の中でだけ行われるわけで

29 渡植,1987a:7-8

30 渡植,1987a:5-36

はない。例えば生活の中での人と人之間を讀んだり、挨拶を交わしたりという作法の中にも一つの熟練としての人の技が潜んでいるということもできる。60歳も過ぎた一角のおばあさんなら家の掃除の技と言うものを持っている。それは20歳前後の娘たちが真似のできない鮮やかさである。このように、昔の日本の一家の主婦はそれぞれの家のいわばその家風とでもいえるようなものを通して、様々な家事を取り仕切り、子どもたちにも教えた。技の世界には熟練があり、「腕前」の上達で、仕事が楽しくなる。それに対してマニュアルの近代技術の世界ではそのようなことの必要がなくなって、仕事に対する興味を失わされる³¹。

近代化のプロセスが生み出したものは、物的生産量における飛躍的な拡大ということがあったのは間違いないが、一方で技能的世界の中で生み出されてきたそこに生きる人の成熟をとまなう「生きがい」を生み出す活動という広大な領域の喪失があったということが浮かび上がってくる。「田舎」の中の生活者はものづくりの中の手作りの世界も含めて、すでに述べてきたように一つの<技能>の世界が展開する場であったといつてよいだろう。それぞれの家の婆さんはそれぞれが一人の匠であった。

(3) 技能の世界の種差性

このように近代技術世界に対しては技能世界全体としてその異質性を主張することができるが、技能の世界にも一定の種差性を認めることができる。そこには高い精度を持って行われるものがある。和紙や漆器の工芸などの中には、近代以前の日本の世界では、職業集団に支えられた専門的なものづくりの世界があった。その世界の特色は匠のもとに厳しい就業過程があり、ものづくりのこつを体得し、その様式や技法に徹底的にこだわることであろう。そして職業集団に支えられた田舎の世界においては、できるだけ多くの商品を効率的、生産的に繰り出そうとするものであった。

このような社会の階層構造の中にも組み込まれた職業集団は農村の中にも存在する。しかしこれに対して、田園工芸としてそれぞれの村で自らの生活の必要のために生み出された仕事はもう少し自由なものだ³²。職業集団の仕事と比べれば洗練を欠き、不細工であったり、非能率のごとくであったが、それは働く当人にとって自発的である。また能率を口にする「職業集団」の視点から見れば田舎の世界には無駄が多いように見える。無駄のあることは「職業」の世界では禁物である。

これに対して、田舎の田園工芸とは、あくまでも生活世界の中で、生活集団によって担われるものであり、技能はあらゆるものが生活の一部であって、それゆえに、技能の世界もそこに遊びやユトリがあり、逆に言えば、無駄も許される人間的な生活とそこで育まれる技能であるといつてよいだろう。それゆえ生活集団の技能の中には、職業集団の技能とは異なる優れた部分も生まれてくる。民芸美を追求した柳宗悦が取り出そうとした世界は、日本の伝統のなかの庶民の用のための工芸であり、上手物とは異なる下手物の優れた点にも視点が及んでいる³³。

この普通の生活世界の中に展開する技能知のあり方は、ほとんど全くといつてよいほど看過されてきた。しかし今日の田舎志向の中で顕在化され、主題化されようとしている<技能>や手作りの世界は、この当たり前の世界の中に刻まれていたものであり、いわば生活集団の生活世界の中に技能の世界の意味を取り戻そうとしているのだといつてよいだろう。今日田園工芸が田舎志向を受け止める一つの対象として取り上げられているが、このような立場からの手作り論は田舎にある工芸の多様性、多元性をその魅力として強調する。このように、今立における「遊作」の提唱はその出発点においては、職業集団の中で保存されてきた匠の技が一つの手がかりとなつて、もう一つの契機としてのグリーンツーリズム

31 渡植,1987b:146

32 渡植,1987:167

33 渡植,1987:156

などに見られる、手わざの世界の自在性を求める志向とがクロスされるなかで、遊作という、今立のこれまでの技能的伝統とは極めて異なる手作りの世界が主題化されてきたのである。

4) 手作り論と現代の田舎学

(1) 手作りを可能にする場としての田舎

グリーンツーリズムなどによる都市住民の田舎志向という現象の中で、「人間の生活の場」としての農村が再評価されつつある。工業化、都市化の果てに、その行き詰まりの中で見出されつつある、「人間らしい暮らしのできる場所」としての農村が示す新たな価値創造のプロセスにおいて重要なことは、そこに暮らそうとする人が、あえて都市から離れ、田舎を訪ね、田舎に住もうとすることの意味であり、そこには人間社会の中に、このような技能的世界を回復し、再建するプログラムが内包されているのである。

「田舎」の中の手作りの世界とは、都会と比較するならば、確かに今日においても、すでに述べてきたように一つの<技能>の世界が展開する場である。しかしすでに見たような技能の中に潜む差異の中で、より特殊化し、専門家していく職業集団の中の、様式化し効率化していくような世界と比較するならば、田舎の手わざの世界はその専門家に対して、技の熟練度が低いかもしれないが、より自由で自在なものとしての特質を有していると言えるだろう。もちろん田舎の匠たちもそれなりに技を競う。鮎つかみやザリガニ取りの達人から家の掃除の箒がけの達人まで、それぞれの人がそれぞれの場で活躍する場が与えられている。このように村の世界においては、匠同士の技の入れ替えを許すような遊びの世界があったのだといえるだろう。

(2) 田舎性と都会性

田舎性と都会性に対するスローネスがしばしば語られるが、この自由自在という事柄、いわばあいまいで一つのものに限定されない多義的な要素を持つことが田舎の田舎性であり、この多義性を許すところが現代において重要性を増しているのだ。このように今日の田舎志向の人が持つ手わざの世界にももちろん多様性はあるが、田舎暮らしの技という事柄においては、専門的なものよりもむしろいろいろなものができる田舎の<技能>の方が相応しいのだといえるだろう。

機能化した都市空間からすれば田舎にはまだ隙間があるといってもよいであろう。そのすき間こそ人が遊べる空間なのだ。伝統社会の<田舎>の中にも<職業集団>は存在していたとしても、<技能>の世界が中核を占めていたのではない。競争的なこの技の世界だけがそこに構成されるならば、<都会>に対する<田舎>の価値は半減するかもしれない。

(3) 技能性の復権と田舎学

しかもこのように技能の中にも、<田舎>と手作りのあり方の中に近代に対してより適合的なものとそうでないものがあるとしても、<田舎>志向の人が手にする手作りが生み出す癒しはさしあたり共通するものがあるのだといってよいだろう。そこにはすでに述べたように、今日のあまりにもマニュアル化された世界からの解放という大義があるといつてよいだろう。このように<技能>的世界に着目する視点の中には、これまでの認識の学としての科学の殿堂として大学を頂点とする知のあり方に対して、モノづくり大学の設立のようにそこから排除された<技能>を主題化しようとする動きもある。

しかしすでに行われ始めたこのような新たな学の方角も、ここで検討してきた今回の「遊作」の世界から見れば、近代を貫いた都市化・工業化の真の欠落点との対峙にまではいたっていない。そこに主題化されているのは、あくまでも近代技術の上に立った<技能>性であり、ここの人のモノとの直接の関係や生活世界の回復過程としての<技>への捉え返しというような論点は見られない。

一方、都市と農村をつなぎ、田舎志向を支えようとするグリーンツーリズムを生かした知の体系化の動きにおいても、イベントなどを通じた技能の学びは、あくまでも<都市の>の人の要望に開かれているだけで生活の場として農村を生きる田舎人の田舎性の回復過程との間にはズレがあるといつてよいだろう。こうした<技能>を軸においた<学>のありようという視点から見れば、地元学のこれまでの手法もどちらかという認識の学にとどまる側面が多く、田舎の世界の<暗黙知の広大な世界>に対峙してそれを主題化するものにはなっていない。

それゆえ<都会>との知の位相の差を明確に見据える生活の学としての田舎学が要請されているのだといつてよいだろう。しかし田舎学の母体となる「田舎」はすでに現代社会の中に投げ込まれた「田舎」であり、すでに述べてきたような<近代社会>の価値を反転する視点を受け止める場として、そこに都市民、田舎民による相互交流の中で新たな創造が必要であり、都会民の価値意識を受け止めるものとして、匠の世界も含めてこれまでの<伝統>的世界そのものの脱構築過程も重要となってくる。次にこのような視点から現代の田舎学の構築と<遊作>の意味を取り出しておこう。

5) 遊作 価値の反転と脱構築

(1) 田舎志向と時代精神

このような二つの世界の出会いの中で、主体的な<田舎学>がそこに語りかけようとする事柄は、都市から田舎志向の世界を受け止めながら、それを田舎の世界とつなぎ、そこから新しい世界を構築していくための場を確立し、さらに広げていくことである。要請されるこのような豊かな出会いが生み出されていくためには、それぞれの場の中に閉じこめるのではなく、お互いが自らの胸襟を開き語り合う不断の時間と機会を生み出していくことであろう。他者に寄り添うだけではだめである。都市の世界を捨てて田舎の伝統に帰ろうとしても、すでに田舎の世界も近代の世界に取りこまれ、手作りや技能の世界は狭められ、むしろ突出した技能集団の中だけで確保されている側面もある。

その囲い込まれた<技能>の世界にたどりつき、その中で一つの世界を生きる人も少なくはないが、田舎志向の大きな価値転換の時代精神を受け止めるものにはならない。手がかかりとして継承されてきた匠の世界は極めて重要ではあるが、そこから先に匠とともに、より広い<田舎>の世界を作ることが求められているといつてもよいだろう。このような中で一つの技能の伝承のプロセスのあり方として構想されたものが、<遊作>というコンセプトである。

通常、匠からものを学ぶという場合にわれわれがイメージするものは、極めて厳しい修行の場である。これは確かにある特定のわざを徹底的に身につけようとする場合には回避なものであるが、手わざというものの中に自由な創作の場と癒しを見出そうと考える田舎志向の人たちにとっては、極めて高すぎるハードルであるし、むしろその枠の狭さが拒否反応をもたらす場合もある。これに対して「匠と遊ぶ」というコンセプトの中にあるものは、手わざの世界の達人としての匠にエネルギーを分けてもらい、それぞれの人がわざとのかかわりの出発点を置くというところに重要な差異がある。

2) 「遊び」ということの意味

確かにこのような伝統的な技術を持った匠と触れ合える時間が持て、ましてやその技術を匠から習うことができるということはそこに集まる人に与える刺激は大きいであろう。しかもその出会いの場に仕組まれた「遊び」という枠組みはそこに参加する人を自由にさせる。匠から一方的に教えられたことをやるだけでは、参加者もそんなに楽しいとは思えない。外から参加する人もその場で直ちに「お客さん」ということを忘れさせ、主体的な創造者に仕立て上げることが重要となる。イベントの中で人々が笑いあうということ、主催者と参加者の間に双方向的な関係があることが、これまでのグリーンツーリズムを超えていくためには必要な事柄となってくる。

このように、遊作塾は参加型の学びの場である。同時に、幅広い人が集まるコミュニティの場でもある。「遊びながら学ぶ」という遊作のスタイルの中では、若い人からお年寄り、男女の枠にとらわれない人が参加できる可能性を持っている。それゆえ、作品もそれぞれの個性が宿り重要であるが、遊作するプロセスの中で生まれる人の表情や、人間関係などがそれにも増して重要となってくる。このような共存の場としての遊作塾の試みとして興味深いのは遊作ライブの活動である。

和紙や囲炉裏の製作をした後で、匠も踊る。さらにそこには、音楽好きの若い僧侶たちも参加し、演奏してライブを盛り上げた。宮大工の直井棟梁など若者のライブを聞きながら、「わしはやっぱり演歌がええ」といっていたが、結構若者の音楽を楽しんで聞いていた。このような家族の世界の中では実現している世代間の共働、学びあいの世界が遊作塾の原点である。

3) 価値転換の場

その中で要請されたことは、作る世界の中にこれまでのような伝統的な技は古く、意味がないというような通念とその通念を反転させる場が展開する必要である。遊作の場で改めて息を吹き込まれ、生命を与えられようとするもの、たとえば捨てられた古材、それが匠の技とそこに協働する人達の手で見事な囲炉裏となる。そこで使われる古材は、そのままでは何の価値もないものとみなされていたがゆえに、そこに豊かな使用価値を作り出していくことは、その作業に参画する人に、大きな喜びを与え、創造の場に参加していることを感じさせる。手作りという行為を剥奪された現代の人間に、モノは人の手の加わらせ方によって、無限の可能性を持っていることを教える。

田舎には、捨てられた素材の片々が分散して眠っており、それが豊かにプリコラージュされることを待っている。捨てられた畑がある。それは「生産力」の立場からすればただ捨てておくしかない農業不利地の圃場なのかもしれない。しかしそういうところは、しばしば冷たい清らかな沢水が流れ、適度な日陰を作る雑木の中を木漏れ日が射して、すがすがしい風をもたらす。美しい空気や水、さわやかな風に触れるという価値をふくめるならば、それは市場に近い農地よりもはるかに優れた農地なのだ。そうした<自然>の価値を含みこんだ農業の場では、むしろ多くの人々が、遊びとしての農業を楽しみ、人の交流の場となってくる。そこには田んぼレストランも立つ。

都会と田舎の出会いが豊かなものになるためには、それを迎える田舎の中にも自らのこれまでの規制の考え方を取り払う過程が必要になってくる。とりわけ技や技術が完成された優れたものであればあるだけそのような側面を持つことにもなる。手作りの世界から隔絶された都会の人々は、田舎暮らしには手作りの世界に参加する可能性があるかと勇んでやってきたのに、余りにもハードな手作りの世界のあり方は、それらの人たちの思いを跳ね除けてしまう場合もある。田舎志向が技の世界から疎外された人達のさしあたりの手わざの回復の場という意味も込めて考えようとするならば、そこにはトライアンドエラーを許す遊びの場が必要になってくる。

近代技術世界ではなく、<技能>の行き交う場を前提とする話であるとしても、現代における都会と田舎の交流の中での、相互の歩み寄りとそこからの新しい価値の創造のためには自らのこれまでの価値の脱構築の場が必要である。職業の場としての技能集団は技能の専門家ではあってもそこから逸脱する遊びに対しては許容度が低く、相互のスレ違いだけが残るようなことも起こる。現代の田舎学が、ただ単なる認識の学ではなく、そこに参加する実践の学であり、手作りの世界を主題化するようなものであればあるだけ、意識的に取り入れる遊びが必要である。それを「遊作」と名付け、都市と農村の交流のプロジェクトの中核にすえたのである。

6) 遊作の根源と田舎学の可能性

(1) 「遊び作る」とはということか

それでは「遊び作る」とは具体的にどういうことなのか。すでに述べてきたように、遊作のアイデアはもともと今立のモノづくりの伝統に出発点を持つ。そしてそこにおいてわれわれが手作りや手わざを回復するだけならば、伝統技術の匠に弟子入りして修行をするというような過程も考えられるだろう。実際に、今立の和紙技術などにおいては、都市の若者などが強い関心を持ち、それまでの仕事をやめて弟子入りしてくる人たちも少なくない。しかしこのような都市の田舎志向の中に芽生える手作りファンの一部であって、その要望を全体として受け止めるものではない。もし都市の仕事をやめて農村に飛び込むような決断が必要となれば、そのようなハードな手作りの入り口は高い障壁になる場合も多いだろう。

現代の都市と農村の交流の中で回復されるべき手作りの世界において重要なことは、そこに入る場合の気軽さともいえ、都市の世界の均質で疎外された状況の中での、モノとの直接のかかわりに関する渇きを癒すには、小さいものではあってもそこに一つの「創造」となる場が生まれることであろう。

それと同時にすでに述べてきたように、田舎志向を受けて農村に訪れる都市からの参入者とそれを受け止める農村のホストの人達がともに取り組まなければならないのは、いわば新しいポストインダストリアル状況の中で、環境の世紀を生き抜くための新しい生活のあり方と技術の世界の再創造である。そのことを実現していくためには、伝統的な手作りの世界もそうした状況に向けてもう一度組み替えるために、脱構築され、都市民と農村民の豊かな出会いの場が作り出されなければならない。「遊作」はこうした事柄を遂行していくための方法でもあり手段でもある。

今立 古民家・匠・ロングステイプロジェクトでは、そうしたことをイメージ化させるものとして、今立の世界に根付いた和紙の技能の伝統との関係で、「匠と遊び、匠も遊ぶ」という言葉を生み出すことになった。伝統技術の頂点に立つ者が匠である。とりわけ旧今立町は、人間国宝と言われるような人たちを多数輩出する匠の里でもあり、その技能の完成度はすこぶる高い。

(2) 参加できる手作りの場と遊び

確かに技能は熟練を必要とするものであり、新しくその技を身につけようと思うものは、その技を熟練した人に学ぶということが必要となる。多くの人がイメージするものはそういう熟達した者とそこに入門して学び始める者の間の厳しい修行のあり様である。とりわけその技を職業として取り入れようとするならば、その技の伝承の過程はより厳しさを増すことにもなるだろう。それゆえそうしたイメージからするならば、「匠と遊ぶ」という事柄は考えようもないことかもしれない。

しかし都会から「手作りの場の体験」という癒しを求める人にとって、なによりもまず重要なことは最高の技を極めることではなくて、そうした手わざの世界にさしあたり触れ合うことであって、その中に自らの自由な創造の場としての居場所を作り出すことである。手わざの高い力能を持った匠に導入の手ほどきを受けながらも、その技に刺激を受けて自らも参画する楽しみ方を持つことだろう。

匠から伝統技術を学ぶのは恐れ多い。しかしそれを承知の上で、実行委員は地域社会の一員として、たくみの人たちに参加してもらい、地域のために、時間を割いてもらい、遊んでもらえば、そこから何か生まれてくるのではないかという気持ちを持ってきた。岩野さんは人間国宝であるが、しかし同時に村の生活者であり、一人の田舎人である。その一人の田舎人の心が次の言葉の中に語られているとあってよいだろう。このような実行委員会の視点に対して人間国宝の岩野さんも次のように応えてくれた。

(3) 国宝が語る遊ぶ世界

子供や青年、そして第二の人生を迎えたような人がこの遊作の里に集まるとしよう。匠を囲み、その技術を体験してみる。多分そこに集まる人がすべて技術の継承者になって行くわけではない。そこに人生をかけてきた人と向き合い、そのエトスや経験を共有し、一緒に遊ぶ機会が生まれたならそこには豊かな人生が大きく膨らんで行くだろう。

そして人間国宝の岩野さんは次のような話をして、「遊ぶ」世界を次のように、肯定する。「紙漉はなかなか難しいですが、今立の4つの小学校は卒業証明を自分たちでがんばって喜んで漉きます。ですからその気になればかなりいい物が出来ます。紙は材料によって単価が変わったり、場所の問題がありますが、小学校の卒業証書は今立町が応援してくれています。学年に1-2人くらいは上手な子がいて「将来、紙を漉かんか？」と試みるんですが、首を立てには振ってくれない。けれど、ああいう子供には、備わっているものがあるので、他の物を作らせても上手だろうと思うんです。そういう子と遊べるなら私も遊びたいので、遊作塾のような機会をぜひ増やして下さい。遊びましょう。」遊作塾がキャッチフレーズとした「匠と遊ぶ」とは、このようにさしあたり、匠に遊んでもらいながら技の世界を学ぶことの楽しさを知ることだともいえる。

もう一つの「匠も遊ぶ」は、そういう高い技を持った匠たちにこそ、田舎の新しい技の創出に向けて、その技を前提としながらも、既成概念を超える作業に先頭になって向かってほしいというような意味も託されている。匠は確立された技の正統な継承者であるがゆえにしばしば、その技を守る者として、その世界の中にだけ閉じこもることにもなる。しかしこの新たな田舎の再創造の場においてはこの高い技能を持った匠にこそ新しい時代を探ってもらう必要がある。

このようなプロジェクトの中では、実行委員達は、「匠に学ぶ」というよりもむしろ「匠と遊ぶ」、「匠も遊ぶ」といった自由な雰囲気の中で、未来に向けて地域資源を掘り起こし、ともに再創造する場を作り出していくことなのだと考えた。それは時代が顧みなくなったモノたちに、もう一度いのちを吹き込み、その活動の場を通して、環境の世紀を生きる私たちの小さな希望と連帯の和が育っていく必要があると考えているとすることができるだろう。

このように「遊作」は今立が日本の中でも卓越した田園工芸の伝統を持ち、モノづくり

の心の出会いの中でこそ生まれてきたものであるが、それゆえにこそこれまで農・工という図式の中でこれまでグリーンツーリズム論が必ずしも明瞭にすることができなかったことを主題化することができたともいえるだろう。「遊作」には現代社会が置き去りにしてきたこのわざの世界と一方で規格化された世界を打つ破ろうとする「遊ぶ」という精神が宿っている。

4. 環境の世紀 遊作という希望

1) 自然と和解する技術

(1) 環境の世紀の中で

本研究で中心的な事例とした遊作塾の試みは、現代の田舎志向の動きとのかかわり、すでに見てきたように都市化・工業化の転換を秘めつつ展開するものであり、環境の時代といわれる現代の中に生まれてきているものである。この環境の世紀をどのようなものとして捉えるかということについてはいろいろな考え方や意見があるといっただろう。しかし環境の世紀をどのように生きていくのかという一人一人の生き方の次元に立ち返ったとき、「遊作」という一人一人に与えられた「自由の場」とそこでつむぎ出される思い、それを支える人のつながりは、一つの「希望」だと思える。

現代の世界の中で、われわれはさしあたり一つの足は画一された近代技術の世界におき、そこで働き収入を得ていかなければならない。そのマニュアル化され、一人一人の成熟というものが、排除された社会の中を生きながら、その中でモノとヒトとが等身大で関わるもう一つの世界を夢見ているのだ。それでは環境の世紀に生きるわれわれが、とりわけ技能や手作りの中に、ある意味では時代錯誤とも言えるような深い思いを持つのはなぜだろうか。

今日崩壊する自然や深刻化した環境問題は、すでに具体的に目に見える形で迫ってきている。情報としてわれわれに突きつけられている事柄は膨れ上がっており、了解しうるものでもある。しかしわれわれが自然と和解する技術を持ちえないでいるのはなぜか。自然を客観的に対象化する科学とその適用としての技術は、自然と人間を分かち、対象化されたものとして自然を置く。それはさしあたり目によって捉えられた自然だ。

(2) 「目によって捉えられる自然」を超えて

しかし自然にも触れる自然もあれば、食べる自然もある。近代の世界では「自然」は、いわば「目によって捉えられる自然」に限定した上で、遠くから徹底的に数値化して読み取り、遠くから操作的に処理をする。身をもってそこに巻き込まれ、巻き込まれた上で自然と対処するのでないから、その支配や管理は破壊的なものになる。力による支配の中ではそれですまされた「目の認識」による理解も、そこに自然と和解するための技術を生み出そうとすると、この「目の認識」を超えたそれとより深い関係性を秘めた知のあり方が必要になってくる。

技術を「行為のかたち」という視点から捉えた三木清は³⁴、形を生み出す構想力に定位し、その視点から自然も捉えようとした。この三木の技術哲学に近いところで渡植は、技能を掘り起こし、自然との和解のために必要な「技能知」の現代に有する意味を次のように述べている³⁵。

「・・・そのもっとも大切なことは、科学技術はその対象を支配するといったが、技能はそんな不逞な考えを持たない。その相手が人間でなくとも、まず、その対象と一体となることを求める。それによって、自分も生き、相手も生かすことを心掛ける。たとえば、木工が木組みをはめ込むのに、だましだましやると聞いて、私は思わず笑ってしまったが、これが技能に生きるものの心意気である。その対象を力づくでねじ扶せるのではなく、じっ

34 杉村, 2004: 22-24

35 渡植, 1987b: 151

くりと馴染んでくるのを待つのである。だから、技能は物と人間、人間と入門とを引き賠さない。互いに疎々しくしたりはしない。それだけでなく、物の製作とその製作物の使用とを媒介として、人間と人間とをしっかりと結びつける。科学技術が人間と人間とを敵同士とするのと逆である。」

(3) 自然と和解する生活

体験知を求め、田舎に深い思いをはせる人の中には、自然と和解を求める人の一つの端緒が存在するのである。しかしすでにがんじがらめに張りめぐらされる近代の世界を全面的に相手にすることはできない。一人一人はそうしたシステムのそれぞれの場に立ちながらそこに小さな風穴を作り、つなぎあい、もう一方の足を置く共同の場を作っていくことだ。そのためには、そこがどんな小さな場であっても、そこに行けばひと時の憩いが生まれるようなモノとヒトが自由に振舞える、自立的に生きる方法が必要になってくる。

システムに絡め取られない自在性を確保するために、この田舎志向の人が試みていることの一つは、すでに述べたような半農半Xというような生き方である³⁶。一方では自給的な農業におくことによって生活の保障に最低限の手作りの世界を持つ。そしてもう一方ではXという自らのもっとも得意とするわざの世界に現代社会を生き抜いていくために必要な現金の獲得を目指す。しかし技能が熟成していくその現場においても、その技能がハードな制度の中に取り込まれて闊達さを失うことがないように、自在性の精神としての遊びを主題化することが必要なのだ。もちろんこの遊びも、現代の世界の中で飼いならされ、商品化された遊びではなく、このシステムと対峙しながらそこに風穴を開ける小さな試みの積み重ねとしての遊びが求められているのである。

2) 自在の世界

(1) 自在性の根源

このような技能にかかわる自在なありようを示すものとして興味深いものは、すでに農村の生活の独自性としても言及した、アフリカの世界の中の技能のあり方である。その中で、「遊作」ともつながるものとして、筆者にとってとりわけ興味深い下記のような音楽の匠たちの世界観を取り出してみよう。アフリカの音の世界としては、タイコなどのリズム音楽がよく知られている。しかし日本にも和太鼓伝統があり、それがタンザニア大使館の日本文化の交流事業の中でコラボレーションすることになった。日本からタンザニアを訪れた和太鼓の演奏者たちは、日本の中のえりすぐりの人たちであり、そのバチさばきや採譜の技術の高さなどはタンザニアのミュージシャンたちを驚かせた。

そしてコラボレーションの演奏。そこでタンザニアのミュージシャンたちが語った感想が興味深かった。「確かに日本の和太鼓はすごい。しかしこれは私達の音楽ではありません。日本の音楽では、演者が集中していった自分の世界の中に閉じていく。そこでは聴衆がともにその音楽に参加することはない。しかし私達の音楽はそのようなものではありません。私達の音楽は言ってみればリラックスの為の音楽、緊張をほぐし、人をつなぎ、自分たち自身を開く音楽なのです」

(2) 技における日本とアフリカ

このような視点は日本の匠の技と人との関係とアフリカの技能とそれを取り巻く人と人との関係を広く示すものであり、ここで検討してきた遊作の発想の中には、こうしたアフリカの技と人との関係性の中に共鳴するものが多いと言えるだろう。このような異質な人々を招き寄せる場のあり方は、今日の都市と農村をつないでそれを培地として展開する田舎学にとっては、極めて重要な「場」の構造である。それはハードなシステムの中に閉じ込められたオフィシャルな世界で生きる人間がそこから離脱して自らの世界を回復していく必

36 塩見,2003

要な場である。

都会から田舎を志向する人は、このような自在でゆとりのある“場”のあり方と重ね合わせて、田舎の世界を捉える。逆に見れば、都会の空間は底に生きる人にぼんやりとした時間や多面的に生きることを許さず、常にある機能を果たすものとして追いたて働かしていく息苦しさがあることであろう。人は意識的な存在として人は意識的な存在として効率的に物事を成し遂げていこうとするが、しかしその一方では、無意識の世界も抱え込み、時には非合理と思うようなことにとらわれたりする。そういう事柄を都市の機能的空間は許さない。

そしてそこに生きる人を一つの規格化された<モノ>として配置し理解しようとする<人間工学>的な人間の理解がそこに行き交い、それから常にはみ出そうとする人間を規格の中に押し戻し困り込むことに対する苦しみかもしれない。このような都市空間に生きる人の理解は、まさにここで見てきた技と対極にある、それぞれの技術的過程を単能的なものとして枠付けてゆく近代的科学技術のあり方と重なり合い、それを模写している世界像といってもよいだろう。マニュアル化された技術の中で人間の行為は常にそれにはめ込まれ、それから逸脱するものは即座に誤った行為と見なされ拒絶される。

これに対してここで試みてきたような手作りの世界が許すものは、そのプロセスの一瞬一瞬のあり方の中にその逸脱を許し、むしろその逸脱がある種の個性としてその作品の中に刻まれてゆくことを許す、極めて人間的な“場”のあり方であろう。とりわけ本研究において主題化してきた<遊作>が、マニュアル化した現代世界に問いかけるものは、常に歴史的文化的固有の生を生きざるを得ない者としての人間存在のモノとの関係を我々が将来に向けてどのようなものとして構想していくのかということである。

3)「生活の芸術化」への問い

(1)「生活の芸術化」の出発点

近代世界の進行するただ中で、近代人は一方ではそこに獲得する道具的世界とは異なる機械的世界のあまりにもかけ離れた生産力に驚愕し、この問いを封印したままで歩み続けてきた。ただそのことのあまりにも大きい代価に全く気づいていなかったわけではない。このような人の手わざの世界を復権しようとする視点は、まさに近代社会をその先頭に立って謳歌したイギリスの中に芽生え、ラスキンやモリスなどの文化経済学者達の中に最も鋭い問いを認めることができるだろう。その時すでに始まっていた機械の一部となりつつあった自分の<労働>をみつめ直し、生産のプロセスの中に手作り、手わざを復権しながら、芸術性のある製品を作っていくということから始まった。そのことを通して、働く者が自尊心を育み、仲間同士の中に賞賛と共感が生まれていくようにすることであり、そういうことを可能にするわざの世界の豊かさが浮かび上がってくる³⁷。

ラスキンやモリスがみつめたものは、機械化の中に進行している<労働>の質的な単純化である。確かに産業革命の中で道具から機械にかわることによって、ある労働現場では労働者の仕事が極めて軽減するということが存在したのである。しかしそれはそもそも単純な仕事を大量に作り出す機械という手段による労働量の軽減ではあっても、そこに人が生きるに相応しい生きがいを持ちうる<仕事>を与えるものにはならない。

ラスキンやモリスも単純労働者が機械の導入によって労働を軽減するという人間的側面に関してはその重要性を認めているが、しかし近代化の中で浸透したことは、道具的世界を取り上げ、全てをこの機械の単純労働に代替させることによって、労働のかたちを遍く単純でつまらないものにするのであった。彼らは近代社会の進行する中でこの陳腐化する労働の様態を主題化しようとしたのである³⁸。

ウィリアム・モリスは生活の芸術化を語り、芸術的な手仕事を尊重して、単能化し、機

37 池上,1993: 2-40

38 池上,1993:15

械の一部に組み込まれようとするイギリスの社会に対して、「労働の人間化」を語りかける。「このような手仕事においては人間は自分の内発的なリズムを越えて仕事を速くこなすようにせかされることはなく、落ち着いて念入りにやりとげることが許された。品物一個を作るのにも一人の人間の全体を投入したのであり、多くの人達の部分部分を小出しにしたのではなかった。手仕事の場合には労働者はつまらない偏った一つの仕事だけに精力を傾けるのではなく、能力に応じて彼の知性の総体を伸して行くことができた。人間は商業のためにあるのではなく、……商業が人間の為にあるのだ、という前提にごく単純にたった手仕事こそが中世の芸術を産みだしたのだ。」³⁹

(2) 手作りの現代的復権の場としての田舎

モリスが生きた時代、イギリスの産業革命影響が社会にいたるところに浸透し、多くの人はその成果に驚愕し、「便利で能率的な生活」を営もうとした時代に、人間は人類史の中で始めて直面する手作りの世界の喪失ということの深い意味を問い直そうとしたのである。

モリスの考え方は、決してかつてあった伝統的な世界の手作りの世界を保存しようとするだけではなく、あくまでも「古きを尋ねて新しきものを知る」という精神に支えられている。それは伝統ある仕事から学んで美しさやイキイキとした生活を取戻そうとする動機に支えられたものであり、これがこれまで本研究で見えてきた「遊作」塾の精神とその根底で通じるものであり、手作りの世界がなくなろうとすることへの懐疑に裏打ちされたものであった。

しかしその問いは一旦棚上げされて地球上の全ての世界が、この近代化の呼び声につき従い、その問いを振り捨ててひたすら歩み続けてきたのだといってよいだろう。20世紀に開発されたテーラーシステムなどの中には、まさに人間の労働を秒単位までに切り分け、非人間的なものに仕立て上げていった。そこには手わざの世界が入り込む余地はなくなった。それは物量と低コストで大量に作るには極めて向いたものであったかもしれない。しかし今日この近代科学世界がまさにこの世界を覆いつくそうとする瞬間において、その成功のゆえに人間世界がおかれた環境の破壊が浮かび上がり、そのことそのものに対する環境の限界が意識され始めている。

そして同時にこの近代世界の中で失ったものとしての、かつて手作りの世界で実現していた生きがいや成熟という問題が浮かび上がってくる。そして例えば不合理や不便さをも抱え込んで生きざるをえない<人間存在>というものに目を向け、手作りの世界の復権を求める、都市から田舎へという新たな価値志向を芽生えさせている。

4) 遊作の希望

(1) 精神のモノカルチャーを超えて

例えば、この単能的な世界の広がりを見れば農業の世界の中で見るならば、バンダナ・シヴァが強調するようなモノカルチャーの精神の蔓延であろう。伝統的農業の世界は複雑に入り組んだ植生を許容し、多品目少量の生産を展開してきた。それに対して、近代農業のシステム化した世界では、一つの「優れた」種子を全面的に展開しようとして開発が行われ⁴⁰、その中でモノカルチャーの価値は、一つの公準として世界の農業のあり方を規定してきた。

しかし興味深いことはこれまでもっとも遅れた農業と言われてきた場所の中に、むしろこのモノカルチャーの精神を批判し、異なる農業の豊かさを語りかけているものがある。

その一つはアフリカ農業の中に普遍的なものとして組み込まれた「混作」の農業の世界である。アフリカ農村には、トウモロコシ、コメ、バナナ、キャッサバと様々な種類の作物をばらばらに植える作付けの仕組みは、一つのものだけを植える生真面目な単作に慣れた日本人にとって、本当に真面目に農業をやっているのかという印象を抱く。それは

39 池上,1993:34

40 バンダナ・シヴァ,2003

混作が、始めからきちんと作付けするのではなく、思いついたところに思いついたものを植えつけていくという感じだからである。しかし彼らに聞いてみると、ばらばらに色々なものが植え付けられた畑の方がよい畑であり、美しい畑だという。そしてアフリカで暮らしの中にあるこのような多様性を受け入れる精神世界が、それと連鎖するかたちで彼らの生き方、暮らし方、人と人の関係の中にも様々な形で現れている。

(2) 教育の世界の中の自在性

例えば教育現場においても、この近代の時代を通じて行ってきたことはこの近代技術の担い手を大量に作りあげて行くことであり、まさにマニュアル化された世界になじむ人々の効率的な生産が求められてきたのだ。歴史的文化的背景を持った一人一人の固有の成熟ということが可能にしてきた生活世界の中での手わざを通した<教育>のありようは捨てられ、マニュアル化された世界になじまない子どもは切り捨てられ、不良品として扱われてゆく。そしてここでも、こうした近代教育とは異なる教育の視座を残し続けているものとして、アフリカの世界の教育のあり方が浮かび上がってくる。

タンザニアの小学校を訪ねると、35歳くらいの小学校一年生と8歳くらいの小学校一年生が当たり前のように机を並べて勉強している姿を見かける。明らかに人生経験の異なる者が一緒になって学ぶ。そしてタンザニアでは学生自身が落第を恐れない。自分に合わせてそれぞれがそれぞれのレベルに合わせて学力をつけていったらいいのであって、それぞれの学力の状況は極めて個別的で固有性を持ち、マニュアル教育によってそろえることをそんなに急ぐことはないという考えだ。日本の受験戦争とはほど遠い学びの場だ。そこには異なる能力と人生の共存を前提とした生き方が現れている。「匠も遊び、匠と遊ぶ」という遊作塾の世界は、異なる人の共存を前提とした新しい試みだが、これはアフリカの学びの場にどこか似ているのではないかと思われる。

(3) 遊作の世界のひろがりとその希望

近代を超えて都市から農村へ向かう田舎志向の人達の中にあるものは、<土>から<農>へというような、あるいは土から離れた人がまた土につくような事柄とは少し異なり、<土>の世界にがんがらめになって、システムの一駒に組み込まれようとした人たちが、<手作りの人>として成熟する、新しい<人間>の生きる場を求めて探し始めている一つの過程と見ることもできるだろう。<田舎>は不便であり、そこではそれぞれが自立的に生きる手段を持たなければならない世界であるがゆえに豊かなのだ。そこでは不便であるがゆえに生きる過程の中に豊かな遊作の場が与えられる。田舎志向の人達が手作りの世界に共鳴し、そこに<田舎>の中心的な意味をおくのには極めて重要な意味があるのだ。

環境の世紀の中で“遊作”は農村の中にあるだけでなく、町や都会の中でもひろがりをはじめているように思われる。天然酵母のパンを焼く人、和紙を使った花屋を目指す人、エクステリアの仕事の中で、人間の顔をした空間を模索する人、日々はプログラマーとしてハードなコンピューターに向かいながら、家ではできるだけ地域の材料を使って手作りケーキを作る人。地域の有機農産物を素材として、ワゴン車に乗って販売に出かける人。自分の事業の合間に、木炭自動車や木炭田植え機を製作してくれた人。遊作塾やその母体となった森のエネルギーフォーラムに参加する人々には生活の中に様々な「遊作」が溢れている。

環境の世紀の中で、あちらこちらで始まった遊作。これらは、本当に小さな試みと遊びである。しかしこれは20世紀を貫いたがんじがらめのシステムとハードな画一的な世界の中に、環境の世紀を超えていくために必要な新しい「仕事」と「生き方」の萌芽を生み続けているのではないかと考える。同時に、しかめっ面の労働世界とは異なり、それは文字通り遊びながら、一つの希望の場を共有していくものでもあるとも考える。だから<遊作>は、環境の世紀を生きていくわれわれにとっての一つの希望なのだということができるだろう。

参考文献

- [1] 青木辰司 『グリーンツーリズム実践の社会学』、丸善、2004。
- [2] 秋津元輝、「座長解題『ライフスタイルの転換と地域農業 21世紀の地域農業を展望する』」、『農林業問題研究』第145号、第37巻・第4号2002。
- [3] 平野克己、『図説アフリカ経済学』日本経済評論社、2002。
- [4] 安心院町グリーンツーリズム研究会・安心院町『心のせんたく』vol.9 2005。
安心院町グリーンツーリズムホームページ
<http://www3.coara.or.jp/ajimu/howtogt.htm>
- [5] Hyden,G., Beyond Ujamaa in Tanzania.-Underdevelopment and Uncaptured Peasantry, Heinemann,London. 1980。
- [6] Hyden,G., No Shortcuts to Progress:African Development management in Perspective, London: Heinemann. 1983。
- [7] 池上甲一「5章 地域の農林漁業を組み直すーグリーンツーリズムへの対応とその効果」21 ふるさと京都塾編『人と地域をいかにグリーンツーリズム』学芸出版社、1998。
- [8] 池上甲一「日本農村の変容と「20世紀システム」-農村研究再発見のための試論」『日本農村の「20世紀システム」生産力主義を超えて』【年報】村落社会研究=36, 農文協、2000。
- [9] 池上惇『生活の芸術化 ラスキン、モリスと現代』丸善株式会社、1993。
- [10] 池上惇『情報社会の文化経済学』丸善株式会社、1996。
- [11] 井上和衛・中村攻・山崎光博『日本型グリーンツーリズム』都市文化社、1996。
- [12] 内山節『自然と人間の哲学』岩波書店、1988。
- [13] 大原興太郎「コメント 東報告にたいして」『農林業問題研究』第128号、1998。
- [14] 掛谷誠編『白神山地ブナ帯域における基層文化の生態史的研究』平成元年度科学研究費補助金(総合A), 1990。
- [15] 北川泉編著『森林・林業と中山間地域問題』御茶の水書房、1995。
- [16] 北尾邦伸「森業(もりぎょう)-参加・協約による新たな里山づくり」北川泉編著『森林・林業と中山間地域問題』御茶の水書房、1995。
- [17] 『現代農業』1999年11月増刊号46号, 農山漁村文化協会、1999。
- [18] 『現代農業』2001年5月増刊号52号, 農山漁村文化協会、2001。
- [19] 『現代農業』2007年11月増刊号78号, 農山漁村文化協会、2007。
- [20] 西川潤、『人間の経済』岩波書店、2000。
- [21] 坂本慶一『日本農業の再生』中央公論社、1977。
- [22] 佐々木泉「ごろ寝だけして帰る人もいる「かやぶきの里」の貸し農園-京都府美山町 大野彦さんと「江和ランド」」『日本的グリーンツーリズムのすすめ』現代農業2000年11月増刊、2000。
- [23] 佐藤豊信『農村型リゾート』明文書房、1992。
- [24] 塩見直紀『半農半Xという生き方』ソニー・マガジズ、2003。
- [25] サ・リンズ、M.D,山内昶訳、『石器時代の経済学』法政大学出版局、1984。
- [26] スミス、L『観光・リゾート開発の人類学』勁草書房、1991。
- [27] 杉村和彦、「共食に生きる理性」福井勝義等編『文化の地平線』世界思想社、1994。
- [28] 杉村和彦,鹿取悦子「「緑」を耕す連帯 21世紀の都市 農村関係試論」祖田修編『都市・農村の交流と結合 21世紀に向けた都市・農村関係論の構築』平成10年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(1)), 2001。
- [29] 杉村和彦、『アフリカ農民の経済 組織原理の地域比較』世界思想社、2004。
- [30] 杉村和彦,「パラダイムとしての「アフリカ小農世界」」『農林業問題研究』第165号 地域農林経済学会、2007。

- [3 1] 杉村和彦,「消費の世界とアフリカ・モラル・エコノミー」『アフリカ研究』No.70 日本アフリカ学会, 2007.
- [3 2] 杉山祐子,「焼畑農耕民社会における「自給」のかたちと柔軟な離合集散 ザンビア、ベンバにおける「アフリカ・モラル・エコノミー」『アフリカ研究』No.70 日本アフリカ学会, 2007.
- [3 3] スコット・ジェームズ・C,高橋彰訳,『モラル・エコノミー』勁草書房, 1999.
- [3 4] セン,A.大庭健、川本隆史,『合理的な愚か者』勁草書房, 1989.
- [3 5] 上山春平,「社会編成論」川喜田二郎・梅棹忠夫・上山春平編『人間 - 人類学的研究』, 1966.
- [3 6] 祖田修『現代経済社会と農業 - 「着土」の時代に向けて』農文研ブックレット NO.1 農耕文化研究振興会, 1989.
- [3 7] 祖田修『市民農園のすすめ - 見る緑から作る緑へ』岩波書店, 1992.
- [3 8] 祖田修『着土の時代』家の光協会, 1999.
- [3 9] 立川雅司「ポスト生産主義への移行と農村に対する「まなざし」の変容」『消費される農村 ポスト生産主義への移行と農村に対する「まなざし」の変容』【年報】村落社会研究 = 4 1, 農文協, 2005.
- [4 0] 辻信一『スローライフ 100 のキーワード』弘文堂, 2003.
- [4 1] 渡植彦太郎『仕事が暮らしをこわす 使用価値の崩壊』農山漁村文化協会, 1986.
- [4 2] 渡植彦太郎『技術が労働をこわす 技能の復権』農山漁村文化協会, 1987-a.
- [4 3] 渡植彦太郎『学問が民衆知をこわす 科学の内省』農山漁村文化協会, 1987-b.
- [4 4] 中道仁美「農山村におけるグリーンツーリズムの展開とその意味」『山村再生 21世紀への課題と展望』【年報】村落社会研究 = 3 4, 農文協, 1998.
- [4 5] 21ふるさと京都塾編『人と地域をいかすグリーンツーリズム』学芸出版社, 1998.
- [4 6] 東廉「都市民よる農地のレクリエーション的利用の可能性」『農林業問題研究』第 128 号, 1998.
- [4 7] 東廉「大原興太郎氏のコメントに対して」『農林業問題研究』第 128 号, 1998.
- [4 8] 宮崎猛編『グリーンツーリズムと日本の農業』農林統計協会, 1997, 11 - 27.
- [4 9] 持田紀治編『むらまち交流と地域活性化』家の光協会, 1995.
- [5 0] 持田紀治「グリーンツーリズムの課題と展望」『農林業問題研究』第 128 号, 1997.
- [5 1] 持田紀治「農村型リゾートによる都市農村の交流に関する考察」『農村生活研究』第 37 巻第 3 号, 1993.
- [5 2] 山崎光博・小山義彦・大島順子『グリーンツーリズム』家の光協会, 1993.
- [5 3] 矢部賢一「ポスト生産主義の視点から」『消費される農村 ポスト生産主義への移行と農村に対する「まなざし」の変容』【年報】村落社会研究 = 4 1, 農文協, 2005.
- [5 4] 吉本哲郎「風に聞け、土に着け」『地域から変わる日本 地元学とは何か』現代農業 2001 年 5 月増刊, 2001.
- [5 5] 米山俊直『同時代の人類学』日本放送協会, 1981.
- [5 6] 依光良三・栗栖祐子『グリーンツーリズムの可能性』日本経済評論社, 1996.
- [5 7] 宇根豊,『国民のための百姓学』家の光協会, 2006.
- [5 8] バングナ・シヴァ『生物多様性の危機 精神のモノカルチャー』明石書店, 2003.
- [5 9] Woof 日本,『泥だらけのスローライフ - 自分さがしの農の旅』実業之日本社, 2003.